

静岡県 富士市

# 富士市内遺跡発掘調査報告書

## —平成22・23年度—

- ◆ 東平遺跡 第55地区
- ◆ 富士岡1古墳群 花川戸第4号墳
- ◆ 柏原遺跡 第6地区
- ◆ 沖田遺跡 第133次調査地点
- ・その他の試掘確認調査

2013年3月

富士市教育委員会



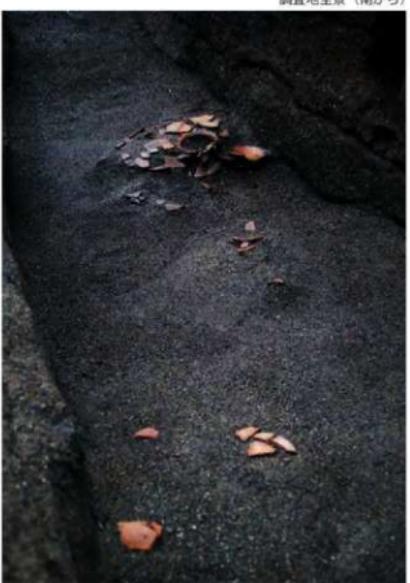


出土瓦集合  
撮影：杉本和樹

カラー図版 2 柏原遺跡 第6地区



土層堆積状況



遺物出土状況（砂層中）



出土遺物集合  
撮影：小田真子



準構造船（丸木舟部）

撮影：寿福 滋



丸木舟部と舷側板の接合方法



丸木舟部先端のほぞ穴



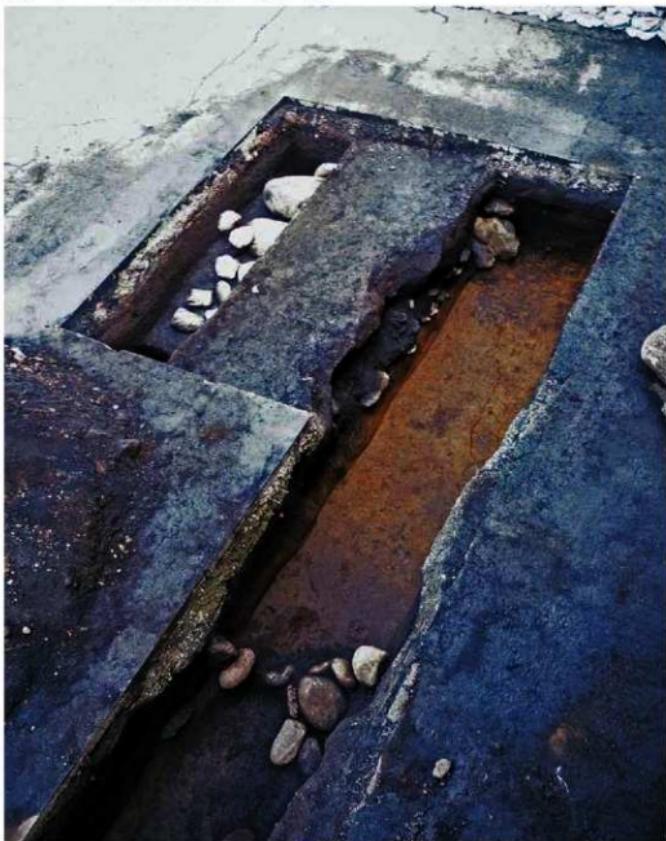
船底の補修痕



船底 骨残存状況



珠文鏡



花川戸第 4 号墳 石室全景（南から）



花川戸第 4 号墳出土 主頭大刀把頭



花川戸第 4 号墳出土 主頭大刀把頭 木質残存状況

撮影：杉本和樹

## 例 言

1. 本書は、静岡県富士市内において富士市教育委員会が平成 22 年度・平成 23 年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。調査名については、調査当時の包蔵地範囲に準拠して呼称している。ただし、一部には平成 22 年度以前に調査された調査成果の報告も含んでいる。
2. 調査は、富士市教育委員会教育長を主体者として実施し、文化振興課職員がこれにあたった。調査の一部は「国宝重要文化財等保存整備費補助金」及び「静岡県文化財保存費補助金」を得て実施した。調査体制、担当者は第 1 表に譲る。
3. 本書の編集は佐藤祐樹（文化振興課上席主事）・若林美希（文化振興課臨時職員）が行った。執筆分担は、第 1 章は若林、第 2・3 章は佐藤、第 4 章は藤村翔（文化振興課主事）・小島利史（文化振興課臨時職員）・若林、第 5 章は佐藤・若林による。また、上杉陽氏（都留文科大学名誉教授）、植月学氏（山梨県立博物館）の両氏からは玉稿を賜った。
4. 本書に掲載した遺物写真は第 1・2・4 章に関わるものと小田貴子（文化振興課臨時職員）が、第 3・5 章に関わるものと井上尚子（文化振興課臨時職員）が撮影した。一部、杉本和樹氏、寿福道氏による撮影があるが、それについては個別に記載することとする。調査記録写真は、調査担当者が撮影したものを使用した。
5. 三日市廃寺跡出土の瓦や富士岡 1 古墳群出土の銀装主頭把頭、沖田遺跡出土の準構造船などについて数多くの皆様からの御指導、御協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

赤澤徳明、井口智博、上杉陽、植月学、植松章八、大川敬夫、大森信宏、大谷宏治、岡林孝作、  
菊池吉修、篠原武、鈴木一有、鈴木敏則、瀧瀬芳之、田村隆太郎、豊島直博、中嶋郁夫、平野吾郎、  
堀内秀樹、丸山真史、山田昌久、渡井英吾
6. 本書で報告した調査に関わる記録図面・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会で保管している。

## 凡 例

1. 確認調査を含め、座標は平面直角座標第Ⅳ系を用いた国土座標、世界測地系を使用して調査した。調査では、国土地理院による都市再生街区基本調査成果を用いた。平成 22 年度以前の調査成果については、世界測地系に変換した数値を表記した。
2. 各調査報告の冒頭に示す調査位置図には、「富士市土地計画基本図」を使用した。
3. 掘図の縮尺は、各図に添付したスケールで示す。写真図版の縮尺はすべて任意である。
4. 本書における標記は次のとおりである。

Tr・TP : レンチ・テストピット	SB : 橫穴建物跡	SD : 溝状遺構		
SX : 性格不明遺構	SK : 土坑	Pit : ピット	P : 土器	S : 石
5. 土器の実測図では、断面を以下のように表現することで種類の違いを示した。

縦文土器・弥生土器・土師器	□	須恵器	■	灰釉陶器・陶器	■■■
---------------	---	-----	---	---------	-----
6. 土器および土層などの色調は「新版 標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議局監修 2000 年版)による。

# 目 次

例 言  
凡 例  
目 次

<b>第1章 平成22・23年度の調査</b>	
第1節 調査体制と調査件数 .....	1
第2節 平成22年度の発掘調査報告 .....	3
第3節 平成23年度の発掘調査報告 .....	17
第4節 報告書一覧 .....	29
平成22・23年度 調査写真	
<b>第2章 東平遺跡・三日市廃寺跡の調査</b>	
第1節 東平遺跡・三日市廃寺跡の概要 .....	43
第2節 第48地区の調査成果 .....	48
第3節 第55地区の調査成果 .....	49
第4節 第57地区の調査成果 .....	61
<b>第3章 富士岡1古墳群の調査</b>	
第1節 調査の経緯と経過 .....	63
第2節 遺跡の立地と調査履歴 .....	66
第3節 花川戸第4号墳の調査 .....	69
第4節 壑穴建物跡・土坑・ピット .....	75
第5節 まとめ .....	77
<b>第4章 柏原遺跡の調査</b>	
第1節 遺跡の概要 .....	79
第2節 第4地区の調査成果 .....	81
第3節 第6地区の調査成果 .....	94
第4節 第7地区の調査成果 .....	120
第5節 静岡県富士市中柏原新田40「柏原遺跡」の地形地質 上杉 陽（都留文科大学名誉教授） .....	122
第6節 富士市柏原遺跡から出土した馬歯 植月 学（山梨県立博物館） .....	144
第7節 柏原遺跡の調査成果 .....	149
<b>第5章 沖田遺跡の調査</b>	
第1節 調査の経緯と経過 .....	153
第2節 遺跡の環境と条里型水田 .....	154
第3節 第133次調査地点の調査成果 .....	162
第4節 総括 .....	175

写真図版  
報告書抄録

## 挿図目次

第1章 平成22・23年度の調査	
第1節 調査体制と調査件数	
第1回 平成22・23年度 調査地の位置と地形区分	1
第2節 平成22年度の発掘調査報告	
第2回 沖田道路第146次 調査地位置図・トレント配置図	3
第3回 沖田道路第146次 セクション図	3
第4回 善光寺発祥寺跡第3地区 調査地位置図	3
第5回 善光寺発祥寺跡第3地区 トレント配置図・セクション図	3
第6回 大石道路第2地区 調査地位置図	4
第7回 大石道路第2地区 トレント配置図・セクション図	4
第8回 東平道路第49地区 調査地位置図	4
第9回 東平道路第49地区 トレント配置図・セクション図	4
第10回 東平道路第50地区 調査地位置図	5
第11回 東平道路第50地区 トレント配置図・セクション図	5
第12回 東平道路第15地区 7次調査 調査地位置図	5
第13回 東平道路第15地区 7次調査 トレント配置図・セクション図	6
第14回 花守道路第4地区 調査地位置図・トレント配置図	6
第15回 花守道路第4地区 セクション図	6
第16回 三日市発祥寺跡接続(東平51地区) 調査地位置図	7
第17回 三日市発祥寺跡接続(東平51地区) 土層柱状図	7
第18回 武東B道路第6地区 調査地位置図	7
第19回 武東B道路第6地区 トレント配置図	7
第20回 武東B道路第6地区 セクション図	7
第21回 寺下道路第4地区 2次調査 調査地位置図	8
第22回 寺下道路第4地区 2次調査 トレント配置図・セクション図	8
第23回 東平道路第52地区 調査地位置図	9
第24回 東平道路第52地区 トレント配置図・セクション図	9
第25回 北奈5古墳群第1地区 3次調査 調査地位置図	9
第26回 北奈5古墳群第1地区 3次調査 トレント配置図・セクション図	10
第27回 三新田道路K地区 調査地位置図	11
第28回 三新田道路K地区 トレント配置図・セクション図	11
第29回 中島道路第8地区 調査地位置図	11
第30回 中島道路第8地区 トレント配置図・セクション図	11
第31回 津川1古墳群第1地区 調査地位置図	12
第32回 津川1古墳群第1地区 トレント配置図・セクション図	12
第33回 東平道路第53地区 調査地位置図	12
第34回 東平道路第53地区 トレント配置図	12
第35回 東平道路第53地区 セクション図	13
第36回 北奈1古墳群接続地 調査地位置図	13
第37回 北奈1古墳群接続地 トレント配置図・セクション図	13
第38回 桃宜ノ前道路第3地区 調査地位置図	14
第39回 桃宜ノ前道路第3地区 トレント配置図・セクション図	14
第40回 三ツ沢道路第2地区 調査地位置図	14
第41回 三ツ沢道路第2地区 トレント配置図	14
第42回 三ツ沢道路第2地区 セクション図	15
第43回 東平道路第54地区 調査地位置図	15
第44回 東平道路第54地区 トレント配置図・セクション図	15
第45回 天岡沢道路第30地区 調査地位置図	16
第46回 天岡沢道路第30地区 トレント配置図・セクション図	16
第47回 三日市発祥寺跡(東平56地区) 調査地位置図	16
第48回 三日市発祥寺跡(東平56地区) トレント配置図・セクション図	16
第3節 平成23年度の発掘調査報告	
第49回 神戸4古墳群第2地区 調査地位置図	17
第50回 神戸4古墳群第2地区 トレント配置図・セクション図	17
第51回 天岡沢道路第31地区 調査地位置図・トレント配置図	17
第52回 天岡沢道路第31地区 セクション図	17
第53回 厚原横道下道路第2地区 調査地位置図	18
第54回 厚原横道下道路第2地区 トレント配置図・セクション図	18
第55回 中野沖田道路接続地 調査地位置図	18
第56回 中野沖田道路接続地 トレント配置図・セクション図	18
第57回 石坂10古墳群接続地 調査地位置図	19
第58回 石坂10古墳群接続地 トレント配置図・セクション図 ・トレントSAI平面図、エレベーション図	19
第59回 滝下道路1地区 調査地位置図	20
第60回 滝下道路1地区 トレント配置図・セクション図	20
第61回 天岡沢道路第32地区 調査地位置図	20
第62回 天岡沢道路第32地区 トレント配置図	21
第63回 天岡沢道路第32地区 セクション図	21
第64回 天岡沢道路第32地区 出土遺物	21
第65回 東平道路第58地区 調査地位置図	21
第66回 東平道路第58地区 トレント配置図・セクション図	21
第67回 滝下道路J地区 調査地位置図	22
第68回 滝下道路J地区 トレント配置図	22
第69回 滝下道路J地区 セクション図	22
第70回 沖田道路第147次調査地点 調査地位置図・トレント配置図	22
第71回 沖田道路第147次調査地点 セクション図	23
第72回 川坂道路第1地区 調査地位置図	23
第73回 川坂道路第1地区 トレント配置図・セクション図	23
第74回 桃宜ノ前道路第1地区 5次調査 調査地位置図	23
第75回 桃宜ノ前道路第1地区 5次調査 トレント平面図	24
第76回 厚原横道下道路接続地 調査地位置図	24
第77回 厚原横道下道路接続地 トレント配置図・セクション図	24
第78回 中原道路第27地区 調査地位置図	24
第79回 中原道路第27地区 トレント配置図・セクション図	25
第80回 桃宜ノ前道路第4地区 調査地位置図	25
第81回 桃宜ノ前道路第4地区 トレント配置図・セクション図	25
第82回 沢川B道路接続地 調査地位置図	26
第83回 沢川B道路接続地 トレント配置図・セクション図	26
第84回 地藏横道路接続地 調査地位置図	26
第85回 地藏横道路接続地 トレント配置図・セクション図	27
第86回 中里4古墳群第5地区 調査地位置図	27
第87回 中里4古墳群第5地区 トレント配置図・セクション図	28
第88回 潟上道路第1地区 調査地位置図	28
第89回 潟上道路第1地区 トレント配置図・セクション図	28

<b>第2章 東平道路・三日市魔寺跡の調査</b>	
<b>第1節 東平道路・三日市魔寺跡の概要</b>	
第90図 5～7世紀の主要集落と古墳	43
第91図 東平道路の調査区と官衙関連遺物の出土状況	44
第92図 東平道路第3地区 出土銅印	45
第93図 東平道路第2・3地区周辺の状況	45
第94図 東平道路第15地区	46
第95図 三日市魔寺跡周辺の状況	46
第96図 古代の主要集落と官衙関連遺物の分布	47
<b>第2節 第48地区的調査成果</b>	
第97図 東平道路第48地区 調査地位置図	48
第98図 東平道路第48地区 出土遺物	48
第99図 東平道路第48地区	
トレンチ配図図・1トレンチ平面図・セクション図	49
<b>第3節 第55地区的調査成果</b>	
第100図 東平道路第55地区 調査地位置図	49
第101図 東平道路第55地区 トレンチ配図図	50
第102図 東平道路第55地区 トレンチ平面図・セクション図	51
第103図 東平道路第55地区 出土遺物（土器・土製品）	53
第104図 東平道路第55地区 出土遺物（瓦①）	55
第105図 東平道路第55地区 出土遺物（瓦②）	56
第106図 東平道路第55地区 出土遺物（瓦③）	57
第107図 東平道路第55地区 出土遺物（瓦④）	58
第108図 東平道路第55地区 出土遺物（瓦⑤）	59
第109図 東平道路第55地区 出土遺物（瓦⑥）	60
<b>第4節 第57地区的調査成果</b>	
第110図 東平道路第57地区 調査地位置図	61
第111図 東平道路第57地区 トレンチ配図図	61
第112図 東平道路第57地区 トレンチ平面図・セクション図	62
第113図 東平道路第57地区 出土遺物	62
<b>第3章 富士岡1古墳群の調査</b>	
<b>第1節 調査の経緯と経過</b>	
第114図 富士岡1古墳群第12地区 調査地位置図	63
第115図 富士岡1古墳群第12地区 トレンチ配図図	64
第116図 3・4・5・6・7・トレンチ セクション図	65
<b>第2節 道路の立地と調査歴史</b>	
第117図 周辺道路分布図	66
第118図 富士岡1古墳群 調査履歴図	67
第119図 花川戸第1号墳・花川戸第2号墳・花川戸第3号墳	
石室と出土遺物	68
<b>第3節 花川戸第4号墳の調査</b>	
第120図 1・2トレンチ 花川戸第4号墳	
墳丘・周辺発掘状況平面図・セクション図	70
第121図 1トレンチ 花川戸第4号墳	
石室平面図・セクション図	72
第122図 花川戸第4号墳 出土遺物	74
<b>第4節 墓穴建物跡・土坑・ピット</b>	
第123図 富士岡1古墳群第12地区 出土遺物	76
<b>第4章 柏原道路の調査</b>	
<b>第1節 道路の概要</b>	
第124図 柏原道路 位置図	79
第125図 柏原道路 調査範囲図	80
<b>第2節 第4地区的調査成果</b>	
第126図 柏原道路第4地区 調査地位置図	81
<b>第127図 柏原道路第4地区 2次調査</b>	
調査区位置図・道構全体図・基本土層図	81
第128図 SB01	83
第129図 SB01カマフ	83
第130図 SB02	84
第131図 SB02カマフ	84
第132図 SB03	86
第133図 SB03カマフ	86
第134図 SB01・SB02・SB03・SD01 出土遺物	87
第135図 SH01	88
第136図 SH02	89
第137図 SH03	89
第138図 SH02・SH03・SD02 出土遺物	90
第139図 SD01～5・Pit. 平面図・セクション図	91
第140図 道構外出土遺物	92
<b>第3節 第6地区的調査成果</b>	
第141図 柏原道路第6地区	
調査区位置図および試掘確認調査土層図	95
第142図 柏原道路第6地区5次調査 全体図（Ⅳ層上面）	97
第143図 柏原道路第6地区5次調査 全体図（Ⅲ層上面）	98
第144図 柏原道路第6地区5次調査 基本土層	99
第145図 道物集中4	100
第146図 出土遺物実測図（弥生時代後期～古墳時代前期）	101
第147図 道物集中1	102
第148図 道物集中2	103
第149図 道物集中3・SX05	104
第150図 道物集中5・SK01	105
第151図 SX04	106
第152図 SX06・SX07	107
第153図 出土遺物実測図（古墳時代中期～後期初頭）	108
第154図 SB01	109
第155図 SD01	111
第156図 SD02	112
第157図 SD03	113
第158図 SD04	114
第159図 SX01	115
第160図 SX02	116
第161図 SX03	117
第162図 出土遺物実測図（奈良時代以降）	118
<b>第4節 第7地区的調査成果</b>	
第163図 柏原道路第7地区 調査地位置図	120
第164図 柏原道路第7地区 トレンチ配図図・セクション図	121
第165図 柏原道路第7地区 出土遺物	121
<b>第5節 静岡県富士市中柏原新田40号「柏原道路」の地形地質</b>	
国1A 柏原道路第6地区トレンチ東壁上部	125
国1B 柏原道路第6地区トレンチ東壁下部	125
国2 柏原道路大潤スコリアFj-Kwb（第7刷）	126
国3 柏原道路大潤スコリア	126
国4 低温酸化した柏原道路大潤スコリア	126
国5 直径1cmの気孔の多いスコリア例	126
国6 高温酸化した柏原道路大潤スコリア	126
国7 第7層下半スコリア粉碎試料の実体顕微鏡反射光像	126
国8 柏原道路大潤スコリア層Fj-Kwbの典型的な石基構成	128
国9 第7層下半に軋する地火起源透明ガラス	128
国10 第7層下半に軋する地火起源透明ガラス	128
国11 第7層上半を構成する回転破碎円錐入りスコリア層	128

## 挿表目次

図 12 第7層上半中の赤黄褐色スコリア質火山灰に包まれる 表 I No.14破砕岩塊	128
図 13 第6層上半のスコリア群	131
図 14 第6層上半スコリア	131
図 15 第6層上半スコリア	131
図 16 第6層上半スコリア	131
図 17 第6層上半の漂着軽石	131
図 18 第6層上半に含まれる富士系スコリアの 典型的な石馬タイプ	131
図 19 第6層上半に含まれる赤火山起源透明ガラス	131
図 20 第6層中の礫の堆積状況	134
図 21 第6層	134
図 22 第6層	134
図 23 第6層のスコリアの気孔中に飛び込んだ破砕岩片	134
図 24 中相原海岸での試料 101 及び 102 の位置	136
図 25 埋積物の粒径密度分布の諸特徴	140
第6節 富士市相原道路から出土した馬齒	
写真 1 取上げ前の状況	144
図 1 柏原道路出土馬齒と東日本古墳時代～ 中世道路出土馬齒の歯冠長・歯冠高の比較	145
図 2 柏原道路出土馬と東日本古墳時代～ 中世道路出土馬の歯冠長 LSI 比較	146
写真 2 左下部 P2 の新使用痕と推定される摩耗	147
写真 3 出土馬齒	148
第7節 柏原道路の調査結果	
第 166 図 柏原道路第 6 地区の土層と土器の関係	149
第 167 図 田子の浦通り西半部堤防の道路跡地①	150
第 168 図 田子の浦通り西半部堤防の道路跡地②	151
第 5 章 沖田道路の調査	
第 1 節 調査の経緯と経過	
第 169 図 沖田道路第 133 次調査地点 調査地位置図	153
第 170 図 沖田道路第 133 次調査地点 トレンチ配置図	153
第 2 節 道路の環境と桑里型水田	
第 171 図 沖田道路の位置	154
第 172 図 沖田道路 調査現況図	155
第 173 図 沖田道路 眼窓検出調査地点と 糞便堆立点・土層柱状図	159
第 174 図 沖田道路 木田岡遺跡検出地位置図	160
第 175 図 「静岡縣富士郡今泉村地番反別入地図」と 推定墓室区画	161
第 176 図 小咲町の推定	162
第 3 節 第 133 次調査地点の調査成果	
第 177 国 沖田道路第 133 次調査地点 土層柱状図	162
第 178 国 単構造船・木棺転用のイメージ	163
第 179 国 沖田道路第 133 次調査地点 出土遺物（木製品①）	164
第 180 国 沖田道路第 133 次調査地点 出土遺物（木製品②）	166
第 181 国 沖田道路第 133 次調査地点 出土遺物（木製品③）	168
第 182 国 単構造船の復元	169
第 183 国 沖田道路第 133 次調査地点 出土遺物（木製品④）	170
第 184 国 沖田道路第 133 次調査地点 出土遺物（木製品⑤）	171
第 185 国 沖田道路第 133 次調査地点 出土遺物（木製品⑥）	172
第 186 国 沖田道路第 133 次調査地点 出土遺物（鏡・勾玉）	173
第 187 国 沖田道路第 133 次調査地点 出土遺物 (土器・石製品)	174
第 1 章 平成 22・23 年度の調査	
第 1 節 調査体制と調査件数	
第 1 表 平成 22・23 年度発掘調査一覧	1
第 3 節 平成 23 年度の発掘調査報告	
第 2 表 天間沢道路第 32 地区 出土遺物観察表	20
第 2 章 東平道路・三日市発掘調査	
第 2 節 第 48 地区の調査成果	
第 3 表 東平道路第 48 地区 出土遺物観察表	48
第 3 節 第 55 地区の調査成果	
第 4 表 東平道路第 55 地区 出土遺物観察表	54
第 4 節 第 57 地区の調査成果	
第 5 表 東平道路第 57 地区 出土遺物観察表	62
第 3 章 富士岡 1 古墳群の調査	
第 2 節 道路の立地と調査現況	
第 6 表 富士岡 1 古墳群 調査現況	67
第 4 節 穴建物跡・土坑・ピット	
第 7 表 富士岡 1 古墳群第 12 地区 空穴建物跡・溝状構造 詳細一覧	75
第 8 表 富士岡 1 古墳群第 12 地区 出土遺物観察表	77
第 4 章 柏原道路の調査	
第 1 節 道路の概要	
第 9 表 柏原道路 調査現況	80
第 2 節 第 4 地区の調査成果	
第 10 表 柏原道路第 4 地区 出土遺物観察表	93
第 3 節 第 6 地区の調査成果	
第 11 表 柏原道路第 6 地区 出土遺物観察表	118
第 4 節 第 7 地区の調査成果	
第 12 表 柏原道路第 7 地区 出土遺物観察表	121
第 5 節 静岡県富士市中柏原新田 40 号柏原道路の地形地質	
表 1 第 7 層上半部に含まれるスコリア以外の粗粘物の諸特徴	130
表 2 第 6 層構成物の諸特徴	135
表 3 柏原海岸静岡時 (2013 年 2 月 13 日) の 海上带 swash zone の礫の諸特徴	136
表 4 柏原海岸荒天時 (2013 年 2 月 13 日以前) 汀段 berm crest の礫の諸特徴	137
第 6 節 富士市柏原道路から出土した馬齒	
表 1 出土馬齒一覧	144
第 5 章 沖田道路の調査	
第 2 節 道路の環境と桑里型水田	
第 13 表 沖田道路 調査現況一覧	156
第 14 表 沖田道路 検出柱町一覧	159
第 3 節 第 133 次調査地点の調査成果	
第 15 表 沖田道路第 133 次調査地点 出土遺物観察表 (毎玉)	173
第 16 表 沖田道路第 133 次調査地点 出土遺物観察表 (土器)	174

## 写真図版目次

- カラー図版 1 東平道路第 55 地区 出土瓦集合
- カラー図版 2 柏原道路第 6 地区 調査地全景（南から）  
土層堆積状況  
遺物出土状況（砂利中）
- カラー図版 3 柏原道路第 6 地区 出土遺物集合
- カラー図版 4 沖田道路第 133 次調査地点  
単橢造船（丸木舟部）
- カラー図版 5 沖田道路第 133 次調査地点  
丸木舟部と鉄鋼物の組合方法  
丸木舟部先端のはざ穴  
船底の補修痕  
船底 骨残存状況  
瓦文鏡
- カラー図版 6 富士岡 1 古墳群第 12 地区  
花川戸第 4 号墳 石室全景（南から）  
花川戸第 4 号墳出土 主頭大刀把頭
- PL.1 東平道路 第 48 地区・第 3 地区  
第 48 地区 調査写真  
1. 1Tr SBI 検出状況（北から）  
2. 1Tr SBI 検出状況（西から）  
3. 1Tr SBI 亂物出土状況（北から）  
4. 1Tr SBI 西壁半裁終了（南から）  
5. 1Tr 西壁 SBS セクション（東から）  
6. 2Tr 北壁セクション（南から）
- PL.2 東平道路 第 55 地区  
調査写真  
1. 1Tr 全景（北から）  
2. 1Tr 道標検出状況（南から）  
3. 1Tr 道標検出状況（北から）  
4. 1Tr 西壁 SB1・SBS セクション  
5. SBS サブランチ遺物出土状況  
6. SBS SX1（東から）  
7. 1Tr SBS 検出状況（南から）
- PL.3 ~ PL.7 東平道路 第 55 地区  
出土遺物
- PL.8 東平道路 第 57 地区  
調査写真  
1. 1Tr 全景（西から）  
2. 1Tr 全景（東から）  
3. SBI（北から）  
4. SB2（南から）
- 出土遺物
- PL.9 富士岡 1 古墳群 第 12 地区  
1 次調査写真  
1. 調査地全景（南から）  
2. 花川戸第 4 号墳全景（南から）  
3. 1Tr 西壁セクション  
4. 1Tr 東壁セクション  
5. 1Tr（南から）  
花川戸第 4 号墳 出土遺物
- PL.10 富士岡 1 古墳群 第 12 地区  
2 次調査写真  
1. 2Tr 古墳周溝検出状況と 1Tr（南から）  
2. 2Tr 古墳周溝等検出状況（西から）  
3. 2Tr 古墳周溝等検出状況（北東から）  
4. 2Tr 北壁基部・埴生内埋没構造セクション  
5. 4Tr 北壁 SBT セクション  
6. 5Tr SBS 検出状況（南西から）
- PL.11 富士岡 1 古墳群 第 12 地区  
出土遺物
- PL.12 ~ PL.13 柏原道路第 4 地区  
調査写真  
1. 調査区全景（東から）  
2. SB01・SB02 全景（西から）  
3. SB01 カマド  
4. SB02 カマド  
5. SB03 全景（南から）  
6. SB03 カマド  
7. SD01 全景（西から）  
8. SD04 東手部分（西から）  
9. SH03・SD05（西から）
- PL.14 ~ 15 柏原道路第 4 地区  
出土遺物
- PL.16 柏原道路第 4 地区・第 7 地区  
第 4 地区 出土遺物  
第 7 地区 調査写真  
1. 調査地全景（南から）  
2. 1Tr 南壁セクション（西から）  
3. 2Tr 東壁・南壁セクション（西から）
- PL.17 地区 出土遺物  
PL.17 ~ 19 柏原道路第 6 地区  
調査写真  
1. 調査完了全景（南から）  
2. 遺物集中 4  
3. A-C 区Ⅲ-2 層検出  
4. A-C 区Ⅲ-2 層検出  
5. 遺物集中 1  
6. 遺物集中 3  
7. 遺物集中 5  
8. III 層上部全景  
9. SB01 完掘  
10. SX01・SD01 完掘  
11. A 区西壁・SX01 セクション  
12. SD02 完掘  
13. SD03・SD04 完掘  
14. C 区西壁セクション  
15. SD03 馬鹿頭土状況  
16. SX03 完掘
- 出土遺物集合
- PL.20 ~ 22 柏原道路第 6 地区  
出土遺物
- PL.23 沖田道路第 133 次調査地点  
調査写真  
1. 重機掘削状況  
2. TPI 船部材出土状況  
3. TPI 土層堆積状況  
4. TPI 土層堆積状況  
5. TPI 全景  
6. 出土した単橢造船の丸木舟部
- PL.24 ~ 28 沖田道路第 133 次調査地点  
出土遺物

# 第1章 平成22・23年度の調査

## 第1節 調査体制と調査件数

### 1. 埋蔵文化財発掘調査の体制

平成22年度

〔事務局〕

富士市教育委員会 教育長 平岡 彰三  
 教育次長 堀内 哲雄  
 文化振興課 課長 友野 貴正  
 参事 若月 正巳  
 参事補 木ノ内義昭

〔調査担当〕

文化振興課 主事 佐藤 祐樹  
 藤村 駿  
 臨時職員 佐野五十三  
 小島 利史  
 若林 美希

平成23年度

〔事務局〕

富士市教育委員会 教育長 平岡 彰三（12月退任）  
 山田 幸男（後任）  
 教育次長 鈴木 清二  
 文化振興課 課長 渡井 義彦  
 主幹 前田 勝己

〔調査担当〕

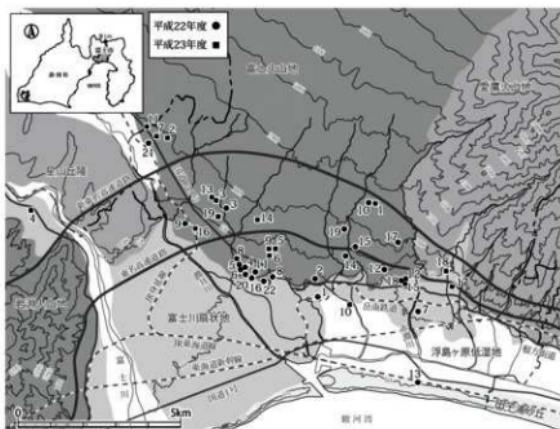
文化振興課 上席主事 佐藤 祐樹  
 主事 藤村 駿  
 臨時職員 服部 孝信  
 小島 利史  
 若林 美希

### 2. 埋蔵文化財発掘調査の件数

平成22年度には28件（本発掘調査0件、試掘・確認調査28件）、平成23年度には24件（本発掘調査2件、試掘・確認調査22件）の埋蔵文化財発掘調査を実施した。

各調査の概要是第1表のとおりである。

平成22年度の調査については本章第2節で、平成23年度の調査については本章第3節で、それぞれ報告するが、本書第2～4章にて別途報告する調査については本章では取り上げない。



第1図 平成22・23年度 調査地の位置と地形区分 (S=1/150,000)

第1表 平成22・23年度発掘調査一覧(1)

調査年度	調査番号	調査名	調査区名	調査員	調査期間	所在地	面積(ヘクタール)	対象(戸数)	調査面積(ヘクタール)	時代	遺構	遺物	調査担当者
平成22年	第1回 1	内宿遺跡	内宿	確認	H22.4.8	今泉3丁目156-7 番	集合住宅建設	1.292	38	なし	なし	なし	佐藤 祐樹
平成22年	第2回 1	第1回調査地点	内宿	確認	H22.4.8	今泉3丁目156-7 番	集合住宅建設	1.292	38	なし	なし	なし	佐藤 祐樹
平成22年	第2回 2	三ヶ森発掘調査 （東平尾跡 48地区）	三ヶ森	試掘 確認	H22.4.22 -4.26	西側上町 2007-2 番	個人住宅建設	270	4	平安	壁穴建物跡	土器類・磁器類	佐藤・小島
平成22年	第1回 2	青木寺跡	青木寺	確認	H22.5.19	今泉5丁目1144	不動産売買	333	23	なし	なし	なし	藤村・小島
平成22年	第2回 2	第3回調査	内宿	確認	-5.21	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	藤村・小島

第1表 平成22・23年度発掘調査一覧(2)

番号	所在地	施設名	施設名	調査期間	所在地	原因・目的	対象(㎡)	調査(㎡)	時代	遺物	遺物	調査担当者	
H22 第1回 第2回	3 久居地区 第1回地区	東平井跡 試掘	東平井跡 試掘	H22.3.5 H22.6.8	厚原234-1 外	店舗新設	3029	185	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第1回 第2回	4 東平井跡 第1回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.6.11 H22.7.7	東平井跡周辺 6-17	道路改良	440	26	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第4回	5 久居地区 第4回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.7.22	佐原236-4 5号	伝承278-4 5号	不動産売買	566	37	なし	なし	なし	佐藤・小島
H22 第1回 第2回	6 久居地区 第1回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.7.27	中里442-5 6号	市立田島小学校 体育館新築建設	65	8	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第1回 第2回	7 田島地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.7.27	中里442-5 6号	宅地開発	727	34	なし	なし	なし	佐藤・若林	
H22 第1回 第2回	8 三井地区新規施設 (第1回地区 第51地区)	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.8.26 H22.9.13	久居二丁目2161 外	店舗新築新築	14564	19 金古-平野	なし	土師器・須恵器	佐藤・藤村		
H22 第1回 第2回	9 沢原地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.8.26 H22.9.13	厚原139-2 外	不動産売買	721	30	なし	なし	なし	佐藤・藤村	
H22 第1回 第2回	10 久居地区 第1回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.9.20 H22.10.6	神戸 壱光	土塁古墳整理	3500	137	なし	なし	なし	佐藤・藤村	
H22 第1回 第2回	11 久居地区 第1回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.10.6 H22.10.17	佐原280-1 107	伝承280-1	個人住宅建設	214	13	なし	なし	なし	佐藤・小島
H22 第1回 第2回	12 比合5古墳群	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.10.15 H22.10.22	比合200 外	公園整備	7600	400	なし	なし	なし	佐藤・若林	
H22 第1回 第2回	13 久居地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.10.27	佐原333-1 外	個人住宅建設	178	25	なし	なし	なし	佐藤・藤村	
H22 第1回 第2回	14 小幡地区 第1回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.11.9	草原913-3	宅地造成	155	12	なし	なし	なし	佐藤・藤村	
H22 第1回 第2回	15 通路跡 第1回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.11.17	草原1120-11	不動産売買	302	8	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第4回	16 久居地区 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.11.25	中稻原29-25 9号	道路改良	300	38 古墳-摩今 豊穴建物跡?	なし	土師器・須恵器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	17 久居地区 第1回地区 第2回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.20	中稻原29-25 9号	個人住宅建設	956	19	なし	なし	なし	佐藤・若林	
H22 第1回 第2回	18 比合3古墳群 第1回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.14	比合1561-1 の一帯	個人住宅建設	359	6	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第1回 第2回	19 三ツ沢通 第2回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.15 H22.12.20	三ツ沢38-外	宅地分譲地造成	3116	10	なし	なし	なし	佐藤・若林	
H22 第1回 第2回	20 比合5古墳群 第2回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.17	比合252-1	不動産売買	1439	83	なし	なし	なし	佐藤・若林	
H22 第1回 第2回	21 沢原地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.18	比合1561-1 の一帯	個人住宅建設	846	35	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第4回	22 朝日新宿 第4回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.21	中稻原新宿198-1 外	道路改良	100	8 古墳-律令	なし	土師器	藤村・小島		
H22 第4回	23 朝日新宿 第4回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.22	中稻原新宿155-1 外	宅地造成	1349	46 古墳-律令 豊穴建物跡	なし	土師器・須恵器	藤村・小島		
H22 第1回 第2回	24 天原地区 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.26	天原625-10 5号	不動産売買	342	8	なし	なし	なし	藤村・小島	
H22 第2回	25 天原地区 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.27	天原128-1-128	個人住宅建設	350	47 古墳-平安 豊穴建物跡	なし	土師器・須恵器	藤村・小島		
H22 第1回 第2回	26 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	浅井町字3425-1	共同住宅建設	675	15 金古-平安	なし	土師器・石製品	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	27 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	三ツ沢45-2 9号	高輪作業用 資材貯蔵庫	1390	40	なし	なし	なし	佐藤・若林	
H22 第1回 第2回	28 天原地区 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	天原116-8 1号	集合住宅建設	635	14	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第1回 第2回	29 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	天原128-1-128	宅地造成	960	32	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第1回 第2回	30 三日町通 (東平井跡付近 35地区)	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	比合297-6 5号	個人住宅建設	350	47 古墳-平安 豊穴建物跡	なし	土師器・須恵器	藤村・小島		
H22 第1回 第2回	31 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	三ツ沢45-2 9号	個人住宅建設	1390	40	なし	なし	なし	佐藤・若林	
H22 第1回 第2回	32 天原地区 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	天原116-8 1号	集合住宅建設	635	14	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第1回 第2回	33 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	天原116-8 1号	宅地造成	960	32	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第1回 第2回	34 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	天原116-8 1号	宅地造成	960	32	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第1回 第2回	35 三日町通 (東平井跡付近 35地区)	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	比合297-6 5号	不動産売買	168	17 古墳-平安 豊穴建物跡 2軒	なし	土師器・須恵器	藤村・小島		
H22 第1回 第2回	36 小幡地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	比合297-6 5号	個人住宅建設	2758	12	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第1回 第2回	37 行徳10古墳群 (第3回地区)	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	石坂704-5 5号	老人福祉施設建設	1641	58 不明	御持1回	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第1回 第2回	38 行徳10古墳群 (第3回地区)	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	石坂704-5 5号	済生会新宿	1308	83 金古-平安	なし	土師器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	39 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	天原1056-1 5号	集合住宅建設	628	19 金古	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	40 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	天原1056-1 5号	個人住宅建設	717	6	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第1回 第2回	41 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	天原1056-1 5号	調査探査	2749	70	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第1回 第2回	42 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	今富334-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	土師器	佐藤・小島		
H22 第4回	43 朝日新宿 第3回地区	本契約 第4回地区	本契約 第4回地区	H22.12.31 H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	道路改良	475	古墳-律令 豊穴建物跡	なし	土師器・須恵器	藤村・小島		
H22 第1回 第2回	44 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	個人住宅建設	210	10	なし	なし	なし	佐藤・小島	
H22 第3回	45 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	46 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	47 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	48 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	49 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	50 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	51 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	52 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	53 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	54 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	55 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	56 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	57 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	58 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	59 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	60 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	61 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	62 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	63 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	64 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	65 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	66 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	67 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	68 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	69 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	70 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	71 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	72 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	73 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	74 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	75 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	76 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	77 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	78 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	79 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	80 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	81 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	82 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	83 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	84 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号	済生会新宿	2317	39 古墳	なし	関文土器	佐藤・小島		
H22 第1回 第2回	85 朝日新宿 第3回地区	試掘 試掘	試掘 試掘	H22.12.31	中稻原新宿198-1 5号								

## 第2節 平成22年度の発掘調査報告

### 1. 沖田遺跡 第146次 調査地位置図・トレンチ配置図 (S=1/2,500)

所在地 富士市今泉3丁目158-7 外

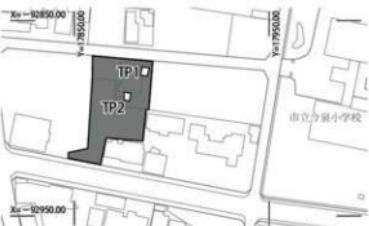
調査面積 28m<sup>2</sup> (調査対象面積 1.292m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年4月8日

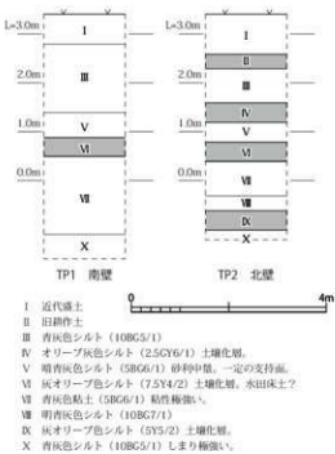
調査原因 集合住宅建設

調査の概要 2箇所の試掘坑を設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 造構・遺物は検出されなかった。



第2図 沖田遺跡第146次 調査地位置図・トレンチ配置図 (S=1/2,500)



第3図 沖田遺跡第146次 セクション図 (S=1/100)

### 2. 善得寺廃寺跡 第3地区

所在地 富士市今泉5丁目1144

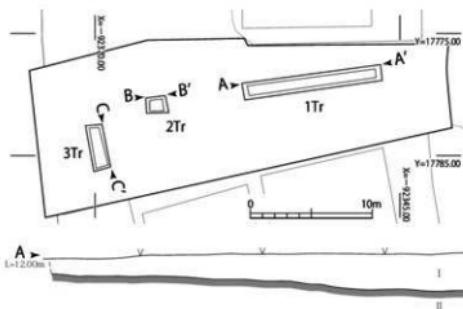
調査面積 23m<sup>2</sup> (調査対象面積 353m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年5月19日～5月21日

調査原因 不動産売買

調査の概要 3本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

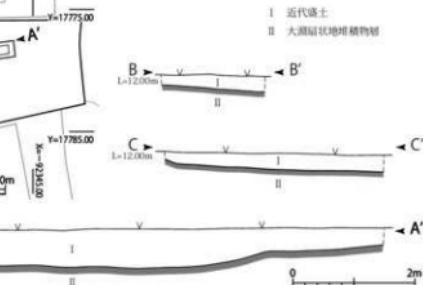
調査の結果 造構および遺物は検出されなかった。



第5図 善得寺廃寺跡第3地区 トレンチ配置図 (S=1/400)・セクション図 (S=1/80)



第4図 善得寺廃寺跡第3地区 調査地位置図 (S=1/5,000)



### 3. 大石遺跡 第2地区

所在地 富士市厚原2314-1 外

調査面積 185m<sup>2</sup> (調査対象面積3,029m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年5月25日

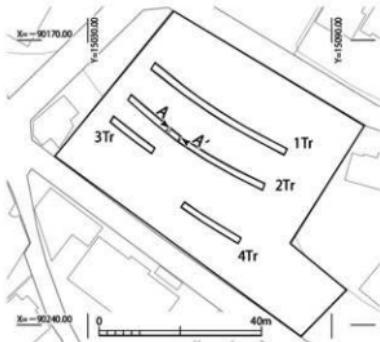
調査原因 店舗建設

調査の概要 4本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 造構および遺物は検出されなかった。



第6図 大石遺跡第2地区 調査位置図 (S=1/5,000)



第7図 大石遺跡第2地区 トレンチ配置図 (S=1/1,200)・セクション図 (S=1/100)

### 4. 東平遺跡 第49地区

所在地 富士市伝法2804-12

調査面積 22m<sup>2</sup> (調査対象面積443m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年6月8日

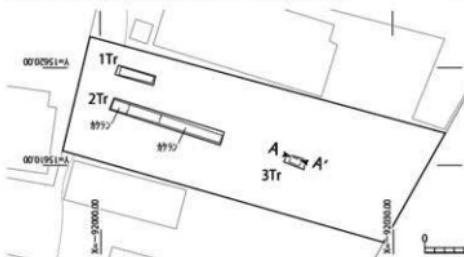
調査原因 不動産売買

調査の概要 3本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

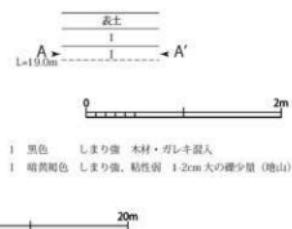
調査の結果 造構・遺物は検出されなかった。過去の開発により土地は全体的に削られていると考えられる。



第8図 東平遺跡第49地区 調査位置図 (S=1/5,000)



第9図 東平遺跡第49地区 トレンチ配置図 (S=1/500)・セクション図 (S=1/50)



### 5. 東平遺跡 第50地区

所在地 富士市伝法2782-1 外

調査面積 57m<sup>2</sup> (調査対象面積 566m<sup>2</sup>)

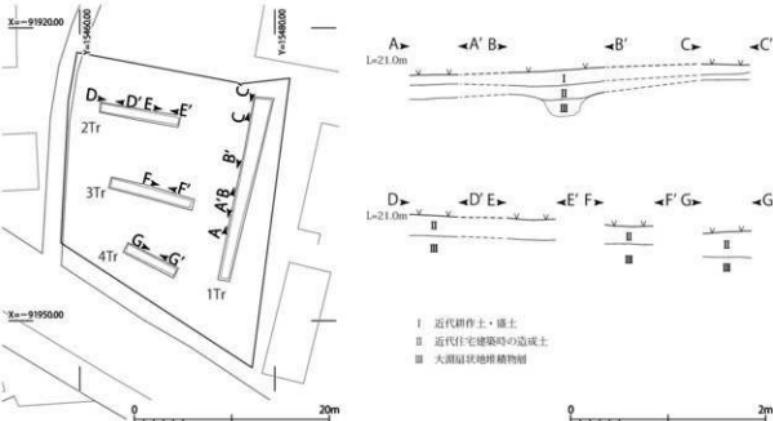
調査期間 平成22年7月6日～7月7日

調査原因 不動産売買

調査の概要 4本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 道構および遺物は検出されなかった。

地表下40～50cmにおいて検出された大淵扁状地堆積物層は、調査区北西隅を最高点として南東～南へと降っていく状況が確認された。



第11図 東平遺跡第50地区 トレンチ配置図 (S=1/500)・セクション図 (S=1/50)

### 6. 東平遺跡 第15地区7次調査

所在地 富士市伝法3116-1

調査面積 8m<sup>2</sup> (調査対象面積 65m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年7月22日

調査原因 市立伝法小学校体育器具庫建設

調査の概要 対象地は、平成18～20年度にかけて行われた発掘調査で横穴式石室1基と奈良～平安時代の集落跡が発見された東平遺跡第15地区<sup>1)</sup>の南東部分である。

3本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 道構および遺物は検出されなかった。

校庭は2m程度の盛土により平坦面が造りだされており、盛土施行時に地山の一部が削平されているとも考え



第10図 東平遺跡第50地区 調査位置図 (S=1/5,000)

- I 近代耕作土・盛土
- II 近代住宅建築時の造成土
- III 大淵扁状地堆積物層

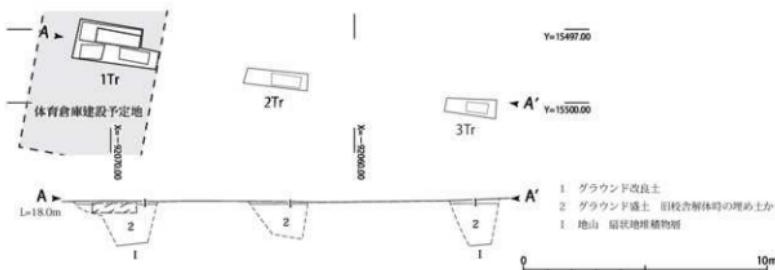
0 2m

られる。また、校庭の中央には東西方向に官地が存在し、かつての「道」の痕跡と考えられる。

1)『東平遺跡 第15地区』富士市教育委員会、2010年。



第12図 東平遺跡第15地区7次調査 調査位置図 (S=1/2,500)



第13図 東平遺跡第15地区7次調査 トレンチ配置図・セクション図 (S=1/200)

## 7. 花守遺跡 第4地区

所在地 富士市中里442-6 外

調査面積 34m<sup>2</sup> (調査対象面積 727m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年7月27日

調査原因 宅地分譲

調査の概要 3箇所の試掘坑を設定し、重機によって地表下3m程度まで掘削、精査を行った。

調査の結果 道構および遺物は検出されなかった。



第14図 花守遺跡第4地区 調査地位図・トレンチ配置図 (S=1/2000)

## 8. 包蔵地外 三日市廐跡隣接地

(東平遺跡 第51地区)

所在地 富士市国久保二丁目 2161 外

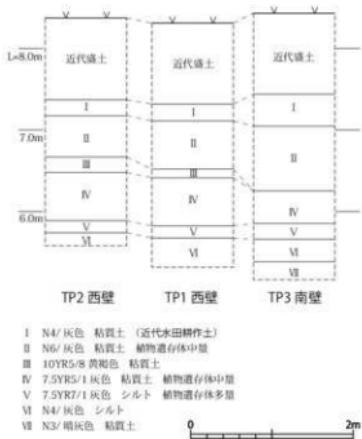
調査面積 19m<sup>2</sup> (調査対象面積 14,564m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年8月26日～8月27日

調査原因 店舗解体新築工事

調査の概要 2箇所の試掘坑を設定し、重機による掘削後、精査を行った。

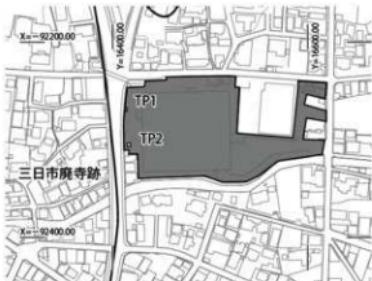
調査の結果 各トレンチとも、地表下2mほどから下では、水分を含んだ細粒砂層やシルト層が厚く堆積した状況を確認することができた。



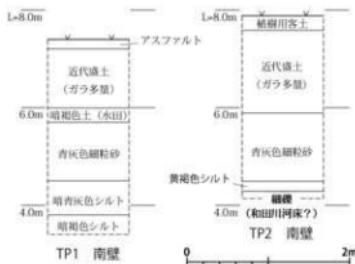
第15図 花守遺跡第4地区 セクション図 (S=1/60)

そのうち最も下層に位置する暗褐色シルト層(TP1)には、図化はできなかつたものの、外面に磨き調整を施す土器部の小片や須恵器小片などといった8～9世紀頃の遺物が含まれていた。

調査区は富士山南麓から延びる扇状地南端直下の崖地に位置しており、潤井川(富士川)もしくは浮島沼の影響によって多量の土砂が絶えず流入する、定住には適さない地形であったと考えられる。道構もまったくみられないことから、出土遺物は和田川の上流や北側の扇状地上に位置する道路から流れ込んだものと考えられる。



第16図 三日市廃寺跡隣接（東平51地区） 調査地位置図（S=1/5,000）



第17図 三日市廐跡隣接(東平51地区) 土層柱状図(S=1/60)

### 9. 沢東B遺跡 第6地区

所在地 富士市厚原159-12

調査面積 30m<sup>2</sup> (調査対象面積 721m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年9月13日

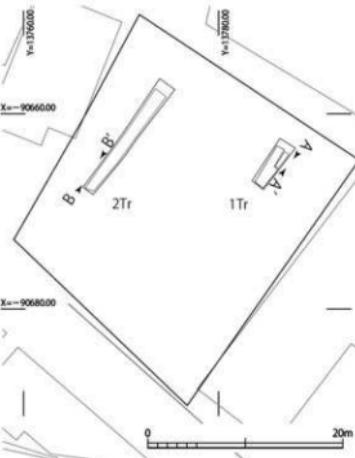
#### 調查原因 不動產臺買

調査の概要 2本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

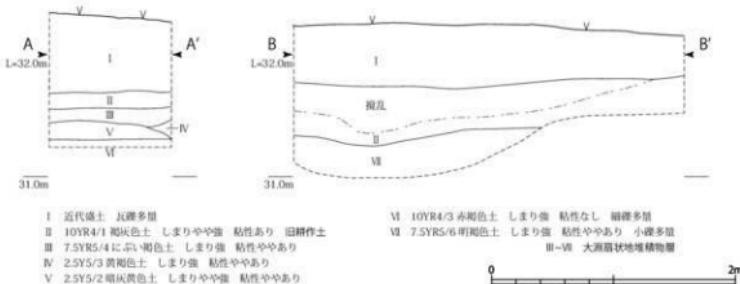
調査の結果、遺構および遺物は検出されなかった。



第18図 沢東B遺跡第6地区 調査地位置図 (S=1/5,000)



第19図 沢東B遺跡第6地区 トレンチ配置図 (S=1/500)



第20図 沢東B遺跡第6地区 セクション図 (S=1/40)

#### 10. 寺下道路 第4地区2次調査

所 在 地 富士市神戸 地先

調 査 面 積 137m<sup>2</sup> (調査対象面積3,500m<sup>2</sup>)

調 査 期 間 平成22年9月30日～10月1日

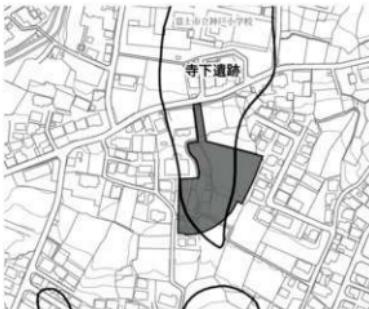
調 査 原 因 土地区画整理

調査の概要 6本のトレンチを設定し、重機による掘削

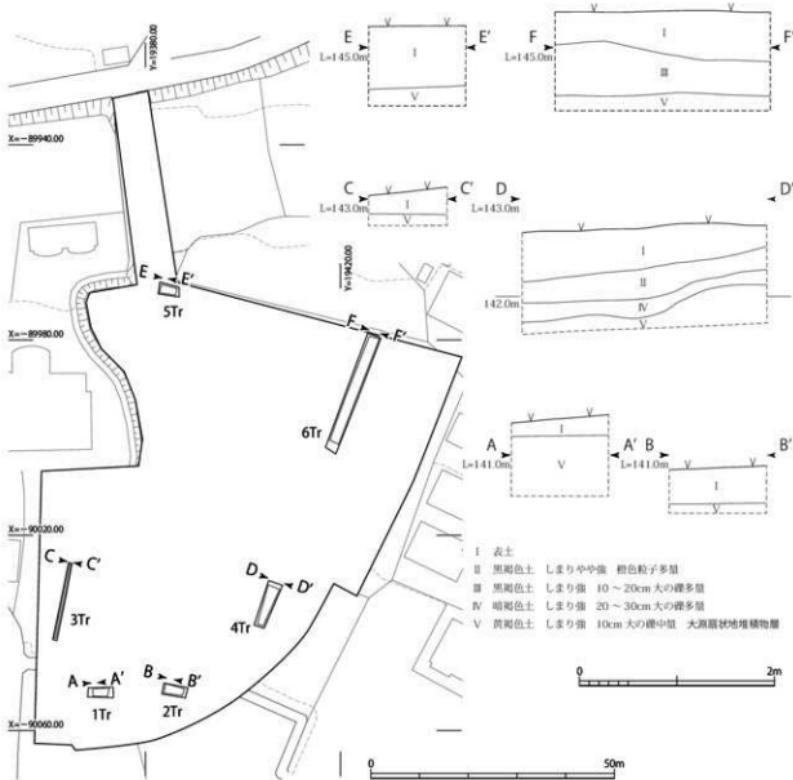
後、精査を行った。

調査の結果 造構および遺物は検出されなかった。

調査区北側の4・5・6トレンチでは、表土下において大小の礫を多量に含んだ丘陵斜面上方からの流入土と考えられる土層(Ⅲ・Ⅳ層)がみられ、その直下において大洞窟状地堆植物層(基盤層)が確認された。



第21図 寺下遺跡第4地区2次調査 調査地位置図 (S=1/5,000)



第22図 寺下遺跡第4地区2次調査 トレンチ配置図 (S=1/1,000)・セクション図 (S=1/50)

## 11. 東平道路 第52地区

所在地 富士市伝法2869-1

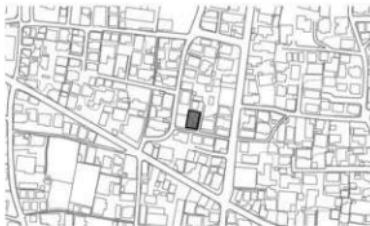
調査面積 13m<sup>2</sup> (調査対象面積 214m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年10月6日～10月7日

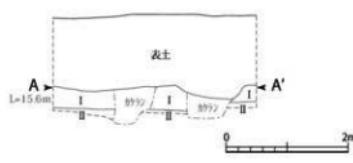
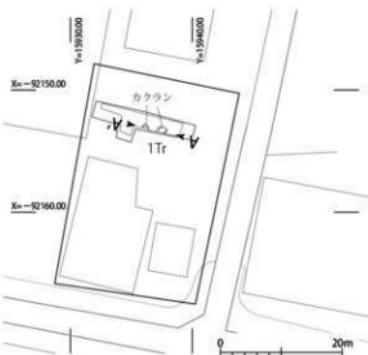
調査原因 個人住宅建設

調査の概要 1本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 遺構および遺物は検出されなかった。



第23図 東平道路第52地区 調査位置図 (S=1/5,000)



I	黒色	しまりややあり。粘性なし。 直径10mmの粒のスコリア（大湖スコリア？）中量。 オレンジ色の粒子少量。
II	オレンジ	しまりなし。粘性なし。マサ。
II分Ⅱ	黒色	しまりややあり。粘性ややあり。 直径10mmの粒のスコリア（大湖スコリア？）中量。 オレンジ色の粒子少量。時期不明。
II分Ⅲ	黒色	しまりややあり。 直径10mmの粒のスコリア（大湖スコリア？）中量。 オレンジ色の粒子少量。時期不明。

第24図 東平道路第52地区 トレンチ配置図 (S=1/400)・セクション図 (S=1/80)

## 12. 比奈5古墳群 第1地区 3次調査

所在地 富士市比奈2038 外

調査面積 400m<sup>2</sup> (調査対象面積 7,600m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年10月15日～10月22日

調査原因 公園整備

調査の概要 対象地では、公園整備工事に伴う発掘調査を平成21年度から実施しており<sup>11)</sup>、今回が3次調査となる。

今回の調査範囲は対象地の東側、現況で谷地となっている場所である。15本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 遺構および遺物は検出されなかった。

南北方向に設定した1～4トレンチでは、地山が南に向かって緩やかに傾斜し、大沢スコリアを含む黒褐色土層と大湖スコリアを含む土層が自然堆積していた。

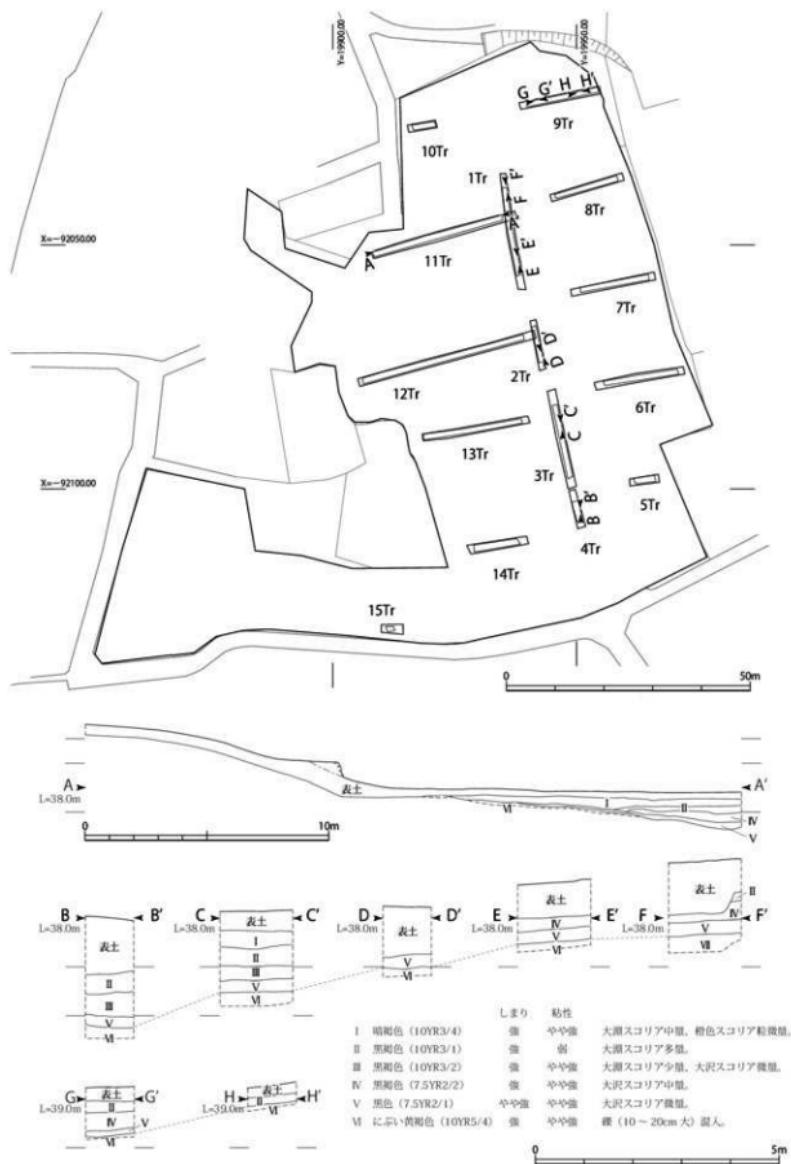
5～9トレンチでは、東側の丘陵から1～4トレンチ付近に向かって地山が傾斜していることが確認できた。



第25図 比奈5古墳群第1地区 3次調査 調査位置図 (S=1/5,000)

11) トレンチにおいては、前回調査した西側の尾根からトレンチ東端に向かって地山が急激に傾斜することが確認できた。

1)『平成21年度 富士市内道路発掘調査報告書』富士市教育委員会、2011年。



第26図 比奈5古墳群第1地区3次調査 トレンチ配置図 ( $S = 1/1,000$ )・セクション図 ( $S = 1/100 \cdot 1/200$ )

## 13. 三新田遺跡 K地区

所在地 富士市桧新田203-1 外

調査面積 25m<sup>2</sup> (調査対象面積 178m<sup>2</sup>)

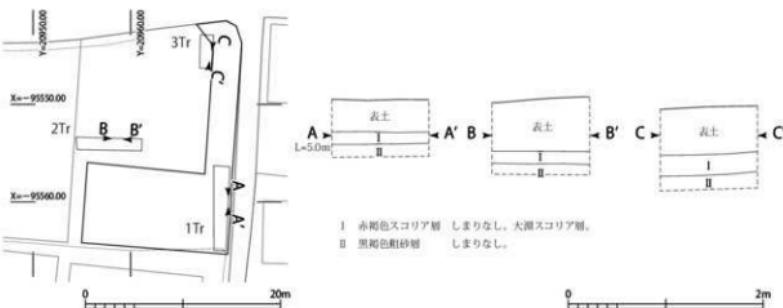
調査期間 平成22年10月27日

調査原因 個人住宅建設

調査の概要 3本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 道構および遺物は検出されなかった。

調査区全域にわたり、大潤スコリア層上面までは削平が及んでいるとみられる。



第27図 三新田遺跡K地区 調査位置図 (S=1/5,000)

## 14. 中島遺跡 第8地区

所在地 富士市原田913-3

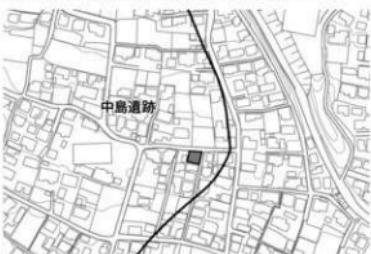
調査面積 12m<sup>2</sup> (調査対象面積 155m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年11月9日

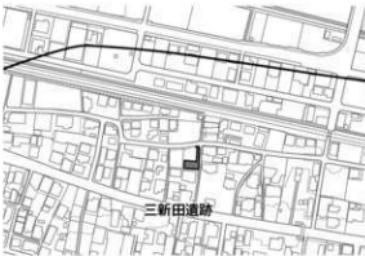
調査原因 宅地造成

調査の概要 1本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 道構および遺物は検出されなかった。



第29図 中島遺跡第8地区 調査位置図 (S=1/5,000)



第27図 三新田遺跡K地区 調査位置図 (S=1/5,000)

近代盛土層および旧表土とみられる褐色土層の下で基盤層である大潤層状地堆積物層が確認された。

調査地と北側の道路や耕作地とでは標高差が大きいため、調査地は既に削平を受けているものと判断される。

第30図 中島遺跡第8地区  
トレンチ配置図 (S=1/500)・セクション図 (S=1/140)

### 15. 滝川1古墳群 第1地区

所 在 地 富士市原田1120-11

調査面積 8m<sup>2</sup> (調査対象面積 202m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年11月17日

調査原因 不動産売買

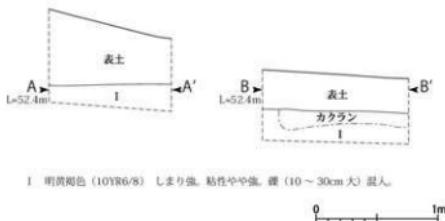
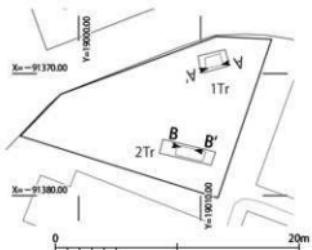
調査の概要 2本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 造構および遺物は検出されなかった。

地表面直下に地山が検出され、古墳時代の地表面(旧表土)は残存していないことが明らかとなった。



第31図 滝川1古墳群第1地区 調査位置図 (S=1/5,000)



第32図 滝川1古墳群第1地区 トレンチ配置図 (S=1/400)・セクション図 (S=1/100)

### 16. 東平道路 第53地区 1次調査・2次調査

所 在 地 富士市伝法3031-1

調査面積 1次調査: 2m<sup>2</sup> 2次調査: 19m<sup>2</sup>

(調査対象面積 958m<sup>2</sup>)

調査期間 1次調査: 平成22年12月1日

2次調査: 平成22年12月20日

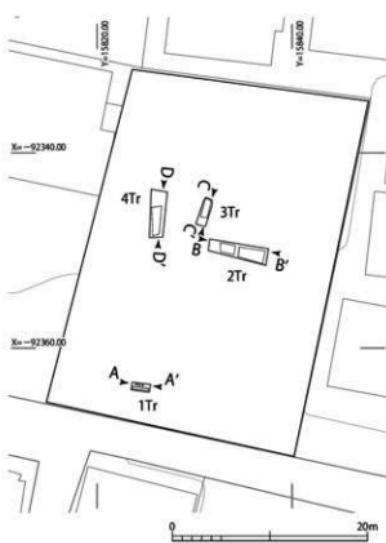
調査原因 共同住宅建設

調査の概要 4本のトレンチ (1次調査…1トレンチ、2次調査…2～4トレンチ) を設定し、人力・重機による掘削後、精査を行った。

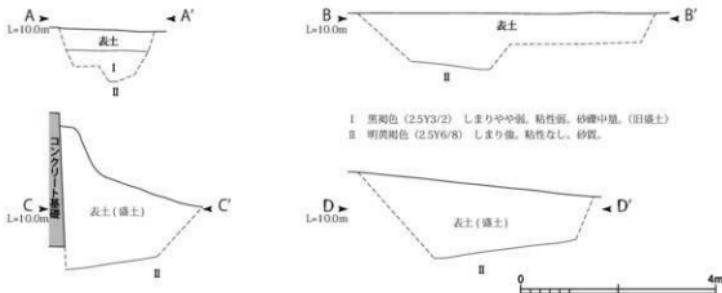
調査の結果 造構および遺物は検出されなかった。



第33図 東平道路第53地区 調査位置図 (S=1/5,000)



第34図 東平道路第53地区 トレンチ配置図 (S=1/500)



第35図 東平遺跡第53地区 セクション図 (S=1/100)

## 17. 包蔵地外 比奈1古墳群隣接地 (第8地区)

所在地 富士市比奈2523-1

調査面積 83m<sup>2</sup> (調査対象面積 1439m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年12月7日

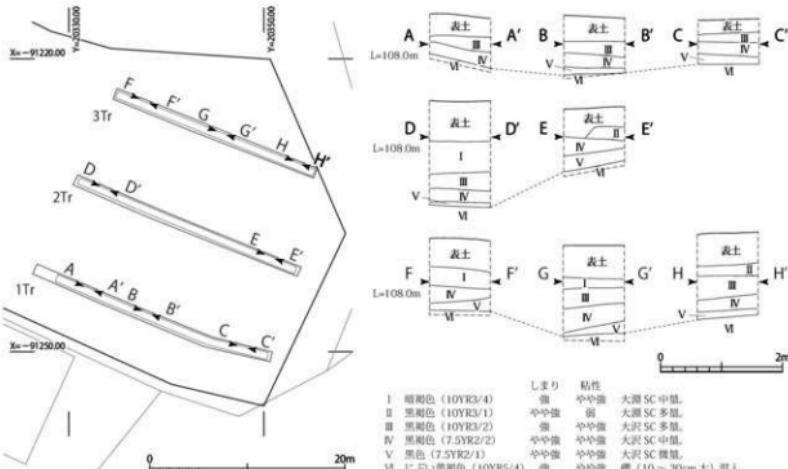
調査原因 不動産売買

調査の概要 3本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 2~3トレンチの一部においては、表土直下に大潤スコリアを含む土層が確認できたが、遺構および遺物は検出されなかった。



第36図 比奈1古墳群隣接地 調査位置図 (S=1/5,000)



第37図 比奈1古墳群隣接地 トレンチ配置図 (S=1/500)・セクション図 (S=1/180)

### 18. 桃宜ノ前遺跡 第3地区

所在地 富士市比奈1562-1の一部

調査面積 6m<sup>2</sup> (調査対象面積 359m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年12月14日

調査原因 個人住宅建設

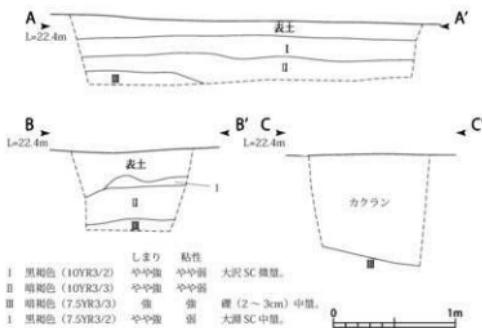
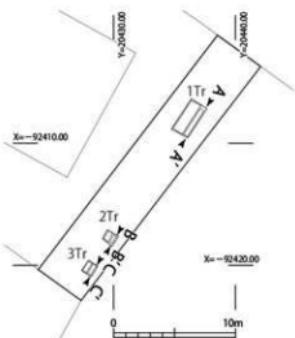
調査の概要 3本のトレンチを設定し、重機による掘削

後、精査を行った。

調査の結果 造構および遺物は検出されなかった。



第38図 桃宜ノ前遺跡第3地区 調査位置図 (S=1/5,000)



第39図 桃宜ノ前遺跡第3地区 トレンチ配置図 (S=1/400)・セクション図 (S=1/40)

### 19. 三ツ沢遺跡 第2地区

所在地 富士市三ツ沢318外

調査面積 10m<sup>2</sup> (調査対象面積 3116m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年12月15日～12月20日

調査原因 宅地分譲地造成

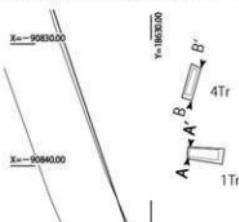
調査の概要 4箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力精査を行った。

調査の結果 造構および遺物は検出されなかった。

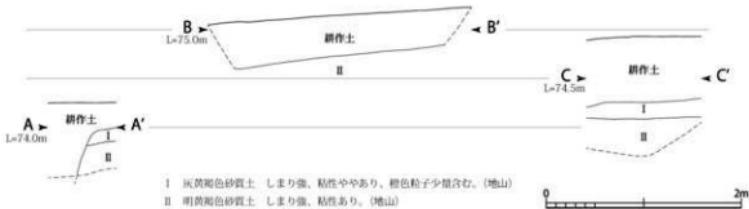
調査地北側は現況で道路より2～3m低く、全体的に耕作地形成の際の削平が及んでいるとみられる。



第40図 三ツ沢遺跡第2地区 調査位置図 (S=1/5,000)



第41図 三ツ沢遺跡第2地区 トレンチ配置図 (S=1/400)



第42図 三ツ沢遺跡第2地区 セクション図 (S=1/50)

## 20. 東平道路 第54地区

所 在 地 富士市伝法3106-1

調査面積 55m<sup>2</sup> (調査対象面積846m<sup>2</sup>)

調査期間 平成22年12月17日

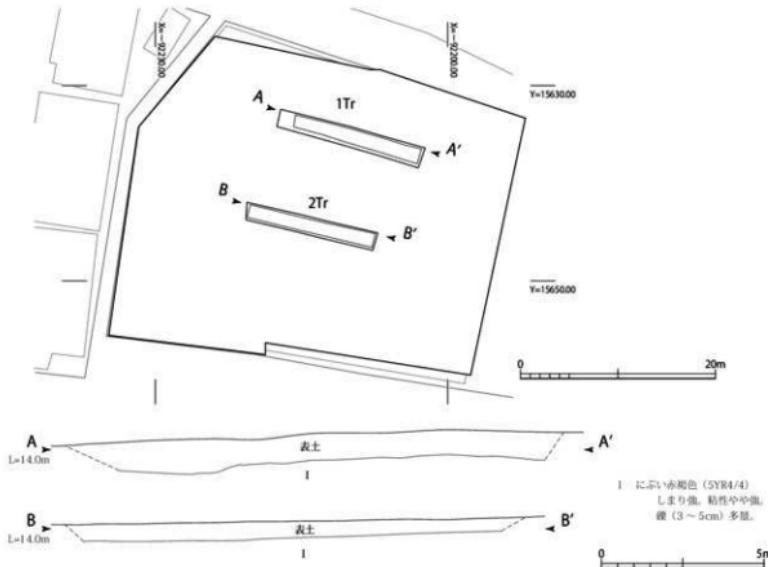
調査原因 動物病院建設

調査の概要 2本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力精査を行った。

調査の結果 表土直下約1mで大甃扇状地堆積物を基盤とする地山が検出されたものの、遺構・遺物の検出には至らなかった。



第43図 東平遺跡第54地区 調査位置図 (S=1/5,000)



第44図 東平遺跡第54地区 トレンチ配置図 (S=1/500)・セクション図 (S=1/150)

## 21. 天間沢道路 第30地区

所在地 富士市天間625-10 外

調査面積 8m<sup>2</sup> (調査対象面積 342m<sup>2</sup>)

調査期間 平成23年1月26日

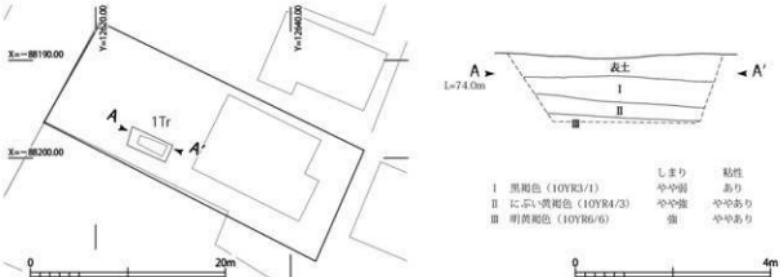
調査原因 不動産売買

調査の概要 1本のトレンチを設定し、重機による掘削

後、人力で精査を行った。

調査の結果 造構および遺物は検出されなかった。

第45図 天間沢道路第30地区 調査位置図 (S=1/5,000)



第46図 天間沢道路第30地区 トレンチ配置図 (S=1/500)・セクション図 (S=1/100)

## 22. 三日市廃寺跡（東平道路 第56地区）

所在地 富士市浅間本町 3423-1

調査面積 15m<sup>2</sup> (調査対象面積 675m<sup>2</sup>)

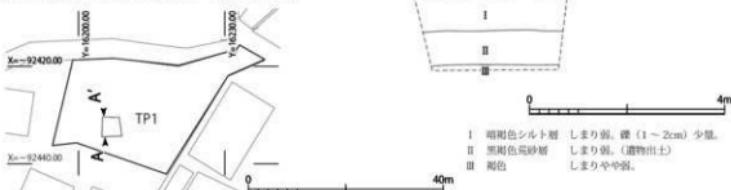
調査期間 平成23年3月1日

調査原因 共同住宅建設

調査の概要 1箇所の試掘坑を設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 調査地は過去に行われた和田川護岸工事により、約2mの盛土がされていることが明らかとなった。

地表下2.6mより小破片の遺物を含む層（II層）が検出されたが、和田川の流れにより運搬され混入した遺物とみられる。奈良・平安時代の包含層はさらに深いと考えられるが、湧水などにより調査が不可能であった。



第47図 三日市廃寺跡（東平56地区）調査位置図 (S=1/5,000)

### 第3節 平成23年度の発掘調査報告

#### 1. 神戸4古墳群 第2地区

所在地 富士市三ツ沢615-2 外

調査面積 40m<sup>2</sup> (調査対象面積 1,890m<sup>2</sup>)

調査期間 平成23年4月8日

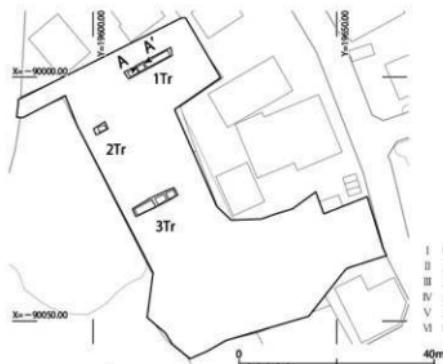
調査原因 高齢者専用賃貸住宅建設

調査の概要 3本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構および遺物の検出につとめた。

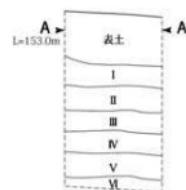
調査の結果 遺構および遺物は検出されなかった。



第49図 神戸4古墳群第2地区 調査地位置図 (S=1/5,000)



第50図 神戸4古墳群第2地区 トレンチ配置図 (S=1/1,000)・セクション図 (S=1/50)



	しまり	粘性	
I 暗褐色 (10YR3/4)	強	なし	大歯ねじ多量。
II 黒色 (2.5Y3/1)	やや強	ややあり	大歯ねじ中量。大沢口77少量。
III 黒褐色 (2.5Y3/1)	やや強	ややあり	大歯ねじ多量。
IV 黑褐色 (10YR2/3)	強	ややあり	大歯ねじ少量。
V 黑褐色 (10YR2/3)	やや強	ややあり	大沢口77微量。
VI 暗褐色 (10YR3/3)	強	ややあり	鍬 (2~3cm) 中量。

#### 2. 天間沢道路 第31地区

所在地 富士市天間1168-6 外

調査面積 14m<sup>2</sup> (調査対象面積 635m<sup>2</sup>)

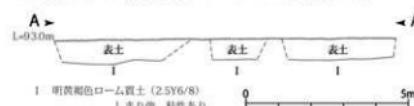
調査期間 平成23年4月11日

調査原因 集合住宅建設

調査の概要 3本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力精査を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

調査の結果 遺構・遺物は検出されなかった。

旧地表はすでに削平を受けていることが確認された。



第52図 天間沢道路第31地区 セクション図 (S=1/150)



第51図 天間沢道路第31地区 調査地位置図・トレンチ配置図 (S=1/1,500)

## 3. 厚原横道下道路 第2地区

所在地 富士市厚原1209-1 外

調査面積 32nf (調査対象面積 960nf)

調査期間 平成23年4月14日

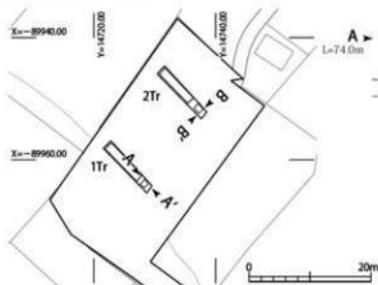
調査原因 宅地分譲地造成

調査の概要 2本のトレンチを設定し、重機による掘削

後、精査を行った。

調査の結果 遺物および遺構は検出されなかった。

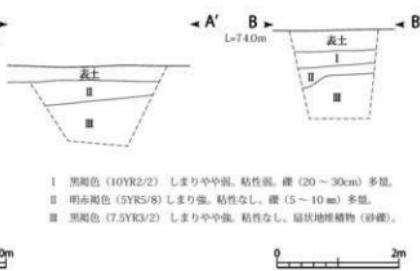
耕作土(表土・I層)の直下に、基盤層である明赤褐色土層が検出された。



第54図 厚原横道下道路第2地区 トレンチ配置図 (S=1/800)・セクション図 (S=1/80)



第53図 厚原横道下道路第2地区 調査位置図 (S=1/5,000)



I 黒褐色 (10YR2/2) しまりやや弱。粘性弱。礫 (20~30cm) 多量。  
II 明赤褐色 (5YR5/8) しまりや無。粘性なし。礫 (5~10cm) 多量。  
III 黒褐色 (7.5YR3/2) しまりやや強。粘性なし。層状堆積物 (砂礫)。

## 4. 包蔵地外 中野沖田遺跡隣接地

所在地 富士市北松野1894 外

調査面積 12nf (調査対象面積 2758nf)

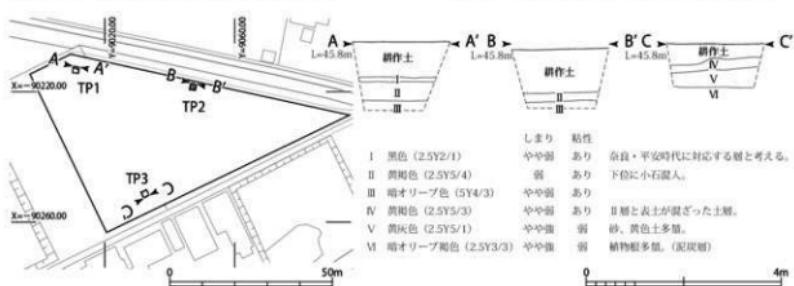
調査期間 平成23年4月26日

調査原因 宅地分譲地造成

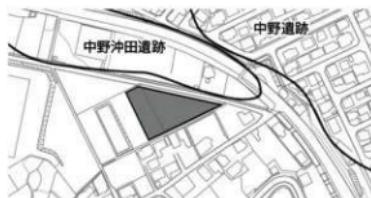
調査の概要 3箇所の試掘坑を設定し、重機による掘削

後、人力精査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果 遺構および遺物は検出されなかった。



第56図 中野沖田遺跡隣接地 トレンチ配置図 (S=1/1,500)・セクション図 (S=1/100)



第55図 中野沖田遺跡隣接地 調査位置図 (S=1/5,000)

	しまり	粘性	特徴
I 黒色 (2.5Y2/1)	やや弱	あり	奈良・平安時代に對応する層と考える。
II 黄褐色 (2.5Y5/4)	弱	あり	下位に小石混入。
III 暗オーロバ色 (5Y4/3)	やや弱	あり	
IV 黄褐色 (2.5Y5/3)	やや弱	あり	II層と表土が混ざった土層。
V 黄灰褐色 (2.5Y5/1)	やや強	弱	砂・黄土多量。
VI 暗オーロバ褐色 (2.5Y3/3)	やや強	弱	植物根多量。(泥炭層)

## 5. 包蔵地外 石坂10古墳群隣接地（第3地区）

所 在 地 富士市石坂70-6 外

調査面積 58m<sup>2</sup>（調査対象面積 1.641m<sup>2</sup>）

調査期間 平成23年5月18日

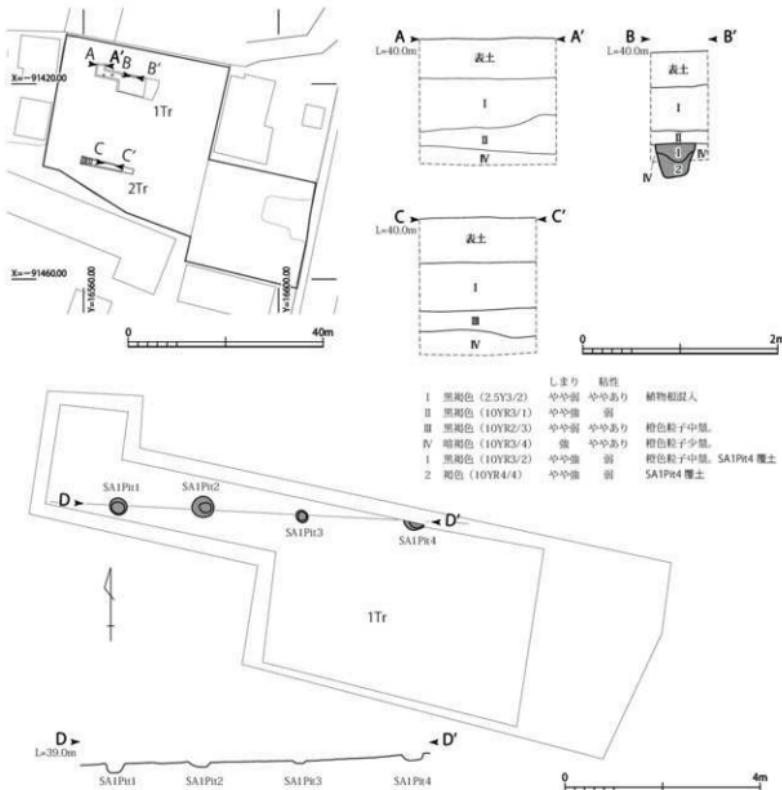
調査原因 老人福祉施設建設

調査の概要 2本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 古墳時代後期以降の土層は耕作や土地改変により失われていたが、1トレンチで、東西方向に並ぶピット4基が検出された。トレンチを拡張した結果、掘立柱建物跡とは考えられないことから横列（SA1）とした。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。



第57図 石坂10古墳群隣接地 調査位置図 (S=1/5,000)



第58図 石坂10古墳群隣接地 トレンチ配置図 (S=1/1,000)・セクション図 (S=1/50)・1トレンチ SA1 平面図・エレベーション図 (S=1/100)

## 6. 滝下道路 I 地区

所在地 富士市伝法1957-1

調査面積 83m<sup>2</sup> (調査対象面積 1,808m<sup>2</sup>)

調査期間 平成23年5月19日～5月20日

調査原因 調査依頼

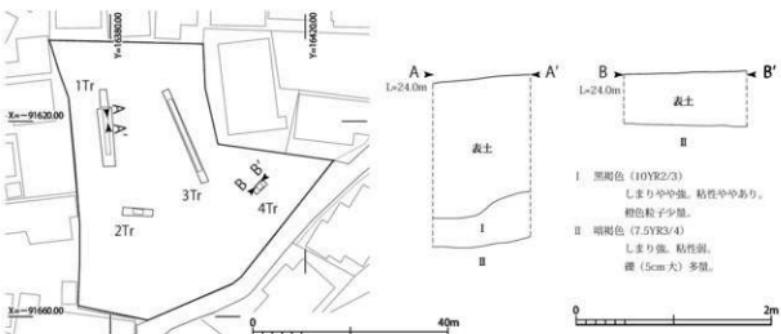
調査の概要 4本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 道構は検出されなかった。

また、奈良・平安時代と考えられる土師器片4点が出土したが、これは周囲からの流れ込みと考えられる。



第59図 滝下道路I地区 調査位置図 (S=1/5,000)



第60図 滝下道路I地区 トレンチ配置図 (S=1/1,000)・セクション図 (S=1/50)

## 7. 天間沢道路 第32地区

所在地 富士市天間1096-1 外

調査面積 19m<sup>2</sup> (調査対象面積 628m<sup>2</sup>)

調査期間 平成23年6月3日

調査原因 集合住宅建設

調査の概要 1本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力精査を行い、道構・遺物の検出に留めた。

調査の結果 トレンチ北端のⅢ層中より、繩文土器1片(第64図1)が出土したが、明確な道構を捉えることはできなかった。また、トレンチ南側には大規模な擾乱が存在することから、調査地北側には道構の存在が推定されるものの、調査地内には埋蔵文化財は残存しないものと考えられる。

出土遺物 トレンチから出土した繩文土器1片を示す。

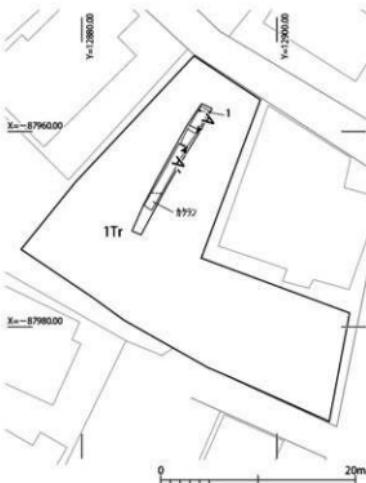
第2表 天間沢道路第32地区 出土遺物観察表

博団	国版	報告 番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	内面色調	外面色調	備考
第64図	39頁	I	1Tr・第Ⅲ層	縄文土器	深鉢?	口縁部	-	(4.4)	-	10YR8/4 (にほい黄橙) 10YR4/3 (にほい黄褐)	茅山下層式		

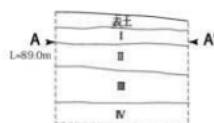


第61図 天間沢道路第32地区 調査位置図 (S=1/5,000)

した(第64図1)。早期後葉、茅山下層式の口縁部片である。口唇部端は内側に面取りされ、口唇部の内外に刺突文が施されている。口辺部文様帶は、横方向とやや弧を描く斜方向の刺突列で構成され、刺突文施用後、ごく浅い凹線を施することで刺突列を際立たせている。



第62図 天間沢遺跡第32地区 トレンチ配置図 (S=1/500)



- I 黒褐色 (7.5YR3/1)  
II 姫褐色 (10YR3/3)  
III にじみ黄褐色 (10YR5/4)  
IV 明黄褐色 (10YR6/8)
- しまり 粘性  
少々強 あり  
少々強 あり  
強 あり  
強 あり
- 細色粒子少額。  
細色粒子微量。  
黒色土少額。縄文土器出土層。  
ローム質



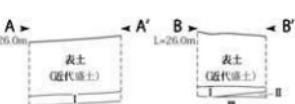
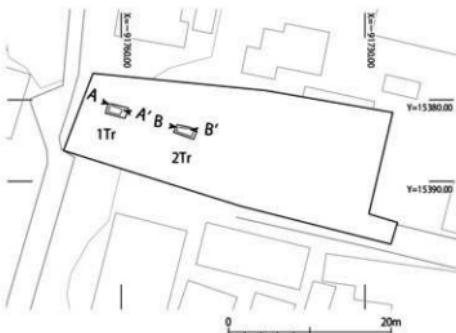
第63図 天間沢遺跡第32地区 セクション図 (S=1/50)



第64図 天間沢遺跡第32地区 出土遺物 (S=1/4)



第65図 東平遺跡第58地区 調査位置図 (S=1/5,000)



- I 黒褐色 (10YR3/1)  
しまりやや強。粘性あり。
- II 灰黄褐色 (10YR4/2)  
しまり強。粘性あり。  
黄褐色中里。
- III 黄褐色 (10YR5/6)  
しまり強。粘性やや弱。  
緑 (5 ~ 10mm) 多量。



第66図 東平遺跡第58地区 トレンチ配置図 (S=1/600)・セクション図 (S=1/100)

### 9. 滝下遺跡 J地区

所在地 富士市伝法1964-1 外

調査面積 70m<sup>2</sup> (調査対象面積 2749m<sup>2</sup>)

調査期間 平成23年7月5日～7月7日

調査原因 調査依頼

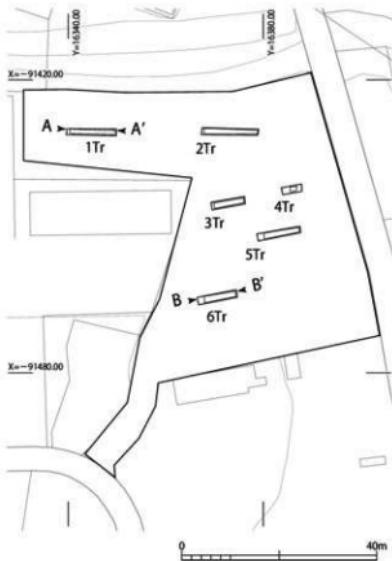
調査の概要 6本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行った。

調査の結果 道構および遺物は確認されなかった。

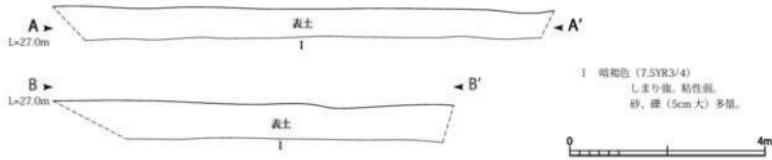
50cm程の耕作土直下に地山が確認され、かつて地山自体も削平を受けていると考えられる。



第67図 滝下遺跡J地区 調査位置図 (S=1/5,000)



第68図 滝下遺跡J地区 トレンチ配置図 (S=1/1,000)



第69図 滝下遺跡J地区 セクション図 (S=1/100)

### 10. 沖田遺跡 第147次調査地点

所在地 富士市今泉534-1 外

調査面積 59m<sup>2</sup> (調査対象面積 2,617m<sup>2</sup>)

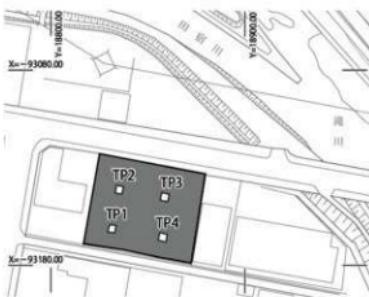
調査期間 平成23年7月11日～7月12日

調査原因 調査依頼

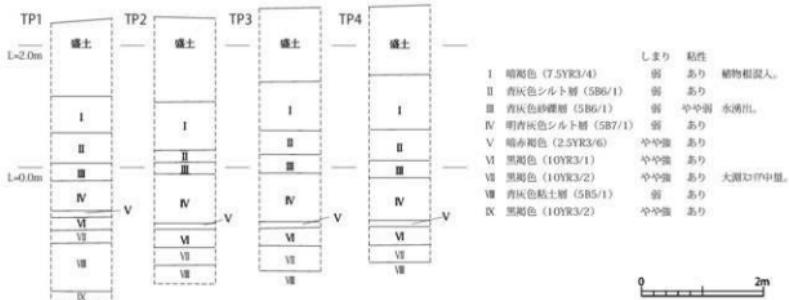
調査の概要 4箇所の試掘坑を設定し、重機による掘削後、人力による排土の精査を行った。

調査の結果 地表下3.5mで大溝スコリアを含む層(Ⅷ層)を検出したものの、確実にⅧ層に伴うと考えられる遺物や道構は確認されなかった。

また、2トレンチ掘削時の排土から土師器片が1点出土したが、層位が明確でなく、図化も出来なかった。



第70図 沖田遺跡第147次調査地点  
調査位置図・トレンチ配置図 (S=1/2,500)



第71図 沖田通跡第147次調査地点 セクション図 (S=1/80)

## 11. 川坂遺跡 第1地区

所 在 地 富士市天間 902-38 外

調査面積 10m<sup>2</sup> (調査対象面積 210m<sup>2</sup>)

調査期間 平成23年7月14日

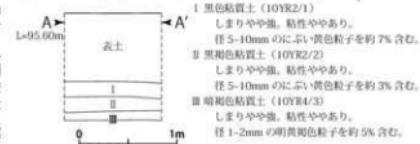
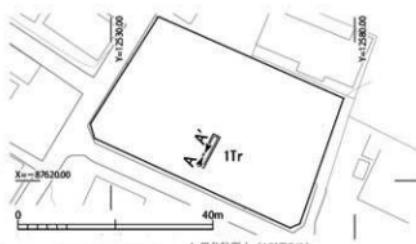
調査原因 個人住宅建設

調査の概要 1本のトレンチを設定し、重機による掘削後、精査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果 遺構・遺物は検出されなかった。



第72図 川坂遺跡第1地区 調査位置図 (S=1/5,000)



第73図 川坂遺跡第1地区

トレンチ配図 (S=1/1,000)・セクション図 (S=1/50)

## 12. 秩宮ノ前道路 第1地区 5次調査

所 在 地 富士市比奈 1651 外

調査面積 13m<sup>2</sup> (調査対象面積 1,100m<sup>2</sup>)

調査期間 平成23年8月26日～8月29日

調査原因 富士市立高等学校新生活館改築

調査の概要 富士市立高等学校（旧・富士市立吉原商業高等学校）校地では過去に4回の発掘調査が行われており、今回調査地の西に位置する屋内運動場改築工事に伴う本発掘調査（3次調査）では、古墳時代および平安時代の集落跡が検出されている<sup>11)</sup>。

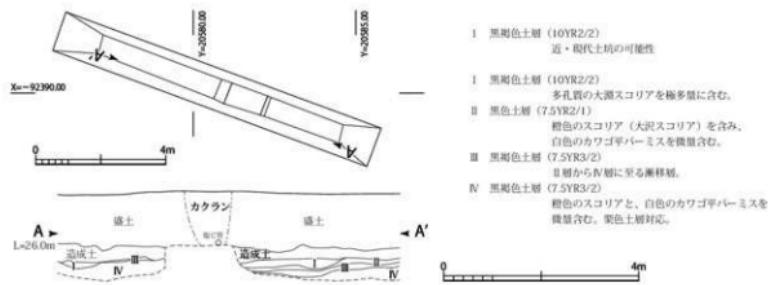
掘削が可能であった対象地の南側に、トレンチを1本設定し、重機による掘削後、人力により精査を行った。

調査の結果 今回の調査では遺構・遺物は認められなかったが、調査が不可能であった北側部分は、今後も注视する必要がある。

1)「秩宮ノ前道路」富士市教育委員会、2008年。



第74図 秩宮ノ前道路第1地区5次調査 調査位置図 (S=1/2,000)



### 13. 包蔵地外 厚原横道下遺跡隣接地 (第3地区)

所在地 富士市厚原1287

調査面積 30m<sup>2</sup> (調査対象面積 1,190m<sup>2</sup>)

調査期間 平成23年9月6日

調査原因 地宅分譲地造成

調査の概要 3本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行った。

調査の結果 道構および遺物は検出されなかった。

耕作土直下に地山が確認され、地山自体も削平を受けていると考えられる。また、3トレンチで検出された土坑は、近・現代のものと考えられる。



### 14. 中原道路 第27地区

所在地 富士市伝法522 外

調査面積 186m<sup>2</sup> (調査対象面積 7,367m<sup>2</sup>)

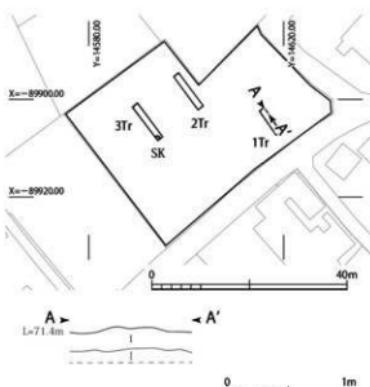
調査期間 平成23年9月7日～9月9日

調査原因 倉庫建設

調査の概要 10本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、道構および遺物の検出につとめた。

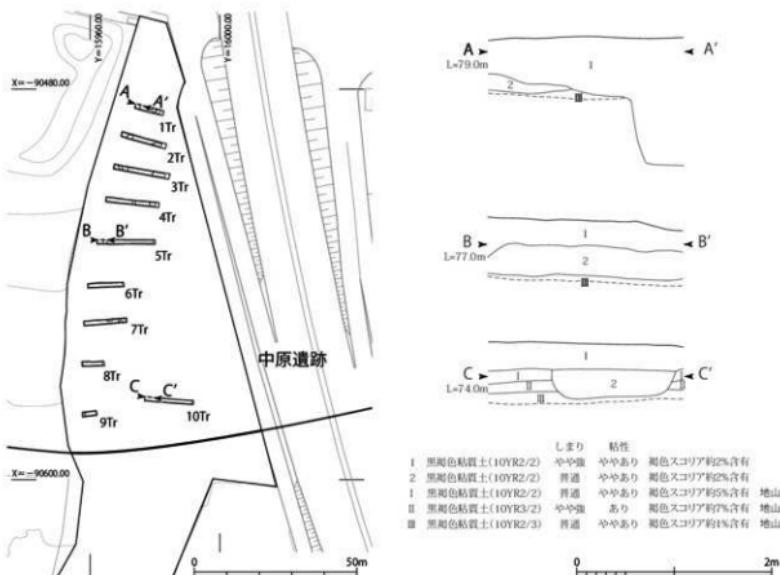
調査の結果 道構および遺物は検出されなかった。

- I 黒褐色土層 (10YR2/2)  
近・現代土坑の可能性
- I 黒褐色土層 (10YR2/2)  
多孔質の大頭スコリアを極量含む。
- II 黒色土層 (7.5YR2/1)  
褐色のスコリア (大頭スコリア) を含み、白色のカワゴ平バーミミスを微量含む。
- III 黑褐色土層 (7.5YR3/2)  
II層からIV層に至る漸移層。
- IV 黑褐色土層 (7.5YR3/2)  
褐色のスコリアと、白色のカワゴ平バーミミスを微量含む。褐色土層対応。



- I オリーブ黒色粘質土 (5Y2/2) 現地の客土  
粘性ややあり、しまりふつう
- I 明褐色粘質土 (10YR3/4) 地山  
粘性ややあり、しまりふつう  
黒色 (5Y2/1) のスコリア (2~10mm大) を約3%含有  
円錐、角錐 (10~25mm大) を約1%含有





第79図 中原遺跡第27地区 トレンチ配置図 (S=1/1,500)・セクション図 (S=1/50)

## 15. 桃宜ノ前遺跡 第4地区

所在地 富士市北奈 1642-17 外

調査面積 16m<sup>2</sup> (調査対象面積 188m<sup>2</sup>)

調査期間 平成23年9月26日

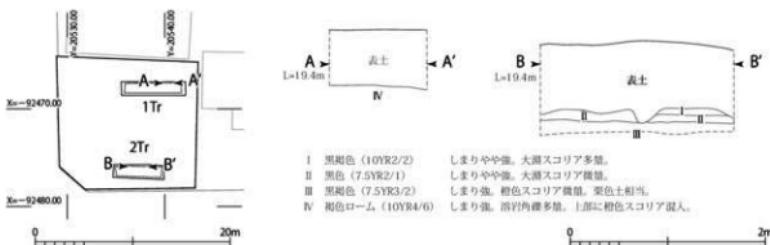
調査原因 不動産売買

調査の概要 2本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果 敷地全体が大規模な削平を受けており、遺構は検出されなかった。また、遺物は縄文土器片・土師器片など4点が出土したが、固化は出来なかった。



第80図 桃宜ノ前遺跡第4地区 調査位置図 (S=1/5,000)



第81図 桃宜ノ前遺跡第4地区 トレンチ配置図 (S=1/500)・セクション図 (S=1/50)

## 16. 包蔵地外 沢東B遺跡隣接地（第7地区）

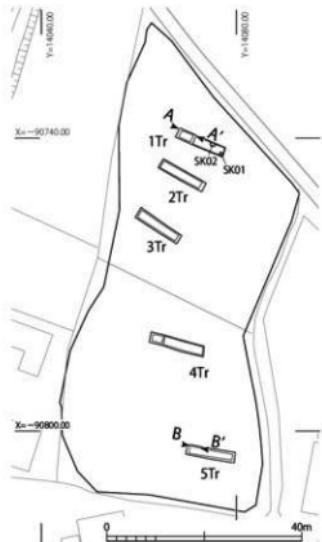
所在地 富士市厚原363-1

調査面積 111m<sup>2</sup>（調査対象面積2,942m<sup>2</sup>）

調査期間 平成23年9月29日～9月30日

調査原因 駐車場増設

調査の概要 5本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査し、遺構・遺物の検出につとめた。  
 調査の結果 1・4・5トレンチで、基盤層とみられる黄



第83図 沢東B遺跡隣接地 トレンチ配置図 (S=1/1,000)・セクション図 (S=1/60)

## 17. 包蔵地外 地蔵塚道路隣接地（第3地区）

所在地 富士市神谷674

調査面積 138m<sup>2</sup>（調査対象面積8,779m<sup>2</sup>）

調査期間 平成24年1月10日～1月16日

調査原因 不動産売買

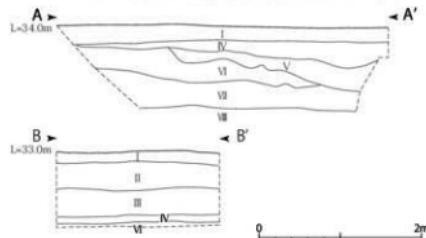
調査の概要 21箇所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果 敷地内はかつての須津川あるいはその氾濫原の一部と考えられ、遺構を確認することは出来なかつた。また、土器片が1点出土したものの、河川などにより運ばれたものと考えられ、同化も出来なかつた。

褐色土層（VI層）が確認され、この上面で時期不明の円形土坑や須恵器片が検出された。VI層より上は、部分的に腐植土層（IV・V層）が確認できるものの、耕作土が直接およぶ状況も認められた。このような状況から、対象地は農地造成に伴う大規模な土地改変が行われており、明瞭な遺構や遺物は残存しないものと判断される。

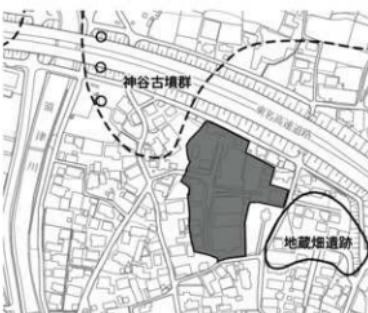


第82図 沢東B遺跡隣接地 調査地位置図 (S=1/5,000)

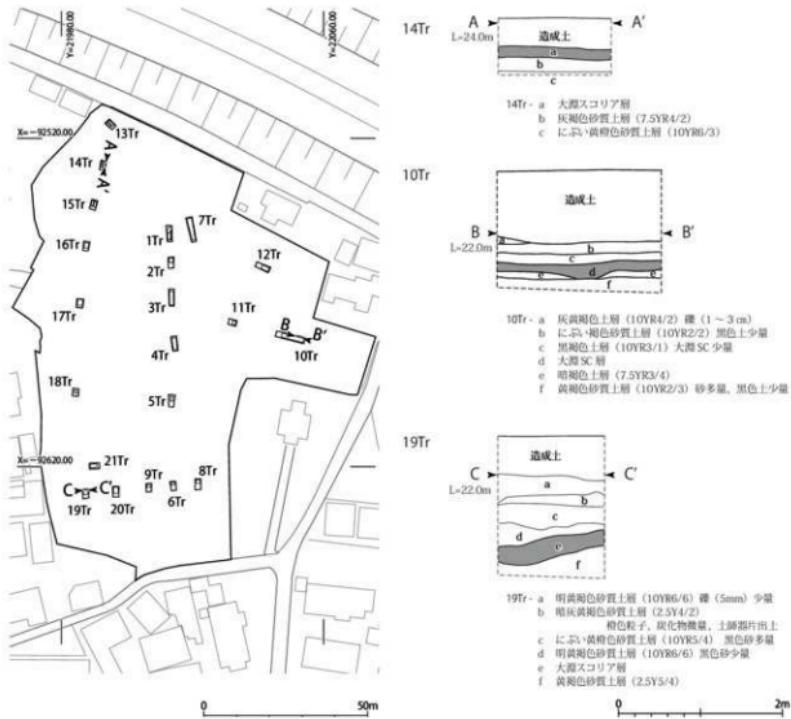


	しまり	粘性	耕作土
I	灰褐色砂質土	弱	なし
II	灰褐色砂質土	やや強	ややあり
III	灰褐色砂質土	やや強	ややあり
IV	暗褐色砂質土	強	ややあり
V	黑褐色砂質土	強	ややあり
VI	黄褐色砂質土	強	ややあり
VII	暗褐色砂質土	弱	なし
VIII	褐色砂質土	弱	なし

上部は赤褐色を呈する。耕作土  
黄褐色粒子少混合。耕作土  
VI層起源の黄褐色粒子少混合。自然道路堆積土  
VI層起源の黄褐色粒子中混合。自然道路堆積土  
褐色コマツ少混合。角礫中混含。大源流状地堆植物層  
褐色コマツ少混合。角礫中混含。大源流状地堆植物層



第84図 地蔵塚遺跡隣接地 調査地位置図 (S=1/5,000)



### 18. 中里 4 古墳群 第5地区

所在地：富士市由里

調查面積 8m<sup>2</sup> (調查對象面積 500m<sup>2</sup>)

調査期間 平成24年2月14日

#### 調查原因 農道改善

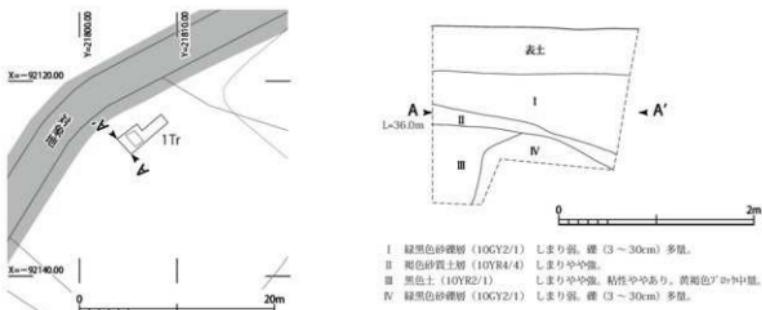
調査の概要 対象地が現在も使用されている農道であることから、隣接する空き地（中里 1747・4）にトレチを設定し、調査を行った。

**調査の結果** 調査地は、須津川に由来する河川堆積を頻繁に繰り返していた場所であることが判明した。

今回のトレント調査でみられた状況は、対象地である農道下においても基本的には変わらないものと考えられることから、対象地には遺構や遺物は存在しないものと判断される。



第 86 圖 由里 A 村填寫第 5 地區 調查地圖圖 (S=1/5,000)



第87図 中里4古墳群第5地区 トレンチ配置図 ( $S=1/500$ )・セクション図 ( $S=1/500$ )

#### 19. 溝上道路 第1地区

所 在 地 富士市厚原506-1の一部

調査面積 45m<sup>2</sup> (調査対象面積 987m<sup>2</sup>)

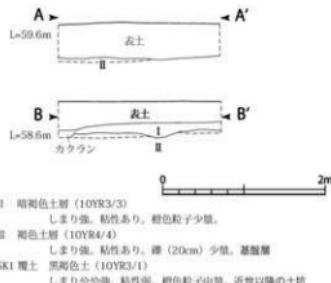
調査期間 平成24年3月15日～3月16日

調査原因 集合住宅建設

調査の概要 2本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果 表土（耕作土）層直下で大潤層状地特有の大小の礫を含んだ褐色砂質土層（II層）が検出された。

II層上面には近代の擾乱も多く、過去にこの面まで削平がおこなわれたものと判断される。調査区南東では一部表土下に暗褐色土層（I層）が残っていたが、遺物などは見つかっていない。また、1トレンチ東端付近で土坑1基（SK1）を検出したが、覆土から近世以降のものと判断した。



第88図 溝上道路第1地区 トレンチ配置図 ( $S=1/5,000$ )



第89図 溝上道路第1地区 トレンチ配置図 ( $S=1/600$ )・セクション図 ( $S=1/60$ )

## 第4節 報告書一覧

富士市教育委員会が刊行した埋蔵文化財調査に関する本報告書は本年度で55冊となるが、一貫したシリーズ名を付していなかった。

そこで、これまでに刊行したものも含めて「富士市埋蔵文化財調査報告 第〇集」としてシリーズ名および番号を付することとし、以下に一覧を示す。

また、本報告書以外の概報および、旧吉原市（昭和41年合併）、旧富士川町（平成20年合併）で刊行された報告書の一覧も以下に示す。

### ・富士市（本報告書）

シリーズ名	書名	調査名	旧シリーズ名	発行年月
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第1集〕 中里久保（K第96号）古墳		付録 K第97・98・99号墳の副品		S50.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第2集〕 中里大塚跡古墳				S51.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第2集〕 天間代山遺跡				S52.10
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第4集〕 土手内古墳 中原第2号墳 中原遺跡			左富士縄織埋蔵文化財発掘調査報告	S56.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第5集〕 草平	(2分冊) 道傍編 遺物・考古編 (別冊) 遺物回収編		西富士道跡(富士地区) 尼南広域都市計画道路田子浦臨港幹線埋蔵文化財発掘調査報告	S57.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第6集〕 横沢古墳 中原1号墳 伝法跡跡群(伝法A～E地区) 天間地区			西富士道跡(富士地区) 尼南広域都市計画道路田子浦臨港幹線埋蔵文化財発掘調査報告	S57.1
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第7集〕 山の神古墳 西第1号墳 実寺門西第1号墳 伊勢原古墳 志念開古墳 大湊台古墳第1号墳 大野田遺跡			富士市埋蔵文化財発掘調査報告書	S58.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第8集〕 三新田跡発掘調査報告書				S58.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第9集〕 天間尺跡路 1 道傍編 天間尺跡路 2 道傍・考古編				S59.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第10集〕 沼津寺上第1号墳発掘調査報告書				S60.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第11集〕 向山遺跡				S62.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第12集〕 舟久見尾跡6丁目遺跡 舟久見跡 古久古跡 舟久見尾跡 久保原跡 高山地区 出口道路		東京電力㈱若狭新工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		H4.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第13集〕 東平道跡第3次調査				
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第14集〕 泉佐八幡跡第2次調査			富士市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集	H4.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第15集〕 泉佐八幡跡			富士市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集	H5.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第16集〕 花川原第1号墳	(主) 富士宮市花比頃草單道跡改築工事に伴う 緊急発掘調査報告書		富士市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集	H6.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第17集〕 舟久見道跡	第20・21・33・34地区発掘調査報告書			H8.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第18集〕 泉佐八幡跡・第5地区	第4号調査報告書			H9.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第19集〕 泉佐八幡跡 現文化財調査報告書				H10.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第20集〕 下前田跡跡地・富士岡下第22号墳	株式会社富士不動産センターによる第2部名ニュータウン造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書			H10.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第21集〕 沼津寺古墳群	富士岡下第18号・20号・25号墳 製錬工場跡に伴う発掘調査報告書			H11.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第22集〕 三新田跡路(D地区) 発掘調査報告書	富士市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集			H12.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第23集〕 沢田跡路	大羽根工場跡(大井川河岸)の作業施設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書			H12.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第24集〕 宇摩川遺跡1地区	今度は丁度地盤強度適宜に合わせ 埋蔵文化財発掘調査報告書		富士市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集	H13.12
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第25集〕 宇摩川遺跡2地区				H13.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第26集〕 中古都宿跡	中古都宿跡第5地帯埋蔵文化財発掘調査報告書			H14.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第27集〕 宇摩川遺跡	第15地区(三日月寺跡) 第27地区発掘調査報告書			H14.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第28集〕 東平道跡	第4地区 北条地区 第25地区 第20地区 第31地区 第32地区			H15.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第29集〕 花川原第2・3号墳発掘調査報告書	今度は丁度地盤強度適宜に合わせ (高麗海岸) 併用文化財発掘調査報告書			H15.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第30集〕 林萩原第2号墳発掘調査報告書	林萩原古墳学校の移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書			H16.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第31集〕 中村遺跡	千子村新移転の公会堂 上野場古墳合葬墓に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書			H16.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第32集〕 上ノ山第1号墳 第二墓名Xo52地点	第二名義設置事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書			H17.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第33集〕 平成16年度 富士市内遺跡発掘調査報告書				H17.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第34集〕 中野・中ノ坪跡路 第2地区	株式会社 ABC 新工場建設に先立ち埋蔵文化財発掘調査			H19.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第35集〕 ジンケン古道跡	地盤造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書			H19.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第36集〕 宮添跡路I	個人地盤改修工事に伴う 宮添跡路 I 地帯埋蔵文化財発掘調査報告書			H20.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第37集〕 宮井・山道跡	山立の山荘等地区内道路改良に伴う 埋蔵文化財発掘調査各報告書			H20.3
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第38集〕 甲武17・18年度 富士市内遺跡発掘調査報告書	春那跡建設工事に伴う 東平道跡第37地区4次調査埋蔵文化財発掘調査報告書			H21.2
〔富士市埋蔵文化財調査報告 第39集〕 草平道跡				

## 第1章 平成22・23年度の調査

シリーズ名	書名	調査名	日シリーズ名	実行年月
富士市埋蔵文化財調査報告 第40集	宮道道路Ⅱ	個人墓地改良工事に伴う 宮道道路G地区埋蔵文化財発掘調査報告書	H21.4	
富士市埋蔵文化財調査報告 第41集	平成15・19年度 富士市内道路発掘調査報告書	平成19年度富士市内臨海道路築造工事に伴う 宇栄川道路B地区埋蔵文化財発掘調査報告書	H21.4	
富士市埋蔵文化財調査報告 第42集	宇栄川道路	株式会社西日本不動産建設による宅地造成工事に伴う ヨーカン細道跡B地区埋蔵文化財発掘調査報告書	H21.8	
富士市埋蔵文化財調査報告 第43集	ヨーカン細道跡	富士市立伝承小学校校舎改築事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	H22.2	
富士市埋蔵文化財調査報告 第44集	平成14・20年度 富士市内道路発掘調査報告書	個人墓地改良工事に伴う 宮道道路D地区埋蔵文化財発掘調査報告書	H22.2	
富士市埋蔵文化財調査報告 第45集	東平野路・第15地区	富士市立伝承小学校校舎改築事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	H22.3	
富士市埋蔵文化財調査報告 第46集	宮道道路Ⅲ	個人墓地改良工事に伴う 宮道道路E地区埋蔵文化財発掘調査報告書	H22.3	
富士市埋蔵文化財調査報告 第47集	平成21年度 富士市内道路発掘調査報告書	個人墓地改良工事に伴う 宮道道路F地区埋蔵文化財発掘調査報告書	H22.3	
富士市埋蔵文化財調査報告 第48集	宮道道路F	個人墓地改良工事に伴う 富士市内道路発掘調査報告書	H22.3	
富士市埋蔵文化財調査報告 第49集	平成13年度 富士市内道路・伝法久保古墳 埋蔵文化財発掘調査報告書	富士市立伝承小学校校舎改築事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	H22.3	
富士市埋蔵文化財調査報告 第50集	宇栄川道路A地区	原田公園造成整備事業に伴う 3~6月播種文化財発掘調査報告書	H24.1	
富士市埋蔵文化財調査報告 第51集	富士市埋蔵文化財発掘調査報告書	岩沼B道路 第1地区・高能筋道路 第2~3地区 沖田道路 第8~92次開発地点 沖田道路 第90~93次開発地点 舞森道路 第2地区	H24.3	
富士市埋蔵文化財調査報告 第52集	宮道道路V	土砂改良工事に伴うB地区埋蔵文化財発掘調査報告書 市道改良工事に伴うC地区埋蔵文化財発掘調査報告書 市道改良工事に伴うD地区埋蔵文化財発掘調査報告書	H24.3	
富士市埋蔵文化財調査報告 第53集	富士市内道路発掘調査報告書 - 平成11・12年度 -	駒場古墳群Ⅰ	H24.3	
富士市埋蔵文化財調査報告 第54集	富士市内道路発掘調査報告書 - 平成22・23年度 -		H25.3	
富士市埋蔵文化財調査報告 第55集	駒場古墳群Ⅱ		H25.3	

・富士市（桜ほのか）

書名	調査年月	実行年月
西富士道路・南広域都市計画道路・田子浦臨海埋蔵文化財発掘調査 概報 - 昭和54年度	S53.3	
天沢沢跡第7次(F区) 発掘調査概報	S54.3	H1
富士市埋蔵文化財発掘調査(富士地区) 概報 - 昭和53年度 -	S54.3	H1
三新田跡・舞森文化財発掘調査概報	S56.3	H2.6
駒津寺上第1号墳 発掘調査概報	S61.3	H3.3
三新田跡C地区確認調査概報	H1	H4.3
舞森町O地区確認調査概報	H1	H6.3
天沢沢N地区確認調査概報	H1	S61.3
		S63.3

・旧吉原市

書名	実行年月
吉原市の古墳	S53.9

・旧富士川町

シリーズ名	書名	調査名	日シリーズ名	実行年月
静岡県富士市川町山王道跡調査概要	静岡県富士市川町山王道跡調査概要		S4.0 索引	
富士市川町山王道跡発掘調査概要			S4.1 索引	
東名高速道路建設工事に伴う発掘調査報告書			S4.9 索引	
富士市川町山山城跡概要			S50	
駿河山王	静岡県富士市川町山王道跡調査報告書		S50.3 本報告	
白山・峰山文化財発掘調査概報 第1報 大平・谷寺道路			S50.3 本報告	
富士川町舞津原古墳群分布記録書			S50.3 本報告	
白山・峰山文化財発掘調査概報 第2報 台山城跡			S51.1 本報告	
駿河妙寺古墳群	静岡県富士市川町妙寺見古墳群調査報告書		S55.3 本報告	
木島	静岡県富士市川町木島道路第4次調査報告書 昭和55年度		S56.3 本報告	
浅間林道発掘調査概報	静岡県富士市・身延山道路改良工事地内での調査 昭和55年度		S56.3 本報告	
駿賀富士上川・住む郷地造成工事に伴う			S59.3 本報告	
駿道富士上川・身延山道路改修工事に伴う			S60.0 本報告	
富士川町若宮道発掘調査報告書			S61.3 本報告	
手在家	県富士市・身延山改修工事に伴う発掘調査報告書		S61.3 本報告	
室野シラアゲ遺跡			S61.3 本報告	
駿河妙寺古墳群	静岡県富士市妙寺見古墳群第2・3次調査報告書		S62.3 本報告	
県道富士上川・身延山道路改修工事に伴う			S63.3 本報告	
中野沖ノ瀬道・発掘調査概報			S63.3 本報告	
駿河妙寺古墳群	静岡県富士市妙寺見古墳群第4次調査報告書		S63.3 本報告	
火丸道路	駿富宮上川・身延山改修工事に伴う発掘調査報告書		H2.3 本報告	
駿岡林	駿富宮上川・身延山改修工事に伴う第4次調査報告書		H3.3 本報告	
室野坂古墳群	静岡県富士市川町室野坂古墳群第3次発掘調査報告書		H6.3 本報告	
富士川町文化財調査報告 第17集	万葉道路		H7.2 本報告	
富士川町文化財調査報告 第15集	中野石塚道路(馬込地区)		H9.3 本報告	
富士川町文化財調査報告 第16集	中野石塚道路		H9.3 本報告	
富士川町文化財調査報告 第17集	室野坂古墳群		H10.3 本報告	
富士川町文化財調査報告 第18集	中野石塚道路(馬込地区)		H10.3 本報告	
富士川町文化財調査報告 第19集	中野石塚道路		H11.3 本報告	
富士川町文化財調査報告 第20集	室野坂古墳群		H10.3 本報告	
富士川町文化財調査報告 第21集	駿河妙寺古墳群		H10.3 本報告	
富士川町文化財調査報告 第23集	谷津原古墳群		H20.3 本報告	

H22-1 沖田遺跡 第 146 次調査地点



1. 2Tr 重機掘削状況



2. 1Tr 南壁

H22-2 善得寺廃寺跡 第 3 地区



1. 1Tr 全景 (北東から)



2. 3Tr 全景 (南東から)

H22-3 大石遺跡 第 2 地区



1. 2Tr・3Tr 全景 (西から)



2. 2Tr 北壁土層

H22-4 東平遺跡 第 49 地区



1. 2Tr 全景 (南西から)



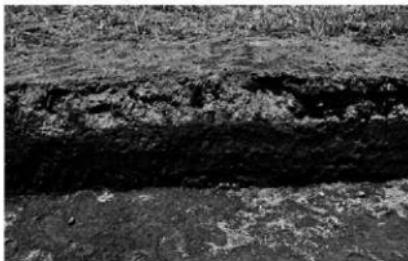
2. 3Tr 東壁土層

平成 22 年度 調査写真

H22-5 東平遺跡 第 50 地区



1. 3Tr 全景（西から）



2. 1Tr 西壁土層

H22-6 東平遺跡 第 15 地区 7 次調査



1. トレンチ全景（南から）



2. 3Tr 西壁土層

H22-7 花守遺跡 第 4 地区



1. 3Tr 重機掘削状況



2. 3Tr 南壁土層

H22-8 三日市廃寺跡隣接地（東平遺跡 第 51 地区）



1. 1Tr 全景（北東から）

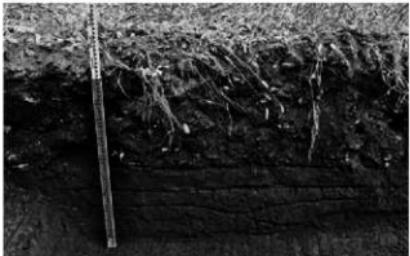


2. 2Tr 全景（北から）

H22-9 沢東 B 遺跡 第 6 地区



1. 1Tr 全景 (南西から)



2. 1Tr 東壁土層

H22-10 寺下遺跡 第 4 地区 2 次調査



1. 1Tr 全景 (北西から)



2. 6Tr 全景 (南から)

H22-11 東平遺跡 第 52 地区



1. 1Tr 全景 (北西から)



2. 1Tr 南壁土層

H22-13 三新田遺跡 K 地区



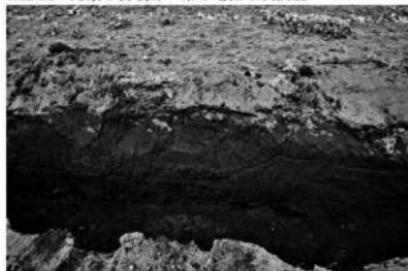
1. 2Tr 全景 (南東から)



2. 3Tr 東壁土層

平成 22 年度 調査写真

H22-12 比奈 5 古墳群 第 1 地区 3 次調査



1. 6Tr 北壁土層



2. 9Tr 全景（西から）



3. 12Tr 全景（東から）



4. 13Tr 北壁土層

H22-14 中島遺跡 第 8 地区



1. 1Tr 全景（西から）



2. 1Tr 南壁土層

H22-15 滝川 1 古墳群 第 1 地区



1. 調査区全景（西から）

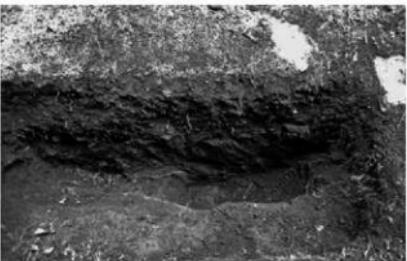


2. 2Tr 全景（南から）

H22-16 東平遺跡 第 53 地区 1 次調査・2 次調査



1. 1Tr 全景（東から）



2. 1Tr 北壁土層

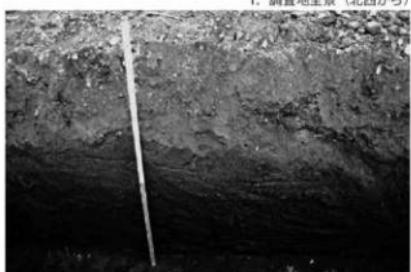
H22-17 比奈 1 古墳群隣接地（第 8 地区）



1. 調査地全景（北西から）



2. 1Tr 全景（東から）

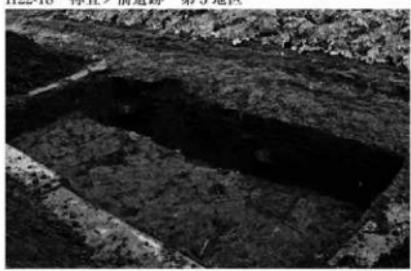


3. 2Tr 北壁土層



4. 3Tr 北壁土層

H22-18 桜宮ノ前遺跡 第 3 地区



1. 1Tr 東壁土層



2. 2Tr 東壁土層

平成 22 年度 調査写真

H22-19 三ツ沢遺跡 第 2 地区



1. 2Tr 全景（南から）



2. 4Tr 全景（南東から）

H22-20 東平遺跡 第 54 地区



1. 2Tr 全景（南東から）



2. 1Tr 西壁土層

H22-21 天間沢遺跡 第 30 地区



1. 1Tr 全景（南西から）



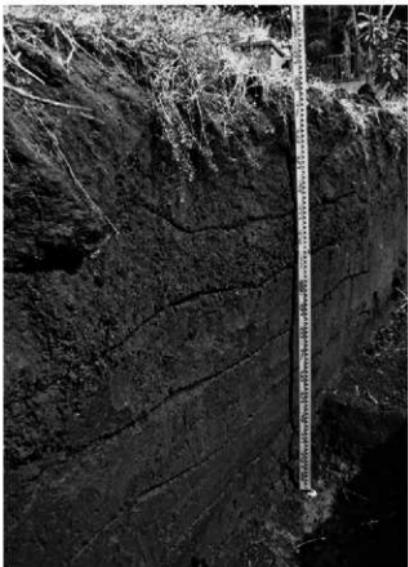
2. 1Tr 北壁土層

H22-22 三日市廃寺跡（東平遺跡第 56 地区）

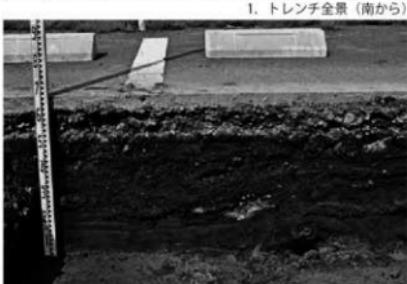


1. 1Tr 全景（東から）

H23-1 神戸 4 古墳群 第 2 地区



H23-2 天間沢遺跡 第 3I 地区



H23-3 厚原横道下遺跡 第 2 地区

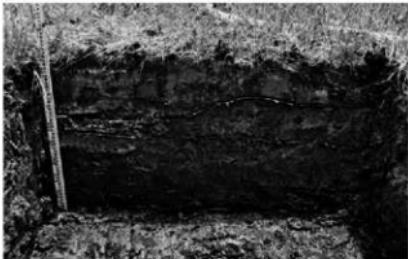


平成 23 年度 調査写真

H23-4 中野沖田遺跡隣接地



1. 2Tr 北壁 土層



2. 3Tr 南壁 土層

H23-5 石板 10 古墳群隣接地（第 1 地区）



1. 1Tr 全景 SA1 完掘（東から）



2. 1Tr 北壁 SA1Pit4 土層



3. 2Tr 全景（南東から）



4. 2Tr 北壁 土層

H23-6 滝下遺跡 I 地区



1. 3Tr・4Tr 全景（南から）



2. 3Tr 東壁 土層

H23-7 天間沢遺跡 第 32 地区



1. 1Tr 全景（南から）



2. 出土遺物

H23-8 東平遺跡 第 58 地区



1. 1Tr 全景（南から）

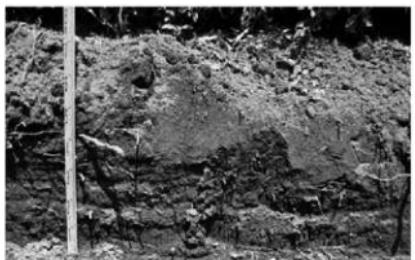


2. 2Tr 全景（南東から）

H23-9 滝下遺跡 J 地区



1. 1Tr + 2Tr 全景（東から）

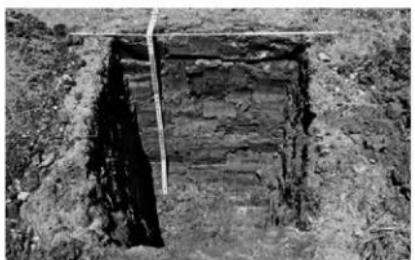


2. 1Tr 北壁土層

H23-10 沖田遺跡 第 147 次調査地点



1. 重機掘削状況



2. 2Tr 全景

平成 23 年度 調査写真

H23-11 川坂遺跡 第1地区



1. 1Tr 全景 (南から)



2. 1Tr 西壁土層

H23-12 桟宮ノ前遺跡 第1地区 5次調査



1. 調査地全景 (東から)



2. 1Tr 全景 (東から)



3. 1Tr 南壁土層

H23-13 厚原横道下遺跡隣接地 (第3地区)



1. 1Tr 全景 (南東から)



2. 3Tr SK 完掘 (北から)

H23-14 中原遺跡 第 27 地区



1. 1 ~ 4Tr 全景 (東から)



2. 10Tr 全景 (南西から)

H23-15 桜宮ノ前遺跡 第 4 地区



1. 1Tr 全景 (南から)



2. 2Tr 全景 (南から)

H23-17 地蔵塚遺跡隣接地 (第 3 地区)



1. 調査地全景 (北から)



2. 19Tr 土層



3. 10Tr 全景 (西から)



4. 10Tr 北壁土層

平成 23 年度 調査写真

H23-16 沢東 B 遺跡隣接地（第 7 地区）



1. 1Tr 全景 (西から)



2. 1Tr 北壁土層

H23-18 中里 4 古墳群 第 5 地区



1. 1Tr 全景 (西から)



2. 1Tr 南壁土層

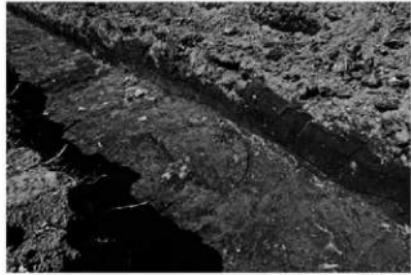
H23-19 溝上遺跡 第 1 地区



1. 1Tr 全景 (東から)



2. 1Tr 北壁土層



3. 1Tr SK1 棘出状況



4. 2Tr 全景 (東から)

## 第2章 東平遺跡・三日市廃寺跡の調査

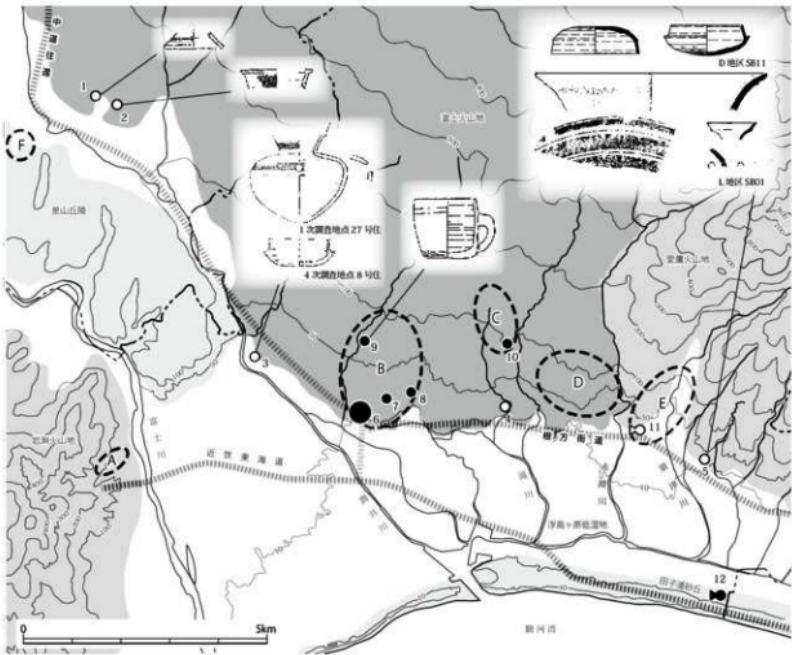
### 第1節 東平遺跡・三日市廃寺跡の概要

東平遺跡・三日市廃寺跡は、富士山南麓の緩斜面の大潤扇状地上に立地し、その広がりは東西南北ともに約1.2km程度の範囲が登録されている。東側の三日市廃寺跡と東平遺跡は、文化財保護法上は別の遺跡として登録されているが、切り離して考えることは出来ない。東平遺跡からは古墳時代前期から7世紀の遺構・遺物も検出されているが、小規模で、遺跡の主体は8世紀から9世紀にかけてと考えられている。

近年、東平遺跡の概要がまとめられているので（藤村・

佐藤2013）、それに沿って東平遺跡が大規模に発展する8世紀の前後の状況を述べてみたい。

東平遺跡隆盛前夜 富士山の南西麓から駿河湾に注ぎ込む潤井川流域には、東平遺跡が発展する以前の5世紀後半から6世紀にかけて、「王権との関連を有した先進性の高い文物を積極的に利活用した集団によって」開発が進められたと考えられている（藤村2012）。潤井川流域に限らず、富士山南麓では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構が確認される一方で、中期には継続し



A. 富士川西岸古墳群 B. 佐古古墳群 C. 一色古墳群 D. 比奈・富士岡古墳群 E. 中里・須津古墳群 F. 別所古墳群  
1. 浅間大社遺跡 2. 大宮城跡 3. 泽東A遺跡 4. 宇賀川遺跡 5. 宮浜遺跡 6. 伊勢塚古墳 7. 東平1号墳  
8. 国久保古墳 9. 中原4号墳 10. 実円寺西1号墳 11. 天神塚古墳 12. 山の神古墳

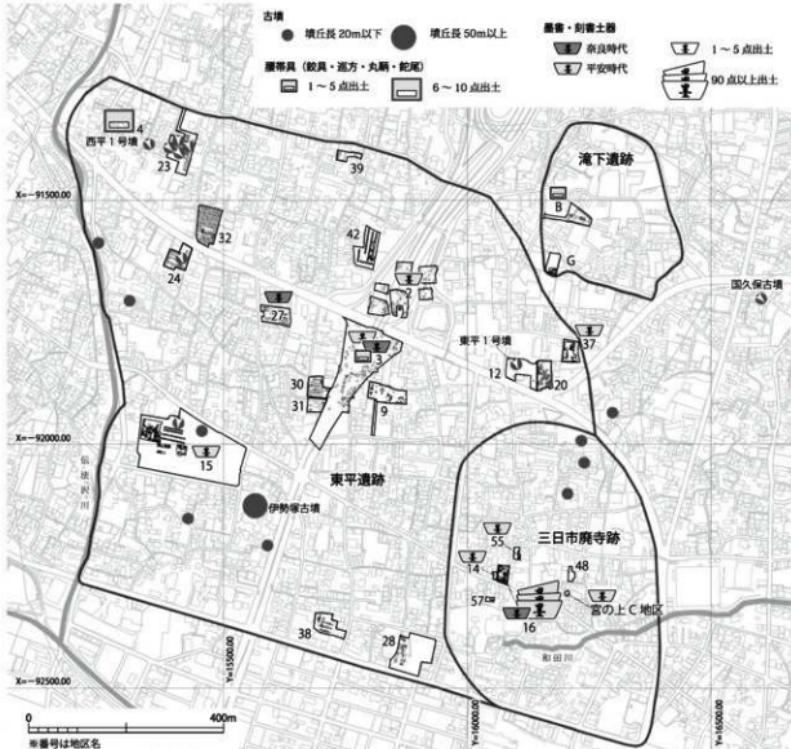
ないことが多い。中期前半の空白期を挟んで集落が確認されるようになるのが中期後半のことである。潤井川流域では、沢東A遺跡の発展に見ることが出来る。潤井川下流に立地する東平遺跡から中柄・中ノ坪遺跡、沢東A遺跡と遡るように位置している。沢東A遺跡からは初期須恵器や子持ち勾玉など新たな知識・考え方を背景にした文物が出土している。古墳時代後期初頭前後にそれまでの首長墓空白期への終わりを告げる記念碑的な伊勢塚古墳が、東平遺跡の西側に築造されたことも、王権との関わりを考える上で重要な要素となる。

古墳時代後期から7世紀にかけて東平遺跡を見ていいくと、遺跡東側の第16・28地区にその広がりを確認することが出来る。これらの遺構が和田川の始点付近に位置するのは、東方の沼津市・三島市方向への路の出発点

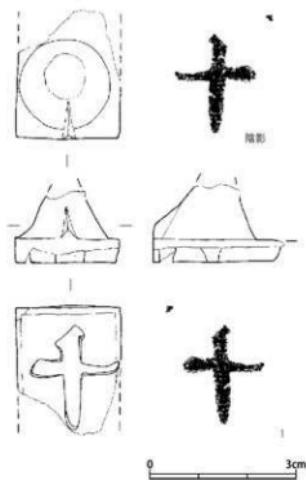
に位置すること、和田川をくぐり駿河湾に出ることができることなど、流通の利便性が背景にある。一方、前述の伊勢塚古墳を始めとして、遺跡を取り囲むように東平第1号墳や西平第1号墳、伊勢塚古墳周辺の石室墳などが存在することは集落遺跡と墓域が明確に区分されていたことを示している。

古墳時代後期から7世紀にかけて大規模に発展する沢東A遺跡が8世紀に入ると規模を縮小し、それと相対するように東平遺跡が一気に拡大を見せる。

**東平遺跡の隆盛** 8世紀に入るとそれまで墓域と考えられていた遺跡内の縁辺部（第2・3・15地区）において大規模な集落が突如出現する。この計画的な集落化は、中央政権の地方支配の一貫として捉えられている（佐野2008）。方形配列の掘立柱建物群や銅製腰帶具・輪羽口・



第91図 東平遺跡の調査区と官衙関連遺物の出土状況



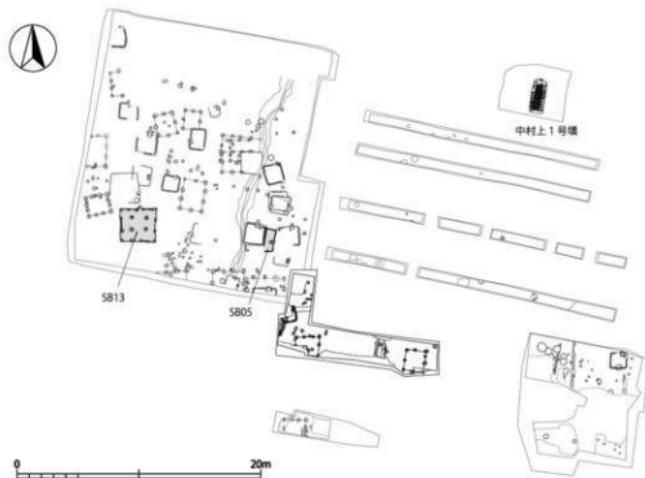
第92図 東平道路第3地区 出土銅印



第93図 東平道路第2・3地区周辺の状況

鉄津・土馬・「布自」墨書き須恵器の出土等を総合的に考えれば、このエリアが8世紀の富士郡衙の中権付近と考えることが出来よう。

一方、それまで集落域として捉えられてきた、道路東側では8世紀前半の布目瓦が半径100m程度の範囲にまとまって出土しており、郡衙周辺寺院（志賀2005）として機能転換が行われた可能性が考えられる。これま



第94図 東平道路第15地区



第95図 三日市廃寺跡周辺の状況

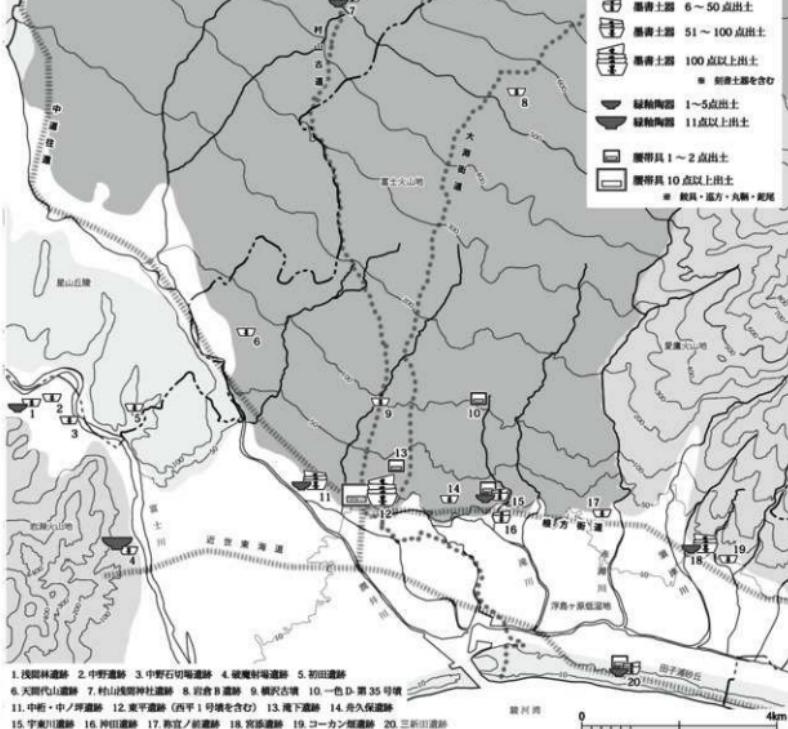
で寺院の存在を直接的実証する遺構は検出されていないものの、「日本三代実録」貞觀5年(863)6月2日にある「以駿河國富士郡法照寺預之定額」がこのエリアと考えられる。

**東平遺跡の変容・衰退** 9世紀に入ると富士郡衙中枢域と推定した地区(第2・3地区)において遺構がほとんど継続しないという現象を示す。その一方で、8世紀の寺城として推定した地区(第16地区周辺)では、堅穴建物跡のカマド芯材に布目瓦を転用するなどの現象からも、再度、集落化が認められるようになる。

さて、9世紀は集落内において墨書き土器が認められる始める時期であり、東平道路(三日市廃寺跡)でも、130

点以上の墨書き・刻書き土器が見つかっているが、そのほとんどが9世紀に入ってからのものである。これは沼津・三島方面への当時の東海道「根方街道」沿いの舟久保道路・宇東川道路・袴宣ノ前道路・宮添道路や潤井川流域の中ノ坪遺跡と同様の状況を示す。

その後、「扶桑略記」延喜2年(902)9月26日には「駿河国云上富士郡官舍為群盜被燒亡之由」という記事がみられ、郡司支配からのひずみから10世紀初頭には終焉を迎える。近年では、郡司支配に対する重みと富士山の度重なる噴火という自然災害史的侧面からも道路の消長を捉える意見もある(佐藤・藤村2013)。



第96図 古代の主要集落と官衙関連遺物の分布

## 第2節 第48地区の調査成果

### 第1項 経緯と経過

平成22年4月15日、個人住宅建設に伴い、事業者からハウスメーカー（以下、工務所）を通じて、富士市浅間上町2967-2、-4について埋蔵文化財の照会がなされた。翌日、文化振興課職員による現地踏査では遺物は採集されなかつたが、「三日市廃寺跡」の範囲内にあたることから、工務所に対し、文化財保護法第93条に基づく届出の必要がある点、また、付近からは布目瓦や墨書き土器が数多く採集されていることから、事前に確認調査を実施する必要がある旨が伝えられた。

4月19日、事業者から富士市教育委員会教育長宛に「試掘確認調査依頼書」「発掘調査承諾書」が提出され、4月22日、文化振興課により確認調査が実施された。

調査の結果、敷地内の二箇所に設定したトレーニチの内、北側の1トレーニチから表土下60cmにおいて竪穴建物跡1軒と土師器环が検出・出土した。そのため、4月28日、

富士警察署長に「埋蔵物の発見届」（富教文発第44-2号）を提出するとともに静岡県教育委員会に「埋蔵文化財保管証」（富教文発第44号）を提出した。また、同日、静岡県教育委員会および事業者に「発掘調査結果概要」を提出し、工務所を通じ事業者と埋蔵文化財保護に向けた調整を開始した。

調整の結果、工事内容を保護層37cmを確保する計画に変更したため、静岡県教育委員会教育長に「埋蔵文化財発掘の届出書」を進呈した。5月10日、静岡県教育委員会より「工事立会いの実施」の指示が通知され、文化振興課職員立会いの下、工事が着手された。なお、工事中の立会いにより、遺構・遺物は発見されなかつた。

### 第2項 調査の結果

建物が存在する状態で確認調査を実施する必要があつたため、敷地北側の1トレーニチは人手による掘削、南側の2トレーニチは重機による掘削を行つた。

その結果、1トレーニチにおいて竪穴建物跡（SBI）を検出した。2トレーニチでは、地山の落ち込みを検出したものの遺構であると断定することが出来なかつた。

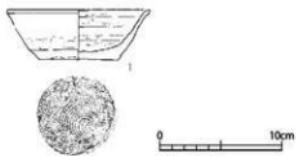
遺構 表土下60cmにおいて、竪穴建物跡の南辺と考えられる黒色土のプランを検出した。そのため、西側部分を半裁した結果、床面までは20cm程度しか残存しないものの柱穴が検出されたことや、ほぼ完存する土師器環や須恵器の小破片が出土したため、竪穴建物跡と断定した（SBI）。部分的な検出のため、建物跡の規模等は明らかではない。

遺物 建物跡の床面から土師器環1点（第98図1）が出土した。駿東環の破片で口縁部11.6cmに対して、底部径6.4cmと、比較的底部が小さい。底部裏面は縁の部分のみヘラケズリが施されている。口縁部のヨコナデが強く、それにより上半部が外反した形態を示す。内面は見込み部の縁から口縁部にかけて同心円状のヘラミガキが施されている。

形態から9世紀のものと考えられる。



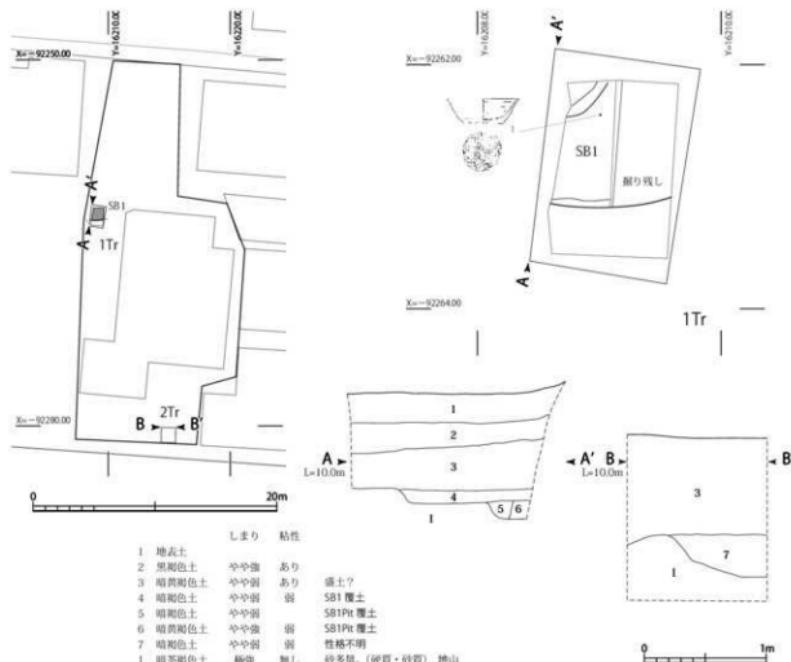
第97図 東平遺跡第48地区 調査地位置図 (S=1/5,000)



第98図 東平遺跡第48地区 出土遺物 (S=1/4)

第3表 東平遺跡第48地区 出土遺物観察表

博団	図版	種類 番号	遺跡名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面色調	外面色調
第98図	PL1	1	SBI01	土師器	環	70%	11.6	4.1	6.4	75YR4/6 (褐)	5YR4/6 (赤褐)



第99図 東平遺跡第48地区 トレンチ配置図 (S=1/400)、1トレンチ平面図・セクション図 (S=1/40)

### 第3節 第55地区の調査成果

#### 第1項 経緯と経過

平成23年1月、個人住宅建設に伴い、事業者から工務所を通じて、富士市浅間上町2978-6、-12、-13、-14について埋蔵文化財の照会がなされた。

文化振興課職員による現地踏査では遺物は採集されなかったが、「三日市廃寺跡」の範囲内にあたることから、工務所に対して文化財保護法第93条に基づく届出の必要がある点、また、付近からは布目瓦や墨書き土器が数多く採集されていることから、事前に確認調査を実施する必要がある旨が伝えられた。

1月14日、事業者から富士市教育委員会教育長宛に「試掘確認調査依頼書」「発掘調査承諾書」が提出され、



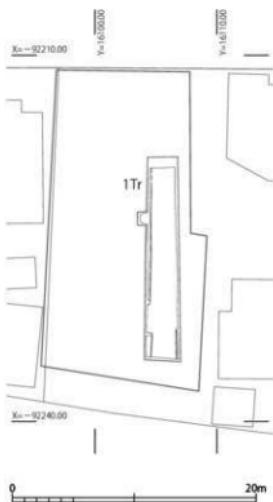
第100図 東平遺跡第55地区 調査位置図 (S=1/5,000)

1月27日から1月28日にかけて、文化振興課により確認調査が実施された。

調査の結果、敷地西側に南北方向に設定したトレントレーナーから古墳時代から平安時代にかけての土師器・須恵器が出土し、竪穴建物跡6軒が検出された。また、布目瓦が重なって出土するという特異な出土状況も確認された。

そのため、2月3日、富士警察署長に「埋蔵物の発見届」(富教文発第452-2号)を提出するとともに静岡県教育委員会に「埋蔵文化財保管証」(富教文発第452号)を提出した。また、2月22日、静岡県教育委員会および事業者に「発掘調査結果概要」を提出し、事業者と埋蔵文化財保護に向けた調整を開始した。

その結果、工事では保護層47cmが確保されることから、静岡県教育委員会教育長に「埋蔵文化財発掘の届出書」を送達し(平成23年3月3日 富教文発第500号)、3月18日、「工事立会いの実施」(教文第1944号)の指示が通知され、文化振興課職員立会いの下、工事が着手された。なお、工事中の立会いにより、遺構・遺物は発見されなかった。



第101図 東平遺跡第55地区 トレントレーナー配置図 (S=1/400)

## 第2項 調査の結果

**遺構 確認調査**では竪穴建物跡6軒、土坑4基(トレントレーナーの土層観察から認定したもの含む)を検出した。

トレントレーナーの南端において、SB3→SB2→SB1の順に構築されている状況が観察され、トレントレーナー中央から北端にかけてSB4→SB5→SB6の順に構築されていると観察されたが、部分的な検出のため、不確かな部分もある。

SB1はトレントレーナー南東端で部分的に検出された。

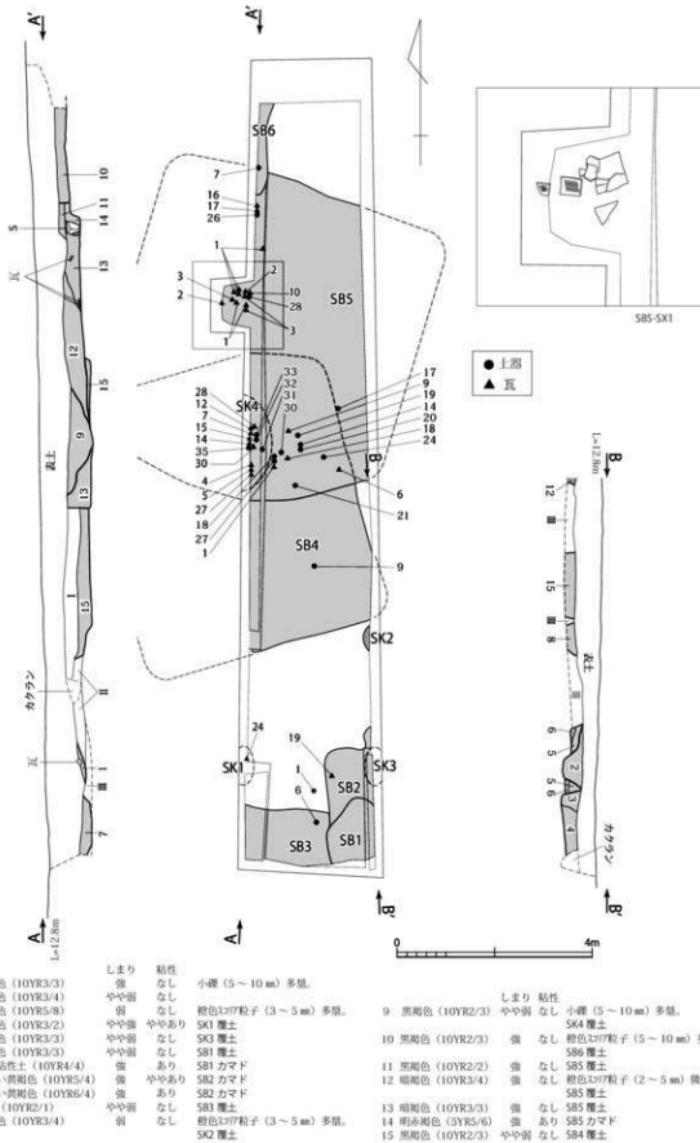
SB2はSB1に切られる建物跡で北西コーナーを検出したのみである。覆土中に粘土を多量に含むことから、カマド付近と考えられる。

SB3は、東側をSB1・SB2に切られる建物跡である。北側の立ち上がりを直線的に検出したが規模は明らかでない。西側に設定したサブトレントレーナーから床面までの深さは25cmと判明した。なお、検出面における切りあいは前述の通りであるが、それこれから出土した遺物は混在しており、遺物の新古と遺構の新古は必ずしも一致しない。

SB4はトレントレーナー中央で検出された建物跡である。建物跡の東側半分程度を検出したものと考えられ、南北幅5.95mを測る。ただし、北側部分はSB5の構築に伴い床面の大部分が削られており、加えてSK4による掘削が伴い、残存状況は良好とは言えない。

SB5はSB4の床面の一部を削る形で構築された建物跡である。南側がやや張り出し、主軸をやや東側にもつ隅丸方形に復元され、復元値は南北6.45mを示す大型の建物跡である。北側壁にはカマドが存在し、カマドと南接する床面付近から平瓦が折り重なった状態で検出された(SB5-SX1)。後述するように建物跡から出土した土器は10世紀初頭のものが多く、8世紀前半と考えられる瓦との年代差をどのように考えればいいのか、出土状況を含めて考えていかなければならないが、現状では明確な答えを持ち合わせていない。

SB6は、建物跡のコーナー部を部分的に検出したのみであり詳細は明らかでない。



第102図 東平遺跡第55地区 トレンチ平面図・セクション図 (S=1/100)

## 遺物

土師器・須恵器・土製品（第103図）

1は造構外から出土した須恵器環口である。著しく扁平な形状を呈し、体部全体が歪んでいる。受け部には二条の沈線を有し、30°の方向に立ち上がる。底部下半にヘラケズリが施される。口径8.9cm、器高2.4cmを測る。環口の最終形態の7世紀前半頃と考えられる。

S B 1からは2・3が出土している。2は、須恵器模倣の环の破片である。屈折部分にあわせて横方向のヘラミガキが施されるなど調整は丁寧。3は須恵器の蓋の破片である。明瞭な屈曲を有する。

S B 2からは4・5が出土している。4は、土師器の环で器壁が厚い上に、調整が粗い為に器面に凹凸が目立つ。須恵器の环蓋を模倣した形態だが、口縁部を強くヨコナデすることのみで屈曲を作り出している。砂粒を多く含む。5は、造構外出土の1と似た形態を呈する。1と比べると受け部下端のヨコナデが強い。4・5とも7世紀前半の遺物と考えられる。

S B 3からは駿東窯の口縁部の破片（6）が出土している。内面のヨコハケの後、口唇部内側に低い突出を作り出し、中央をややくぼませるように調整している。時期は明らかでない。

S B 6からは7の底部糸切り未調整の环の破片が出土している。底部からナメ横方向に立ち上がり、段差をつけている。10世紀に入ってからのものと考えられる。

S B 4からは、8～12が出土している。8は环、9～11は甕、12は皿である。8は明確な底部を持たず、緩やかに屈曲しながら口縁部にいたる。口唇部付近を若干、内湾させている。口唇部内面の横方向のヘラミガキも屈曲を意識しての調整と考えられる。外面は底部付近のみケズリ調整で口縁部付近はヘラミガキが施される。古墳時代後期のものと考えられる。9・10は駿東窯の口縁部の破片でいずれも口唇部内面に突出を有する。時期は7～8世紀と考えられる。

11は小破片のため確定的ではないが、古墳時代初頭（弥生時代終末期）の北陸南西部系の甕の破片と考えられる。内面はハケメ調整が施され指サエは存在しないものの、外面のヨコハケが擬円線を意識しているかのように感じられる。富士市内では宇東川遺跡において10点近くが確認されているが、他では確認されていない。

出土造構の時期が大きく異なることから明らかに混入と考えられるが、今後、三日市廃寺跡（東平遺跡）における古墳時代前期の様相についても注視する必要がある。

12は内面黒色処理の甲斐型の皿もしくは环の破片である。小破片のため傾きが確定的ではないが圓化したよりも立つ可能性もある。下半にはナメ方向のケズリが観察される。

S B 5からは、13～30が出土している。13・14は甲斐型の皿と考えられる。13は内面黒色処理が施されている。底部付近に横方向のケズリが強く施され、外形に屈曲を与えている。14は黒色処理が施されていない。内面には同心円状のヘラミガキが施され、外面下半には、ナメ方向のケズリが施される。15～17も环の破片である。17は他に比べて薄く、口縁部の外反も顕著である。18・23・24は墨書き土器である。18は側面に、23・24は底部裏面に確認される。いずれも判読に困る資料だが、18は「身」、24は「て」の可能性が考えられる。24が「て」であれば、「寺」も想定されることから今後、さらに調査を進めていきたい。19は駿東窯で内面に同心円状のミガキが確認される。20は他の环と明らかに胎土が異なり、4と似た胎土で色調もともに橙色を呈する。21・22は底部を削りだすことで高台を作り出している。

25・26は駿東窯の破片だが明確な時期決定は出来ない。

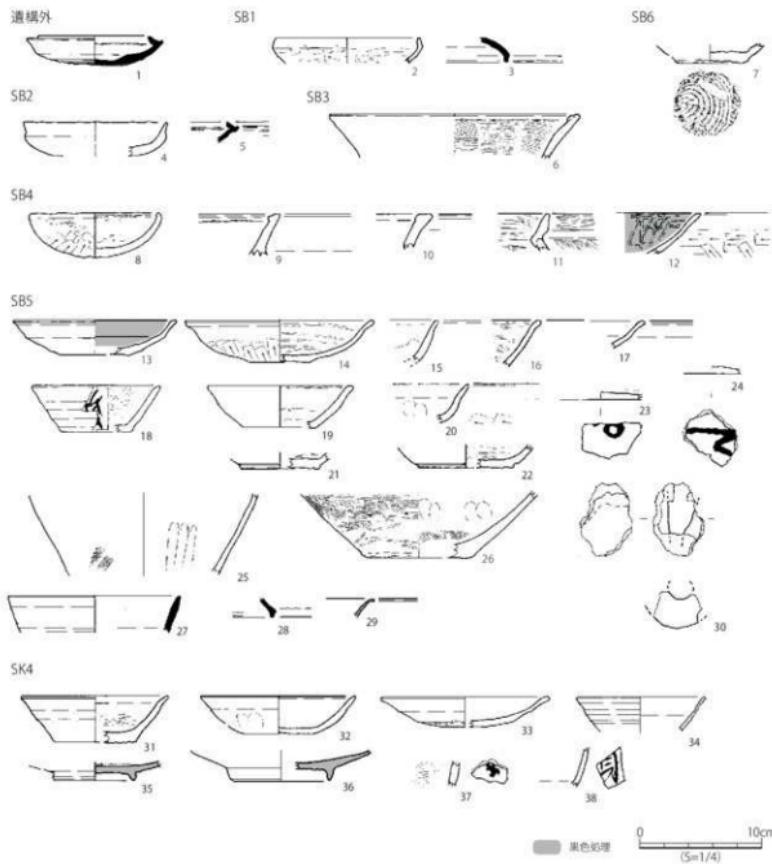
27は須恵器の环、28は須恵器蓋、29は灰釉陶器碗の破片と考えられる。注目すべきは30の輪の羽口の破片である。中空の筒状を呈し、外径が直径6.5cm、内径が2.3cmに復原される。内面が被熱により赤化が著しい。S B 5からは、古墳時代後期から平安時代にかけての多岐に渡る時期の遺物が出土しているが、破片の残存状況の良い13・14から造構の年代を考えれば10世紀初頭前後とされよう。30の輪の羽口がS B 5に伴うものであれば時期が限定できる資料となるが、確定的ではない。富士市内ではこれまでに宮添遺跡E地区S B 17において、同様の形態を示す輪の羽口が出土しており、造構の時期も10世紀と一致する。三日市廃寺の最終段階である10世紀に鍛冶生産が存在した可能性が指摘できる。

S K 4からは31～38が出土している。31は狭い底部から直線的に口縁部にいたる环である。回転糸切り後、底部裏面にヘラケズリを行う。外面に凹凸はなく、調整

もヨコナデのみで丁寧ではない。駿東窯の最終形態と考えられよう。32は口縁部のヨコナデ以外をユビオサエ調整する杯である。底部の範囲が不明瞭でやや内湾しながら口縁部に至る。口唇部内面に沈線上の凹線を有する。胎土・形態から10世紀前半の遠江窯の杯と考えられる。33は甲斐型土器の皿と考えられる。底部からあまり立ち上がりらず横方向に直線的に広がる。甲斐型土器の最終時期の10世紀と考えられる。37・38は墨書き土器である。37は甕の破片と考えられるが判読不能。38は杯外面上に「身」が認められる。

35・36は灰釉陶器の碗である。高台部分のみが残存する。35の高台は内外面に弱いナデ調整で、低く端部に尖る形態を示す。外面高台部の付け根に沈線上の窪みが存在する。底部糸切り後未調整である。O-53型式期と考えられる。

36の高台は内面が強くナデられ、内湾した高い三日月高台を呈する。K-90からO-53型式期と考えられる。以上よりSK4出土遺物は10世紀前半の比較的まとまった時期の遺物と考えられる。



第103図 東平遺跡第55地区 出土遺物（土器・土製品）

第4表 東平遺跡第55地区 出土遺物(土器・土製品)観察表

## ・土器

探査	回版	報告番号	遺構名	種別	器種	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面色調	外面色調	備考
第103回	PL.3	1	SK4	須恵器	环	50%	8.9	2.4	-	SY5-1(灰)	2SY5-1(灰灰)	
第103回	PL.3	2	SBR	土師器	环	20%	(11.8)	(2.1)	-	10YR4-3(にぶい黄褐)	7SYR4-3(褐)	
第103回	PL.3	3	SBR	須恵器	蓋	-	-	(2.0)	-	SY5-1(灰)	7SY5-1(灰)	
第103回	PL.3	4	SBR	土師器	环	20%	(11.8)	(2.8)	-	SYR6-6(橙)	SYR6-6(橙)	
第103回	PL.3	5	SBR	須恵器	环	-	-	(1.7)	-	SY6-2(灰オーブ)	SY6-1(灰)	
第103回	PL.3	6	SB3	土師器	壳	20%	(20.0)	(3.6)	-	25YR4-6(赤褐)	SYR4-6(赤褐)	
第103回	PL.3	7	SBR	土師器	环	60%	-	(1.5)	5.4	SYR4-4(にぶい赤褐)	2SY5-3(黄褐)	
第103回	PL.3	8	SB4	土師器	环	20%	(10.6)	3.6	-	10YR4-2(灰黄褐)	10YR5-3(にぶい黄褐)	
第103回	PL.3	9	SBR	土師器	壳	-	-	(3.4)	-	7SYR4-4(褐)	7SYR5-3(にぶい褐)	
第103回	PL.3	10	SB4	土師器	壳	-	-	(2.9)	-	5YR5-4(にぶい赤褐)	5YR5-6(明赤褐)	
第103回	PL.3	11	SBR	土師器	壳	-	-	(3.0)	-	7SYR6-4(にぶい橙)	7SYR5-3(にぶい褐)	北隣系
第103回	PL.3	12	SBR	土師器	环	-	-	(3.4)	-	N2(黒)	7SYR5-4(にぶい褐)	
第103回	PL.3	13	SBS	土師器	环	30%	(13.2)	2.8	(5.6)	7SY3-1(オーブ黒)	SYR5-6(明赤褐)	
第103回	PL.3	14	SBS	土師器	环	30%	(15.2)	3.4	(4.6)	5YR5-6(明赤褐)	7SYR5-6(明褐)	
第103回	PL.3	15	SBS	土師器	环	-	-	(3.5)	-	10YR4-2(灰黄褐)	10YR4-3(にぶい黄褐)	
第103回	PL.3	16	SBS	土師器	环	-	-	(3.8)	-	SYR4-6(赤褐)	5YR4-3(にぶい赤褐)	
第103回	PL.3	17	SBS	土師器	环	-	-	(2.2)	-	SYR4-6(赤褐)	7SYR5-4(にぶい褐)	
第103回	PL.3	18	SBS	土師器	环	20%	(10.6)	3.8	(5.8)	SYR4-6(赤褐)	SYR5-6(明赤褐)	墨書き土器
第103回	PL.3	19	SBS	土師器	环	20%	(11.7)	3.4	(6.0)	7SYR4-4(褐)	10YR3-2(灰褐)	
第103回	PL.3	20	SBS	土師器	环	-	-	(3.0)	-	5YR2-6(橙)	SYR7-6(橙)	
第103回	PL.3	21	SBS	土師器	环	20%	-	(1.3)	(6.4)	7SYR4-4(褐)	10YR4-3(にぶい黄褐)	
第103回	PL.3	22	SBS	土師器	环	25%	-	(1.6)	(7.8)	SYR4-8(赤褐)	SYR4-6(赤褐)	開口出し高台
第103回	PL.3	23	SB4	土師器	环	25%	-	(0.6)	-	10YR6-4(にぶい黄褐)	7SYR6-6(橙)	墨書き土器
第103回	PL.3	24	SBS	土師器	环	-	-	(0.6)	-	5YR4-6(赤褐)	7SYR4-6(褐)	墨書き土器
第103回	PL.3	25	SBS	土師器	壳	20%	-	(6.7)	-	10YR4-4(褐)	7SYR3-3(暗褐)	
第103回	PL.4	26	SBS	土師器	壳	25%	-	(5.4)	(8.4)	25YR4-4(にぶい赤褐)	5YR4-4(にぶい赤褐)	
第103回	PL.4	27	SBS	須恵器	环	20%	(14.0)	(3.0)	-	25Y6-2(灰黄)	25Y6-1(灰灰)	
第103回	PL.4	28	SBS	須恵器	蓋	-	-	(1.6)	-	25Y6-1(灰黄)	5Y6-2(灰オーブ)	
第103回	PL.4	29	SBS	灰陶器	碗	-	-	(1.6)	-	25Y6-1(灰灰)	25Y6-1(灰灰)	
第103回	PL.4	31	SK4	土師器	环	30%	(12.0)	3.8	(6.6)	7SYR5-6(明褐)	SYR4-6(赤褐)	
第103回	PL.4	32	SK4	土師器	环	60%	(12.8)	3.1	5.6	10YR6-4(にぶい黄褐)	7SYR5-4(にぶい褐)	
第103回	PL.4	33	SK4	土師器	盖	40%	(13.8)	2.4	(4.0)	5YR5-6(明赤褐)	SYR4-6(赤褐)	
第103回	PL.4	34	SK4	土師器	环	20%	(10.6)	(2.8)	-	5YR5-6(明赤褐)	SYR5-6(明赤褐)	
第103回	PL.4	35	SK4	灰陶器	碗	50%	-	(1.6)	6.6	25Y5-2(暗赤褐)	25Y6-2(灰黄)	
第103回	PL.4	36	SK4	灰陶器	盖	20%	-	(2.5)	(8.0)	5Y6-2(灰オーブ)	10YR6-3(にぶい黄褐)	
第103回	PL.4	37	SK4	土師器	环	-	-	-	-	7SYR5-4(にぶい黄褐)	10YR5-3(にぶい黄褐)	墨書き土器
第103回	PL.4	38	SK4	土師器	环	-	-	(3.2)	-	SYR5-6(明赤褐)	SYR5-6(明赤褐)	墨書き土器

## ・土製品

探査	回版	報告番号	遺構名	種別	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	内面色調	外面色調	備考
第103回	PL.4	30	SB5	土製品	輪の羽II	(6.0)	(4.2)	(2.4)	50.94	7.5YR5-3(にぶい黄褐)	10YR5-3(にぶい黄褐)	

## 瓦(第104~109回)

今回の調査では、平瓦16.31kg、丸瓦2.18kgが出土している。特にS B 5 S X 1からは、平瓦12点(14.81kg)、丸瓦6点(1.66kg)が折り重なるように出土した。

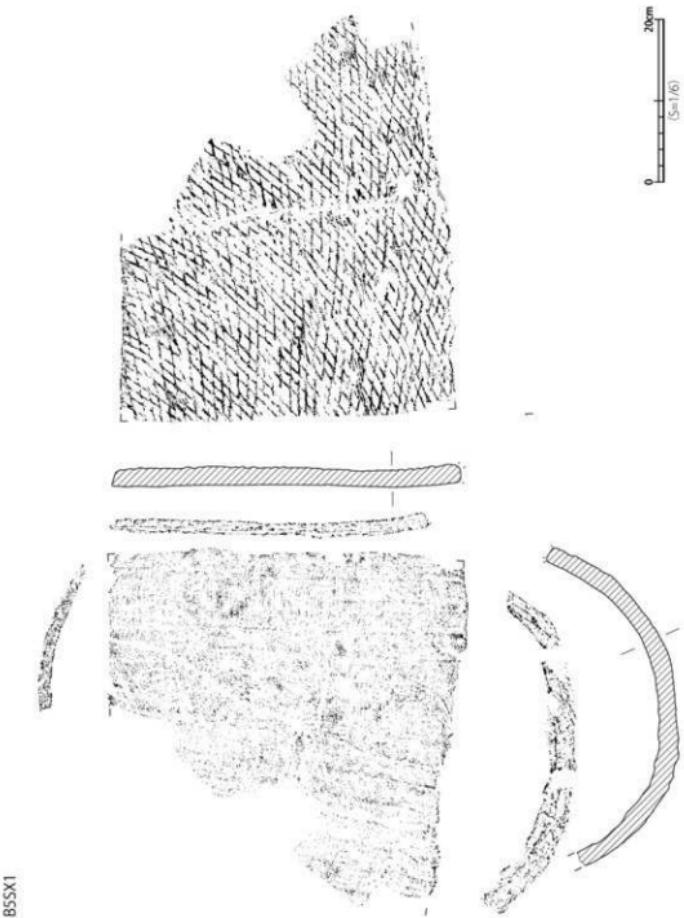
1~12は、桶巻作りの平瓦で凸面側には、格子目状の叩き目が残り、凹面側には布目が鮮明に残る。凸面側の広幅部分(幅6cm)の格子目状叩きのみ水平方向に行われており、この部分が桶巻き時の下方向を示す。他

の部分の叩きは螺旋状に右上がり(正面から見て)に行われている。これは桶の上方から叩いた時に右手で叩きが行われた事を推測させる。また、凹面側には幅2.5~3.5cmの板を繋ぎ合わせて桶にした痕跡が認められる。端部はケズリ調整が行われるが、3は、叩き後に広幅部先端に粘土紐を追加し、整形後にケズリを行っている。一方、桶巻き時にワラなどが敷かれていたらしく、10などの広幅部先端にその痕跡を確認することが出来る。

13～17は、丸瓦で凸面側はナデ調整、凹面側には布目が鮮明に残る。全体の形状が復原されるものはない。端部はケズリ調整が行われるが、その手法も尖らせるものの(17)、側面・凹面の二箇所にケズリを行うものの(14)、側面・凹面・凸面の三箇所にケズリを行うものの(13・15)などバリエティが存在する。その調整方法の違いと

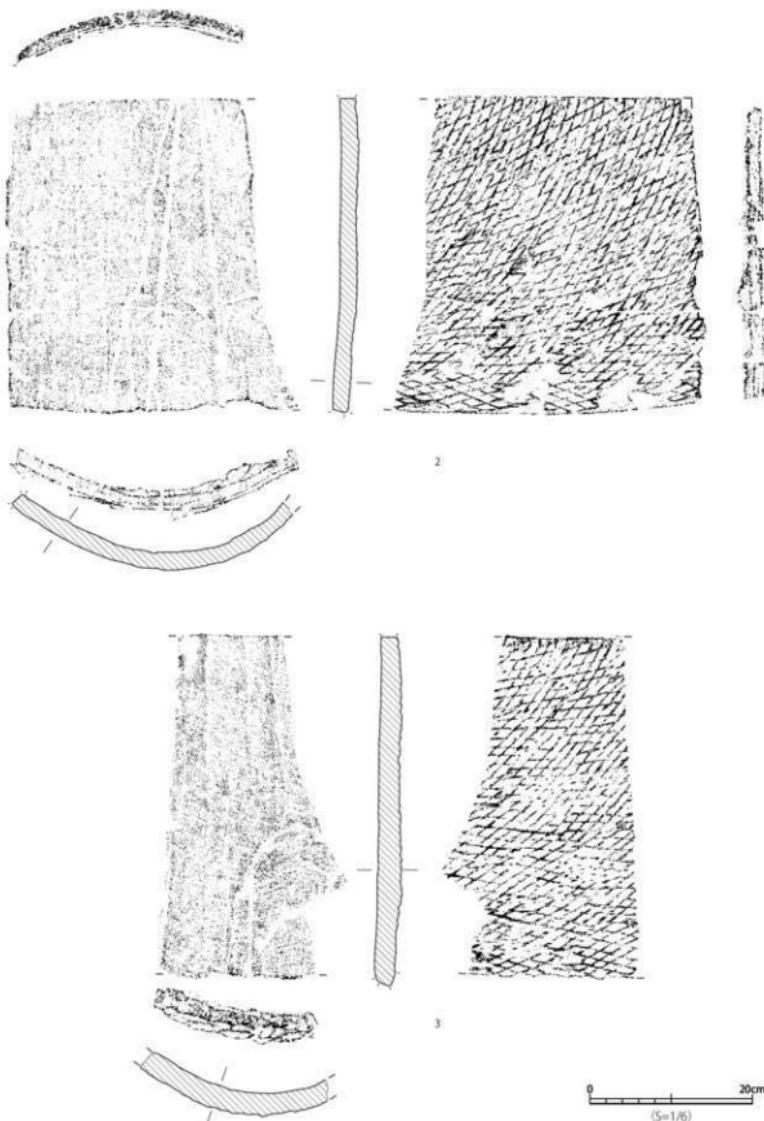
形態・整形技法の違い等との相関関係は今後、良好な資料が出土した段階で検討したい。

また、19から33のように他の造形からも平瓦や丸瓦の小破片が出土しているが前述の特徴を著しく逸脱するものはないため、詳細な記述は省略する。



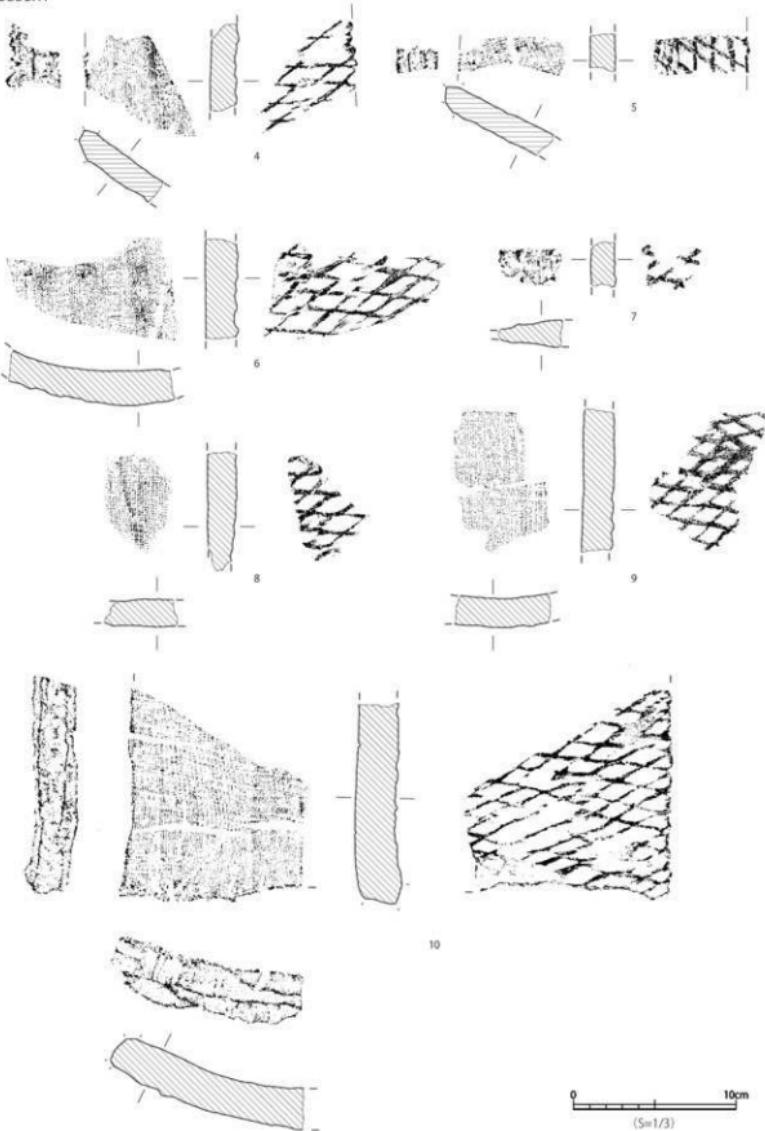
第104図 東平瀬跡第55地区 出土遺物 (Fig. 1)

SB55X1



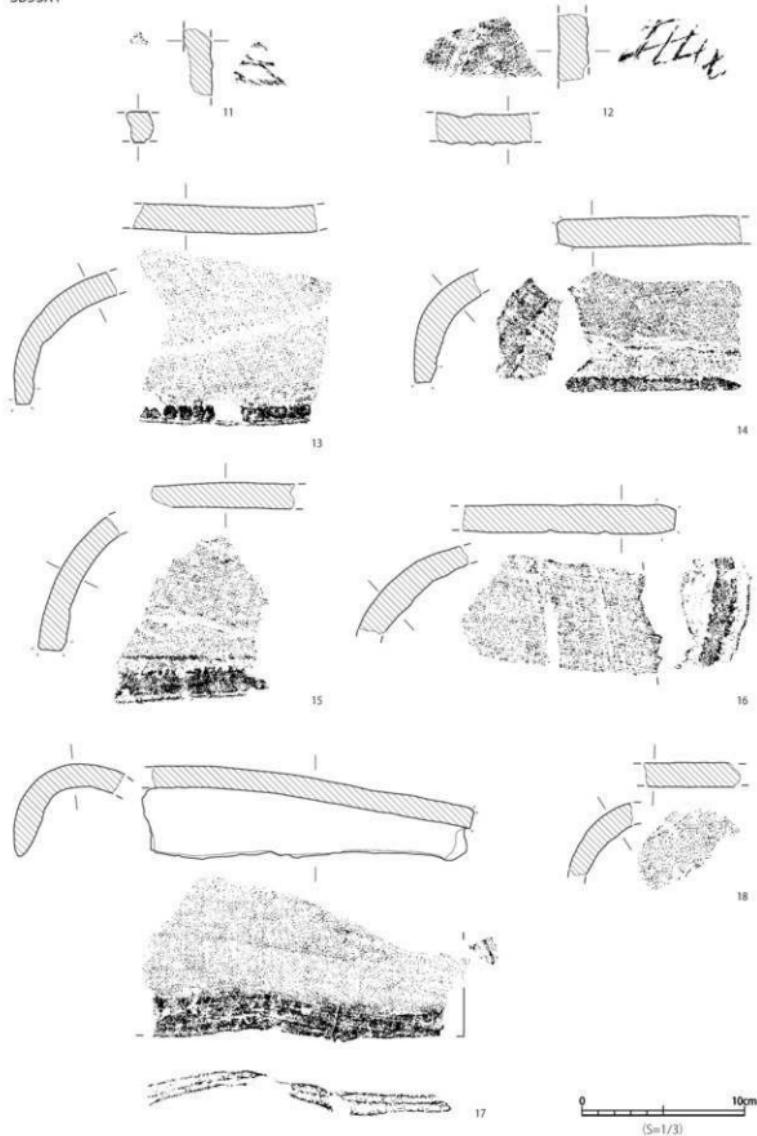
第105図 東平遺跡第55地区 出土遺物（瓦②）

SB5SX1

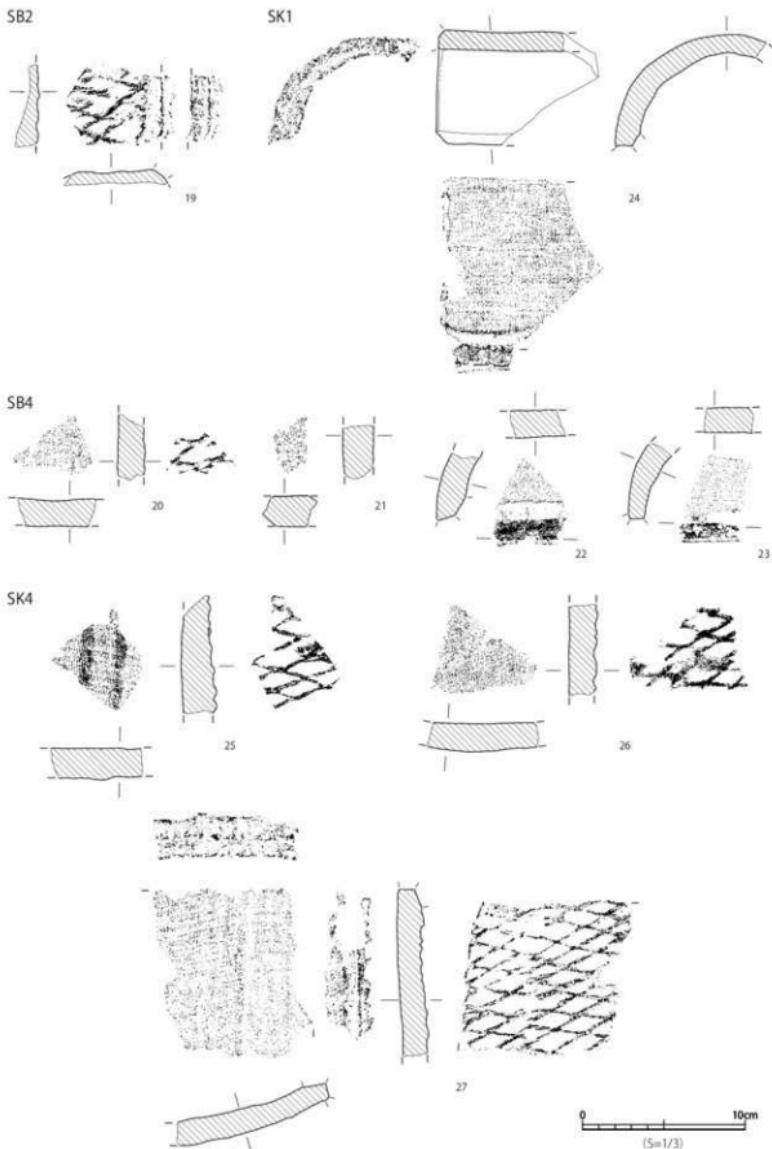


第106図 東平遺跡第55地区 出土遺物（瓦③）

SBSSX1

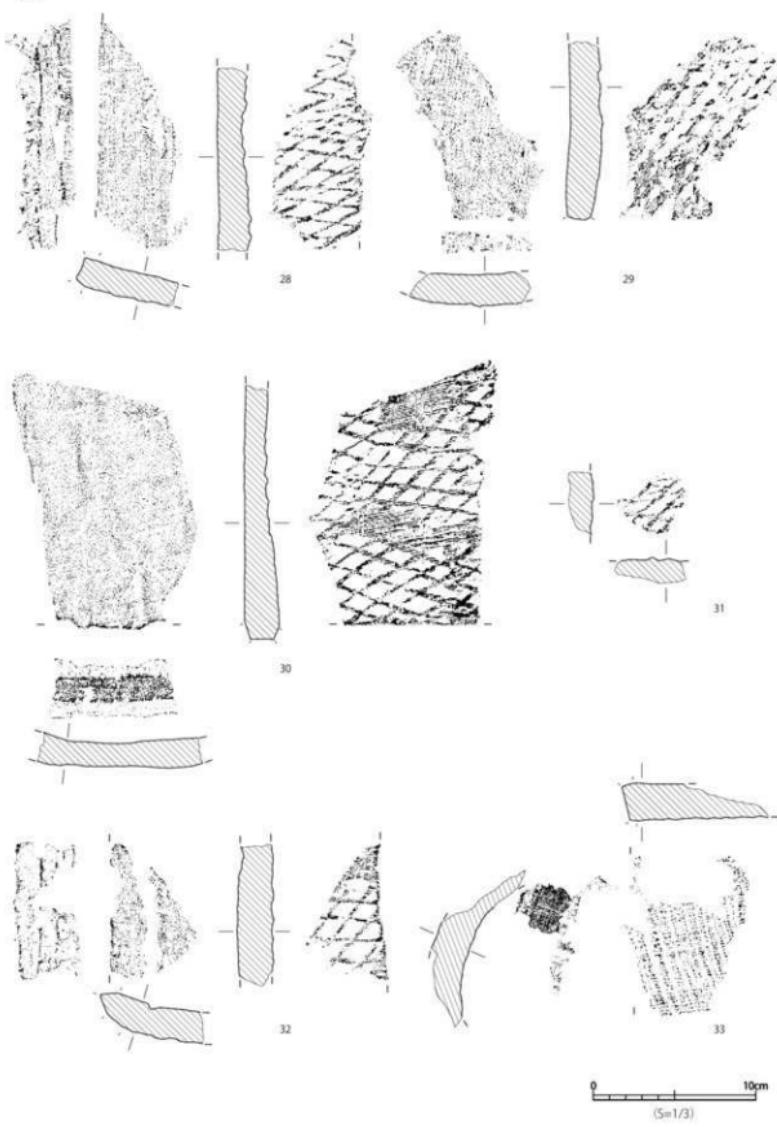


第107図 東平遺跡第55地区 出土遺物（瓦④）



第108図 東平遺跡第55地区 出土遺物（瓦⑤）

SK4



第109図 東平遺跡第55地区 出土遺物（瓦⑥）

## 第4節 第57地区の調査成果

### 第1項 経緯と経過

平成23年3月14日、不動産業者（以下、事業者）から、富士市浅間本町2992番37外について、不動産売買（個人住宅建設を目的とする）に際して埋蔵文化財の照会がなされた。文化振興課職員による現地踏査では、遺物は採集されなかったが、今後、個人住宅を含めた土木工事を行う際には、文化財保護法第93条に基づく届出の必要がある点、また、付近からは布目瓦や墨書き器が数多く採集されていることから、事業者に対して、事前に確認調査を実施する必要がある旨が伝えられた。

3月25日、事業者から富士市教育委員会教育長宛に「試掘確認調査依頼書」「発掘調査承諾書」が提出され、4月18日、文化振興課により確認調査が実施された。

調査の結果、敷地内に東西設定したトレーニングから表土下130cm～160cmにおいて堅穴建物跡2軒と土師器・須恵器・布目瓦が検出・出土した。そのため、4月21日、富士警察署長に「埋蔵物の発見届」（富教文発第55-2号）を提出するとともに静岡県教育委員会に「埋蔵文化財保管証」（富教文発第55号）を提出した。また、4月26日、静岡県教育委員会および事業者に「発掘調査結果概要」（富教文発第70号）を提出した。

その後、平成23年5月10日、個人住宅新築に伴い、静岡県教育委員会教育長に「埋蔵文化財発掘の届出書」が提出された。調査の結果から80cm程度の保護層が確保されることが明らかであり、進発後の6月1日、「工事立会いの実施」の指示（教文第307号）が通知され、文化振興課職員立会いの下、工事が着手された。なお、工事中の立会いにより、遺構・遺物は発見されなかった。



第110図 東平遺跡第57地区 調査位置図 (S=1/5,000)

### 第2項 調査の結果

遺構 堅穴建物跡2軒を検出した。

S B 1はトレーニング東端においてカマド部分のみが検出された。サブトレーニングによる振削では床面まで12cm程度しか残存しない。

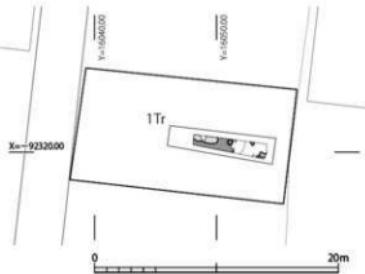
S B 2はトレーニング中央から西側にかけて検出された。東側の立ち上がり部とカマドの一部を検出した。カマドは建物の北壁に設置されたものと考えられるが上面が削平されており、残存状況はよくない。そのため、構築方法の詳細やカマド廃棄に伴う行為については明らかにすることが出来なかった。

遺物 土師器3点、須恵器1点、瓦1点を報告する（第113図）。

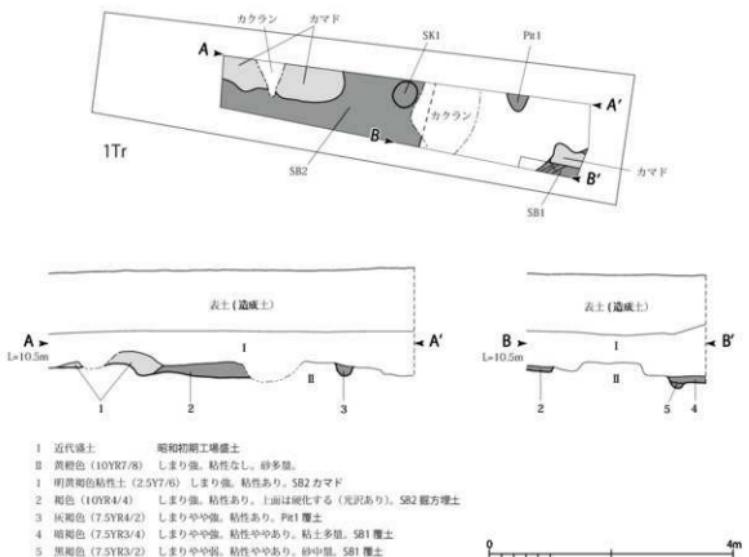
3の須恵器のみがS B 1出土の遺物で、他はS B 2カマドの東側からまとめて出土した。

1は橙色を呈する壺の口縁部片である。ヨコナデにより口縁部下端の屈曲が作り出されている。8世紀前半のものと考えられる。2・4は駆東甕の破片である。小破片のため時期決定は出来ないが、共伴する1との年代的矛盾はない。3は須恵器の蓋の破片だが、時期は不明。

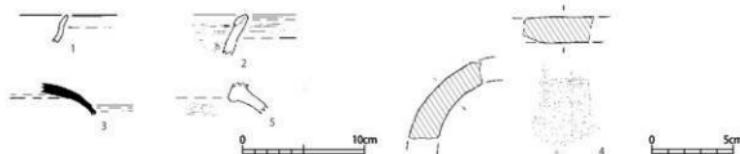
4は丸瓦の破片である。内面に布目が明瞭に残る。外面は丁寧にナデられている。1の土師器壺との共伴を考えれば7世紀から8世紀の瓦が、廃棄などにより堅穴建物内に混入したものと考えられる。



第111図 東平遺跡第57地区 トレーニング配置図 (S=1/400)



第112図 東平道路第57地区 トレンチ平面図・セクション図 (S=1/80)



第113図 東平道路第57地区 出土遺物

第5表 東平道路第57地区 出土遺物観察表

件名	回版	報告番号	造機名	種別	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面色調	外面色調
第113回	PL.8	1	SA2	土師器	壺	-	-	(23)	-	7.5YR6/4 (にじみ根) 10YR6/4 (にじみ、黄褐色)	
第113回	PL.8	2	SA2	土師器	壺	-	-	(33)	-	SYR4/4 (にじみ、赤褐色) 7.5YR4/3 (褐)	
第113回	PL.8	3	SA1	陶器	壺蓋	-	-	(26)	-	2.5Y5/1 (黄灰)	5Y4/1 (灰)
第113回	PL.8	4	SA2	瓦	丸瓦	-	-	-	-		
第113回	PL.8	5	SA2	土師器	壺	-	-	(25)	-	SYR4/4 (にじみ、赤褐色) 7.5YR4/3 (褐)	

## 参考文献

- 大協謙 1991 「研究ノート 丸瓦の製作技法」『研究論集』Ⅷ 泰良国立文化研究所  
 佐藤祐樹・藤村耕 2013 「考古学からみた富士山の噴火と地域社会の変動－古墳時代・平安時代を中心にして－」『考古学からみた静岡の自然災害と復興』静岡県考古学会 2012 年度シンポジウム  
 佐野五十三 2008 「駿河国富士郡における 8 世紀代の移住と集住」『静岡県考古学研究』40  
 佐原真 1972 「平瓦棒巻作り」『考古学雑誌』第 58 卷 2 号

志賀信 2005 「都御観道寺跡」の性格—考古資料を用いた分析への展望—『地方官衙と寺院—都御観道寺を中心として—』泰良文化財研究所  
 藤村耕 2012 「古墳時代後期初期における2つの首長墓とその評価」『富士市内道路発掘調査報告書—平成 11・12 年度—』富士市教育委員会  
 藤村耕・佐藤祐樹 2013 「富士市東平道路の概要と現状の課題」『都内の官衙道路と最近の調査成果』(平成 24 年度 静岡県考古学会東・中・西合同研究会資料)

## 第3章 富士岡1古墳群の調査

### 第1節 調査の経緯と経過

#### 調査依頼

事業者は当該地において、集合住宅新築工事を計画した。そのため、工務所を通じ、文化振興課に埋蔵文化財の取り扱いについて照会した。それに対して文化振興課は、包蔵地に隣接していること、平成21年以来、当該地の北側における本発掘調査（愛鷹2期地区農道整備事業）において、これまで想定していた古墳以外にも、縄文時代の敷石住居や弥生・古墳時代の建物跡・方形周溝墓などが新たに見つかっていることから（静岡県埋蔵文化財センター2013）、包蔵地範囲が拡大する可能性を考え、試掘・確認調査を実施したい旨を回答した。

それを受け、事業者は、富士市教育委員会教育長宛に「埋蔵文化財試掘確認調査依頼書」「発掘調査承諾書」を提出した。

#### 第1次調査実施

それに基づき、文化振興課職員による試掘・確認調査を行うこととなった。調査は平成23年7月27日～8月30日に行われ【第12地区第1次調査】、その結果、横穴式石室を有する古墳1基を新規発見し、加えて縄文時代の竪穴建物跡1軒を検出した。



第114図 富士岡1古墳群第12地区 調査位置図 (S=1/5,000)  
(地図に示した包蔵地範囲は変更前のもの)

平成23年9月27日、終了報告書を作成し静岡県教育委員会に提出するとともに（富教文発第280号）、新たに発見された古墳を「花川戸第4号墳」として、新規登録することを静岡県教育委員会と協議し（富教文発第281号）、加えて「富士岡1古墳群」の範囲についても拡大し、範囲変更することで協議を行った（富教文発第282号）。

平成23年10月3日、静岡県教育委員会教育長より花川戸第4号墳の新規登録（教文第892号）、それに伴う富士岡1古墳群の範囲変更の通知（教文第893号）があった。

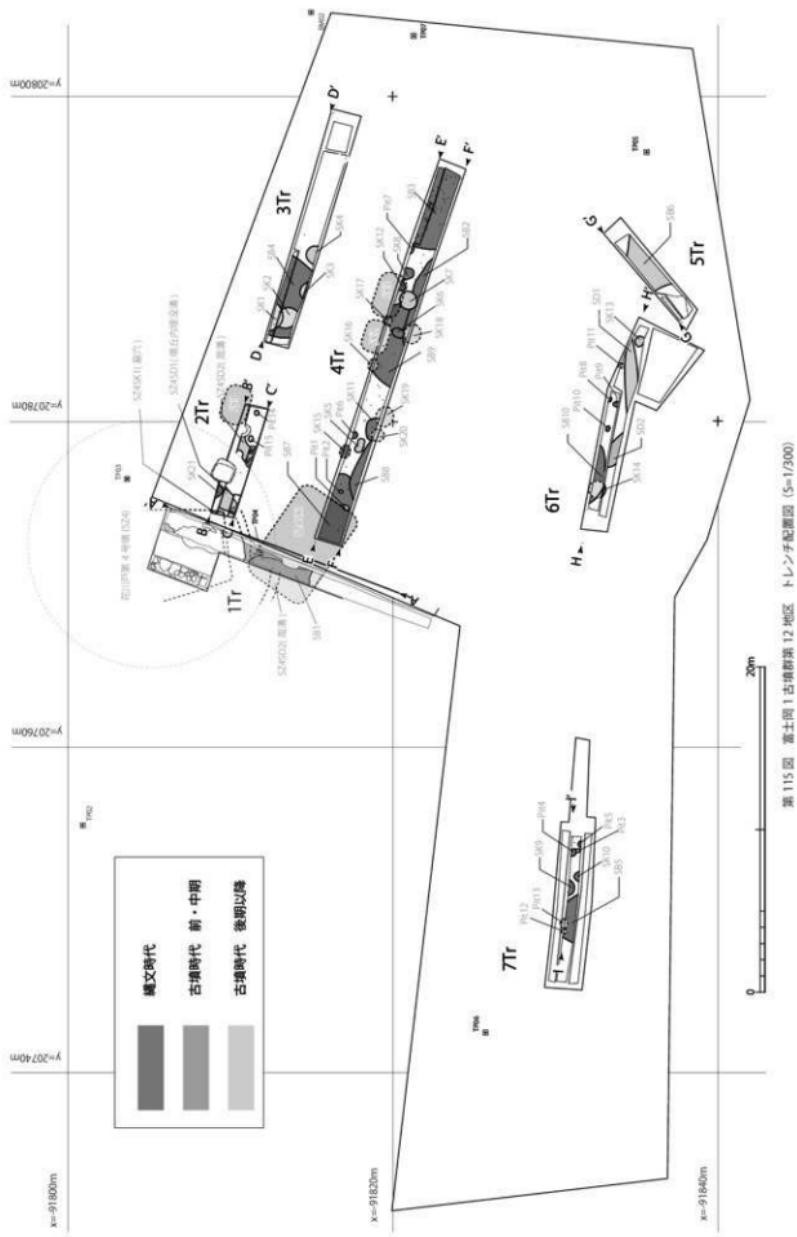
#### 第2次調査実施

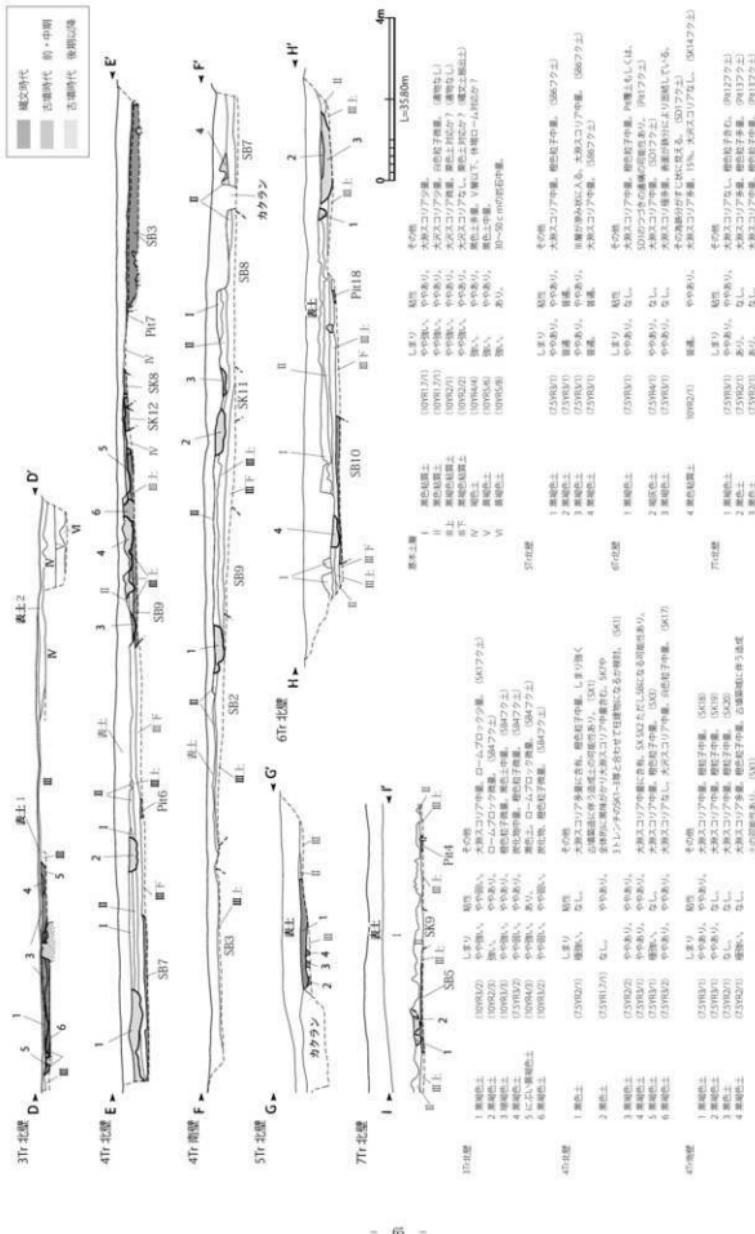
第1次調査時には事業地内の大部分が倉庫であったため、地下に埋蔵文化財が存在するのか、またその検出率についてのデータを取得することが出来なかった。そのため、第1次調査終了後の8月31日より倉庫の解体工事が開始され、9月9日、事業者より倉庫解体後の試掘調査を再度依頼する「埋蔵文化財試掘確認調査依頼書」「発掘調査承諾書」が提出された。

第2次調査では敷地内にトレント6本を新たに設定し、重機による表土除去後、人力による精査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

その結果、第1次調査で新規発見した古墳（花川戸第4号墳）は、倉庫建築に伴う削平を受けながらも、周溝が残存すること、直径約15mと比較的大きな墳丘を有していることなどが明らかとなった。また、他のトレントからは縄文時代中期の竪穴建物跡が多数検出され、赤瀬川西岸に大規模な集落跡が展開していることが明らかとなった。

なお、平成24年2月、事業により遺跡の保護が図れない範囲について、本発掘調査が実施されたが、それについては改めて報告することとする。





第116回 3・4・5・6・7トレンチ セクション図 (S=1/120)

## 第2節 遺跡の立地と調査履歴

### 第1項 遺跡の立地

富士市は、西方に岩淵火山地、星山丘陵、北方に富士火山地、東に愛鷹火山地、南方は駿河湾と富士川河口から沼津市の狩野川まで続く田子の浦砂丘に取り囲まれ、平野部は富士川の運搬した堆積物によって形成されたデルタ地帯により形成されている。また、愛鷹火山地と田子の浦砂丘に挟まれた低地部は「浮島ヶ原低地」と呼ばれ、古墳時代以降、肥沃な生産基盤として存在していたものと考えられる。

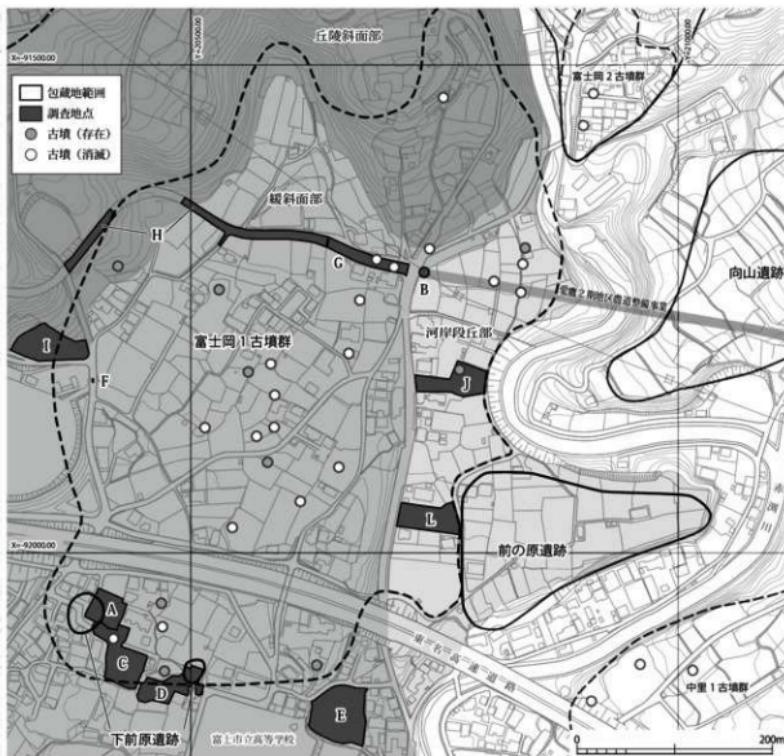
富士火山地と愛鷹火山地を隔てているのが赤瀬川で、西岸の丘陵斜面が少し緩やかになった箇所に富士岡1古墳群が存在する。消滅古墳を含めると25基の古墳において構成されていたと考えられている。

近年、愛鷹2期地区農道整備事業に伴う調査により、古墳の周溝と考えられる掘り込みが3基分調査され、今回の新規発見「花川戸第4号墳」と合わせると29基が認識されている。

古墳は、「丘陵斜面部」、傾斜の緩やかになる「緩斜面部」、緩斜面部が東側の赤瀬川に向かってさらに低くなり、赤瀬川東岸を望むことの出来る「河岸段丘部」の3つに区分される。大部分の古墳は「緩斜面部」に存在するが、今回の調査において、「河岸段丘部」にも古墳が立地することが明らかとなった点は、対岸の中里1古墳群との関係を考える上で重要な成果といえる。



第117図 周辺遺跡分布図 (S=1/20,000)



第118図 富士岡1古墳群 調査履歴図 (S=1/5,000)

第6表 富士岡1古墳群 調査履歴

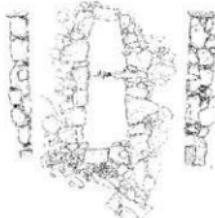
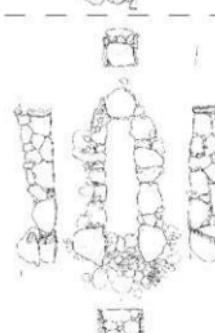
地区	測定 年度	測定 機種	測定期間	測量 (m)		測定の範囲	時代	出土遺物	報告書	備考	
				対象	測定						
A	1 地区	H06	試験	16.622	- 6.30	1,030	25 地下造工事	なし	なし	富士岡 F- 8B 5号墳 発掘記録	
B	2 地区	H06	半調査	16.74	- 8.12	40	20 道路修理工事	古墳 花川戸第 1 号墳	刀子、鉢形・可憐 ・土器類・組合せ	# 1 新規発見	
C	3 地区	H08	試験	16.111	- 11.22	2,000	450 32 地下造工事	古墳 富士岡 F- 8B 2号墳	鏡形器・灰陶壺・灰瓦	# 2	
D	4 地区	H10	試験	16.065	- 7.3	1,395	300 地下造工事	圓文 土器類	土器・石器	# 3	
E	開闢地	H12	試験	16.12023	- 10.27	2,637	72 地下造工事	なし	なし	# 3	
F	5 地区	H12	試験	16.32217	- 6.0	60	3 地下木構造施工作業	なし	なし	# 3	
		H13	試験	16.11136	- 11.29	26	26				
		H13	試験	16.12122	- 12.21	36	36				
G	6 地区	H13	試験	16.42212	- 21.5	370	84 直道整理工事	古墳 花川戸第 3 号墳	圓柱形 ・土器類・灰陶壺	# 4 花川戸第 3 号墳 発掘記録	
		H14	本年度	16.193	- 10.3	650	650	花川戸第 2 号墳 ・花川戸第 3 号墳	土器・石器 ・鏡形器・刀劍・鎧兜	新規発見	
		H15	試験	16.53015	- 10.16	2,807	75	なし	なし	# 5	
		H15	試験	16.62219	- 2.20	240	40	なし	なし	# 5	
H	7 地区	H16	試験	16.692	- 9.6	630	109 直道整理工事	なし	なし	# 6	
		H16	試験	16.61018	-	1,093	132	なし	なし	# 6	
		H16	試験	16.7113.3	- 1.18	113	40	なし	なし	# 6	
I	8 地区	H20	試験	16.701.1	- 7.2	1,877	39 高松寺合宿建設工事	なし	なし	# 7	
		H24	試験	16.23.227	- 8.30	1,525	37				
J	12 地区	H24	試験	16.30.10.2	- 10.20	1,440	151	集合住宅建築工事	圓文 花川戸第 4 号墳 古墳 花川戸第 4 号墳	土器・石器 ・鏡形器・金銀品(鉄製)	花川戸第 4 号墳 新規発見
		H24	試験	16.30.11.2	-			なし	なし		

## 第2項 調査履歴

富士岡1古墳群は、平成24年度までに第13地区までの地区が設定され調査が行われてきた。これまでの調査で発掘調査が行われたのは、8基存在する。そのうち3基は、愛鷹2期地区農道整備事業に伴う調査で発見されたもので周溝のみの検出である。それ以外の「花川戸第

1号墳」(第2地区)、「富士岡F-第22号墳」(第3地区)、「花川戸第2・3号墳」(第6地区)そして、今回報告する「花川戸第4号墳」(第12地区)のすべてが、古墳時代後期の横穴式石室を有する古墳である。

花川戸第1号墳 平成6年、富士富士宮由比線県単道路改良工事の工事立会い中に発見され、調査された。丘陵

埋葬施設	出土遺物
花川戸第1号墳	
花川戸第2号墳	
花川戸第3号墳	

第119図 花川戸第1号墳・花川戸第2号墳・花川戸第3号墳 石室と出土遺物

斜面部が緩斜面部に移行する傾斜変換付近に存在した。7世紀前半から中葉と考えられ、墳丘は直径96m（推定）で石室長4.5mの横穴式石室を検出した。石室は大規模な攪乱を受けしており、石室内から出土したのは、鉄鏃2、刀子2、耳環1、須恵器模倣の土師器环1のみである。主軸方位はN-9°10'-Wで、開口部は斜面下方に位置する（富士市教育委員会 1995）。

花川戸第2号墳 平成13年、県営社会環境基盤重点農道整備事業（愛鷹地区）に伴う試掘調査において第1号墳の西側に隣接するように第2・第3号墳を新規発見した。墳丘は削平され、周溝も検出されなかったことから墳丘規模は明らかでないが、石室長4.1mの横穴式石室を検出した。床面は3面確認されたものの、出土遺物は

須恵器蓋と鉄鏃が1点ずつ出土したのみで詳細は明らかではないが、7世紀代の築造と考えられる。主軸方位はN-24°-Wで、開口部は斜面下方に位置する。（富士市教育委員会 2003）。

花川戸第3号墳 花川戸第1号墳と第2号墳の中間地点で検出された。墳丘規模は明らかではないが石室長3.5mの横穴式石室を検出した。第2号墳と異なり、刀、刀子、装身具、須恵器など数多くの副葬品が出土しており、7世紀末から8世紀第2四半期まで追葬が行われていたと考えられている。しかし、出土した須恵器のみから導き出された時期幅が古墳築造から追葬までの全時期を示しているとは限らないところに注意が必要である（富士市教育委員会 2003）。

### 第3節 花川戸第4号墳の調査

#### 第1項 調査概略

第1次調査時には、対象地は包蔵地範囲外であったため、トレンチ1本を設定することで、埋蔵文化財の有無を確認することを計画し、1トレンチを設定・掘削を行った。その結果、横穴式石室1基を検出した。当初、石室側壁を地山の自然石と誤認し、除去し、断割ってしまったことは調査者として深く反省しなければならない。石室・花川戸第4号墳（S Z 4）の存在を認識した後、石室の規模を知るため、トレンチ北端を西側に正方形に拡張し、側壁と裏込め石の一部、墓壙、墳丘盛土などを確認した。しかし、調査範囲の問題からトレンチをさらに北側に拡張することが出来ず、石室長については明らかとならなかった。

#### 第2項 調査成果

**墳丘・周溝の構造** 調査地は北側から南側に傾斜し、土地全体がアスファルトに覆われていた。1次調査時においては、敷地東側には倉庫が存在したため、倉庫入口のアスファルト部分に南北方向の1トレンチを設定し、倉庫解体後の2次調査では、1トレンチに直交する形で2トレンチを設定した。調査前の地形観察からは、古墳の存在を推測させる等高線の乱れなどはまったく確認されなかった。そのため、トレンチの設定も任意で行った。

調査の結果、古墳には「墳丘内埋没溝」（S Z 4 S D 1）と周溝（S Z 4 S D 2）が存在することが明らかとなつた。また、不確かながら周溝掘削前（もしくは石室構築前）に、石室開口部（南側）全面を造成している痕跡（以下、「古墳造成土」と称する）を確認することが出来た。

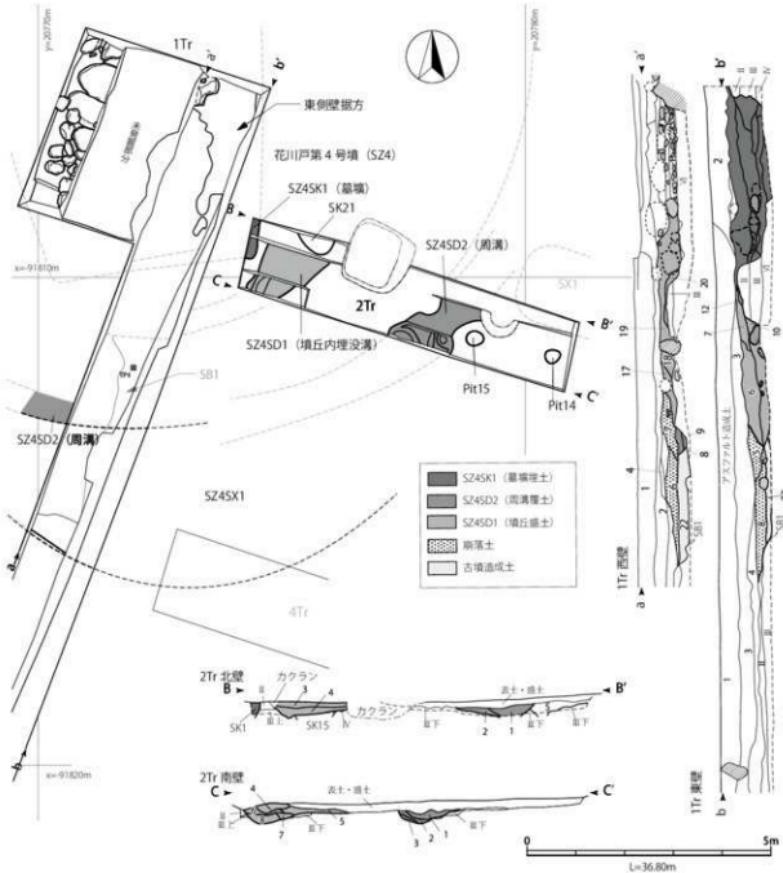
墳丘内埋没溝（S Z 4 S D 1）は、後述の墓壙の外側20cmの箇所に弧状に確認された。墓壙検出面と同一面において確認されたが、上面は削平を受けており、実際の掘削面は明らかではない。幅0.9m、確認された深さは25cmを測る。溝上部の土層は墳丘盛土（2トレンチ3層・4層）と考えられ、墓壙内への石室石材の設置後、墓壙上面に側壁が設置された際の土留めとして機能し、また結果として第一次墳丘としての性格を有する。

周溝（S Z 4 S D 2）は、1トレンチ中央西壁と2トレンチにおいて確認された。1トレンチ東壁において確認されなかつたのは、開口部には、周溝が存在しなかつたためと考えられる。2トレンチでは、前述の墳丘内埋没溝から外側に2.5mの箇所に弧を描くように検出されたもののやや重なプランを示す。これは、周溝上面が大規模に削平を受けており、検出された周溝が底面付近であったことに起因する。検出箇所で幅1.3m、深さ25cmを測る。本来、周溝と墳丘内埋没溝の間には墳丘盛土が存在したはずだが、削平により残存しない。

今回の調査では、古墳築造前に開口部付近を一度掘削し、大溜スコリアを含む土層で埋め戻すという造成が存在した可能性が考えられる。「古墳造成土（a-a' 22層）」と称したその土層を掘り込むように周溝が掘削されていることが1トレンチ西壁で確認された。周溝の掘削箇所より外側3mの範囲の土層がそれにあたるが、古墳築造前の遺構（堅穴建物等）覆土の可能性も否定できない。しかし、遺物がまったく出土しないことから今回は、可能性も考え、「古墳造成土」とした。今後の調査によつて検証されることを望む。

**埋葬施設の構造** 前述の通り、石室左側壁（東側）の一部と床面の一部を重機により掘削してしまったことや調査範囲が限られていることから、横穴式石室の規模を確定することは出来なかった。しかし、床面の枚数や、石室幅、墓壙の存在など明らかになった点も多い。特に、石室床面から出土した銀装主頭大刀の把頭は注目される。

**石室の検出** 天井石は残存せず、側壁の一部が遺存する



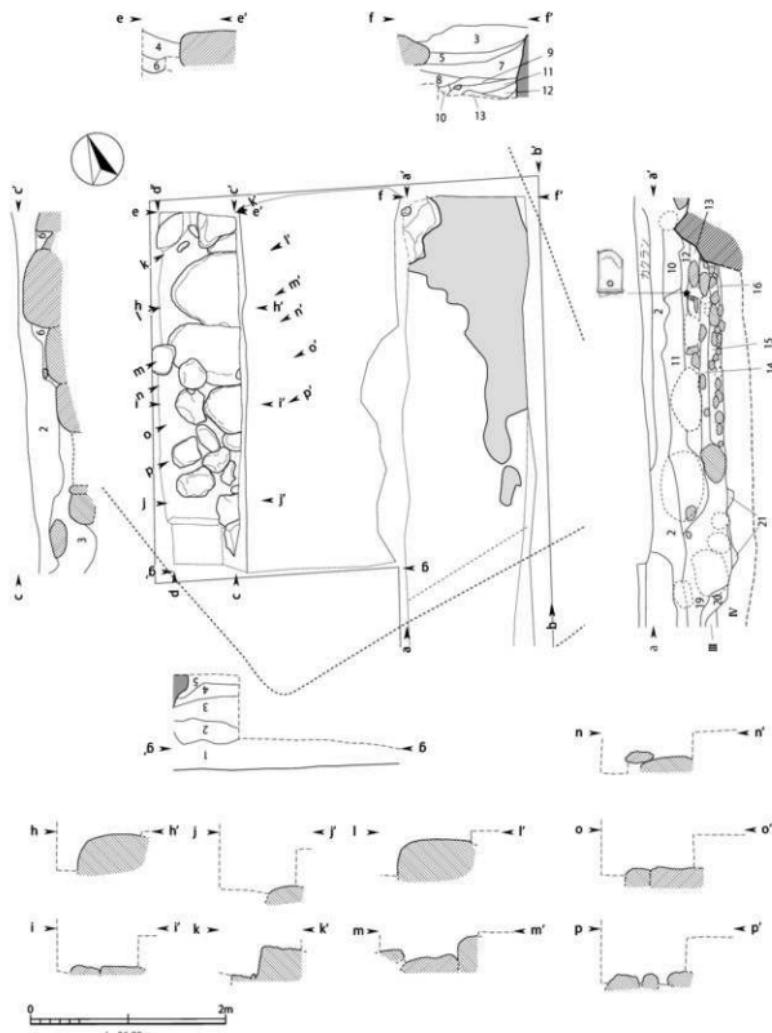
第120図 1・2トレンチ 花川戸第4号墳 墳丘・周溝検出状況平面図・セクション図 (S=1/100)

基本土質		しまり	粘性
Ⅱ 黒色粘質土	(10YR1.7/1)	やや強い。	その他の 大沢スコリア少量、白色粘子微量。(遺物なし)
Ⅲ上 黒褐色粘質土	(10YR2/1)	やや強い。	ややあり。大沢スコリア微量。栗色土粒混在。(遺物なし)
Ⅲ下 黑褐色粘質土	(10YR2/2)	やや強い。	ややあり。大沢スコリアなし。栗色土粒混在? (礫文土層出土)
IV 黄褐色土	(10YR4/4)	強い。	ややあり。黑色土多量。V層以下、休場ローム列記か?

27t 土層		しまり	粘性
1 黒色粘質土	(10YR2/1)	普通	やや強い。3~10mm大沢スコリア5%含有。(S24502 周縁フク土)
2 黒色粘質土	(10YR2/1)	普通	ややあり。2~10mm大沢スコリア3%含有。(S24503 周縁フク土)
3 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	ややあり。5~10mm大沢スコリア15%含有。(S24501 墓底土)
4 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	ややあり。3~7mm大沢スコリア10%含有。(S24501 墓底土)
5 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	ややあり。3~7mm大沢スコリア7%含有。(S24501 墓底土)
6 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	ややあり。3~7mm大沢スコリア5%含有。(S24501 墓底土)
7 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	ややあり。3~7mm大沢スコリア3%含有。(S24501 墓底土)
8 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	ややあり。10mm大沢スコリア2%含有。(S24501 墓底土)

a-a'		しまり	粘性
1 オリーブ黒色土	(5YR3/2)	普通	ややあり。5~10mmの砂礫や砂利を約25%含有。
2 黒色粘質土	(10YR2/1)	強く強い。	ややあり。5~10mm以下の角礫(10YR4/3 黄褐色)を約3%、2~5mmの大沢スコリア約5%含有。
3 黑褐色粘質土	(7.5YR2/1)	普通	やや強い。5mm大沢スコリア5%含有。(S24502 周縁フク土)
4 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	ややあり。5~10mm大沢スコリア15%含有。(S24501 墓底土)
5 黑褐色粘質土	(2.5YR2/1)	やや中強。	ややあり。2~3mm大沢スコリア(7.5YR4/4 鮎色)を多く含有。
6 黑褐色粘質土	(2.5YR1/1)	普通	ややあり。2~3mm大沢スコリア(7.5YR4/4 鮎色)を3%含有。(礫文土層)
7 黑褐色粘質土	(7.5YR2/1)	普通	ややあり。5~10mm大沢スコリア(7.5YR4/4 鮎色)を5%含有。やややラサツ感あり。(礫文土層)
8 黑褐色粘質土	(2.5YR1/1)	普通	ややあり。3~12mm大沢スコリア(7.5YR4/4 鮎色)を2~3mmに含有。(S24502 周縁フク土)
9 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。3~5mm大沢スコリア(10YR4/4 鮎色)を2%含有。やややラサツ感あり。(S24501 周縁フク土)
10 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。2~5mm大沢スコリア(10YR4/4 鮎色)を約1%含有。やややラサツ感あり。(S24501 周縁フク土)
11 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。2~5mm大沢スコリア(10YR4/4 鮎色)を約5% (10層より多い)、1~2mmの松子の3%含有。(10層より多い)
12 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。
13 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	ややあり。1mm以下の粒子(10YR4/4 鮎色)を約1%含有。
14 黑褐色粘質土	(7.5YR2/1)	やや弱い。	ややあり。1mm以下の粒子(7.5YR4/4 鮎色)を約1%含有。
15 黑褐色粘質土	(7.5YR2/1)	やや弱い。	ややあり。1~3mmの岩状大沢スコリア(10YR2/2 黄褐色)を約2%、1~2mmの粒状スコリア(7.5YR4/4 鮎色)1%含有。
16 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	弱い。	ややあり。2~3mmの岩状大澤石(10YR2/2 黄褐色)を20%含有。
17 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。3~8mm大沢スコリア(10YR4/4 鮎色)を2%含有。(S24501 墓底土)
18 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。2~5mm大沢スコリア(7.5YR4/4 鮎色)を1%含有。(S24501 墓底土)
19 黑褐色粘質土	(7.5YR2/1)	普通	ややあり。2~5mm大沢スコリア(7.5YR4/4 鮎色)を10%含有。(S24501 墓底土)
20 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	あり。2~5mm大沢スコリア(7.5YR4/4 鮎色)7%含有。ただし、下位では、スコリア少。
21 黑褐色粘質土	(7.5YR2/1)	普通	あり。(1~3mmのスコリア(10YR4/4 鮎色)を約2%含有。
22 黑褐色粘質土	(2.5YR1.7/1)	普通	ややあり。2~8mm大沢スコリア(7.5YR4/4~4/6 鮎色)を7%含有。
23 黑褐色粘質土	(7.5YR1.7/1)	普通	ややあり。3~12mm大沢スコリア(10YR4/6~10YR4/4 鮎色)10%含有。
24 黑褐色粘質土	(7.5YR2/1)	普通やや弱い。	あり。2~5mm大沢スコリア(7.5YR4/6~10YR4/4 鮎色)を20%含有。

b-b'		しまり	粘性
1 黒色粘質土	(10YR1.7/1)	やや弱い。	ややあり。5~10mmのスコリア(10YR4/4 鮎色)2%含有。
2 黑褐色粘質土	(10YR1.7/2)	やや弱い。	ややあり。3~5mm大沢スコリア(10YR4/4 鮎色)5%、2~3mmのスコリア(5YR3布福東褐色)1%、5~8mmの岩状物を約2%含有。
3 黑褐色粘質土	(10YR2/2)	普通やや弱い。	ややあり。J~2mmの大沢スコリア(10YR4/4 鮎色)7%含有。1~3mmの砂礫3%含有。
4 黑褐色粘質土	(7.5YR2/1)	普通	ややあり。2~11mmの岩状大沢スコリア(7.5YR4/4 鮎色)5%含有。
5 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。3~8mm大沢スコリア(10YR4/4 鮎色)を2%含有。(S24501 墓底土)
6 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	弱い。	ややあり。2~5mm大沢スコリア(7.5YR4/4 鮎色)を1%含有。(S24501 墓底土)
7 黑褐色粘質土	(7.5YR1.7/1)	普通	ややあり。(1~3mmのスコリア(7.5YR4/4 鮎色)2%含有。(S24501 墓底土)
8 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。1~3mmのスコリア(7.5YR4/4 鮎色)を約1%含有。(礫文土層)
9 黑褐色粘質土	(7.5YR1.7/1)	普通	ややあり。2~5mm大沢スコリア(7.5YR4/4 鮎色)5%含有。
10 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。5~10mmのガラス状砂礫物(10YR2/2~2/5 黒褐色粘質土)を約20~25%混在。3~8mmの大沢スコリア(10YR4/4~4/6 鮎色)を約5%含有。(S24501 墓底土)
11 黑褐色粘質土 (70%)	(10YR2/2)	普通	ややあり。2~5mmの岩状物(10YR2/2)と黒褐色粘質土(10YR1.7/1)が混在。(S24501 墓底土)
12 黑褐色粘質土 (30%)	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。2~5mmの岩状物(10YR2/2)と黒褐色粘質土(7.5YR4/4 鮎色)約3~5%含有。
13 黑褐色粘質土	(5YR1.7/1)	やや弱い。	ややあり。2~4mmの大沢スコリア(5YR4/4 鮎色)約2%含有。(S24501 墓底土)
14 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。4~12mmの大沢スコリア(10YR4/4 鮎色)3%含有。(S24501 墓底土)
15 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	弱い。	ややあり。(1~8mmの大沢スコリア(7.5YR4/4 鮎色)2%含有。(S24501 墓底土)
16 黑褐色粘質土 (90%)	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。1~3mmのスコリア(7.5YR4/4 鮎色)を約1%含有。(S24501 墓底土)
17 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。J~2mmの大沢スコリア(10YR4/4 鮎色)7%含有。1~3mmの砂礫3%含有。
18 黑褐色粘質土 (40%)	(10YR2/1)	普通	ややあり。2~8mmの大沢スコリア(5YR4/4 鮎色)約2%含有。(S24501 墓底土)
19 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。2~5mmの大沢スコリア(7.5YR4/4 鮎色)5%含有。
20 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。30~40mmの砂礫物(10YR2/1)の存在が一部見られ、さらに黒褐色粘質土(10YR1.7/1)が約3%混在。3~8mmの大沢スコリア(10YR4/4~4/6 鮎色)を約5%含有。(S24501 墓底土)
21 黑褐色粘質土	(10YR2/2)	普通	ややあり。2~5mmの大沢スコリア(5YR4/4 鮎色)約2%含有。
22 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	ややあり。2~4mmの大沢スコリア(10YR3/4 鮎色)2%含有。
23 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	ややあり。黒褐色粘質土(10YR1.7/1)と栗色粘質土(10YR2/1)が50%マッシュ化混在。
24 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	ややあり。(1~2mX3コット)(7.5YR4/4 鮎色)約1%含有。大沢スコリア5%含有。(S24501 墓底土)
25 黑褐色粘質土 (60%)	(10YR2/1)	普通	あり。栗色粘質土(10YR2/1)と栗色粘質土(10YR2/1)が上位中心約60%、黒褐色粘質土(10YR1.7/1)が下位中心約40%と40mm前後の塊状が混在。8mmの大沢スコリア1%含有。(S24501 墓底土)
26 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	ややあり。栗褐色粘質土(10YR1.7/1)と栗褐色粘質土(10YR1.7/1)が25~30mmの塊状に混在。
27 黑褐色粘質土	(10YR1.7/1)	普通	さらさらに塊状の黒褐色粘質土(10YR2/1)がマッシュ化混在。黒褐色粘質土(10YR2/1)が約15%混在。
28 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	栗褐色粘質土(10YR3/4)が20mmの塊で10%点在。(S24501 墓底土)
29 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	やや強い。2~4mmの大沢スコリア(5YR4/4 鮎色)約15%で30mm後に混在。
30 黑褐色粘質土	(10YR2/1)	普通	やや強い。2~8mmの大沢スコリア(5YR4/4 鮎色)約1%含有。(S24501 墓底土)
31 黑褐色粘質土	(2.5YR1.7/1)	普通	ややあり。2~8mmの大沢スコリア(5YR4/4~4/6 鮎色)を7%含有。(S24501 墓底土)



3 黒色粘質土	(7.5W82/1)	しまり	軽度	その他
3 黒色粘質土	(10W82/1)	透け	ややあり。	2~10mmスコリア (10W84/4褐色) 約7%含む。
6 黒色粘質土	(7.5W83/2/1)	普通	ややあり。	3~10mmスコリア (10W84/4褐色) 約7%含む。
7 黒色粘質土	(7.5W83/2/1)	やや透け	ややあり。	2~3mmスコリア (7.5W83/4褐色) 約7%含む。
7 黒色粘質土	(7.5W83/2/1)	普通	ややあり。	2~3mmスコリア (7.5W84/4褐色) 約7%含む。
8 黒色粘質土	(7.5W83/2/1)	普通	ややあり。	30~80mmの黒褐色粘質土 (10W82/3) の塊状が30%程度に点在。

第121図 1トレーナー 花川戸第4号墳 石室平面図・セクション図 (S=1/50) ①

のみである。側壁には、1m前後、厚み40cm前後の比較的大きな河原石が使われる。墓壙の深さが80cm程度であることから、基底石から二段分が墓壙内に設置されていたものと考えられる。石室長は明らかではないが、墓壙幅や、石室据え方の痕跡等から石室幅は、幅1.5m程度と推測される。



d-d' g-g'

		しまり	起伏	その他
1 黒色粘土	(109R2/1)	陥へん。	ありなし。	5~30mm角礁約20%、5mmの円礁5%、10mmスコリア約2%混在。
2 黒色粘土	(109R1/3)	陥へん。	ややあり。	3~4mmの2コリア (109R4/6細胞) 各3%含む。
3 黒褐色粘土	(109R2/2)	普通。	ややあり。	2~8mmのスコリア (109R4/6細胞) 約2%含む。
4 黒色粘土	(109R1/7)	普通。	ややあり。	褐色粘土質 (109S3/3) が現れ (30~40mm) 約25%混在。
5 黒色粘土	(109R1/7)	普通。	ややあり。	1~2mmのスコリア (7.5mm/46細胞) 各1%含む。

e-e' f-f'

		しまり	起伏	その他
1 黒色粘土質	(109R2/2)	陥へん。	ほとんどない。	3~50mmの角礁 (80%) と10~60mmの円礁 (20%) を多量に含む。
2 黒褐色粘土質	(109R4/4)	陥へん。	ほとんどない。	10~30mmの2コリア (109R4/6細胞) を2%含む。
3 黒色粘土質	(109R2/2)	やや陥へん。	ややあり。	2~3mmのスコリア (7.5mm/46細胞) 2%含む。
4 黒色粘土質	(7.5mm/7)	普通。	ややあり。	7~15mmのスコリア (7.5mm/46細胞) 約1%含む。
5 黒色粘土質	(109R1/7)	普通。	ややあり。	10~20mmの褐色粘土質 (109R3/3) の塊状 (40mm) が混在。
6 黒色粘土質	(109R1/7)	普通。	ややあり。	1~2mmのスコリア (109R4/6細胞) 約2%含む。
7 暗褐色粘土質 (70%)	(109R3/3)	やや陥へん。	ややあり。	2~5mmのスコリア (109R4/6細胞) 30%が塊状に混在。
8 黒色粘土質 (30%)	(109R1/7)	陥へん。	ややあり。	2~5mmのスコリア (109R4/6細胞) 約1%含む。
9 黒褐色粘土質	(109R2/2)	陥へん。	ややあり。	褐色粘土質 (109R3/3) が現れ (40mm) が塊状 (40mm) が混在。
10 黒褐色粘土質	(109R2/2)	陥へん。	あり。	10mmの褐色粘土質 (109R2/2) が20%含む。
11 黒色粘土質 (75%)	(109R2/2)	陥へん。	ややあり。	褐色粘土質 (109R2/2) が5~10mmの塊状で3%含む。
12 黒褐色粘土質 (25%)	(109R2/2)	陥へん。	あり。	2種類の褐色粘土質 (109R2/2と109R2/2) が混在。褐色粘土質 (109R4/4) が10%含む。
13 黒褐色粘土質 (60%)	(109R2/2)	陥へん。	ややあり。	5~7mmの褐色粘土質 (109R2/1) が塊状5%含む。さらに暗褐色 (109R3/4) がマーブル的に25%混在。少やばささした感じ。
14 黒褐色粘土質	(109R2/3)	陥へん。	ややあり。	

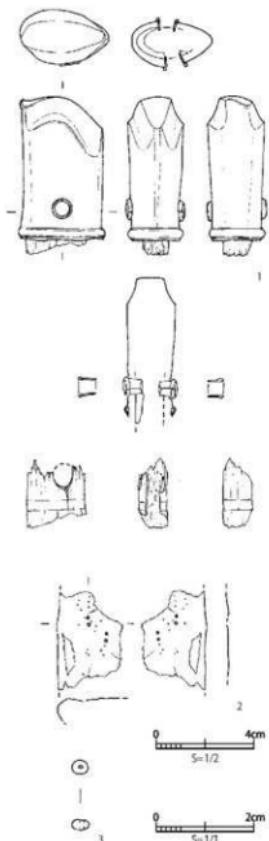
b-a'-b'-b'': 土層注記は、1・2トレンチセクション内のa-a', b-b'の土層注記と共通。

第121図 1トレンチ 花川戸第4号墳 石室平面図・セクション図 (5=1/50) ②

墓壙 墓壙と考えられる落ち込みは、1トレンチ北東隅、1トレンチ南西隅、2トレンチ西端の3箇所で確認されている。それらを繋ぎ合わせると、幅4.2~4.9mに復原され、深さは80cmを測る。墓壙内の裏込め土は、複数種類の異なる土を混在することで構成されている。床面と遺物出土状況 床面は4面認められる。第1次床面(初葬)は、5cm程度の川原石を地面上に直接設置している。その後、第2次床面設置時に砂を敷き、さらに10cm程度の川原石を敷く事で床面としている。第1次床面と第2次床面の間には、堆積がほとんど存在しないことから大きな時間差はなかったものと推測される。第3次床面は、20×15cm程度の扁平な川原石を使用している。第4次床面では使用される石の大きさは似ているものの、扁平な石が少なく、形も描っていない。銀装主頭大刀の把頭はこの第4次床面から出土している。しかし、把頭のみの出土であり初葬時のものが片付けなどに伴い副葬時の位置を留めず出土した可能性を考えられる。

## 第3項 出土遺物

主頭大刀把頭（第122図1） 石室内第4次床面から出土した。全体が銀板を用いた主頭大刀把頭で、把頭下端の内面には木質が一部遺存する。頂部がやや張り出し、腹側に傾斜するいわゆる「へ」字形を呈する。頂部の腹側と背側の高低差が大きいため、張り出しが背側に大きく寄るような印象を与える。頂部上縁は腹側の際で一旦傾斜を変えてやや上向きとなった後、側辺部に移行する。頂部上縁は平坦面をなしており、両側に明確な後線が認められる。この後線は、頂部の板状の銀板と袋状に



第122図 花川戸第4号墳 出土遺物

整形した把頭部分との接合部である。頂上の銀板の内側には、円形の窪みを観察することが出来るが、これは銀板を薄く叩き延ばす際の棒状の當て具の痕跡の可能性が考えられる（注1）。袋状に整形した銀板は全周しているが、肉眼観察では継ぎ目がまったく分からない。

把頭端の資金具が柄頭と一体のものとして作られており、端部にふくらみを持つ。このふくらみの内側には銅芯がはめ込まれ、銀板で包まれている。また、把頭内には木質片が遺存しており、樹種同定の結果、アカガシ亜属であることが明らかとなっている（注2）。

把頭の大きさは、全長約5.9cm、最大幅3.6cmを測る。断面は腹側がやや尖る楕円形を呈する。鶏目金具は佩表、佩裏ともに認められ銀製である。外径約0.8cm、長さ約0.6cmを測る。

さて、主頭大刀把頭の製作時期について考えていくこととしたいが、筆者自身が偏年観を持ち合わせているわけではない。そのため、静岡県沼津市（旧戸田村）井田松江18号墳出土の金銅装主頭大刀の分析を通じて県内の状況を整理した西澤正晴（2000）や全国的な視点から装飾付大刀の系譜を整理した菊地芳朗（2010）や大谷晃二（1999・2012）の研究に導かれながら考えていくことをしたい。

主頭大刀の製作時期については、西澤（2000）が「6世紀末葉を上限とし、7世紀中葉までの範囲」としたのに対して（p.79）、菊地は「一部にTK43型式をふくみつつほとんどがTK209型式からTK217型式を中心とするごく短い幅におさま」と考えた（p.86）。大谷は6・7世紀の金銀装大刀の展開を5つの段階に整理したが、銀装主頭大刀は、百済・伏岩里3号墳例を別にして、Ⅲ段階からⅣ段階（TK43型式からTK209前半・飛鳥I）までの製作とし、V段階には各種の金銀装大刀の生産は終了していると考えた。

以上のように主頭大刀の生産は、かなり限定された時間幅の中で製作したことが伺え、銀装である点や前述の把頭端の資金具が別作りのものから一体作りになるという変遷案（大谷1999）など考慮すれば、現状ではTK209型式の製作と位置づけてよさそうである。

銀板（第122図2） 石室付近の土を篠かけした結果、銀板片と玉1個が発見された。銀板は把頭よりもやや薄く、端部がやや丸まって発見された。二対の穴が二箇所に確認されるが、刀装具のどの部分なのかは明らかでは

ない。また、出土状態が明らかでないため、後世の混入の可能性も否定できない。

玉（第122図3） 径2.8mm、厚み2.2mmのガラス小玉1点が箇かけの結果、発見された。石室周辺の土をすべて箇かけして1点しか出土しないことから後世の混入の可能性が高いが一応、報告しておく。

## 第4節 壇穴建物跡・土坑・ピット

### 第1項 トレント基本土層説明

本調査地点における基本土層は第116図の土層の通りである。土地全体が削平を受けており、自然堆積層がすべて残存するわけではない。特に古墳時代中期以降の自然堆積層はほとんど残存しない。古墳時代以降と考えられる掘り込みはI層において確認される。また、栗色土層に対応するものと考えられるⅢ層は上下2層に細分した。これは、縄文時代の壇穴建物跡がⅢ層の中位で確認されることによる。

### 第2項 構造

1トレントでは、横穴式石室を認識するとともに、縄文時代の壇穴建物跡（SB1）を検出した。そのため、2次調査では建物建築が予定されている箇所について、古墳の墓壙・周溝などの残存状況の把握とともに、縄文時代の集落の広がりについて確認することを目的としてトレント6本を設定し掘削を行った。その結果、いずれ

のトレントからも縄文時代の遺構が複数検出された上に、古墳時代後期以降、古墳築造までの時期と考えられる遺構（SB6など）も存在することが明らかとなった。詳細は第7表に譲ることとする。

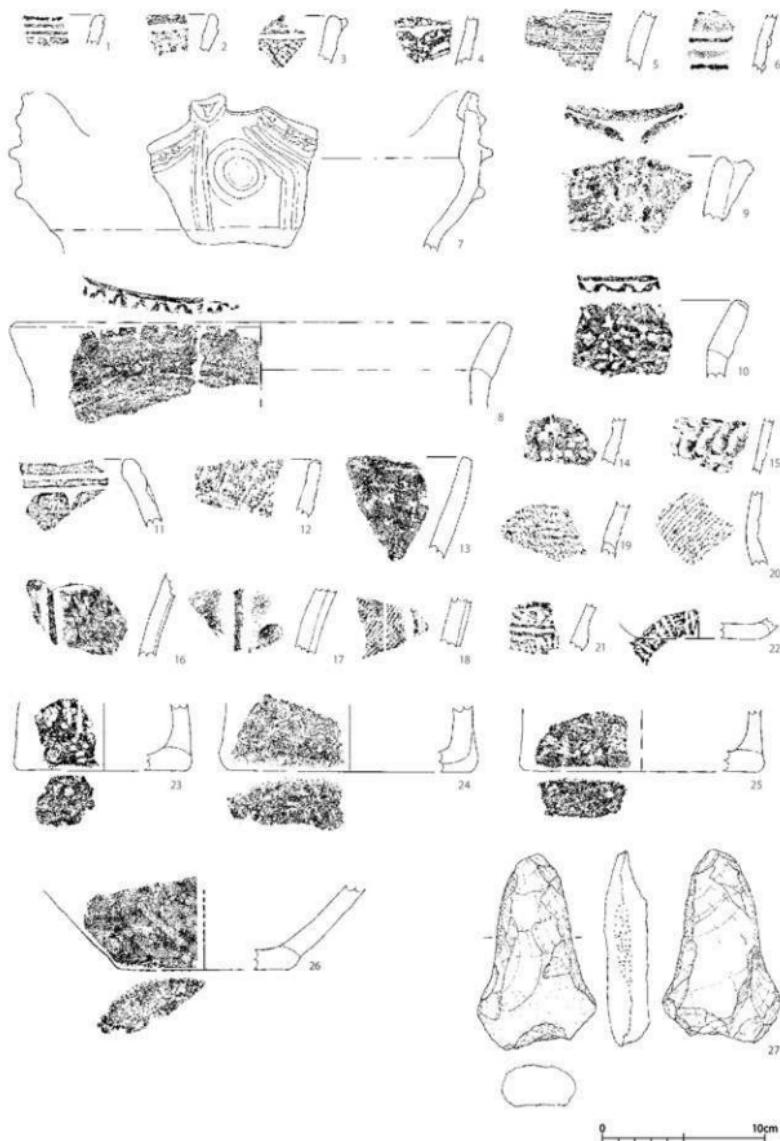
### 第3項 遺物

縄文時代前期後半の諸磯b式、中期前葉の五領ヶ台式の土器がまとまって出土している。諸磯b式（第123図1・5）Iは口縁部の破片で口唇部直下に、半截竹管状工具により沈線が施される。5も1同様、半截竹管状工具による沈線が認められる。なお、2～4、6、8も諸磯b式もしくは前期の土器と考えられるが確定的でない。6は、無文だが二条の隆線が特徴的である。8は西日本を中心に分布する大歳山式の可能性も考えられよう。

五領ヶ台式（第123図7・9～21）7の口縁部には三角形の突起が付き、その下にドーナツ状の粘土帯が貼り

第7表 富士岡1古墳群第12地区 壇穴建物跡・溝状遺構 詳細一覧

	時期	検出 土層	遺物	備考
SB 1	1Tr 縄文			
SB 2	4Tr 縄文	黒褐色粘質土 (10YR2/3) 大沢 Sc9%、大潤 Scなし、白色系 Sc1%		
SB 3	4Tr 縄文 （五領ヶ台2式）	青層 黒褐色粘質土 (10YR2/3) 大沢 Sc9%、大潤 Scなし。	第123図4、8～13、 16～18、20、25、26	サブトレにて検出面から20cm程度 削削、床面と認証する。
SB 4	3Tr 縄文 （五領ヶ台2式）	黒褐色粘質土 (10YR2/3) 大沢 Sc9%、大潤 Scなし。	第123図2、7、23	上面は大規模に削平。サブトレにて 10cm程度の覆土確認。
SB 5	7Tr 縄文	黒褐色粘質土 (10YR2/2) 大沢 Sc9%、大潤 Scなし、白色 Sc7%を1%。	第123図22	黒耀石2点 (R0071, 0072) 出土
SB 6	5Tr 古墳時代後期～Ⅱ層	黒褐色粘質土 (10YR2/2) 大沢 Sc9%、大潤 Sc一部にあり。		唯一、大潤 Scを含む壇穴建物跡。 覆土は10～14cm程度のみ。
SB 7	4Tr 縄文	Ⅲ下層 黒褐色粘質土 (10YR2/2) 大沢 Sc9%、大潤 Scなし。炭化材1～2mmを1%以下。		S B 8に切られるか、プランのみで は不明。
SB 8	4Tr 縄文	黒褐色粘質土 (10YR2/2) 大沢 Sc9%、大潤 Scなし。炭化材2～3mmを1%以下。		トレント西端で検出。 北側部分のみ検出のため、建物跡と ならない可能性あり。
SB 9	4Tr 縄文	黒褐色粘質土 (10YR2/3) 大沢 Sc9%、大潤 Scなし。		覆土が判別しないが土器が出土し たため、追削とした。
SB 10	6Tr 縄文	黒褐色粘質土 (10YR2/2) 大潤 Scなし。		遺物はないが、プランから建物跡と した。
SD 1	6Tr 古墳時代後期～Ⅰ層	黒褐色粘質土 (10YR2/2) 大沢 Scなし、大潤 Sc5% (径7～15mm)		古墳の周溝の可能性もあるが直線的 なため、追削とした。
SD 2	6Tr 古墳時代前葉？	黒褐色粘質土 (10YRL7/1) 大沢 Sc7%、大潤 Sc1%		S D 1と直交するが覆土が異なる。 方形周溝の可能性あり。



第123図 富士岡1古墳群第12地区 出土遺物

第8表 富士岡1古墳群第12地区 出土遺物（縄文土器・石器）観察表

付けられ、周囲には継ぎの沈線が施される。また、円形印刻文が施されるもの（10・14）や細い棒状工具により刻みがつけられたもの（12）などが存在する。

石器（第123図27） 打製石斧である。原礫面を持つ剥片を素材とする。形態は刃部に向かって両側面がいの字状に広がる。加工は表裏面とも側縁部を一周するように広範囲に施されている。刃部への加工は表面に原縁面を残し、裏面に入念な加工が加えられている。

辨別	回版	報告番号	トレンチ	遺構名	層位	種別	時期
第123回	PL.11	1	1Tr	床面		縄文土器	諸説b
第123回	PL.11	2	3Tr	SB4	Ⅲ層	縄文土器	前期
第123回	PL.11	3	7Tr		Ⅲ層	縄文土器	前期
第123回	PL.11	4	4Tr	SB3	覆土	縄文土器	前期
第123回	PL.11	5	4Tr		Ⅲ層	縄文土器	諸説b
第123回	PL.11	6	1Tr		古墳造成土	縄文土器	諸説?
第123回	PL.11	7	3Tr	SB4		縄文土器	第五台2
第123回	PL.11	8	4Tr	SB3		縄文土器	前期
第123回	PL.11	9	4Tr	SB3		縄文土器	五箇ヶ台
第123回	PL.11	10	4Tr	SB3		縄文土器	五箇ヶ台
第123回	PL.11	11	4Tr	SB3	覆土	縄文土器	第五台2
第123回	PL.11	12	4Tr	SB3		縄文土器	五箇ヶ台
第123回	PL.11	13	4Tr	SB3		縄文土器	五箇ヶ台
第123回	PL.11	14	3Tr		Ⅲ層	縄文土器	五箇ヶ台
第123回	PL.11	15	4Tr	SK11		縄文土器	五箇ヶ台
第123回	PL.11	16	4Tr	SB3		縄文土器	五箇ヶ台2
第123回	PL.11	17	4Tr	SB3		縄文土器	五箇ヶ台2
第123回	PL.11	18	4Tr	SB3		縄文土器	五箇ヶ台2
第123回	PL.11	19	4Tr		Ⅲ層	縄文土器	五箇ヶ台
第123回	PL.11	20	4Tr	SB3		縄文土器	五箇ヶ台
第123回	PL.11	21	4Tr	SK11		縄文土器	五箇ヶ台
第123回	PL.11	22	7Tr	SB5		縄文土器	底部
第123回	PL.11	23	3Tr	SB4		縄文土器	底部
第123回	PL.11	24	1Tr		包含層（床面直下）	縄文土器	底部
第123回	PL.11	25	4Tr	SB3	覆土	縄文土器	底部
第123回	PL.11	26	4Tr	SB3		縄文土器	底部
第123回	PL.11	27	1Tr		包含層	打製石斧	

## 第5節 まとめ

古墳の時期 調査における最大の成果は、当然、未発見の古墳を新たに発見したことにある。しかも、銀装主頭大刀の把頭が出土するという幸運にも恵まれた。今回の調査では石室に4面の床面が認められたが、TK209型式期と考えられる主頭大刀は第4面から出土している。しかし、前述の通り、主頭大刀の把頭が最終埋葬に伴うものとは考えられない。それ以上の遺物がなく、古墳築造時期はいつと考えればいいのかは明らかではないが、仮に把頭が初葬時の遺物と考えることが出来れば、TK209型式期の築造と考えることも出来よう。

墓域景観 前述の通り、花川戸第4号墳は、「丘陵斜面部」、傾斜の緩やかになる「緩斜面部」、緩斜面部が東側の赤瀬川に向かってさらに低くなり、赤瀬川東岸を望むことの出来る「河岸段丘部」の3つのまとまりのうち、「河岸段丘部」に位置している。古墳群内の他の古墳同様、南東方向に開口し、あたかも赤瀬川の対岸（東岸）を意識したかのように分布している。ここで注目されるのが、第4号墳の開口部全面に存在したと想定されている「古墳造成土」の存在である。一度、地山を掘削し、

その後、大瀬スコリアで埋め戻すというこの造作は、開口部全面にテラス状の広場のような空間を作り出すためのものではなかったかと考えている。そうなると、古墳群のうち、最も、赤瀬川沿いに位置するということからも古墳群の中でも比較的、古い段階の盟主墳的なものと位置づけることも出来よう。

富士岡1古墳群では、弥生時代から古墳時代の方形周溝墓、古墳時代中期後半?と考えられる円墳、横穴式石室墳が存在する。近年発見された、中期後半以降と考えられる古墳と横穴式石室墳が時代的に連続して捉えることが出来るのかは明らかでない。上記のような墓域として機能していたと思えば、その断絶期には集落も営まれている。墓域と生活域を繰り返しながら、この地がどのような景観であったのか、今回の調査では、それを考える上でも貴重な成果を提供することが出来た。

(注1) 鈴木一有氏の御教示による。

(注2) 東北大植物園鈴木三男氏のご教示による。

#### 参考文献

- 大谷晃二 1999 「上塙治塚山古墳出土大刀の時期と系譜」「上塙治塚山古墳の研究」鳥根県古代文化センター
- 大谷晃二 2012 「金鉢塚古墳の金銀装飾大刀はどこでつくられたか?」「金鉢塚古墳展」—懸る東国古墳文化の至宝—(木更津市郷土博物館企画のすず特別企画展)
- 菊地芳朗 2010 「古墳時代史の展開と東北社会」大阪大学出版会
- 静岡県埋蔵文化財センター 2013 「富士岡1古墳群他」静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第37集
- 西澤正晴 2000 「井田松江18号墳出土の金銅装主頭大刀について」「井田松江古墳群」戸田村教育委員会
- 富士市教育委員会 1995 「花川戸第1号墳」富士市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
- 富士市教育委員会 2003 「花川戸第2・3号墳発掘調査報告書」
- 戸田村教育委員会 2000 「井田松江古墳群」—調査整備事業報告書—

#### ※ 調査履歴一覧の報告書（発行はすべて富士市教育委員会）

- 1 「富士市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 花川戸第1号墳」(1995)
- 2 「下前原遺跡、富士岡F、第22号墳」(1998)
- 3 「平成11・12年度 富士市内道路発掘調査報告書」(2012)
- 4 「花川戸第2・3号墳発掘調査報告書」(2003)
- 5 「平成15・19年度 富士市内道路発掘調査報告書」(2009)
- 6 「平成16年度 富士市内道路発掘調査報告書」(2006)
- 7 「平成14・20年度 富士市内道路発掘調査報告書」(2010)

第4章 柏原遺跡の調査

## 第1節 遺跡の概要

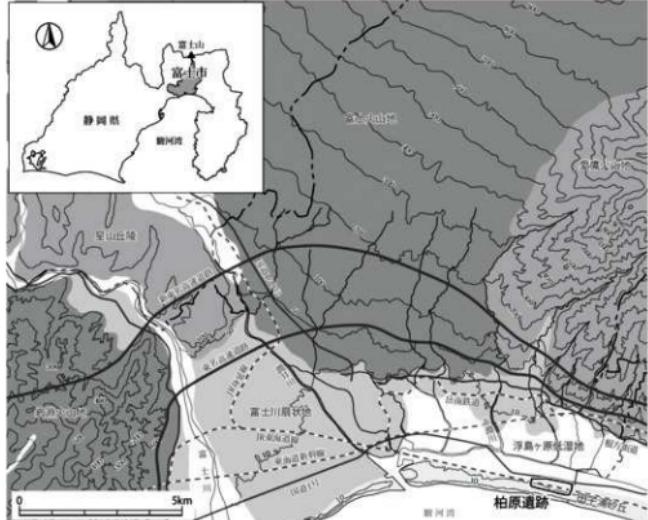
柏原遺跡は、富士市東端に位置し駿河湾と浮ヶ原によって挟まれた田子浦砂丘上に立地する集落遺跡である。柏原遺跡の範囲内には、5世紀から6世紀頃に築造されたとみられる庚申塚古墳（双方中方墳、全長約40m）と山の神古墳（前方後円墳、全長41.5m）が立地しているほか、同じ砂丘上の600mほど西側には、古墳時代から奈良・平安時代にわたる集落跡である三新田遺跡が立地する。かわって沼津市側となる東御の砂丘上には、近年になって古墳時代前期まで遡上する可能性が浮上した神明塚古墳のほか、東畠毛遺跡、鳥沢遺跡といった古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落遺跡が立地している。

また遺跡の南端には、近世東海道（旧国道1号線、現在の県道380号線）が東西方向に走っており、当該地付近には原宿一吉原宿の間宿・柏原が設置されている。「三

代実録》貞觀 6 年(864)12 月 10 日条に記載され、これ以後廢されたとされる「柏原駅」が管まれた場所とも考えられていることから、陸海の別のあった可能性は想定すべきものの、古来より人々の往来が豊かな土地環境であったといえる。

柏原遺跡については、これまでに弥生時代後期から奈良・平安時代にかけての遺物が採集されていることから、三新田遺跡と並び立つ集落跡であると推定されてきたところであるが（志村 1986）、2000 年には第 3 地区の確認調査で奈良～平安時代と考えられる堅穴建物跡が検出され（藤田・若林 2012）、今回報告する第 4 地区の発掘調査においても堅穴建物跡や掘立柱建物跡、溝などの遺構が複数検出されており、近年になって漸く集落の一端が見えてきた状況にある（佐藤・若林 2010、本章第 2 節）。また、第 6 地区の調査においては建物跡等の発見は少な

また、第6地区の調査においては建物跡寺の発見は少な

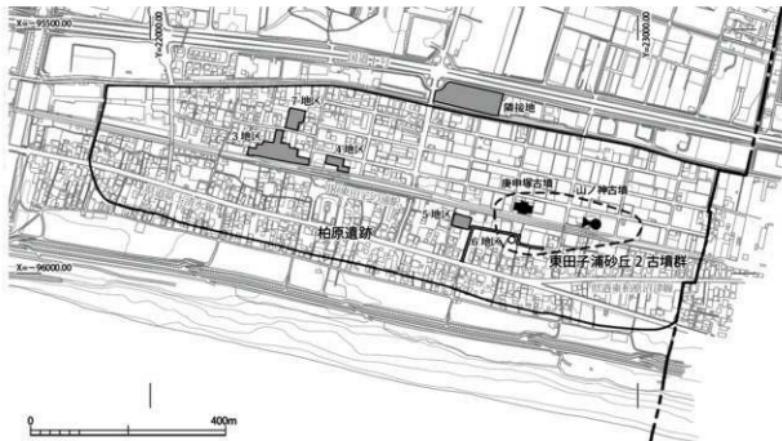


第124図 柏原遺跡 位置図 (S=1/150,000)

かったものの、古墳時代における水害や富士山の噴火といった自然災害の痕跡が認められている（藤村 2012）。  
 （藤村・小島）

## 参考文献

- 志村 博 1986 「富士市の埋蔵文化財（道路編）」富士市教育委員会  
 藤村 雄 2012 「富士市・柏原道路（第6地区）の発掘成果について  
 て一天災に悩まされ続けた、砂丘上の集落遺跡の調査～」『静岡県考古学通信』No.57 静岡県考古学会  
 藤村 雄・若林美希 2012 「富士市内道路発掘調査報告書一平成11・12年度～」富士市教育委員会  
 佐藤祐樹・若林美希 2010 「平成14・20年度 富士市内道路発掘調査報告書」富士市教育委員会



第125図 柏原道路 調査履歴図 (S=10,000)

第9表 柏原道路 調査履歴

調査年度	地区・次	調査区分	調査期間	所在地	調査目的	可変 (m)	固定 (m)	時代	調査結果概要		文献
									遺構	遺物	
平成12年	3地区	試験	H12.12.18 ~ H12.27	西柏原新田113外	区间整備	2719	75	古墳・平安	聖火建物跡	土師器・瓦器・陶器	※4
平成14年	4地区 1次	試験	H14.10.28 ~ H15.1.30	中野原新田164-1 外	夷阿住宅建設	932	135	魚食・平安	聖火建物跡・板状遺構・ビット・土坑	土師器・瓦器	※2
平成14年	4地区 2次 本調査	試験	H14.11.12 ~ H15.1.22	中野原新田164-1 外	夷阿住宅建設	932	224	魚食・平安	聖火建物跡・板状遺構・溝状遺構・ビット	土師器・瓦器・灰釉器	※2
平成17年	3地区	試験	H18.3.15 ~ H18.3.30	中野原新田32	住宅地造成	309	113	なし	聖火建物跡	土師器片・灰釉器片	※1
平成18年	調査地	試験	H18.8.10	中里 2545-6号	雨程施設建設	5.107	18	なし	なし	なし	※1
平成21年	6地区 1次	試験	H21.11.9 ~ H21.11.10	中野原新田161 外	道路改良	373	26	古墳・平安	土坑・溝	土師器・瓦器・陶器	※3
平成22年	6地区 2次	試験	H22.6.11 ~ H22.6.17	東柏原新田 母光	道路改良	440	26	なし	なし	なし	※4
平成22年	6地区 3次	試験	H22.11.25 ~ H22.12.29	外	道路改良	306	28	古墳・律令制	聖火建物跡?	土師器・瓦器・陶器	※5
平成22年	6地区 4次	試験	H22.12.25	中野原新田198-1 外	道路改良	100	8	古墳・律令制	なし	土師器	※5
平成23年	6地区 5次 本調査	試験	H23.7.11 ~ H23.9.9	中野原新田198-1 外	道路改良	475	古墳・律令制	聖火建物跡・溝・火山水器跡	土師器・瓦器・陶器	土師器・瓦器・陶器	※5
平成22年	7地区	試験	H22.11.2	中野原新田155 外	電気分離	1349	46	古墳・律令制	聖火建物跡	土師器・瓦器	※5

\* 1地区・2地区については、富士市河川課による河川等改修に伴う工事立会いの範囲および、富士市農政課による農地整備等に伴う工事立会いの範囲をそれぞれ括じて1地区・2地区としているため、ここでは省略する。

- \* 報告書1 「平成17・18年度 富士市内道路発掘調査報告書」(2008)  
 報告書2 「平成14・20年度 富士市内道路発掘調査報告書」(2010)  
 報告書3 「平成21年度 富士市内道路発掘調査報告書」(2011)  
 報告書4 「富士市内道路発掘調査報告書 - 平成11・12年度～」(2012)

## 第2節 第4地区の調査成果

### 第1項 調査の経緯と概要

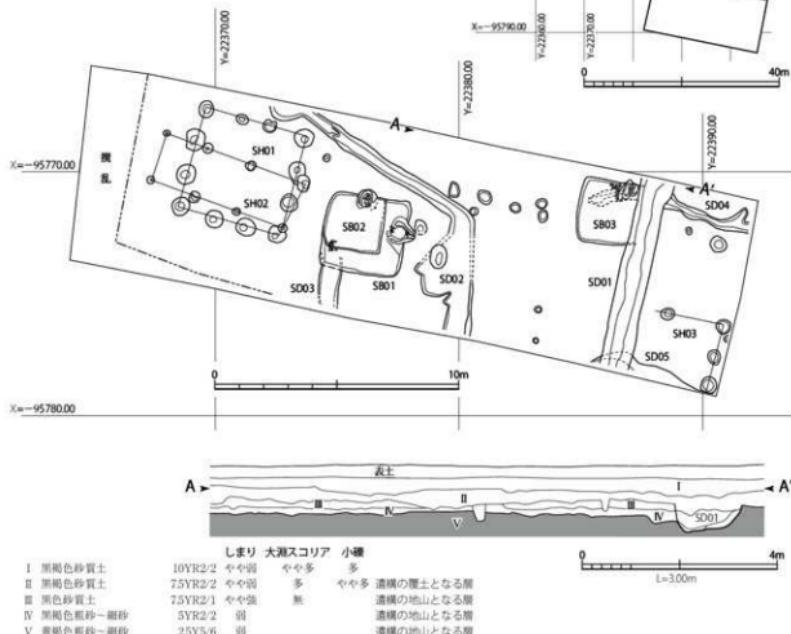
調査の経緯 平成14年、事業者は富士市中柏原新田字宮下164-1(932m<sup>2</sup>)において共同住宅新築工事を計画した。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「柏原遺跡」の範囲内に位置するため、平成14年5月1日、事業者より富士市教育委員会へ「埋蔵文化財試掘確認調査依頼書」および「免掘調査承諾書」が提出された。

これを受け、富士市教育委員会により工事着手前の試掘・確認調査が実施されることとなった。

試掘・確認調査 試掘・確認調査（1次調査）は、平成14年10月28日から10月31日にかけておこなった。

調査対象地に東西方向に2本のトレンチ（1348m<sup>2</sup>）



第126図 柏原遺跡第4地区 調査位置図 (S=1/5,000)

を設定し、重機による表土掘削後、遺構・遺物の残存状況の把握につとめた。

その結果、竪穴建物跡・溝状造構・柱穴・土坑が検出され、土師器片・須恵器片が出土した（富士市教育委員会 2010）。

試掘・確認調査の結果（平成 14 年 11 月 7 日、富教文第 249 号）を受けて、静岡県教育委員会より、建物建設範囲については埋蔵文化財の現状保存が難しいため本発掘調査をおこない、保護が見込める駐車場造成範囲については工事立会をおこなうよう指導（平成 14 年 11 月 18 日、教文第 3086 号）があり、事業者にこれを伝達（平成 14 年 11 月 27 日、富教文第 271 号）した。

**本発掘調査** 本発掘調査（2 次調査）は、建物建設範囲（224m<sup>2</sup>）を調査範囲とし、平成 14 年 11 月 13 日から 12 月 5 日にかけておこなった。

その結果、奈良・平安時代の竪穴建物跡 3 軒（SB01～03）、掘立柱建物跡 3 栋（SH01～03）、溝状造構 5 条（SD01～05）、ピット 15 基を検出し、当該期の遺物（土師器・須恵器・金属製品）が出土した。各遺構は、基本土層Ⅲ層以下を掘り込んで営まれており、主として基本土層Ⅲ層が覆土となるようである。

また、遺構は検出されなかったものの、基本土層Ⅲ層内から繩文土器片が出土した。

## 第2項 遺構と遺物

### 竪穴建物跡

#### SB01

位置：調査区のはば中央に位置する。

重複関係：（古）SB01 → SB02・SD03（新）

残存状況：北西角から北壁・西壁にかけて SB02 に大きく切られ、南壁の一部も SD03 に切られているが、カマドが位置する東壁は良好に残存し、規模や平面形を推定することは可能な状況であった。規模は、主軸幅 3.36m、直交幅 3.20m、検出面からの深さ 20～30cm を測り、平面形は方形を呈する。

主軸方位：N - 101° - E

覆土：大淵スコリアを多く含む黒褐色砂質土が堆積していた。

壁溝：検出されなかった。

柱穴：検出されなかった。

その他の遺構：検出されなかった。

床：掘方に、地山の黄褐色砂が混ざる黒褐色土を 10cm ほどの厚さで入れて床面としていたが、掘方埋土のしまりは弱く、硬化面は確認できなかった。

燃焼施設：カマドが東壁のやや北寄りに位置する。掘方に褐色砂を入れ、その上に黒褐色土の混ざる粘土を用いて補を構築している。芯や支脚となるような石材は出土しなかった。残存部で、煙道から燃焼室までの全長 116 cm、両袖の内幅 48cm、外幅 136cm を測る。

出土遺物：10 点図示した（第 134 図 1～10）。

1 の須恵器壺蓋は天井部を回転ヘラケズリし、端部はわずかに突出させている。2 は須恵器壺の肩部と考えた。強い棱をもって屈曲している。ともに遠江編年の V 期にあたると考えられる。3・4 は土師器甲斐型壺である。体部内面に放射状ヘラミガキが、外面下半にヘラケズリ調整が認められ、8 世紀後半から 9 世紀のものと考えられる。5 は須恵器壺、6 は土師器壺、7・8 は土師器皿東型鍋の口縁部である。9 の土師器鍋はカマド焚口付近から出土したものである。口縁は肥厚せずやや外へ聞く。10 は土師器壺の口縁部である。内面にヘラによるナデ調整が認められる。

時期：本建物跡の時期は、出土遺物から、8 世紀後半から 9 世紀と考える。

#### SB02

位置：調査区のはば中央に位置する。

重複関係：（古）SB01 → SB02（新）

残存状況：東壁が一部搅乱を受けているが、おおむね良好に残存していた。

主軸方位：N - 10.2° - E

覆土：大淵スコリアを含む暗褐色砂質土・黒褐色砂質土が堆積していた。

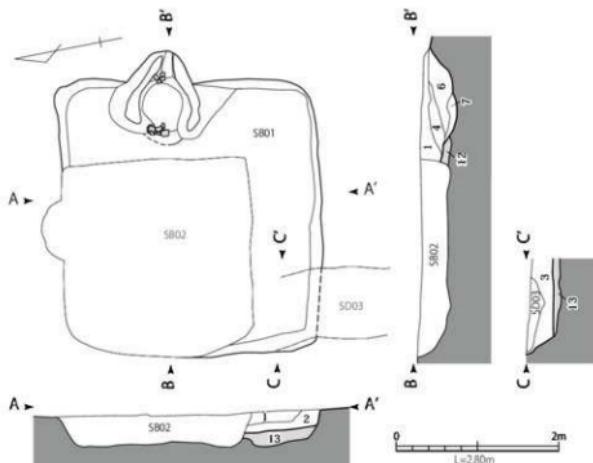
壁溝：検出されなかった。

柱穴：検出されなかった。

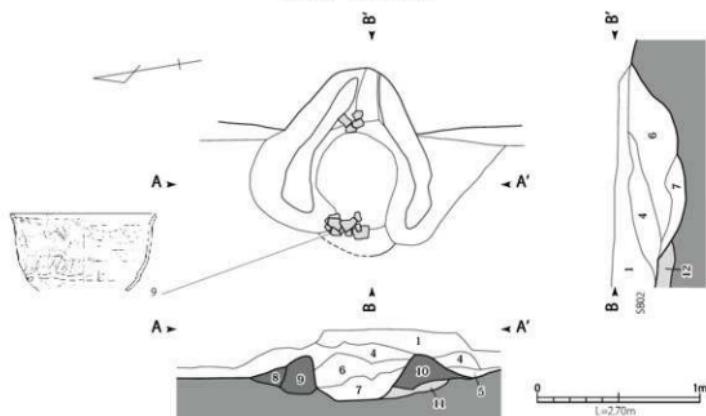
その他の遺構：検出されなかった。

床：掘方に、地山の黄褐色砂が混ざる暗褐色砂質土を 5～15cm ほどの厚さで入れて床面としていたが、掘方埋土のしまりは弱く、硬化面は確認できなかった。南西角に河原（海）石とみられる格円形の礫が十数点まとまって出土したが、その性格及び本建物跡との関連は不明である。

燃焼施設：カマドが北壁のやや東寄りに位置する。掘方

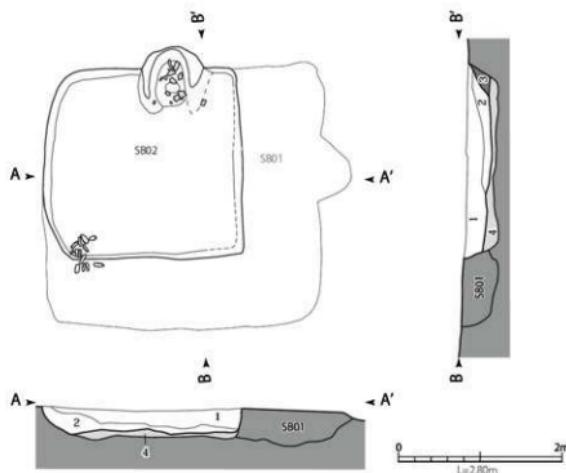


第128図 SB01 (S=1/60)



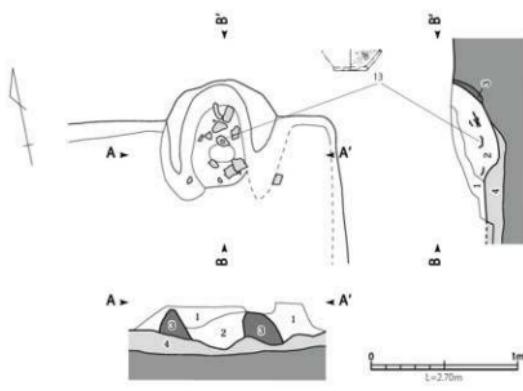
	しまり	粘性	大洞	黄褐色砂、小礫	
1 黒褐色砂質土	10YR2/3	やや強	やや多	SB01 蓿土	
2 黒褐色砂質土	10YR2/2	ごく強	多	SB01 蓿土	
3 黒褐色砂質土	10YR2/2	やや強	やや多	SB01 蓿土	
4 黒褐色土混褐色粘土	75YR4/4	やや強	少	SB01 カマド覆土	
5 黒褐色砂質土	10YR2/2	弱	微	SB01 蓿土	
6 褐色粘土	75YR4/4	強	強	SB01 カマドの崩れ	
7 褐色粘土	75YR4/4	やや強	やや多	SB01 カマドの崩れ	
8 黑褐色土混褐色粘土	75YR4/4	やや弱	少	SB01 カマド油	
9 黑褐色土混褐色粘土	75YR3/4	やや強	少	SB01 カマド油	
10 黑褐色土混褐色粘土	75YR3/4	やや強	やや強	やや多	SB01 カマド油
11 褐色砂	75YR4/4	弱	微	SB01 カマド掘方堆土	
12 短褐赤色砂質土	75YR3/2	弱	ごく多	SB01 掘方堆土	

第129図 SB01 カマド (S=1/30)



		しまり	大潤	スコリア	粘土	黄褐色砂	小礫
1	暗褐色砂質土	75YR3/3	弱	やや多	極微	少	やや多
2	黒褐色砂質土	10YR2/2	やや強	少	少		SB02 覆土
3	黒褐色土混に赤褐色粘土	10YR3/2	やや強				SB02 カマド袖
4	暗褐色砂質土	75YR3/3	弱	少	多		SB02 盆方埋土

第130図 SB02 (S=1/60)



		しまり	大潤	スコリア	粘土	小礫
1	黒褐色砂質土	75YR3/2	やや強	やや多	やや多	やや多
2	燒土混周褐色粘土	75YR4/3	強			SB02 カマドの崩れ
3	黒褐色土混に赤褐色粘土	10YR3/3	やや強			SB02 カマド横壁土
4	黒褐色砂質土	10YR2/2	やや弱	少		SB02 壁方埋土

第131図 SB02 カマド (S=1/30)

に黒褐色砂質土を入れ、その上に暗褐色粘土を用いて袖を構築している。芯や支脚となるような石材は出土しなかった。右袖は搅乱により一部欠損していたが、残存部で、煙道から袖先端までの全長82cm、両袖の内幅35cm、外幅推定84cmを測る。

出土遺物：3点図示した（第134図11～13）。いずれも土師器の壺である。口縁部から胴部が図示できた11・12は小型壺といえる大きさで、肩があまり張らず胴部最大径よりも口径が大きくなる形態で、内面・外面ともハケ目調整が施される。13は底部のみであるが、カマド燃焼室内からの出土である。底部外面に木葉痕が残る。時期：本建物跡の時期は、出土遺物および遺構の切り合い関係から8世紀後半から9世紀と考える。

#### SB01・SB02出土遺物

SB01とSB02は重複する部分が大きかったため、どちらに帰属するか決定しかねる遺物があった。それらを「SB01・SB02出土遺物」としてここで取り上げる。

図示したのは7点である（第134図14～20）。15は須恵器高環の脚部とみられ、外面は縱方向にヘラナテ調整が認められる。16は土師器甲斐型壺である。底部外面はヘラ切り、体部外面下半はヘラケズリ調整がされる。体部内面には放射状ヘラミガキが施され、体部とみこみ部の境にも横位のヘラミガキが巡るが、みこみ部と体部外面にはヘラミガキは認められない。底径は6.0cm、推定口径は11.4cmを測り、その比が1:2に近い。17は土師器壺の底部で外面に木葉痕が残る。18は駿東型壺の口縁部、19は駿東型壺の口縁部である。20の刀子は切先と茎尻を欠損するが、遺存状態は良好である。茎には木柄とみられる木質が残存しており、刀子の間に合わせて木柄も間間に作られている。X線観察により、間は両側で刃削・棟削とともに撫觸であることがわかった。茎部は茎尻に向かって細くなり、断面は刃部と同様の三角形を呈する。刃部は切先に向けて先細りし、全体にやや湾曲している。

#### SB03

位置：調査区の北東寄りに位置する。

重複関係：（古）SD03→SB03→SD01（新）

残存状況：東壁をSD01に切られるが、他はおおむね良好に残存していた。

主軸方位：N-10.5°-E

覆土：大淵スコリアを含む黒褐色砂質土が堆積していた。

壁溝：検出されなかった。

柱穴：検出されなかった。

その他の遺構：検出されなかった。

床：掘方に、地山の黄褐色砂が混ざる黒褐色砂質土を3～10cmほどの厚さで入れて床面としていたが、掘方埋土のしまりは弱く、硬化面は確認できなかった。

燃焼施設：カマドが北壁の中央付近に位置する。掘方に粘土が少量混ざる黒褐色砂質土を入れ、芯材となる石とにぶい褐色粘土を用いて袖を構築している。燃焼室の奥寄りには支脚石が残存していた。残存部で、煙道から左袖先端までの全長94cm、両袖の内幅推定28cm、外幅推定80cmを測る。

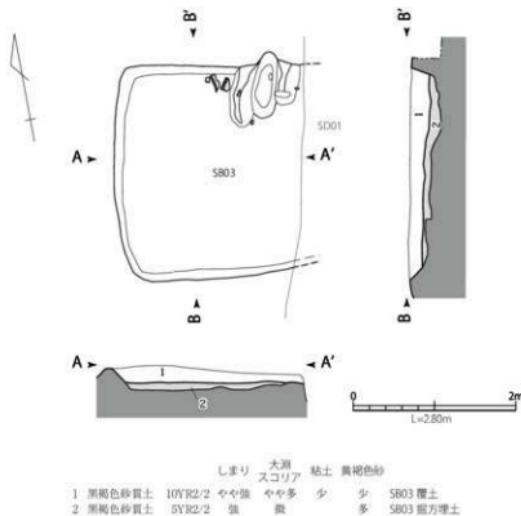
出土遺物：3点図示した（第134図21～23）。22は無高台の須恵器環身で、底部と体部の境は外面では丸みをもって整えられているが、内面では強く屈曲させている。23はカマド左袖近くから出土した、土師器駿東型壺である。口縁部の形状は、上部に面を意識しているようだが、丸みがあるため断面形はしづく形に近い。

時期：本建物跡の時期は、出土遺物から8世紀後半から9世紀と考える。

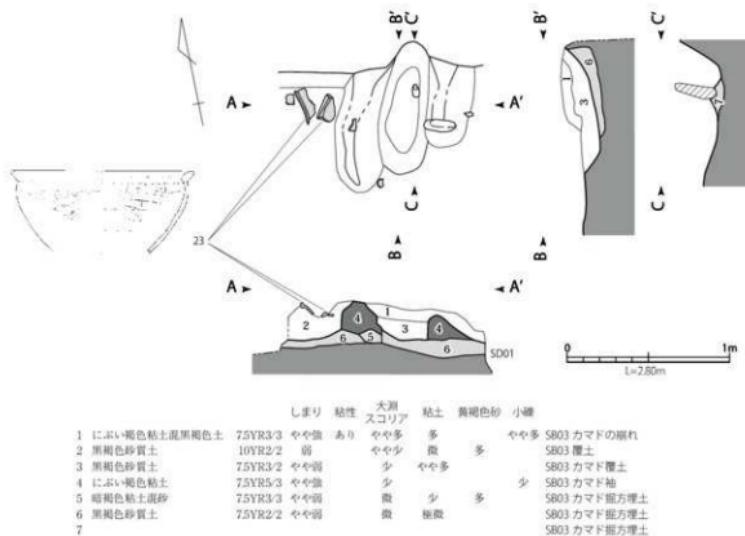
#### SB03・SD01出土遺物

SB03とSD01の両方にわたるトレンチから出土し、どちらに帰属するか決定しがたい遺物を、「SB03・SD01出土遺物」としてここで取り上げる。

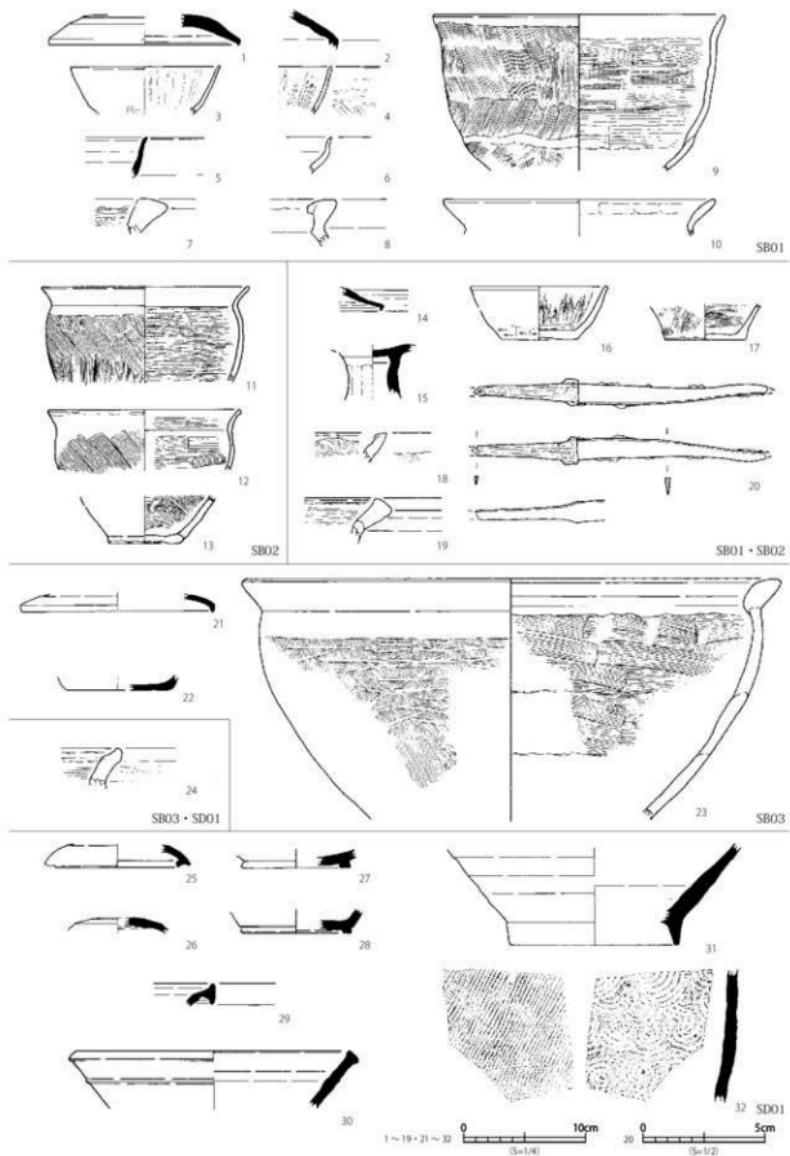
図示したのは、1点である（第134図24）。24は土師器壺の口縁部で、口縁端部は上方にやや突出し、面をもって内側に肥厚している。



第132図 S803 (S=1/60)



第133図 S803 カマド (S=1/30)



第134図 SB01・SB02・SB03・SD01出土遺物

## 据立柱建物跡

## SH01

位置：調査区の西寄りにSH02と重なって位置する。

重複関係：(古) SH01 → SH02 (新)

残存状況：南北三間×東西三間、12基の柱穴が検出された。一部の柱穴がSH02の柱穴に切られている。柱穴間は芯々で120～150cmほどを測り、全体の規模は南北4.80m、東西5.10mで、ほぼ正方形を呈する。検出面からの柱穴の深さは8～40cmである。

主軸方位：N - 15.5° - E

覆土：大瀬スコリアを含む黒褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

時期：覆土や位置関係から、8世紀後半～9世紀代のSB01に伴う建物であった可能性が高い。

## SH02

位置：調査区の西寄りにSH01と重なって位置する。

重複関係：(古) SH01 → SH02 (新)

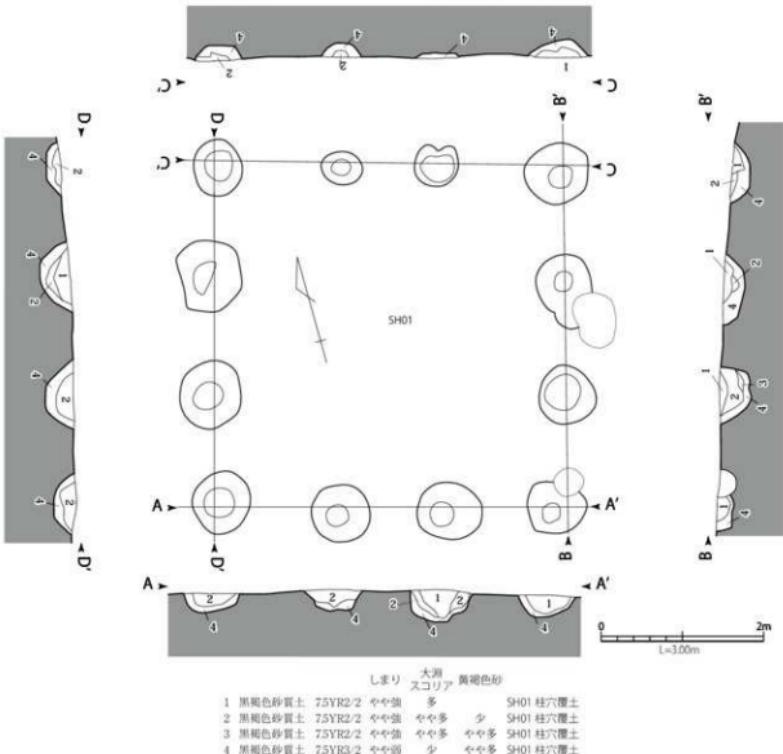
残存状況：南北一間×東西三間、8基の柱穴が検出された。柱穴間は芯々で、180～240cmほどを測り、全体の規模は南北2.50m、東西6.40mで、長方形を呈する。検出面からの柱穴の深さは5～25cmである。

主軸方位：N - 20° - E

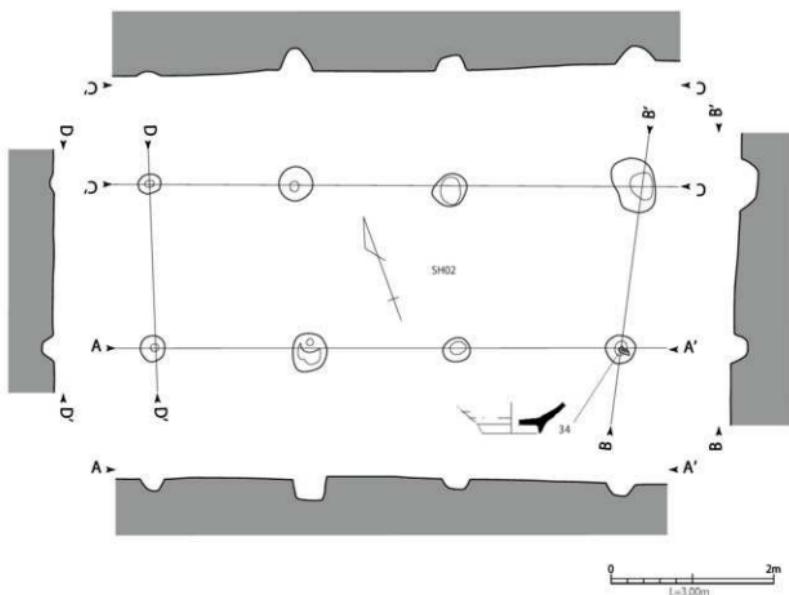
覆土：不明である。

出土遺物：南東角の柱穴から出土した須恵器壺の底部を図示した(第138図34)。外面はヘラケズリ調整され、断面三角形の高台がやや内傾してつく。

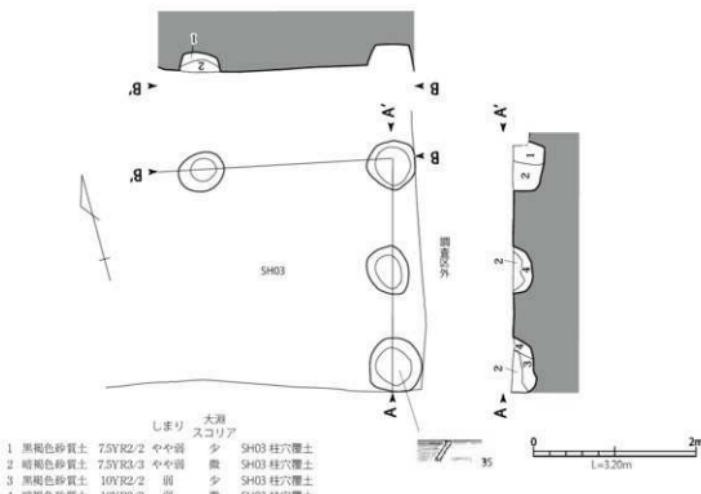
時期：位置関係から、8世紀後半～9世紀代のSB02に伴う建物であった可能性が高い。



第135図 SH01 (S=1/60)



第136図 SH02 (S=1/60)



第137図 SH03 (S=1/60)

## SH03

位置：調査区の南東隅に位置する。

重複関係：(古) SH03 → SB01 → SD05 (新)

残存状況：L字型に並ぶ4基の柱穴を検出し、孤立柱建物跡と判断した。南北に二間、東西に一間の配列で、東西の柱穴間は芯々で240cm、南北は120～135cmを測り、東西に比べ南北方向の柱穴が密に並ぶようである。西側および南側に柱穴が連続すると考えられるが、SD01・SD05により失われ、また調査区外に位置するため確認できなかった。

主軸方位：N = 15° - E

覆土：柱穴内には大潤スコリアを少量含む暗褐色砂質土、黒褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物：南東角の柱穴から出土した土師器壺の口縁部片を図示した（第138図35）。

時期：特定できない。

## 溝状遺構

## SD01

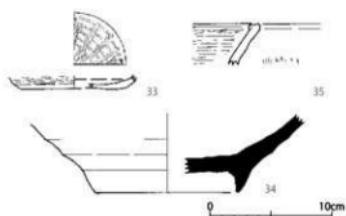
位置：調査区の東寄りに位置する。

重複関係：(古) SD04 → SB03 → SD01 → SD05 (新)

残存状況：検出された部分は良好に残存していた。深さ40～60cm、幅110～130cmほどを測り、南北方向に掘られている。

覆土：地山の黄褐色砂が混ざり大潤スコリアを含む黒褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物：須恵器8点を図示した（第134図25～32）。25は返りを有する环蓋で、返りは天井端部よりもやや下へ出る。天井部には自然釉がかかる。遠江編年のIV期後半～末葉と考える。26は环蓋の天井部である。摘みではなく、天井部は丁寧にヘラケズリされている。27・28は高台環の底部である。いずれも平底の貼付高台で、27



第138図 SH02・SH03・SD02 出土遺物

の底部外面は回転ヘラケズリ調整され、全体に褐色を呈する。29は長頸壺の口縁部で、ラッパ状に開き端部が上下に突出する。27～29は遠江編年のIV期末からV期と考る。30は広口壺の口縁部で、遠江編年V期前葉に位置づけられる。31は壺の底部で、断面細台形を呈する高台が底部の際に貼り付けられている。外面に自然釉がかかる。32は壺の胴部片である。

時期：SB03との切り合い関係と出土遺物の時期（7世紀後半～8世紀）が合わないため、遺物の時期がSD01の時期を示すものとは断定しがたく、遺構の時期は特定できない。

## SD02

位置：調査区の中央から西に位置する。

重複関係：他の遺構とは重複しない。

残存状況：一部搅乱されて不明であるが、調査区南壁から北へ不定形に延び、北西方向へ屈曲してからは幅60cm程度で、ほぼまっすぐに掘られている。

覆土：不明である。

出土遺物：土師器甲斐型壺の底部片を図示した（第138図33）。推定底径は8.6cmを測り、底部外面は全面ヘラケズリ調整され、体部外面には横位のヘラミガキが認められる。みこみには円周状と放射状のヘラミガキが施されている。8世紀後半に位置づけられる土器である。

時期：33の甲斐型壺や遺構の位置関係から、SB01・SH01やSB02・SH02に伴う区画溝であった可能性があるが、特定できない。

## SD03

位置：調査区のほぼ中央に位置する。

重複関係：(古) SB01 → SD03 (新)

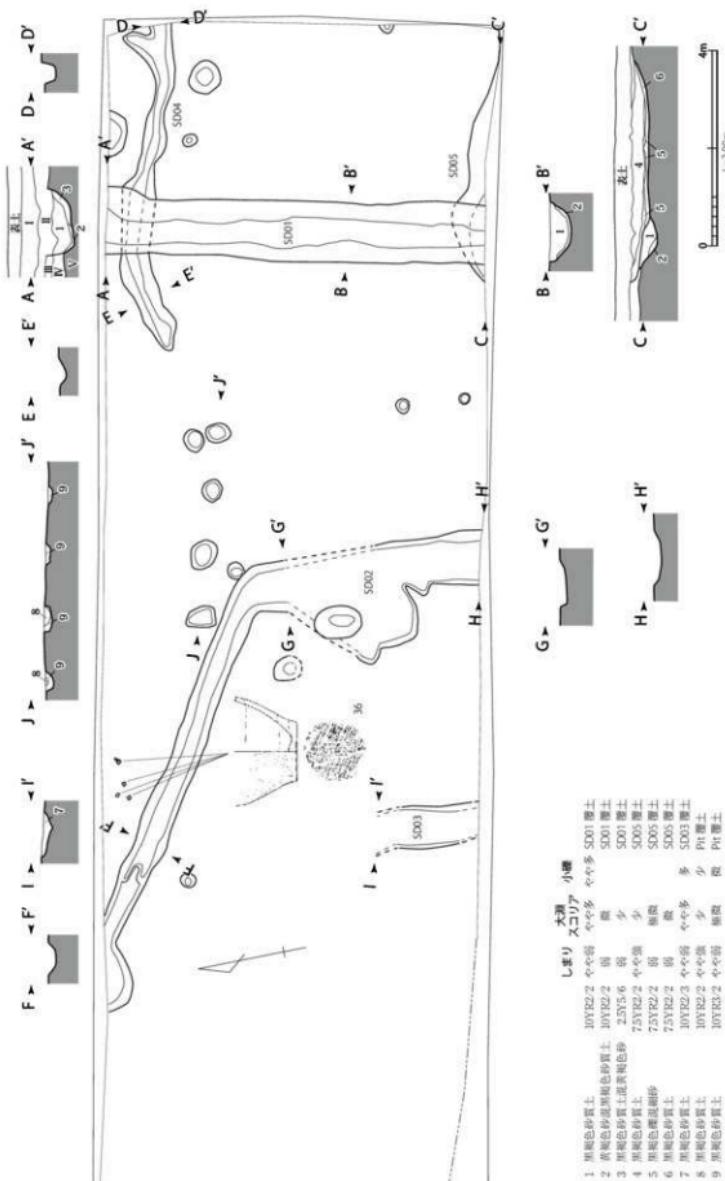
残存状況：平面では、南北方向に走る溝が調査区南壁とSB01南壁の間に確認できただけであるが、SB01との切り合い関係を示すセクション図から、SD03がSB01よりも後に掘られたことが確認できた。SB02との切り合い関係は不明である。

検出された部分で、幅90cm、深さ20cmを測る。

覆土：大潤スコリアを多く含む黒褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

時期：特定できない。



## SD04

位置：調査区北東隅に位置する。

重複関係：(古) SD04 → SB03 → SD01 (新)

残存状況：調査区の東壁から東西方向にやや蛇行しながら延びる。SD01に切られ、西端はSB03の下から検出され、そこで終結するようである。検出された部分で、長さ 6.60 m、幅 35 ~ 55cm、深さ 15 ~ 30cm を測る。

覆土：不明である。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

時期：特定できない。

## SD05

位置：調査区南東隅に位置する。

重複関係：(古) SD01 → SD05 (新)

残存状況：調査区南壁に沿ってごく一部分が検出されたのみで、全体像は不明である。南壁セクションで、SD01との切り合い関係が確認された。

覆土：大潤スコリアを少量含む黒褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

時期：特定できない。

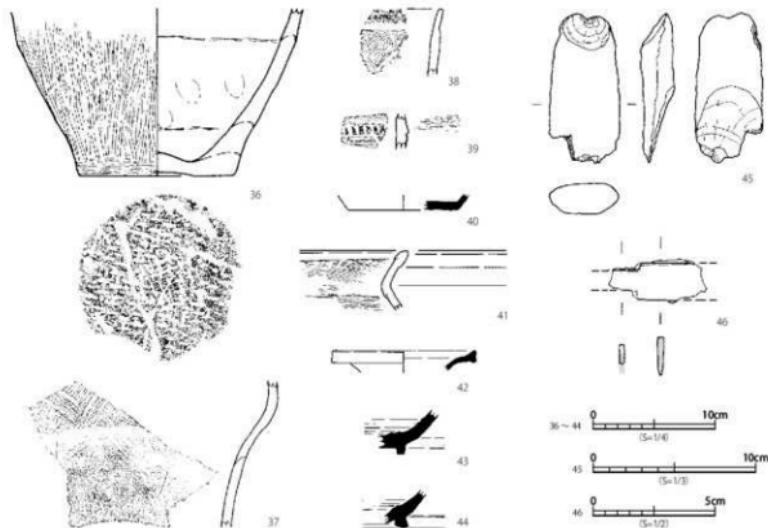
## その他の Pit

掘立柱建物跡の柱穴以外のピットは、調査区内に 15 基検出された。そのうち、調査区中央で東西方向に均等に並ぶ 4 基は何らかの遺構（横列など）になる可能性もある。

## 遺構外出土遺物

出土遺物の内、遺構に伴わなかったもの 11 点を図示した（第 140 図 36 ~ 46）。

36 ~ 39 は縄文土器である。36 は SD02 の北で出土した深鉢の底部である。底部外面には網代痕が残り、胸部は丁寧に磨かれていることから、後期の土器と考えられる。37 は深鉢の胸部片で、残存部の形状は外側にふくらむ上半から、屈曲して、直線的な下半へつながる。外面上半には平行弦線が斜方向に施された後、ミガキによって区画されている。外面下半および内面は丁寧に磨かれている。頸部下端の屈曲と文様構成から加曾利 B2 式の土器と考えられるが、加曾利 B2 式の一般的な文様は矢羽根文様であり、屈曲部も口縁部下端にくるものが大半であることから、一般的な加曾利 B2 式とはやや異なるようである。38 は口縁部片で、口縁部は胸部よりも



第 140 図 遺構外出土遺物

やや薄くつくなっている。胴部外面には細かい単節繩文が施され、斜方向の沈線区画が認められる。文様構成は堀之内1式のものであるが、口唇部を明瞭に削ることから加曾利B1～2式まで下る可能性も高い。39は横位沈線2条と列点が巡る胴部片で、文様構成から加曾利B3式と考えられる。

40は高台を有しない須恵器壺の底部、41は土師器駿東型壺の口縁部、42は須恵器壺の口縁部で、43・44は同じく壺とみられる底部片である。

46は刀子の関付近の破片である。関は両開で、刃側・

桿側とも直角関である。茎部断面は長方形を呈する。装具を推定し得る木質などは残存していない。(若林)

#### 参考文献

- 秋田かな子 2008「加曾利B式土器」「鉢呂、縄文土器」「鉢呂土器」刊行委員会  
 鈴木敏樹 1998「第1章第4節 律令時代土器編年の概要」「紀子北道跡・遺物編(本文)」浜松市文化協会  
 鈴木敏樹 2004「第5章第2節 静岡県下の須恵器編年」「有吉窯」浜松市教育委員会  
 山下孝司 1992「甲斐型壺」「甲斐型土器研究グループ第1回研究集会資料 甲斐型土器・その編年と年代」山梨県考古学協会

第10表 柏原遺跡第4地区 出土遺物觀察表

#### ・土器

種類	固版	報告番号	遺物名	種別	器種	部位	残存率	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内面色調	外面色調	備考
第134 固	PL14	1	SB01	須恵器	壺蓋	肩部→肩部	20%	(15.8)	(2.5)	-	5Y5-1(灰)	7.5Y5-1(灰)	
第134 固	PL14	2	SB02	須恵器	壺蓋?	肩部?	-	-	(1.0)	-	25Y6-1(灰)	25Y5-1(灰)	
第134 固	PL14	3	SB03	土師器	甲斐型壺	底部	20%	(12.2)	(3.9)	-	25Y4-8(赤褐色)	25Y5-6(明赤褐色)	
第134 固	PL14	4	SB04	土師器	甲斐型壺	底部	-	-	(3.9)	-	25Y5-8(明赤褐色)	25Y5-8(明赤褐色)	
第134 固	PL14	5	SB01	須恵器	壺身	底部	-	-	(3.5)	-	5Y7-1(灰白)	5Y6-1(灰)	
第134 固	PL14	6	SB01	土師器	壺	口縁部	-	-	(2.9)	-	5Y8-6(橙)	10R5-8(赤)	
第134 固	PL14	7	SB01	土師器	駿東型壺	口縁部	-	-	(3.0)	-	10R4-6(赤)	10R3-6(赤褐色)	
第134 固	PL14	8	SB01	土師器	駿東型壺	口縁部	-	-	(3.8)	-	7.5R3-4(暗赤)	7.5R3-6(暗赤)	
第134 固	PL14	9	SB01	土師器	壺	口縁→肩部	30%	(24.0)	(12.8)	-	25YR5-6(明赤褐色)	25YR5-6(明赤褐色)	
第134 固	PL14	10	SB01	土師器	壺?	口縁部	20%	(22.4)	(3.2)	-	25Y8-6(明赤褐色)	25YR5-6(明赤褐色)	
第134 固	PL14	11	SB01	土師器	小型壺	口縁→脚部	20%	(16.8)	(7.8)	-	10R5-6(赤)	25YR5-6(明赤褐色)	
第134 固	PL14	12	SB02	土師器	小型壺?	口縁部→肩部	20%	(15.6)	(5.0)	-	25Y6-8(橙)	25Y5-6(明赤褐色)	
第134 固	PL14	13	SB02	土師器	壺	底部	60%	-	(3.9)	6.0	5YR5-6(明赤褐色)	10R5-8(赤)	
第134 固	PL14	14	SB01・ SB02	須恵器	壺?	肩部	-	-	(1.9)	-	25Y6-1(灰)	25Y6-1(灰)	
第134 固	PL14	15	SB01・ SB02	須恵器	高壺	肩部	90%	-	(4.3)	-	N7/(灰白)	25GY6-1(オーリーブグリーン)	
第134 固	PL14	16	SB01・ SB02	土師器	甲斐型壺	底部→口縁部	65%	(11.4)	4.4	6.0	25R4-8(赤褐色)	25R4-8(赤褐色)	
第134 固	PL14	17	SB01・ SB02	土師器	壺?	底部	50%	-	(2.9)	(6.6)	5Y5-4(にぶい赤褐色)	25Y7-3(浅灰)	
第134 固	PL14	18	SB01・ SB02	土師器	駿東型壺	口縁部	-	-	(2.8)	-	7.5R3-6(暗赤)	7.5R3-6(暗赤)	
第134 固	PL14	19	SB01・ SB02	土師器	駿東型壺	口縁部	-	-	(3.8)	-	25Y6-6(橙)	25Y6-6(橙)	
第134 固	PL15	21	SB01	須恵器	壺?	肩部	20%	(15.6)	(1.4)	-	7.5Y5-1(灰)	7.5Y5-1(灰)	
第134 固	PL15	22	SB03	須恵器	壺	底部	20%	-	(1.3)	(8.0)	10Y5-1(灰)	10Y5-1(灰)	
第134 固	PL15	23	SB03	土師器	駿東型壺	口縁部→肩部	30%	(43.4)	(13.5)	-	10R3-4(暗赤)	10R3-4(暗赤)	
第134 固	PL15	24	SD01	土師器	壺?	口縁部	-	-	(3.3)	-	25YR5-3(にぶい赤褐色)	25YR1-3(にぶい赤褐色)	
第134 固	PL15	25	SD01	須恵器	壺?	肩部	20%	(12.0)	(1.8)	-	7.5Y7-1(灰白)	7.5Y6-1(灰)	
第134 固	PL15	26	SD01	須恵器	壺?	肩部	20%	-	(1.3)	-	10Y5-1(灰)	7.5Y5-1(灰)	
第134 固	PL15	27	SD01	須恵器	壺?	底部	20%	-	(1.5)	(9.0)	10YR4-2(灰黃褐色)	10YR4-2(灰黃褐色)	
第134 固	PL15	28	SD01	須恵器	高台壺	底部	20%	-	(2.0)	(9.0)	25Y5-1(灰)	5Y4-1(灰)	
第134 固	PL15	29	SD01	須恵器	壺?	口縁部	-	-	(1.8)	-	7.5Y5-1(灰)	7.5Y5-1(灰)	
第134 固	PL15	30	SD01	須恵器	壺?	口縁部	20%	(21.0)	(5.0)	-	7.5Y6-2(灰オーリーブグリーン)	7.5Y6-1(灰)	
第134 固	PL15	31	SD01	須恵器	壺?	底部	20%	-	(8.0)	(14.0)	10Y5-1(灰)	10Y5-1(灰)	
第134 固	PL15	32	SD01	須恵器	壺?	肩部	-	-	-	-	7.5Y4-1(灰)	NA(灰)	
第138 固	PL15	33	SD01	土師器	甲斐型壺	底部	20%	-	(1.2)	(8.6)	25YR5-6(明赤褐色)	25YR5-6(明赤褐色)	
第138 固	PL15	34	SH01	須恵器	壺?	底部	40%	-	(5.5)	(12.0)	5Y6-1(灰)	25Y6-1(青灰)	
第138 固	PL15	35	SH01	須恵器	壺?	底部	-	-	(3.3)	-	25Y4-4(にぶい赤褐色)	5Y5-4(にぶい赤褐色)	
第140 固	PL15	36	造機外	周文土器	深鉢	底部→肩下部	70%	-	(13.5)	13.0	10R6-6(赤褐色)	10R3-8(赤)	底部に網代板
第140 固	PL15	37	造機外	周文土器	深鉢	肩部	-	-	(12.0)	-	5YR4-6(赤褐色)	5YR4-6(赤褐色)	
第140 固	PL15	38	造機外	周文土器	口縁部	-	-	-	-	-	25Y4-3(にぶい赤褐色)	25YR4-3(赤褐色)	
第140 固	PL15	39	造機外	周文土器	底部	-	-	-	-	-	25YR5-6(明赤褐色)	25YR4-4(にぶい赤褐色)	
第140 固	PL15	40	造機外	須恵器	壺?	底部	30%	-	(1.2)	(9.0)	25Y4-1(灰)	5Y5-1(灰)	
第140 固	PL15	41	造機外	土師器	駿東型壺	口縁部	-	-	(5.0)	-	10R4-6(赤)	7.5R3-6(暗赤)	
第140 固	PL16	42	造機外	須恵器	壺?	口縁部	20%	(12.0)	(1.7)	-	7.5Y5-2(灰オーリーブグリーン)	5Y5-2(灰オーリーブグリーン)	
第140 固	PL16	43	造機外	須恵器	壺?	底部	20%	-	(3.5)	-	25Y5-2(灰暗黄)	7.5Y5-1(灰)	
第140 固	PL16	44	造機外	須恵器	壺?	底部	20%	-	(3.0)	-	5Y5-1(灰)	5Y5-1(灰)	

## ・鉄製品

博物館	国版	報告番号	遺構名	種別	器種	重量(g)	全長(cm)	刃部長(cm)	刃部幅(cm)	刃部厚(cm)	茎部長(cm)	茎部幅(cm)	茎部厚(cm)	備考
第134回	PL14	20	SB01・SB02	鉄製品	刀子	69	(12.1)	(7.7)	0.8	0.2	(4.4)	3.5	0.15	柄部木質残存
第140回	PL16	45	遺構外	鉄製品	刀子	55	(40)	(27)	1.6	0.3	(1.3)	0.8	0.2	

## ・石製品

博物館	国版	報告番号	遺構名	種別	器種	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)
第140回	PL16	45	遺構外	石器	打製石斧	101.5	9.2	4.2	1.9

## 第3節 第6地区の調査成果

## 第1項 調査の概要

調査に至る経緯 富士市役所建設部建設総務課は、平成20年度より富士市柏原新田地内において東柏原地内道路改良事業（延長263m、幅員5m）を計画した。富士市教育委員会は、工事対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地である柏原遺跡に指定されているため、建設総務課の事業の進捗状況と合わせて次のとおり平成21・22年度に4次にわたり試掘確認調査を実施した。

## 1次調査 調査期間 平成21年11月9日～10日

調査対象面積 373m<sup>2</sup>

1次調査においては、5ヶ所のトレンチを設定し調査を実施した。H21-2・3トレンチで大淵スコリア堆積年代前後に亘る土坑等の遺構が検出された。ただしトレンチを設定した範囲以外は既に旧道路や水道管設置時の掘削が及んでいて、遺跡は残存しないものと判断された。1次調査の成果については、「平成21年度 富士市内道路発掘調査報告書」(藤村福2011)において報告している。

## 2次調査 調査期間 平成22年6月11日～17日

調査対象面積 440m<sup>2</sup>

2次調査では、4ヶ所のトレンチ(H22-1Tr～H22-4Tr)を設定し調査を実施した。全てのトレンチにおいて地表面から0.8m程の深さにおいて大淵スコリアの堆積を確認できたが、遺構・遺物とともに検出されなかつた。なお調査対象地が東田子の浦砂丘M-3号墳に隣接することから、2トレンチをこれに合わせて調査を行つ

たが、古墳に伴う遺構等も確認できなかつた。

## 3次調査 調査期間 平成22年11月25日

調査対象面積 300m<sup>2</sup>

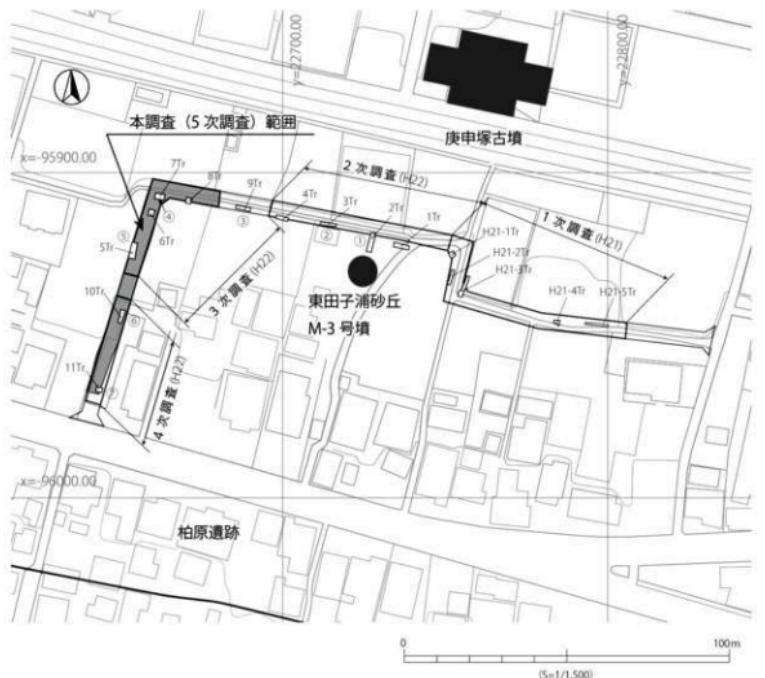
3次調査では、5ヶ所のトレンチ(H22-5Tr～H22-9Tr)を設定し調査を実施した。全てのトレンチにおいて大淵スコリアの堆積を確認でき、5トレンチにおいて大淵スコリア降下後に構築された豎穴建物跡1軒を検出した。9トレンチ以外のトレンチからは土師器を中心に遺物の出土が認められた。

## 4次調査 調査期間 平成22年12月21日

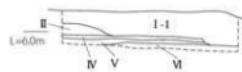
調査対象面積 100m<sup>2</sup>

4次調査では、2ヶ所のトレンチ(H22-10Tr～H22-11Tr)を設定し調査を実施した。遺構は検出できなかつたが、3次調査同様土師器を中心に遺物の出土が認められた。

この試掘確認調査の結果から事業主体者である富士市は、随時、1・2次調査及び3次調査の遺跡が残存しない範囲について「埋蔵文化財発掘の通知」を提出し、市教育委員会はこれを静岡県教育委員会に進達(H21.12.1富教文発第272号、H22.7.20富教文発第167号、H22.12.13富教文発第381号)した。この当該範囲については静岡県教育委員会より市教育委員会による工事立会いの指示があり、文化振興課員による工事立会いのもと工事が実施されることとなったが、目立った遺構や遺物の検出には至らなかつた。



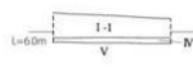
① 2Tr 西壁



② 3Tr 北壁



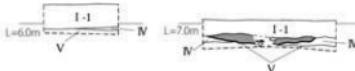
③ 9Tr 北壁



④ 7Tr 南壁



⑤ 5Tr 西壁



⑥ 10Tr 東壁



⑦ 11Tr 南壁



I-1 黒褐色 (10YR3/1)

(表土)

I-2 にぶい黄褐色 (10YR5/4)

しまりやや弱。粘性弱。粗粒砂中量。【近代造成土】

I-3 オリーブ褐色 (2.5YR4/4)

しまりやや弱。粘性弱。粗粒砂多量。【近代造成土】

I-4 喧褐色 (10YR3/4)

しまりやや強。粘性弱。粗粒砂多量。【近代造成土】

II 黒褐色 (10YR3/1)

しまりやや強。粘性弱。粗粒砂多量。

III にぶい 黑褐色 (10YR 4/3.)

しまりやや弱。粘性やや弱。大浪江川少量。【基本剖面Ⅰ層】

IV 大浪江77層 (5Y4/8)

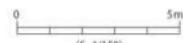
しまりやや弱。粘性弱。粗粒砂中量。【基本剖面Ⅱ層】

V 黑褐色粗砂層 (7.5YR3/1)

しまりやや弱。粘性弱。粗粒砂多量。【基本剖面Ⅲ層】

VI 黑褐色 (10YR3/1)

しまり強。粘性弱。粗粒砂多量。【基本剖面Ⅴ層】



第141図 柏原遺跡第6地区 調査地位置図 (S=1/1,500) および試掘確認調査土層図 (S=1/150)

3次調査の道路が残存する可能性がある範囲及び4次調査について、富士市は平成22年12月27日付けで「埋蔵文化財発掘の通知」を提出し、市教育委員会はこれを静岡県教育委員会に進呈（H23.1.13富教文発第423号）した。これについて平成23年2月8日付けで静岡県教育委員会より当該範囲については事前に本発掘調査を行う旨の指示を受けた。

平成23年6月1日には事業主体者 富士市長 鈴木尚（建設部 建設総務課）から富士市教育長 平岡彦三宛に「埋蔵文化財本発掘調査依頼書」が提出され、富士市教育委員会は本発掘調査（5次調査）を実施するに至った。

**調査の経過（発掘調査）** 発掘調査は、平成23年7月11日～9月9日まで実施した。調査面積は、475m<sup>2</sup>である。

①重機による表土掘削→②確認面（Ⅲ層上面）検出→③確認面調査（遺構発掘・測量等）→④全体写真撮影→⑤確認面（Ⅳ層上面）検出→⑥確認面調査（遺構発掘・測量等）→⑦全体写真撮影の順序で調査を行った。①～⑦に至る過程の適宜必要と認められる場面で、遺構・遺物出土状況の測量および写真撮影を行った。また、⑥Ⅳ層上面での確認面調査の終了後に、テストピット（201～205）を設定し、人力によりV層までの掘削調査を実施した。

**調査の経過（整理作業）** 整理作業は調査終了後、基礎整理を断続的に行い、平成24年4月1日より本格的な整理作業を再開し、本書の刊行をもって終了した。

期間中に出土土器の洗浄・接合・復原、遺物の図化作業、遺構図・遺物図等の編集、各図のトレスス作業、観察表等の作成、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらにこれらを編集して報告書を作成した。本書で報告する遺物・図面は富士市教育委員会にて保管・管理されている。

なお、現地調査中より上杉 陽氏（都留文化大学名誉教授）に地質学的な知見について指導していただき、柏原遺跡の出土テフラおよび水害堆積物について分析調査を依頼することとなった。また、調査により出土した馬歯については、現地調査時より丸山真史氏（奈良文化財研究所）から指導・助言を得て、植月 学氏（山梨県立

博物館）に分析調査を依頼することとなった。また、近世陶磁器類の評価については、堀内秀樹氏（東京大学埋蔵文化財調査室）より指導を受けた。調査に御協力頂いた各氏に、記して感謝申し上げます。

## 第2項 基本層序（第144図）

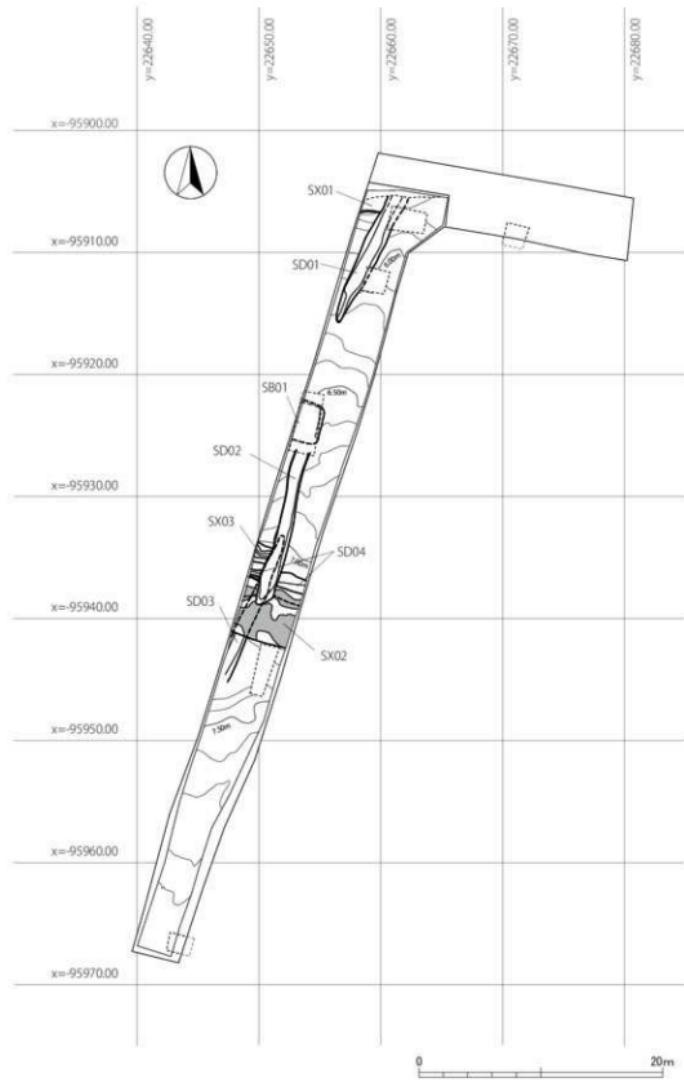
本調査区は、新設道路部分となるため現況は主に畠地である。調査区南端は、県道380号（旧国道1号）につながり標高は9.6mを測るが、75m北となる調査区北端の地表面は標高6.4mとなり、北に向って下降する地形となりさらに浮島ヶ原方向に向って傾斜していく。

第144図は、調査区西壁セクション図にテストピットのセクションを投影したものである。

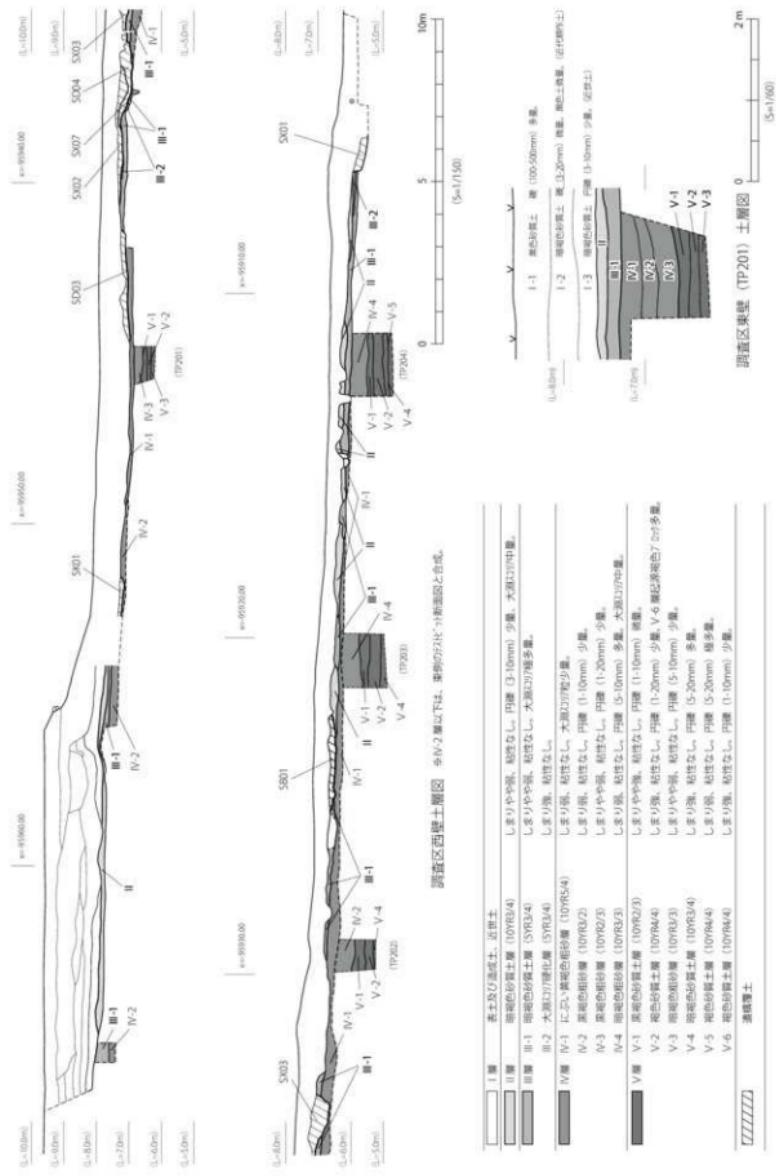
I層（上杉報告第8～10層）は表土及び造成土である。上杉氏報告によるとこの下層（上杉報告第8層）が中近世の暴浪堆積物である可能性を指摘している。II層は古墳時代後期初頭前後に降下、堆積した（佐藤・藤村2013）大瀬スコリアが混入する暗褐色砂質土層であり、一部I層により削平されているが部分的に残存する。III層（上杉報告第7層）はほぼ大瀬スコリアのみで構成される層であり、スコリア降下直後の堆積層と判断される。III-1層はしまりが弱くもらいが、III-2層はスコリア同士が鉄錆物で二次的に膠着しているとみられ、しまりが強い。IV層（上杉報告第4～6層）は粗砂層である。上杉氏はIV-1層上層には少量ではあるが輪郭のはっきりした一次堆積に近い富士系のスコリアが含まれていることを指摘している。厚さ80cmとなるIV層の粗砂層は、分析調査の結果から混潤流状態で堆積していることが判明し、高潮高波堆積物や津波堆積物である可能性を指摘されている。ほぼテストピットのみで確認されているV層（上杉報告第1～3層）は、IV層に比べて土壤化している土層であり、遺構は検出されないがこの上層中より弥生時代後期の土器片が出土している。



第142図 柏原遺跡第6地区 5次調査 全体図 (IV層上面)



第143図 柏原遺跡第6地区5次調査 全体図(Ⅲ層上面)



144 圖 柏原道助第6地區5次調查 基本土層

## 第3項 弥生時代後期～古墳時代前期（V層～IV層中）

## の遺構と遺物

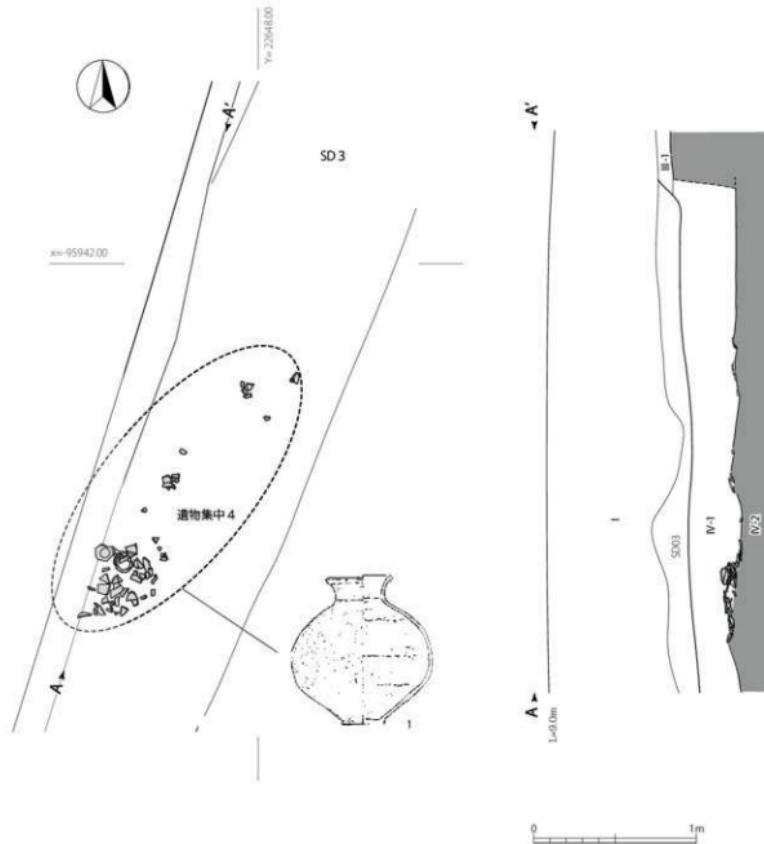
今回の調査区において、面的な掘削をおこなったのがIV層上面までであったため、弥生時代後期から古墳時代前期の建物跡や土坑等の遺構は検出されていない。ただし、IV層以下の土層堆積状況の確認のために設定したテスティット（TP）等において出土した遺物や、SD03の底面下で検出された土器片集中箇所（遺物集中4）は当該期に帰属するものであり、特に後者は、通有の遺構と同等もしくはそれ以上に、当該期の状況を語る一級の

資料となった。

## 遺物集中

## 遺物集中4（第145図・PL.17）

遺物集中4とは、調査区南側西壁付近において長さ2.1m、幅0.5mほどの範囲で広がる土器片集中箇所である。層位的にはIV-2層上面に展開しており、IV-1層に押し潰されたかのような状態で検出されたが、99%の土器片が接合された結果、一個体分の土師器短頸壺を復元する事が出来た（第146図1）。



第145図 遺物集中4 (S=1/30)

出土状況をみると、南側に全周する口縁部や底部片のはか、土器片の大部分がかかる一方で、中央から北側にかけては少量の土器片が分布するという特徴が看取される。このことから、南側付近に存在した完形の壺が何らかの衝撃や圧力を受けて割れた後に、大部分の破片は南側付近に残ったが、小量の破片は北東方向に流されるように散乱した状況を想定することが可能である。IV層全体は調査区南側に位置する駿河湾からの津波や高潮に起因する堆積物層と判断されており（第5節参照）、遺物集中4自体が水害時の状況を推察する大きな手掛かりになるとと考えられよう。

第146図1は遺物集中4から出土した土器器の短頸壺であり、折返口縁とやや下ぶくれの体部、体部に比して極めて小さな底部といった形態的特徴を有する。外面調整のヘラミガキは非常に丁寧に施されており、本葉痕の残る底部下面まで及んでいる。S字壺B類や内輪脚高杯とも共伴する三島市平田前田遺跡SD21001出土の短頸壺（徳宮編1998）に形態が類似しており、大邱II式期（古墳時代前期初頭）に帰属するものと判断される。

#### 包含層出土遺物（第146図・PL.20）

第146図2～7はIV層中から出土した土器片である。2は、S字壺の頸部片である。残存部分の内面に面取りやハケメはみとめられないが、屈曲部外面には弦線が廻っており、古相となる可能性がある。4～7は弥生時代後期とみられる壺の破片であり、5はS字状結節文によ

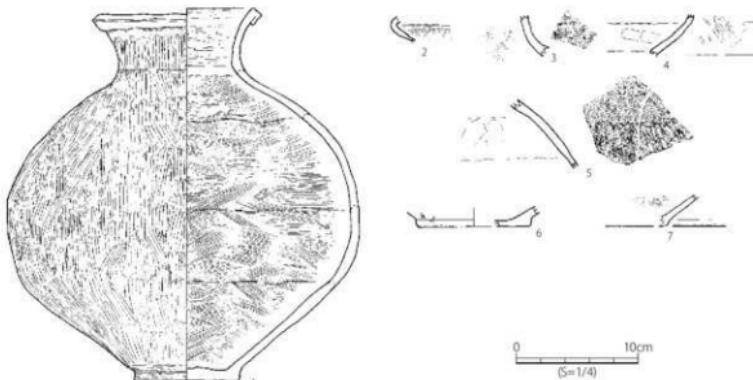
って区画された縄文帯がみられる。

V層の出土遺物として、3を図示した。3は壺の頸部～肩部の破片であるが、縄文帯は下方に施されており、弥生時代後期の雞鹿塚式のなかでも新相の特徴を有する。

#### 第4項 古墳時代中期～後期初頭（IV層上面～III層中）の遺構と遺物

弥生時代後期から古墳時代前期中葉頃に当該地を襲った複数回の水害によってもたらされた砂礫層（IV層）の上面では、明確な建物遺構は検出されなかったものの、4つの土器片集中箇所（遺物集中1～3・5）と土坑等の遺構が検出された。これらの土器や遺構は、調査区のほぼ全域にわたって拡がる。富士山側火山を起源とした火山噴出物である大淵スコリアの一次堆積層（III層）によって覆われた状態で検出されたのであり、スコリア降下前から降下直後の状況を示す資料として認識されるにいたった。

一般的に「大淵スコリア」と呼称されているスコリアについて、4世紀半ば頃のもの、6世紀初頭前後のもの、7世紀頃のものの計三枚に区分する考えも示されているが（第5節参照）、6世紀初頭前後を除いた二時期のものについては、これまでに確認・時期推定された類例も少なく、現在検証の途上にある。今回の調査で確認された大淵スコリアが、後述する土器の特徴や前後の土層堆積状況から、近年の富士市域東部の調査事例の蓄積によ



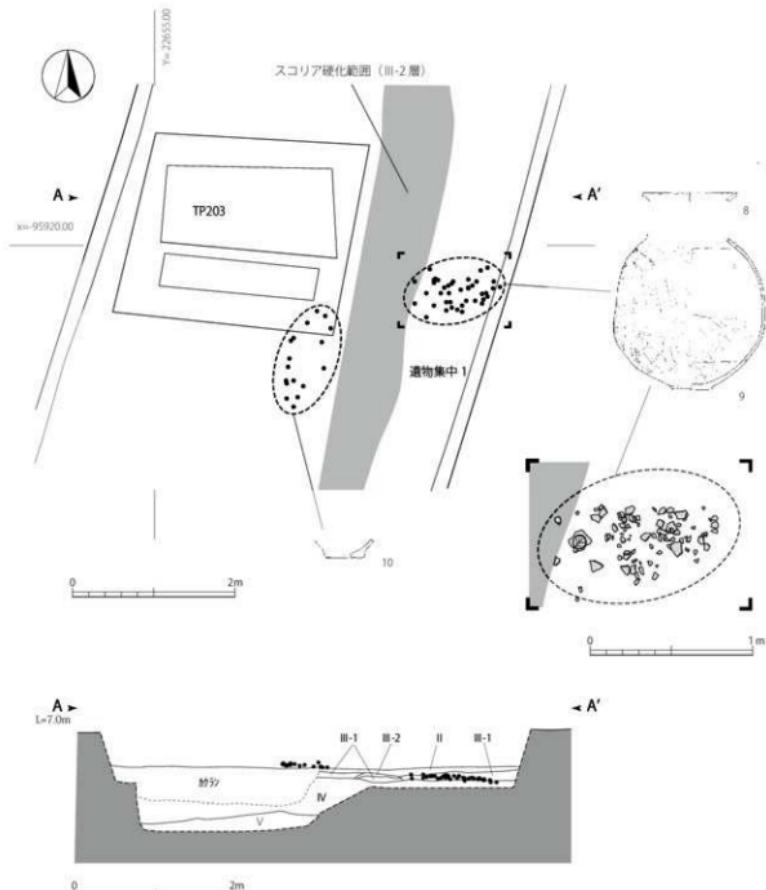
第146図 出土遺物実測図（弥生時代後期～古墳時代前期）

ってその降下時期が確實視されつつある5世紀末～6世紀初頭（古墳時代後期初頭、TK23～TK47型式併行期）のものと判断されることから（佐藤・藤村2013など）、本調査におけるIV層上面の道構やIV層上面～III層中の出土遺物については、古墳時代中期から後期初頭のものとして、以下に報告していくこととする。

## 遺物集中

## 遺物集中1（第147図・PL17）

遺物集中1は、調査区北側東壁付近において東西26m、21mほどの範囲で広がる土器片集中箇所であり、東西それぞれに分布の集中する部分を有する。層位的には、IV層上面から主としてIII層中において検出されている。東側の集中部分から採り上げられた土器片は、ほぼ一個体分の土師器壺に復元されており（9）、スコリアの降下直前、または降下時に割れた土器がそのままパック

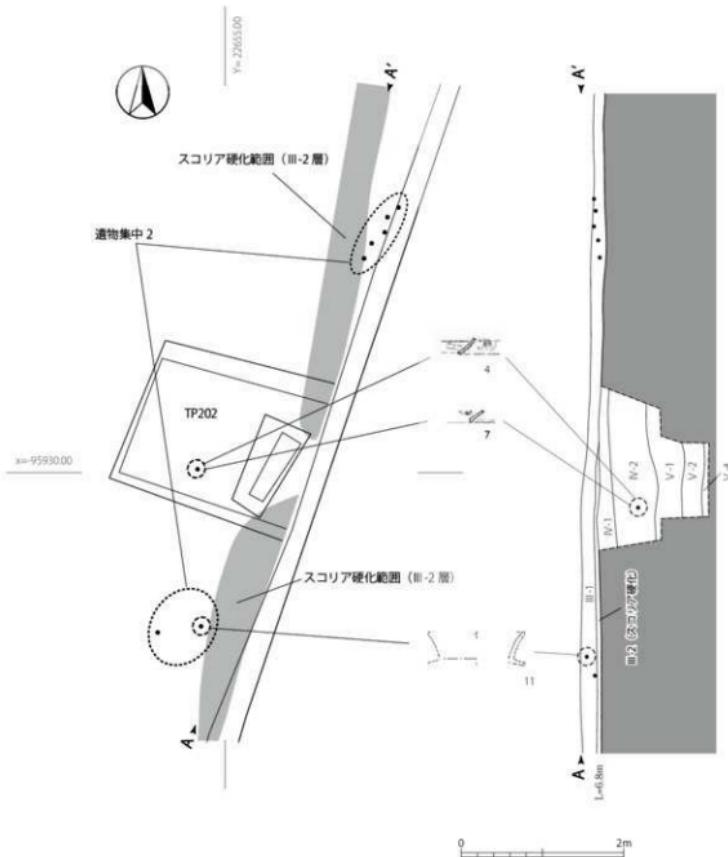


第147図 遺物集中1 (S=1/60)

されたものと考えられる。西側集中部分の土器片はいずれも小片で接合できたものも少なく(10)、水害起源の二次堆積大渦スコリア層(II層)にかかる部分が大きいところから、遺物自体も二次的に移動された破片とみられる。

第153図8は土師器の壺とみられる口縁部片であり、内面にヘラミガキがみとめられる。小破片の接合資料であるため、図示した口径も検討の余地が残る。9は外面にススも付着する土師器の壺であるが、この時期の静岡県東部では珍しく、なで肩・長胴といった特徴を有す

る。惜しいことに頸部～口縁部を復元することはできなかったが、胴部の形態的特徴からは、遠江地域におけるTK23型式併行期頃の壺(鈴木1999)に類似しており、本例は遠江系壺と判断される。8と同位置から出土しており、胎土もよく類似することから、両者が同一個体であった可能性も想定しておくべきかもしれない。そうだとすれば、在地系壺の口縁部、遠江系壺の胴部による折衷的な様相の土器ということになる。底部には木葉痕がみとめられる。10は土師器の壺または壺とみられる底部片であり、こちらも木葉痕がみとめられる。



第148図 遺物集中2 (S=1/60)

## 遺物集中2（第148図）

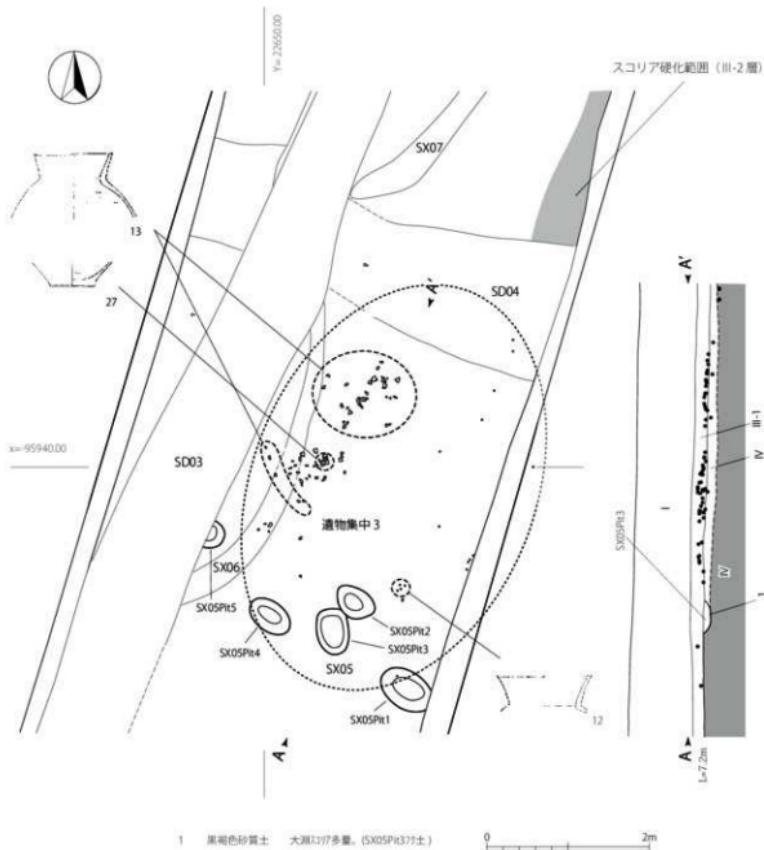
遺物集中2は、調査区中央東壁付近において南北6.0m程の範囲で土器片が出土した箇所であり、層位的にはⅢ層中から検出されている。北側の集中部分と南側の集中部分に分けられ、後者からは土師器壺の口縁部（第153図11）が出土したが、胴部以下を接合することは出来なかった。調査区東隣に分布が拡がる可能性も残るが、もとより二次的な破片のみの散布地点であった可能性もある。

第153図11は土師器の壺または壺の口縁部片であり、

口縁端部はヨコナデによって丸くおさめている。5世紀～6世紀前半のいずれかの時期におさまるものとみて相違ない。

## 遺物集中3（第149図・PL17）

遺物集中3は、調査区中央のやや南側において南北5.2m、東西3.5mほどの範囲で広がる土器片集中箇所であり、後述するSX05・SX06に接する。層位的には、IV層上面から主としてⅢ層中において検出されている。北西側に分布が集中する部分があり、土師器壺また



第149図 遺物集中3・SX05 (S=1/60)

は壺の上部が復元されたが（第153図13）、中央部分に同一個体とみられる底部片（第162図27）もあるため、本来は一個体存在した土器が、スコリア降下前後に破片化したものと判断される。また、中央やや南側で少量分布する部分でも、13に類似した壺または壺の口縁部片が検出されている（第153図12）。

第153図12は土師器の壺または壺とみられる口縁部片であり、ヨコナデによって口縁上端部に面がつくり出されている。13も土師器の壺または壺とみられる口縁部～胸部片であり、11や12よりも上方に立ち上がる口縁部形態を呈する。こちらもヨコナデによって口縁上端部に面がつくり出されている。27は土師器の壺または壺とみられる底部片であり、木葉痕がみとめられる。それぞれ、5世紀～6世紀前半のいずれかの時期におさまるものとみられる。

#### 遺物集中5（第150図・PL.18）

遺物集中5は、IV層上面調査区の南端において東西20mほどの範囲で広がる土器片集中箇所である。調査区の西側が低くなっているため、断面投影図では表現できていないが、遺物はIV層上面においてIII層に覆われたように検出されている。土師器の壺の胸部片がまとまっ

て検出され、2点固化しているが（14・15）、同一個体であった蓋然性が高い。当初は土坑SK01に伴う土器として考えたが、土器片の分布が東側にも大きく広がることが判明したため、遺物集中として報告することとした。

14・15は土師器の壺であり、球胴形の胴部の外面にはヘラミガキが施されている。5世紀後半頃に帰属するともみられる。

#### 土坑

##### SK01（第150図）

重複関係：（古）SK01 → 遺物集中5（新）

主軸方位：N - 110.0° - E

残存状況：西側は調査区域外となり形状は不明。規模は残存値で、東西13m、南北12mを測る。

覆土：多量の大渦スコリアが混入する黒褐色砂質土が15cm程の厚さで堆積する。

出土遺物：覆土中から遺物の出土は認められない。ただし、関係性は不明であるが覆土中から周辺に遺物集中5が存在する。

所見：遺物集中5が形成される以前に造られ、大渦スコリア降下後に埋没したものとみられる。



第150図 遺物集中5・SK01 (S=1/60)

## 不明遺構

## SX04（第151図）

主軸方位：不明

残存状況：東方向に曲がる溝状の遺構で、東側は調査区域外となり形状は不明。規模は、残存部で延長4.5mを測り、幅は北側で1.1mを測るが南に向って狭くなる。

東西1.3m、南北1.2mを測る。

覆土：大潤スコリアが混入する黒褐色砂質土が12cm程度の厚さで堆積する。

出土遺物：覆土中から遺物の出土は認められない。

所見：土層の堆積状況から古墳時代後期以前の遺構と考えられる。

## SX05（第149図）

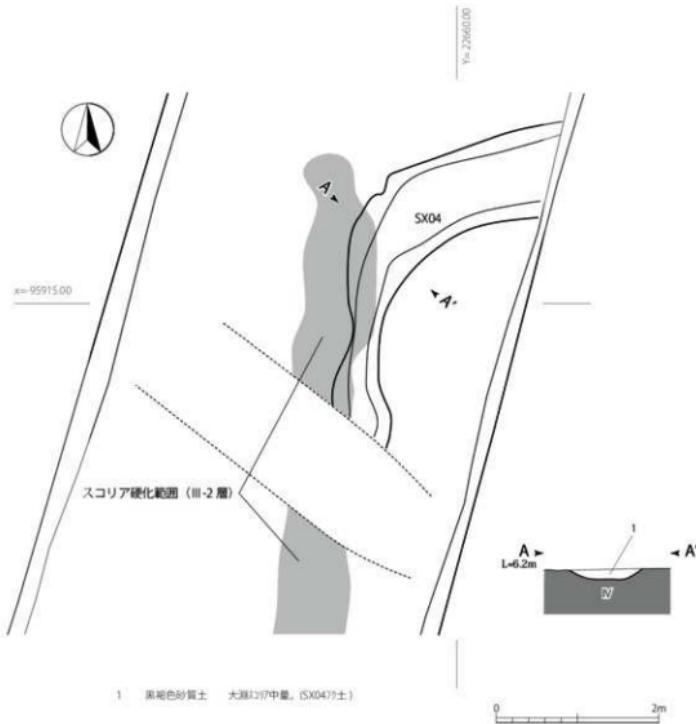
主軸方位：不明

残存状況：5基の浅いピットが隣接する状況で検出。検出状況から東西方向に延びる溝の底部がピットのように残存した可能性もあることから、不明遺構とした。ピットの規模は、径0.3～0.5mを測る。

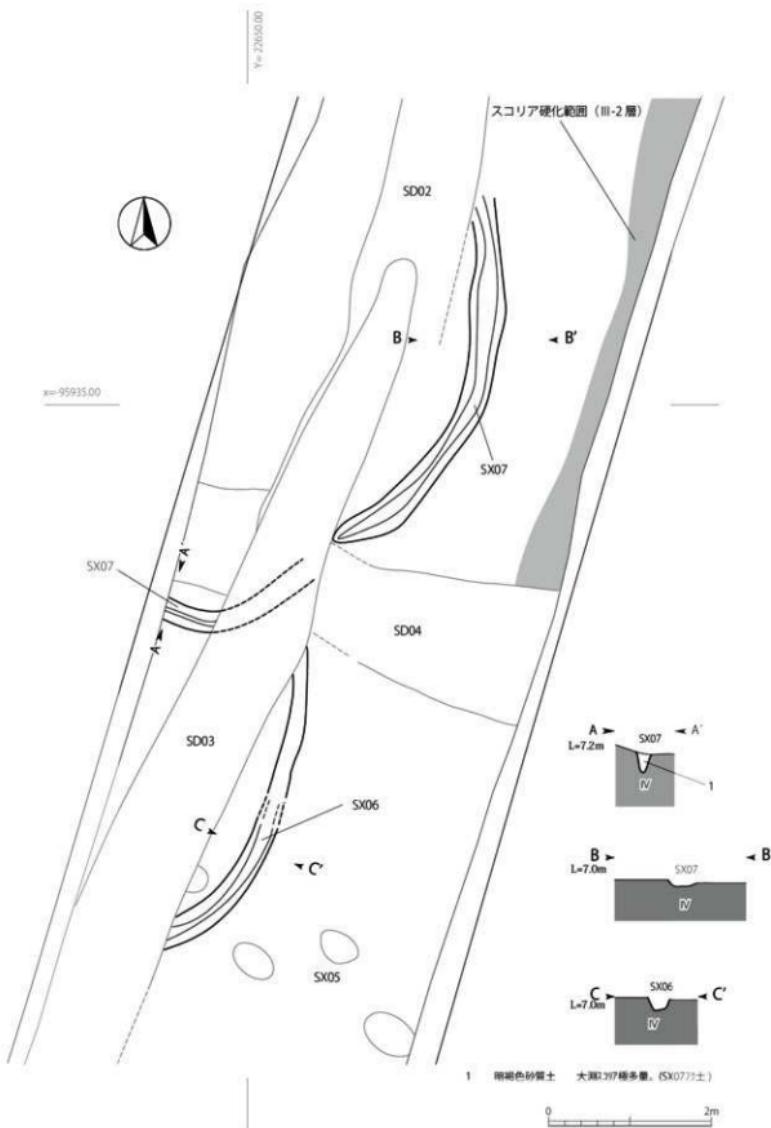
覆土：多量の大潤スコリアが混入する黒褐色土が10cm程度の厚さで堆積する。

出土遺物：覆土中から遺物の出土は認められない。ただし、関係は不明であるがSX05の北側を中心に遺物集中3が認められる。

所見：土層の堆積状況から古墳時代後期以前の遺構と考えられる。



第151図 SX04 (S=1/60)



第152図 SX06・SX07 (S=1/60)

## SX06（第152図）

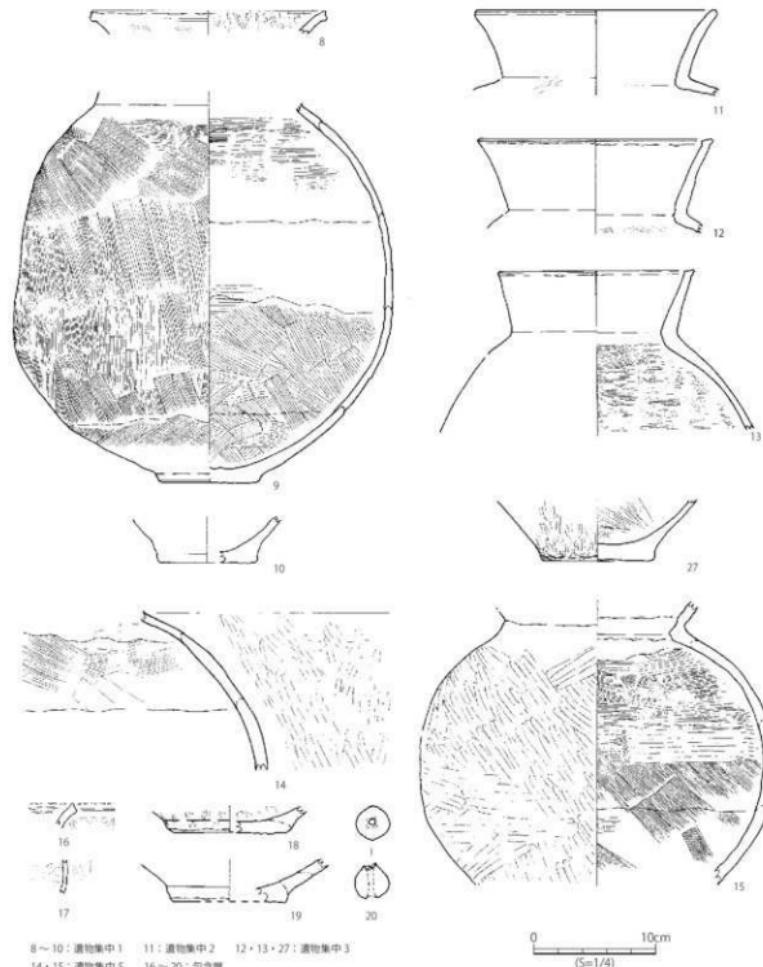
主軸方位：不明

残存状況：西方向に曲がる溝状の遺構で、調査区域内において半円を呈する。規模は、残存値で延長7.4mを測り、幅は0.4mを測る。

覆土：覆土は、ほぼⅢ-1層と同じで20cm程の厚さで堆積する。

出土遺物：出土中から遺物の出土は認められない。

所見：土層の堆積状況から古墳時代後期以前の遺構と考えられるが、地形的な窪みにⅢ-1層が堆積した可能



第153図 出土遺物実測図（古墳時代中期～後期初頭）

性もある。

#### SX07（第152図）

主軸方位：不明

残存状況：西方向に曲がる溝状の造構で、調査区域内において梢円形の一部を呈する。規模は、残存値で延長4.0mを測り、幅は0.3mを測る。

覆土：覆土は、ほぼⅢ-1層と同じで20cm程の厚さで堆積する。

出土遺物：覆土中から遺物の出土は認められない。

所見：土層の堆積状況から古墳時代後期以前の造構と考えられるが、SX06と同様に、地形的な窪みにⅢ-1層が堆積した可能性もある。

#### 包含層出土遺物（第153図・PL.21）

IV層上面からⅢ層にかけて出土した遺物として16～20を記載した。16～19は土師器壺または壺の破片であり、16は内面に横方向のヘラミガキがみとめられ、壺とみられる。17は土師器の壺とみられる破片であり、外面には特徴的な粗いハケメが施される。18・19には底部に木葉痕が残る。20は土玉で、径・高さはともに2.8cmを測り、縫通し穴付近が垂直方向に突出した形態をとる。

### 第5項 律令期以降の造構と遺物

5世紀末から6世紀初頭（TK23～TK47型式併行期）に降下堆積したとみられる大潤スコリア層（Ⅲ層）上面においては、律令期の堅穴建物跡や溝状造構、近世期の溝状造構や不明造構が検出された。前項までと比べると検出された遺物は小破片が多く、検出される造構も覆土が薄いものが目立っているため、近世以降の開墾等による削平を受けているものと考えられる。

#### 堅穴建物跡

##### SB01（第154図・PL.18）

主軸方位：N - 15.0° - E

残存状況：西側が調査区域外となるため、規模等は不明であるが、隅丸方形を呈すると思われる堅穴建物跡である。カマド等燃焼施設が確認されていないこと、また床面も平坦に整形された状態で検出できなかつたことから、住居として使用されていたかどうかは判断できなか

った。規模は、残存値で東西2.0m、南北3.30mを測る。覆土：Ⅱ層を掘り込んで構築されており、覆土は、大潤スコリアが混入する黒褐色砂質土が25cm程の厚さで堆積する。

出土遺物：第162図21は小型壺とみられる口縁部片、22も壺とみられる。23は須恵器壺の底部片であり、取り付け高台がつく。

所見：時期決定に十分な遺物とは言い難いが、8～9世紀の造構と考えられる。

#### 溝状造構

##### SD01（第155図・PL.18）

重複関係：（古）SX01 → SD01（新）

主軸方位：N - 26.0° - E

残存状況：調査区北側に位置し、北側は調査区域外となる。造構は南端に向って狭くなり、収束した状況で検出した。規模は残存値で、延長11.6m、最大幅1.7mを測る。

覆土：大潤スコリアが混入しない暗褐色砂質土が30cm程の厚さで堆積する。

出土遺物：第162図24・25はとともに土師器の壺の破片であり、24は古墳時代後期から飛鳥時代、25は古墳時代中期から後期に帰属するとみられる。

所見：覆土の状況から近世の造構と考えられる。24・25は混入遺物であろう。

##### SD02（第156図・PL.18）

重複関係：（古）SD03 → SX02 → SD02（新）

主軸方位：N - 15.0° - E

残存状況：調査区中央に位置し、北側はSB01と重複するものと考えられるが、攪乱等により切り合い関係は不明である。造構は南端に向って狭くなり収束した状況で検出した。規模は残存値で、延長13.0m、最大幅1.6mを測る。

覆土：黒褐色砂質土が25cm程の厚さで堆積する。

出土遺物：第162図26は弥生土器の壺の頸部～肩部の破片であり、2本の縄文帯の間に円形浮文が残る。弥生時代後期に帰属する。

所見：覆土の状況や切り合い関係から、近世の造構と考えられる。26は混入遺物であろう。

## SD03（第157図・PL.19）

重複関係：（古）SD03 → SD04 → SX02 → SD02（新）

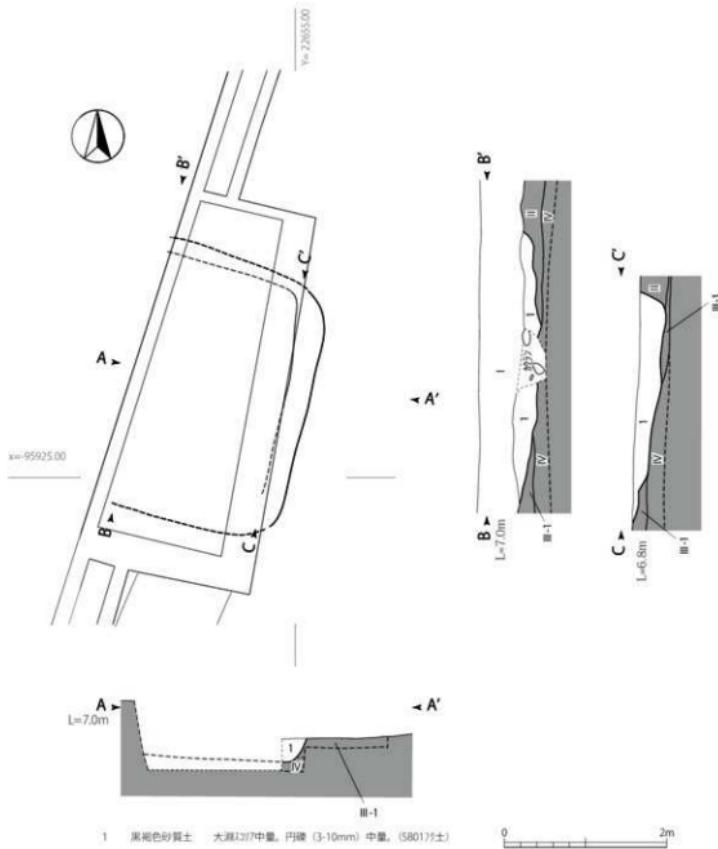
主軸方位：N = 25.0° - E

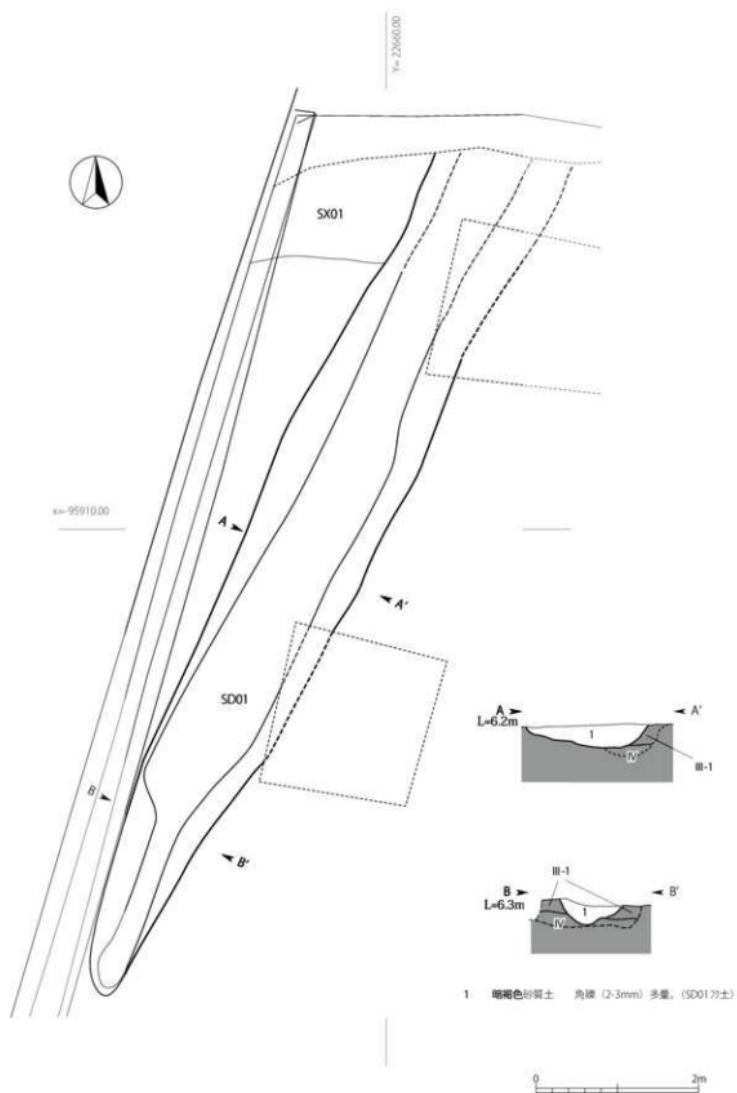
残存状況：調査区中央付近に位置し、南西側は調査区域外へ延びる。造構は北端に向って狭くなり収束した状況で検出した。規模は残存値で、延長12.4m、最大幅1.2mを測る。また溝底面から10cmほど浮いた状態で、馬歯（左側の上顎、下顎臼歯すべて、および右下顎臼歯の一部、その他破片多数）が検出された。詳細は第6節を参照されたい。

覆土：黒褐色砂質土が25cm程の厚さで堆積する。

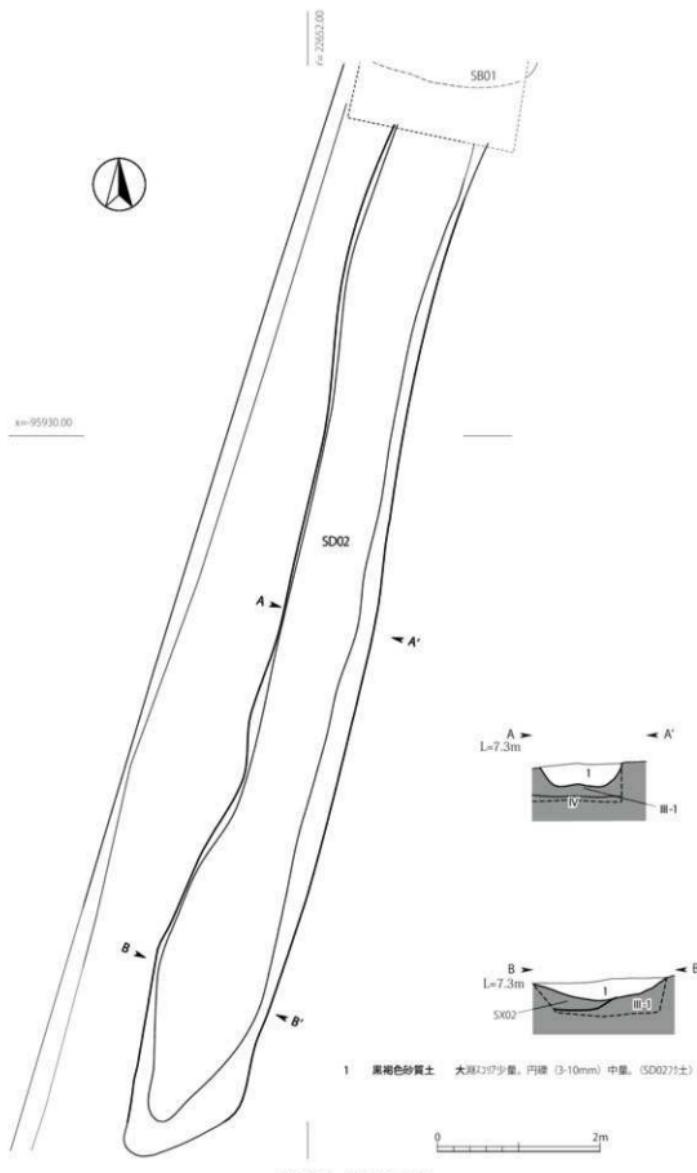
出土遺物：第162図28は土師器長胴壺の底部片であり、底部には木葉痕が残る。胎土は在地系とみられることが、8世紀後半から9世紀に帰属するとみられる。

所見：出土遺物は少ないものの、大渦スコリアを含む覆土の状況や長胴壺の破片から、8世紀後半から9世紀の造構と判断される。上層を近世のSX02に切られているため、本来はもっと深さがあったのであろう。馬歯についても、調査時の土層観察からはSD03に伴うものと判断した。ただ、出土レベルはSX02掘り方底面から20

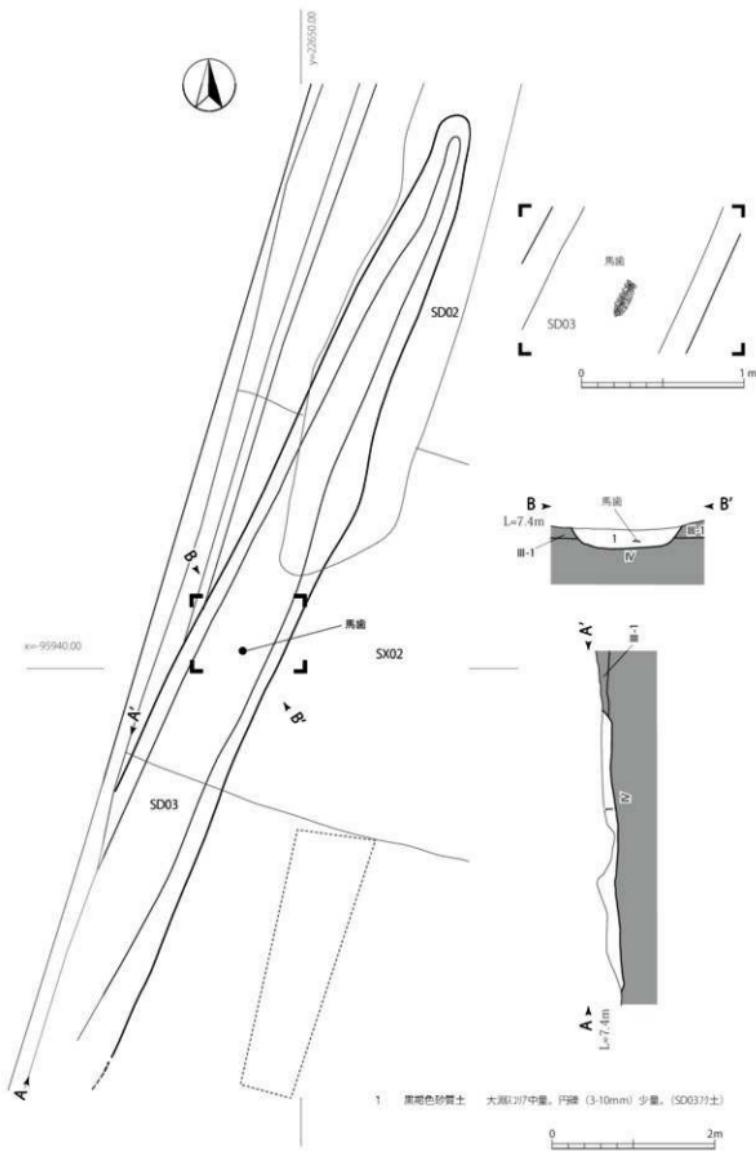




第155図 SD01 (S=1/60)



第156図 SD02 ( $S=1/60$ )



第 157 圖 SD03 (S=1/60)

cm下方でしかなく、近世の遺構に伴う可能性を完全に否定することはできない。資料の正当な評価のためには、理化学的な年代測定も求められる。

## SD04（第158図・PL19）

重複関係：(古) SD03 → SD04 → SX02 → SD02 (新)

主軸方位：N - 102.0° - E

残存状況：調査区中央付近に位置し、東西方向へ延びる溝状遺構である。規模は残存値で、延長 4.6 m、最大幅 2.2 m を測る。また部分的ではあるが、底面には凹凸が認められる。

覆土：黒褐色砂質土が 40cm 程の厚さで自然堆積する。

底面には、部分的に暗褐色土の堆積が認められる。

出土遺物：図示できる遺物はない。

所見：覆土からは近世頃の遺構と考えられる。この遺構の埋没後、同主軸の硬化面遺構 (SX02) が設けられる。

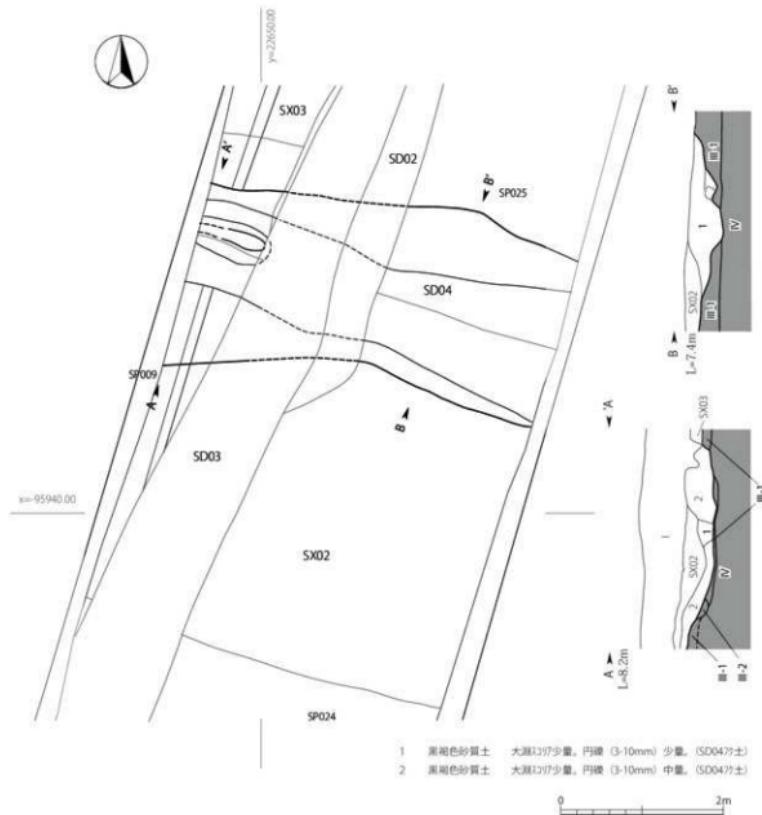
## 不明遺構

## SX01（第159図・PL19）

重複関係：(古) SX01 → SD01 (新)

主軸方位：不明

残存状況：調査区北端に位置する性格不明の掘り込みで



第158図 SD04 (S=1/60)

ある。東側はSD01、北側は擾乱により削平されており、詳しい形態は不明である。残存値として東西18m、南北1.1mを測る。

覆土：円礫を多く含んだ黒褐色砂質土が25cm程の厚さで堆積する。

出土遺物：第162図29は弥生土器壺の肩部片であり、扇形文が施されている。30は胎土に鉄粒が入る漁戸・美濃系陶器のすり鉢であり、17世紀に帰属するとみられる。31・32は須恵器壺の破片である。

所見：残存状況が悪く、遺構の時期を積極的に判断することができないが、近世遺構の可能性が高い。

#### SX02（第160図）

重複関係：（古）SD03 → SD04 → SX02 → SD02（新）

主軸方位：N - 107.0° - E

残存状況：調査区南側に位置し、幅4.8mで東西方向に延びる遺構と認識される。一度掘り込みを行った後に土を入れ、上面を固く締めて形成されたものと考えられる。

硬化面は一部で検出されない箇所もあり、部分的な削平を受けているものと判断した。道路跡の可能性も考えられたが、調査範囲内での検出状況では判断できなかった。覆土：SX02上面には1層が堆積していた。

出土遺物：掘方埋土中より出土した遺物を図示した。第162図33は須恵器壺蓋の天井部片であり、摘みが欠損している。34は土師器壺である。ともに奈良時代のものと考えられる。

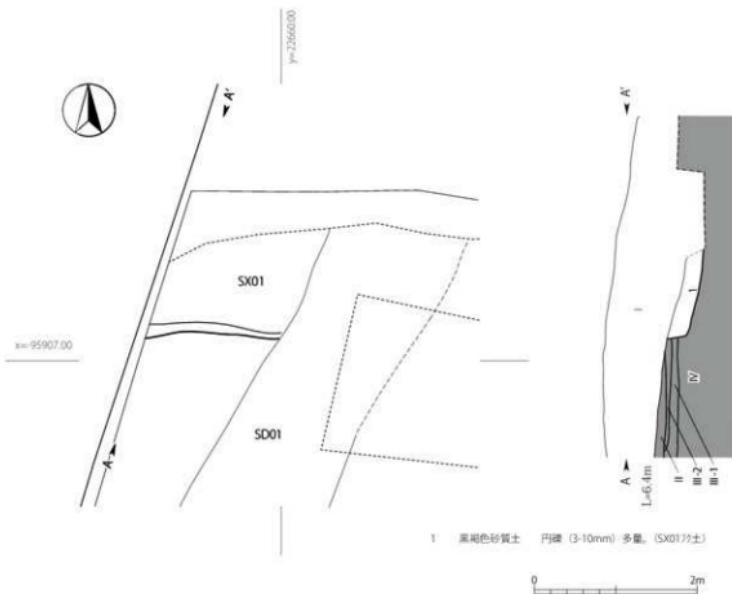
所見：切り合ひ関係や掘方埋土の状況から、近世遺構と判断しておく。SD04と同一主軸を有することから、本来は同機能の遺構であった可能性がある。SX02が近世頃の道路遺構であれば、SD04はそれ以前の路面側溝であった可能性もあるだろう。

#### SX03（第161図・PL.19）

重複関係：（古）SX03 → SD02（新）

主軸方位：N - 105.0° - E

残存状況：SX03は、調査区中央付近に位置し、東西方



第159図 SX01 (S=1/100)

に向延びる幅1.5mの溝状の形状を呈する構造である。東側はSD02と重複し削平されていて、全体的な形状等は不明である。断面の形状は逆台形でやや深い溝であり、南北両側に緩い段をもつ。

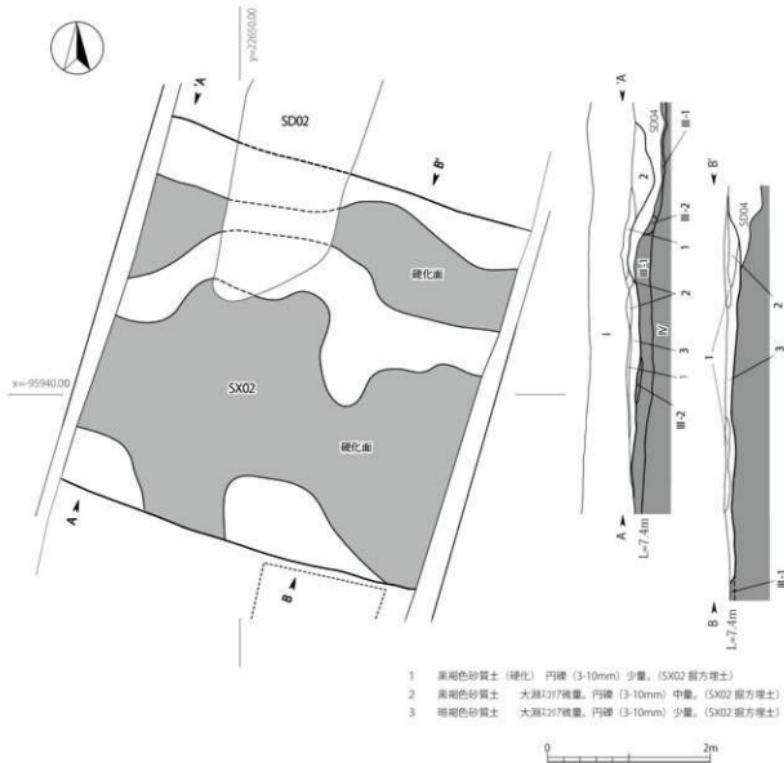
覆土：覆土は多量の大潤スコリアを含む暗褐色土等が、45cm程の厚さで堆積する。

出土遺物：第162図35は土師器壺の口縁部片であり、外面には横方向のヘラミガキが施される。

所見：出土遺物も少なく時期も不明であるが、覆土中の大潤スコリアの量は注意される。古墳時代後期（スコリア下降後）まで遇上する可能性もあるだろう。

#### 包含層出土遺物（第162図・PL.22）

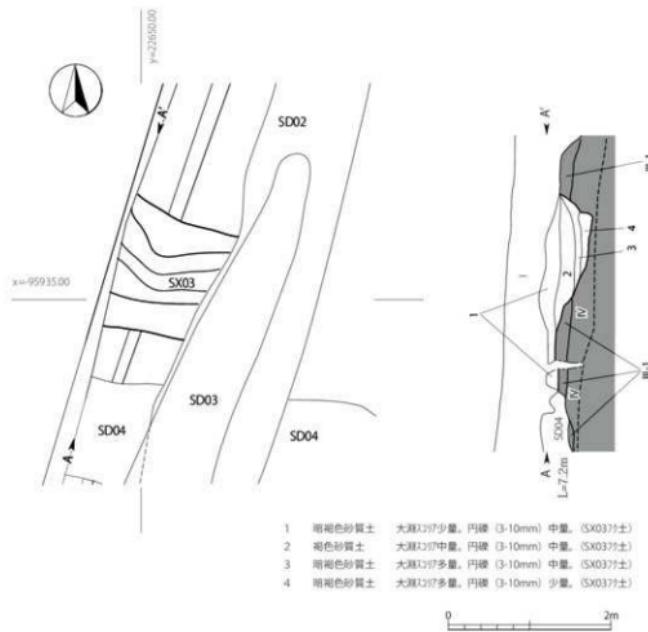
36は須恵器环身の底部片で、45は土師器鍋の破片である。37・38・42は、灰釉陶器の破片である。39は天目茶碗の破片で、16世紀のものの可能性がある。40・41・44は漸戸・美濃系陶器であり、40は18世紀末から19世紀前半の高い受付をもつ油受け皿、41は17世紀前半の笠原鉢、44は18世紀中頃から後半の片口鉢であり底面には墨書きがある。43は肥前系の刷毛丸碗で18世紀のものである。46は海浜螺の平皿面の一部に擦痕がみとめられることから、磨石と考えられる。47は鉄製刀子の破片であり、片開式である。（藤村・小島）



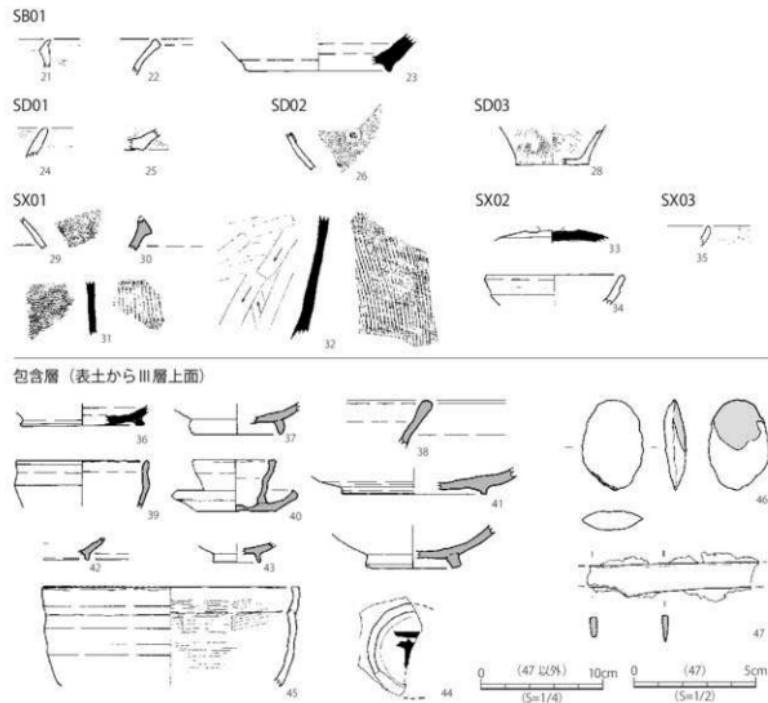
第160図 SX02 (S=1/60)

## 参考文献

- 木ノ内義昭 2002「須恵器流入以降～律令時代の土師器の様相」「東平道路 第16地区（三日市廃寺跡）、第27地区発掘調査報告書」富士市教育委員会
- 佐藤祐樹 2011「急生～古墳時代における官派遺跡を取り巻く社会構造の変化」『官派遺跡IV』富士市教育委員会
- 佐藤祐樹・藤村 雅 2013「考古学からみた富士山の噴火と地域社会の変動－古墳時代・平安時代を中心にして－」静岡県考古学会 2012年度シンポジウム実行委員会編「考古学からみた静岡の災害と復興」静岡県考古学会
- 鶴宮晋士編 1995「平田前田道路」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第103集（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木敏則 1999「遠江の古墳時代中期土器様式（山ノ花様式）」『東国土研究』第5号 東国土器研究会
- 藤村 雅 2011「平成21年度 富士市内道路発掘調査報告書」富士市教育委員会
- 山本惠一 1995「静岡県下の6～7Cの土師器。駿河東部・伊豆北部の現状について」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 山本惠一 1999「駿河の古墳時代中期の土器 一東駿河を中心にしてー」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- 渡井英智 1999「弥生・古墳時代編」『浜戸道路・市立富士宮第三中学校校舎増改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』・『富士宮市文化財調査報告書第23集 富士宮市教育委員会
- 渡井英智 1999「中見代式土器小考。大鄭式土器から中見代式土器へー」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会



第161図 SX03 (S=1/60)



第162図 出土遺物実測図（奈良時代以降）

第11表 柏原遺跡第6地区 出土遺物観察表

土器

探査	回数	報告番号	出土位置	出土層位	種別	器種	残存率	DTH (cm)	器高 (cm)	実径 (cm)	内面色調	外面色調	備考
第146回	PL_20	1	遺物集中 I	Ⅳ・Ⅴ層上面	土師器	壺	90%	12.6	30.5	8.1	10YR6/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	底部木葉模
第146回	PL_20	2	包含層	Ⅳ層中	土師器	壺		(2.0)			SYR5/4 (にぶい赤褐)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	S字型、TP203
第146回	PL_20	3	包含層	V層	弥生土器	壺	-	(3.5)			10YR6/4 (にぶい黄橙)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	頭部に縄文
第146回	PL_20	4	包含層	Ⅳ・V層中	弥生土器	壺		(3.3)			25Y5/3 (黄褐)	10YR5/4 (にぶい黄褐)	TP202
第146回	PL_20	5	包含層	Ⅳ・V層中	弥生土器	壺		(5.7)			10YR6/4 (にぶい黄橙)	10YR6/6 (明黄)	底部木葉模
第146回	PL_20	6	包含層	Ⅳ・V層中	弥生土器	壺	(20%)	9.0	(1.6)	25Y5/1 (黄灰)	7.5YR6/4 (にぶい橙)	TP201	
第146回	PL_20	7	包含層	Ⅳ・V層中	弥生土器	壺		(2.5)			SYR5/6 (明赤褐)	25Y5/3 (黄褐)	TP202
第153回	PL_21	8	遺物集中 I	Ⅳ・V層上面～Ⅲ層中	土師器	壺?	(20%)	19.0	(1.9)		10YR6/4 (にぶい黄橙)	10YR6/4 (にぶい黄橙)	
第153回	PL_21	9	遺物集中 I	Ⅳ・V層上面～Ⅲ層中	土師器	壺?	(60%)	(32.0)	7.8		10YR6/4 (にぶい黄橙)	25Y5/3 (黄褐)	底部木葉模
第153回	PL_21	10	遺物集中 I	Ⅳ・V層上面～Ⅲ層中	土師器	壺 or 壺?	(40%)	(3.8)	7.8	1.0	10YR7/6 (明黄褐)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	底部木葉模
第153回	PL_21	11	遺物集中 II	Ⅳ・V層上面～Ⅲ層中	土師器	壺 or 壺?	(50%)	19.4	(6.9)		25Y7/3 (浅黄)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	
第153回	PL_21	12	遺物集中 III	Ⅳ・V層上面～Ⅲ層中	土師器	壺 or 壺?	(60%)	18.9	(7.6)		10YR8/4 (浅黄)	10YR7/4 (にぶい黄橙)	

桟国	図版	報告番号	出土位置	出土層位	種別	器種	残存率	口徑(cm)	高さ(cm)	底面積(cm)	外面色調	備考	
第153国	PL.21	13	遺物集中3	Ⅳ層上面～Ⅲ層中	土師器	壺 or 壺	(60%)	15.8	(13.0)	25Y7/4 (灰黄)	10YR8/4 (灰黄)		
第153国	PL.21	27	遺物集中3	Ⅳ層上面～Ⅲ層中	土師器	壺 or 壺	(60%)	(5.0)	8.8	25Y7/4 (灰黄)	10YR7/4 (灰黄)	底部木蓋痕	
第153国	PL.21	14	遺物集中5	Ⅳ層上面～Ⅲ層中	土師器	壺		(13.0)		10YR7/4 (灰黄)	10YR7/3 (灰黄)		
第153国	PL.21	15	遺物集中5	Ⅳ層上面～Ⅲ層中	土師器	壺	(40%)	(23.0)		75YR7/6 (橙)	10YR8/4 (浅黄)		
第153国	PL.21	16	包含層	Ⅳ層上面～Ⅲ層中	土師器	壺		(2.0)		10YR5/4 (灰黄・青緑)	10YR6/4 (灰黄)		
第153国	PL.21	17	包含層	Ⅳ層上面～Ⅲ層中	土師器	壺		(2.7)		10YR3/2 (黒褐)	75YR5/4 (黒)	4次11号シ	
第153国	PL.21	18	包含層	Ⅳ層上面～Ⅲ層中	土師器	壺 or 壺	(45%)	(2.1)	8.8	10YR6/4 (灰黄)	10YR6/3 (灰黄)	底部木蓋痕	
第153国	PL.21	19	包含層	Ⅳ層上面～Ⅲ層中	土師器	壺 or 壺	(45%)	(3.5)	9.2	75YR7/6 (橙)	10YR6/4 (灰黄)	3次5号シ	
第162国	PL.22	21	SB01		土師器	小型壺		(2.3)		10YR4/2 (灰黄)	75YR4/3 (黒)		
第162国	PL.22	22	SB01		土師器	壺		(2.8)		75YR4/4 (黒)	75YR5/4 (黒)		
第162国	PL.22	23	SB01		粗毛器	壺	(25%)	(3.1)	12.6	25Y6/2 (灰黄)	25Y6/2 (灰黄)		
第162国	PL.22	24	SD01		土師器	壺		(2.4)		25Y4/2 (暗灰黄)	5YR5/4 (灰黄)		
第162国	PL.22	25	SD01		土師器	壺		(1.7)		5Y3/2 (灰黄)	10YR4/2 (灰黄)		
第162国	PL.22	26	SD02		弥生土器	壺		(3.1)		10YR5/4 (灰黄)	75YR6/6 (橙)	頭部に纏文、円形序文	
第162国	PL.22	28	SD03		土師器	壺	(25%)	(3.2)	6.0	75YR5/4 (灰黄)	7.5YR4/4 (黒)		
第162国	PL.22	29	SX01		弥生土器	壺		(2.6)		75YR6/4 (灰黄)	10YR6/4 (灰黄)		
第162国	PL.22	30	SX01		漁戸・美濃	すり鉢		(2.6)		25Y4/2 (暗灰黄)	10YR4/2 (灰黄)		
第162国	PL.22	31	SX01		粗毛器	壺		(4.5)		25Y5/1 (灰)	5Y5/1 (灰)		
第162国	PL.22	32	SX01		粗毛器	壺		(10.0)		25Y6/2 (灰黄)	25Y6/1 (灰黄)		
第162国	PL.22	33	SX02		粗毛器	壺蓋	(40%)	(0.9)		25Y6/2 (灰黄)	25Y5/2 (暗灰黄)	つまみ径19cm	
第162国	PL.22	34	SX02		土師器	壺	(20%)	11.2	(2.4)	5YR5/4 (灰黄)	7.5YR5/4 (灰黄)		
第162国	PL.22	35	SX03		土師器	壺		(1.7)		75YR5/3 (灰黄)	75YR5/4 (灰黄)		
第162国	PL.22	36	包含層	Ⅲ層上面	粗毛器	壺身	(20%)	(1.6)	10.0	5Y6/1 (灰)	5Y5/1 (灰)		
第162国	PL.22	37	包含層	Ⅲ層上面	灰陶器	碗	(20%)	(2.3)	6.6	25Y5/2 (暗灰黄)	25Y6/2 (灰黄)		
第162国	PL.22	38	包含層	表土～Ⅱ層	灰陶器	壺		(3.9)		5Y6/2 (灰白)	25Y6/2 (灰黄)		
第162国	PL.22	39	包含層	Ⅲ層上面	天目茶碗		(20%)	10.8	(3.8)	10YR17/1 (黒)	10YR3/4 (暗黑)		
第162国	PL.22	40	包含層	Ⅲ層上面	漁戸・美濃	油付鉢	80%	6.6	4.2	6.4	25Y6/3 (灰黄)	25Y5/2 (暗灰黄)	高い受け
第162国	PL.22	41	包含層	Ⅲ層上面	漁戸・美濃	笠原鉢	(20%)	(2.2)	11.8	25Y7/2 (灰黄)	25Y6/2 (灰黄)		
第162国	PL.22	42	包含層	Ⅲ層上面	灰陶器			(1.8)		25Y6/2 (灰黄)	25Y6/2 (灰黄)		
第162国	PL.22	43	包含層	Ⅲ層上面	肥前	八日碗	(40%)	(1.6)	3.9	5Y6/3 (灰白)	25Y6/4 (灰白)		
第162国	PL.22	44	包含層	Ⅲ層上面	漁戸	片口鉢	(40%)	(3.4)	7.6	25Y6/4 (灰黄)	25Y6/2 (灰黄)	底面に墨書き	
第162国	PL.22	45	包含層	表土～Ⅱ層	土師器	鍋	(20%)	20.8	(8.1)	10YR6/4 (灰黄)	10YR6/2 (灰黄)		

土製品・鉄製品・石器

桟国	図版	報告番号	遺物名	出土位置	種別	器種	重量(g)	a長(cm)	b幅(cm)	c上側深(cm)	d下側深(cm)	e孔径(cm)	備考
第153国	PL.21	20	包含層	Ⅳ層上面～Ⅲ層中	土製品	土玉？	21.96	28	28	1.0	1.1	0.6	
桟国	図版	報告番号	遺物名	出土位置	種別	器種	重量(g)	全長(cm)	刃部長(cm)	刃部幅(cm)	刃部厚(cm)	茎部長(cm)	茎部幅(cm)
第162国	PL.22	46	包含層	Ⅲ層上面	鉄製品	刀子	10.26	(7.0)	(5.4)	1.1	0.2	(1.6)	0.8
桟国	図版	報告番号	遺物名	出土位置	種別	器種	重量(g)	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)			3次8号シ
第162国	PL.22	47	包含層	Ⅲ層上面	石器	磨石	71.93	7.4	4.9	1.5			

## 第4節 第7地区の調査成果

### 第1項 調査の経緯と概要

調査の経緯 平成22年、株式会社アバマン（以下、事業者）は富士市中柏原新田155-1外（1348.74m<sup>2</sup>）において宅地分譲地造成工事を計画した。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「柏原遺跡」の範囲内に位置するため、平成22年12月24日、事業者より富士市教育委員会教育長に宛て「埋蔵文化財試掘確認調査依頼書」とおよび「発掘調査承諾書」が提出された。

これを受けて、富士市教育委員会文化振興課により試掘確認調査が行われることとなった。

#### 調査の概要 調査は平成23年1月12日におこなった。

当該地には最近まで、基礎が地表下2~2.5mまで及ぶ大型の建造物が存在しており、その跡地部分については遺跡が残存していないことが建造物解体時の立会い調査によって確認されている（H22富教文発第31-63号）。その為、建造物が建っていないかった部分を中心にトレンチを3本（45.6m<sup>2</sup>）設定し、重機による表土掘削後、人力による精査を行い、遺構や遺物の検出につとめた。

その結果、1トレンチでは地表下2mで、古墳時代から律令期ごろのものとみられる堅穴建物跡1軒が検出され、土師器・須恵器などの遺物も出土した。遺構の基盤層であるIV層の前後では浸水が確認されている。2トレンチでは建物建設に伴う掘削がIV層まで及んでおり、遺跡が残存していないことが確認され、3トレンチでは建物建設の影響は及んでいないものの、遺構や遺物は残存しないことが判明した。

試掘確認調査の結果（平成23年1月25日、富教文発第441号）、旧建造物の影響が及んでいない調査地北側には埋蔵文化財が残存しているものの、1トレンチにおける遺構・遺物の検出面が地表下約1.8mにあり十分な保護層が確保できること、道路建設予定部分の3トレンチには遺構が残存しないことなどから、静岡県教育委員会文化財保護課より、工事立会をおこなうよう指導があり（平成23年2月16日、教文第1720号）、事業者にこれを伝達した（平成23年3月1日、富教文発第496号）。



第163図 柏原遺跡第7地区 調査地位図 (S=1/5,000)

### 第2項 遺構と遺物

堅穴建物跡 1トレンチ土層断面観察において、堅穴建物跡1軒（SB1）を検出した。IV層を掘り込んで造られており、南北幅は不明であるが、土層断面から推定される東西幅はおよそ4.5m、残存部で床面までの深さはおよそ40cmを測る。また、1トレンチ北壁ではSB1覆土（1層）の中央付近に粘土を多量に含むにぶい黄褐色土層（2層）が確認されており、カマドであると考えられる。

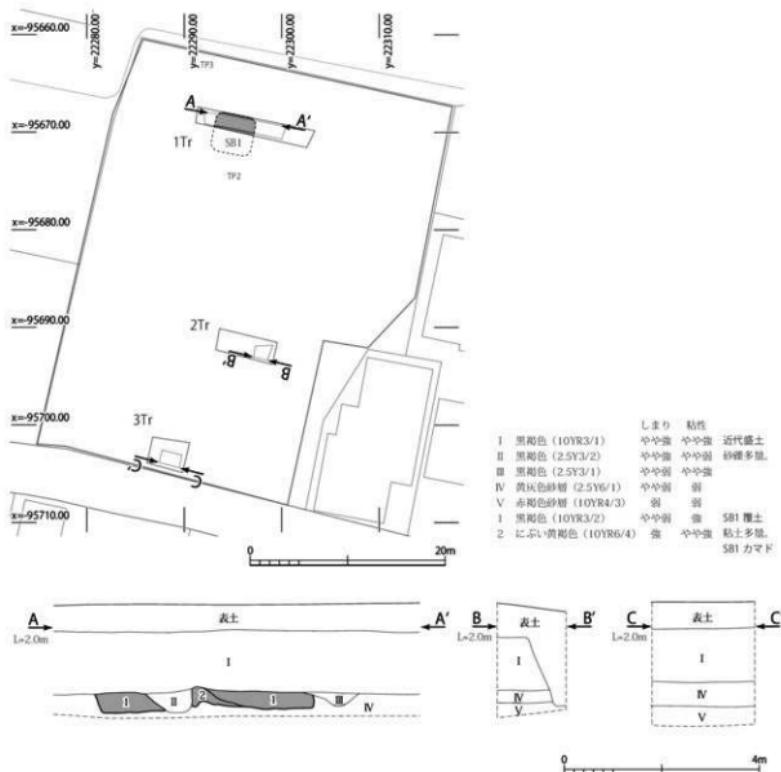
出土遺物（第165図） 1トレンチから出土した5点を図示した。

1・2は土師器駿東型壺の底部片である。いずれもみこみには放射状のヘラミガキが施され、底部はヘラ切りで整えられる。1は中心に糸切り痕を残す。

3は土師器鍋の口縁部片である。

4・5はいずれも天井部をヘラケズリする須恵器蓋である。4は天井部の丸みが強く、返りが天井端部よりも突出する。

（若林）

第164図 柏原遺跡第7地区 トレンチ配置図 ( $S=1/500$ )・セクション図 ( $S=1/100$ )

第165図 柏原遺跡第7地区 出土遺物

第12表 柏原遺跡第7地区 出土遺物観察表

標図	図版	報告番号	出土場所	種別	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面色調	外面色調
第165図	PL.16	1	1Tr	土器	壺	25%	-	(1.1)	(6.2)	5YR5/6 (明赤褐色)	5YR4/6 (赤褐色)
第165図	PL.16	2	1Tr	土器	壺	25%	-	(1.1)	(8.4)	5YR5/6 (明赤褐色)	5YR5/4 (にぶい赤褐色)
第165図	PL.16	3	1Tr	土器	壺	-	-	(2.5)	-	7.5YR5/4 (にぶい赤褐色)	7.5YR4/3 (赤褐色)
第165図	PL.16	4	1Tr	須恵器	壺	20%	(8.6)	(2.6)	-	10YR5/1 (褐灰)	2.5Y5/1 (黄灰)
第165図	PL.16	5	1Tr	須恵器	壺	20%	-	(1.9)	-	2.5Y5/1 (黄灰)	2.5Y6/1 (黄灰)

## 第5節 静岡県富士市中柏原新田40「柏原遺跡」の地形地質

上杉 陽（都留文科大学名誉教授）

### I 本遺跡の地形地質学的な立地環境

#### 1. 本遺跡は田子の浦砂丘にある

本遺跡は富士川河口から駿河湾岸沿いに10km東方、狩野川河口から12km西方に位置する幅430m弱、標高10m余の砂礫洲 sand and gravel barrier の稜線直近北側斜面にある。一般に砂州と砂礫洲をあわせて砂州と呼ぶことが多い。その砂州とは1988年発行の地形学辞典によれば「波食によって生じた砂礫や河川によって運ばれた砂礫が、岬や海岸の突出部から海側に細長く突出した地形で、砂嘴がさらに伸びて対岸にはとんど結びつくようになったものをいう（解説：山内秀夫）」のことである。本地域の砂州は、興津川～由比川間の庵原山地～身延山地や由比川～蘆原間の山地丘陵を削る海蝕崖並びに富士川～潤井川～狩野川などの諸河川から搬出された砂礫が沼津港東方の伊豆半島西岸山地までを繋いで堤防状の高まりで、多くの地点では砂州ではなく砂礫洲である。

いつ頃からか田子の浦砂丘と呼ぶようになったが、砂丘 sand dune というと、地形学上は単なる砂の丘ではなく、風成の丘状～堤状の地形を言う（松倉、1988）。ここは、小川（1965）が述べているように、大半は海成砂礫で構成される砂礫洲である。もちろん、風はいつも吹いているので、局所的～全域的に常に風成砂や風成塵は付加されている（遠藤・上杉、1974）。

#### 2. 田子の浦砂丘の区分

人々が生活していくうえで重要な内陸側地形との関係で、あるいは前面の海底地形との関係で、本砂礫洲を以下のように区分した。

##### 1) 富士川河口～潤井川河口間・内陸側奥部に富士川断層地塊帯がある。

上記の砂礫洲は富士川河口に始まり、西南西から東北東に延び、幅と高度を増していく。東方5.5kmに流出する富士山山頂部～南西麓を流域とする潤井川河口部（田子の浦港）西岸の前田新田～みなと公園一帯までは、国土地理院1981年発行の2万5000分の1国土基本図「吉原」では、幅が250m前後である。Garmin社の

GPSmap60CSx では標高10m以上の幅が120mを超える。

この地域の背後には富士川扇状地があり、そのさらに奥には富士川河口断層帯（地震調査研究推進本部、1998）により隆起した断層地塊群がある。富士川は供給土砂量が多く、富士市は洪水～土石流被害に遭いやすい地域である（富士市教育委員会、2013）。上記国土基本図によれば、富士川扇状地の河口約5km上流に位置する木神社～松岡一帯から分流した扇状地沼河川群は大きく東にそれ、潤井川扇状地と合体しつつ、東方の浮島ヶ原に流出している。

なお、国土庁土地局・静岡県地震対策課が1983年に発行した静岡県土地保全図[自然環境条件図]によれば、この地域の沖合は海岸から僅か12kmで大陸棚外縁水深150mとなる。平均傾斜は7～8度もある。沖合7.4kmで水深1000mの駿河舟状海盆（駿河トラフ）に達する。平野域と深海域が、これほど接近している地域は、本地域を含む駿河湾湧奥中西部と伊豆半島を挟んで東側に位置する相模舟状海盆（相模トラフ）湧奥中西部だけである。富山湾沿岸部が多少はそれに近い。

##### 2) 潤井川河口～須津川扇状地間・その沖合は日本各地の砂州の中では、とりわけ、急傾斜で説明を要する。

潤井川河口沿（田子の浦港）東岸で砂礫洲の方向は西南西～東北東方向から西北西～東南東方向に急転換し、幅も急激に広くなる。何故、ここで方向が急変するのかについては今後の課題である。幅は上記国土基本図「吉原」によれば1000mを超え、砂礫洲が少なくとも3列に分岐する。

そのうちの内陸側の砂礫洲と北西から南東に向かう潤井川～富士川複合扇状地分流群の自然堤防がどこで接続ないしは接近すれば、そこを渡河点として、人々はこの砂礫洲上に移住できる。

阿字神社里宮・同奥宮などが立地する中央砂礫洲では標高20mを超える頂部が点々と列状に存在する（Garmin社のGPSmap60CSxの基団は北海道地図株式会社作成）。何故こここの標高が高いのか？小川（1965）はこの一帯は暴浪や強風の集中点にあたり、風成砂が厚

く堆積するためと考えた。

この地域の背後では、現潤井川扇状地（旧富士川扇状地を含む）、富士火山と愛鷹火山の境界を流れる赤瀬川の扇状地、愛鷹火山南西一帯を流域とする須津川の扇状地の砂質～砂礫質自然堤防～網状流砂礫堆と浮島ヶ原西部後輩湿地堆積物とが複雑に入り組んでいる。

田子の浦港東端の旧吉原宿一帯から本道跡近辺までは、上記の扇状地沿いの自然堤防～網状流砂礫堆をつたって、西側～北側から浮島ヶ原を渡り、田子の浦砂丘に移動しうる重要な渡河地点となるので、やや古い時期から居住～生活拠点となったと思われる。

なお、この地域の沖合では、海岸から僅か400～600mで水深が150mとなる。平均傾斜は15～21度もあり、日本各地の砂州の中では、とりわけ特異的に急傾斜である。8.6km沖合で水深1000mの駿河舟状海盆（駿河トラフ）に達する。日本各地の砂州（松原、2000）の多くは、前面に広い大陸棚（幅が10キロ以上で、水深が150m以浅）があるのに対して、本砂礫洲一帯では例外的に大陸棚部分がほとんどなく、急崖で深海底に直接している。多少誇張はあるが、大陸棚外縁頂部砂礫帶 continental shelf edge barrierとも呼べる状態である。しかも、羽田野ほか（1979）によれば、本砂礫洲の内陸側浮島ヶ原では、泥層が厚く、砂礫層上面は北方（内陸側）の愛鷹山地に向けて深度が増すとされている。このような本砂礫洲の構造は、確かに沿岸沖洲には東西に延び、山内（1988）の言う通りで、「波食によって生じた砂礫や河川によって運ばれた砂礫が、岬や海岸の突出部から海側に細長く突出した地形で、砂嘴がさらに伸びて対岸にはほとんど結びつくようになったもの」であるから coastal barrierであるが、それだけでは説明できない地質構造上の特異性を帯びているように思われる。

富士川扇状地以西に設定されている南北方向のプレート境界複合断層帯（富士川断層系、山崎、1979；山崎・加藤、1986）ないしはプレート境界を切る特A級の活断層（恒石・塙坂、1978；恒石・塙坂、1981；恒石、1984）だけでは、こうした概略東西方向の大陵外縁頂部砂礫洲帯形成を説明できないのではないか？現伊豆半島海岸部に最終間氷期の海成段丘（いわゆる下末吉段丘）が存在しない（全城にわたって沈降している？）こと（上杉他、2001）を考え合わせると、ここに水平に近い押し込み押しかぶせ断層 underthrustを設定すべき

かもしれない。今後の課題である。

3) 須津川扇状地～沼津市新中川間・・内陸側に浮島ヶ原主部＝浮島沼主部がある。

砂礫洲の幅は東に向けて徐々に狭まり、本道跡一帯では幅が450m前後、標高10m以上の幅は200m前後となる。それ以東では、国土地理院1981年発行の2万5000分の1国土基本図「沼津」によれば、本道跡東方5km弱の沼津市JR東海道線原駅辺りまでは幅が450mのままであるが、それ以東では原駅から東方1.1kmの大塚（後述する愛鷹火山の東半部の南東への張り出しの延長線上）で幅が620m余、原駅から東方3.25kmの片浜一帯では幅が1kmとなる。東方狩野川河口一帯でも砂礫洲の幅は800mである。頂面標高は本道跡から東方9kmの沼津市西門町以東では10m以下となる。幅は東に広がるが高度は西高東低となる。

この一帯の背後の愛鷹火山南縁と田子の浦砂礫洲との間に長大な浮島ヶ原湿地～沼地主部が残る。当然、水産資源に富み、湿地化が進むにつれて、水田耕作も可能となるので、弥生時代以降はこの砂礫洲の内陸縁に沿って居住地点が増えるはずである。松原（1992）はこの地帯内の浮島ヶ原主部内の微高地（離鹿塚遺跡一帯）で標高1m以下の西北西～東南東方向に延びる縄文晚期以前の砂礫帶を検出し、これを浮島ヶ原地下に伏在する砂礫洲Iとした。

なお、本道跡東方5.5kmの愛鷹火山が南東に1kmほど張り出す境界となる根古屋～東原間（境界は高橋川）から砂礫洲上の大塚を結ぶ北東～南西方向の地形境界で、この地域の沖合地形は大きく変化する。西側地域は沖合800mで水深150mとなる。平均傾斜は10度もあり、日本各地の砂州の中では、特異的に急傾斜である。9キロ沖合で水深1000mの駿河舟状海盆（駿河トラフ）に達する。他方、東側地域は駿河湾東奥部の大陵棚が広がる一帯で、海岸から水深150mまで水平距離で4km前後となる。ここは日本の多くの海岸砂州地帯と同様な海底地形となっている。

4) 黄瀬川・狩野川扇状地との接続部・・愛鷹火山南東張り出し部、狩野川・黄瀬川扇状地三角州との接合点で交通の要衝

この砂礫洲の東端部（新中川以東）は、前述の愛鷹火山南東縁の南西への張り出し部や黄瀬川・狩野川下流部の扇状地～三角州部（松原、2000）と広く接続してい

る。ここは畿内と東国や甲斐の国を結ぶ官道が走る地域であり、重要な交通の要衝となる。沖合は、駿河湾東奥部で大陸棚が広く、沖合から水深 150 m まで水平距離で 4km 前後となる。

### 3.「田子の浦砂丘」を構成する砂礫は、どこから供給されたのか?

田子の浦砂礫洲を構成する砂礫はどこから供給されたものであろうか? 地形学的には、陸地測量部明治 20 年測量の 2 万分の一地形図「蒲原」によれば、富士川河口部で本流及び各分流が沿岸部で大きく左折、つまり東に曲げられている点及び狩野川が河口部で大きく左折、つまり東に曲げられて砂礫洲の内陸側湿地部を南流した後に沼津港一带で砂礫洲を切り駿河湾に流出している点が重要である。これらから、田子の浦砂礫洲を構成する砂礫粒子の多くは西側(富士川や潤井川など)から東に向かう沿岸流で移動運搬堆積し、例えば、高潮・高波・津波(これらを、以下、暴浪と総称する)や大脛温帯~熱帯低気圧襲来時の大波)により打ち上げられたものと予想される。

本遺跡構成砂礫層や直近海岸の礫の多くは、興津川~由比川間の庵原山地~身延山地や由比川~蒲原間の山地丘陵を削る海蝕崖及び富士川上流の南アルプス赤石山地・身延山地・御坂山地・秩父山地から切り出された中生代ジュラ紀以前~中生代白亜紀や新生代古第三紀~新生代新第三紀のチャート(深海の生物化学的沈殿岩 SiO<sub>2</sub>)、泥岩(粘板岩~頁岩等と呼ぶもの)、砂岩、細粒凝灰岩(海底に堆積した火山灰)や地下から貫入する酸性深成岩体などで構成されていた。これ以外に、富士火山起源の黒色玄武岩質岩礁や愛鷹火山・潤火山等の安山岩質=ディサイト質溶岩類などが含まれる。明確に東方狩野川起源と断定できるものはない。富士川は流域面積が狩野川の 4.7 倍、本流長も 2.8 倍であり、富士川の砂礫流出土砂量は狩野川よりもはるかに多かったと推定される。田子の浦砂礫洲の少なくとも西半部はこれらの西方起源の砂礫で構成されてきたと推定できる。本遺跡東方 3.5 km に位置する田子の浦砂礫洲を横断する明和第二放水路断面を観察した小川(1986)も本砂礫洲中の礫の多くは富士川起源としている。

なお、小川(1965・1986)によれば、狩野川河口北西側の千本浜一帯と南東側の我入道一帯では、狩野川起源の火山岩類礫が多いという。この場合、狩野川河口から土砂が、西側千本浜にも流れるのであるから、狩野川

が最下流部で左折、すなわち、東に流路を変える理由を説明せねばならない。

### II 本遺跡構成層の地質学的な諸特徴

図 1AB は 2011 年 9 月 7 日時点での柏原遺跡第 6 地区東壁の写真柱状図である。以下、上位より、順に記載する。文中の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」に従った。

#### 1. 第 10 層 [遺跡土層番号 I -1]・・現代宅地造成土等

標高 8.1 ~ 8.6 m。層厚 45cm。下半には宅地造成用に人工的な割石を敷き詰めた部分がある。割石の直径は 5 cm 前後のものが多い。割石は、やや成層しており、長軸が水平面に近く、いわゆる「礫が寝ている」状態である。乱雑にまき散らしたものではなく、重機などを使って押し敷き詰めたと思われる。

上半はコンクリート構造物片、アルミ缶、ビニールの紐、電気コード、鉄パイプなどを含むやや乱雑に成層した砂を充填物とする円錐~角錐層である。粗粒物は様々で方向を向いているが、無方向と言ふわけではなく、概ね、水平に近い。円錐の一部は礫表面を構成する面が 1 ~ 2 面しかない。つまり球体~梢円体(一面体)やおはじき状(二面体)で、典型的な海浜礫である。この礫には、ひびが入っている。海浜礫は上流削剥地域から切り出されたひびが多い多面体礫が川の流れの中で順次脱い部分を剥がされ、硬い部分のみが砂や泥で磨滅されて残った下流部に特徴的な三~四面体礫を、さらに海岸の押し波引き波で礫の裏面と表面を交互に磨くことによって作られるもので、硬い芯部のみが残るので、通常は、ひびが多数入ることはない。従って、この地点のこの地層のひびいり海浜礫は、荒天時の礫同士の相互衝突が激しい打ち上げ堆積物か、人工的に海岸部から機械的に掘り出し、乱雑に敷き詰めたものかであろう。但し、これらの礫は、土石流や岩屑流中の礫のように完全に無方向性ではない。やや水平方向に成層している。

#### 2. 第 9 層 [遺跡土層番号 I -2]・・近現代耕作土~客土層

標高 7.9 ~ 7.8m。層厚 40cm。地表部が踏み固められた締まった砂泥層である。近現代の耕作土~農地用客土層と思われる。下半には炭化木片や生木片、円磨海浜礫を含む。本層は下位層を切っているので、本来は下位の第 8 層との間に、近代以前の地層(例えば近世土)が挟在してい

た可能性が高い。

#### 3. 第8層 [遺跡上層番号1-3]・中近世の暴浪堆積物か?

標高7.9~7.6m前後。層厚は30~25cm。上位を第9層に切られ、下位の第7層を切る。つまり、本層の上下に欠層があると思われる。

本層は粘り気がなく、ほろほろと崩れやすい。砂泥混じりの粒径が1ミリ前後の粗砂層で、破碎された砂岩・泥岩起源の細円礫(2~4mm)を含んでいる。赤褐色~赤紫色の火山彈~スコリアも含んでいる。なお、基底部に下位の第7層上半の円礫を含む固結赤褐色スコリア層から剥ぎ取った大きなブロック(直径10~5cm)を含む。本層は粗鬆で飛鳥奈良平安温暖期の諸層ほどには粘り気も黒味もない。色彩的には、恐らくは中近世寒冷期(小氷期)の腐植が十分に蓄積できなかつた時期のもの(いわゆる中近世土: ときにはローム色となる)に類似している。上記破碎細円礫は、海岸から暴浪(高潮高波あるいは津波)で打ち上げられた時に、相互に衝突して礫表面に破碎痕を残したものであろう。

通常時の海浜礫は寄せ波時には、週上する海水を上方に逃がす形で、やや海側に傾いては水平方向に折り重なって堆積し、引き波時には逆に陸側にやや傾いては水平方向に折り重なって堆積する。これの繰り返しで礫の表面が磨かれ二面体~一面体となる。本層の礫は、相互に詰まっているが、垂直に立った礫、露頭面に平行になった破断扁平礫など、全体として無方向性で、しかも砂泥に粒が包まれている。本層の標高は7~8mであるので、静かな海況時の海浜礫~浅海性の礫ではありえず、砂泥混じりの混濁流中で、礫同士が激しく衝突し、多数の破碎痕を残したものと思われる。津波が襲来したのか、それとも、何日も続くような大型の高潮高波堆積物が襲来したのかを識別する粒子単位の識別基準は現状ではない。

#### 4. 第7層~8層間の古代温暖期に対応する可能性がある7世紀初頭~前半以降のコーカン畑遺跡第2地区上位スコリア層 Fj-Kbu

柏原遺跡第6地点では削剥され存在しないが、第7層と第8層との間には、飛鳥奈良平安温暖期の黒味の強い粘りがある層が存在した可能性が高い。これに対応する可能性があるものとして、コーカン畑遺跡第2地区上位スコリア層 Fj-Kbu が考えられる。

コーカン畑遺跡第2地区(富士市江尾727-1: 標高22m前後)は本遺跡の北北東(N10°E方向)2.5kmに位

置する愛鷹火山山麓上に立地し、そこのSB02住居(7世紀初頭~前半)床面を覆う下位から試料④~①は側方で黑色腐植土に移行するスコリア質砂礫層であり、腐植ないしはスコリア中から溶出した  $\text{SiO}_2$  で固められ、團子状~砂利状となっている。これは、加藤・近藤(1960)の言うエカスマサあるいはエカスマサ的な層相と思われる。これらのスコリア層をコーカン畑遺跡第2地区上位スコリア層 Fj-Kbu と仮称する。

詳細調査は今後であるが、これらの試料④~①の腐植で固められたスコリア粒は、腐植を洗い落として観察すると、最大粒径が2~1cm、並みの粒径で5mm前後であり、粒径は本遺跡の第7層中のスコリアと大差ない。しかし、

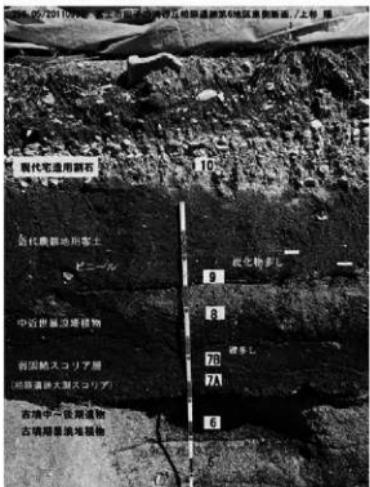


図1A 柏原遺跡第6地区トレチ東壁上部

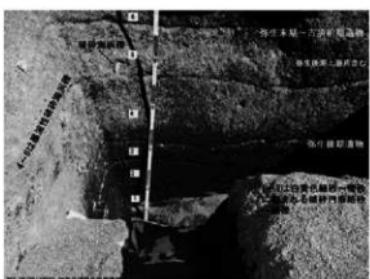


図1B 柏原遺跡第6地区トレチ東壁下部

共通して、以下の①～④のような差異がある。

- ① 気孔面積比を比べれば小である。② スコリア粒の破断面でスコリアの内部の色を観察すると、比べれば赤みが少なく黒色～黒褐色～黒灰色である。③ 気孔隔壁が灰桃色～灰色で比べれば赤みが薄い。④ スコリア粒の破断面を实体顕微鏡（17倍～90倍）で見る限り、柏原遺跡大瀬スコリア層 Fj-Kwb よりも斜長石晶斑が大きく多い。

これらは、富士山南東麓の縄文早期以降のテフラの太郎坊模式地（上杉・大下、2003; N35° 20' 37.1": E138° 47' 42.24") あるいは弥生中期以降のテフラの須走口登山道木ノ根板模式地（上杉・堀口ほか、2003; N35° 21' 53.41": E138° 46' 51.07") の S-24-6 スコリア層（フォールユニットは下位から abc の3層構造、c は溶岩片～火山彈片が多い火碎流相：概略 1200 年前以降）に比較的類似している。なお、S-24-6 前後から西暦 750 年頃の後期鬼高式甕棺等（上杉・松本ほか、2003）が出土し、S-24-6 上半の火碎流からは 1180 ± 100 yrsBP という C<sup>14</sup>年代が得られている（上杉・有留他、2003）。

#### 5. 第7層 [遺跡土層番号 II 及び III ]

標高 7.6 ～ 7.3m、層厚 30 ～ 20cm のスコリア層（図1-2）で、下半部は遺跡土層番号 III に相当し、一次堆積の降下

火山碎屑物（スコリア）である。上半部は遺跡土層番号 II に相当し、図 11 に見られるごとく、円礫が混じる柏原遺跡大瀬スコリア層の二次的な弱固結帶である。

#### 1) 下半部・・・富士系降下火山碎屑物：古墳時代中後期以降の柏原遺跡大瀬スコリア層 Fj-Kwb

本層直下の第6層表層部の遺物は5世紀後半から6世紀前半頃と思われる（藤村、2012）。従って、本層の少なくとも下半部は西暦 450 ～ 550 年以降の主として一次堆積のスコリア層である。本スコリア層を柏原遺跡大瀬スコリア層と仮称する。

最下部はスコリア中から晶出した赤褐色の鉄鉱物で二次的に膠着し、個々の粒子がバラバラに離れることはない。図 3 は下位の第6層上面側から第7層下面を撮影したものである。下底部での柏原遺跡大瀬スコリア Fj-Kwb は最大径が 1 ～ 2cm であり、目立つ並みの粒径が 5mm 前後である。スコリアは表面も内部も高温酸化して赤鉄鉱が生じ赤褐色味を帯びるものと無酸素状態で堆積し、芯部が灰黒色～銀黒色のままのものがある。その後の低温酸化で表皮部に褐鉄鉱を生じ黄褐色～褐色味を呈する。図 4 は低温酸化したもの、図 5・6 は高温酸化したままのものである。表面には縄状によじれた厚皮膜があることがある。スコリアが破断している場合の破断面

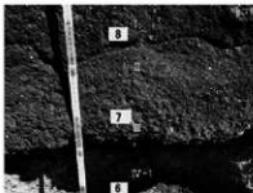


図2 柏原遺跡大瀬スコリア Fj-Kwb (第7層)



図3 柏原遺跡大瀬スコリア  
(下位の第6層側から第7層底部を見たもの)

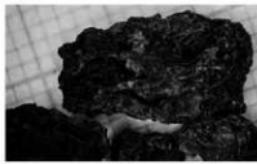


図4 低温酸化した柏原遺跡大瀬スコリア  
縄状によじれた厚皮膜、表面状態断面、多角形～楕円形気孔、気孔隔壁壁が頑丈なのが特徴。このスコリアの場合、内部には面積率で 50% 以下の気孔群がある。その形態は球形～多角形が多く、気孔隔壁壁が厚くて頑丈である。方眼の 1 目盛は 1m。

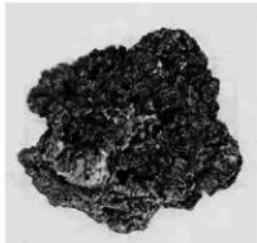
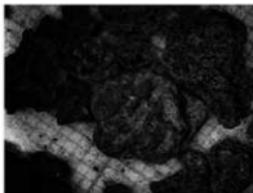


図5 直径 1cm の気孔の多いスコリア例。  
無酸素状態で酸化した芯部は黒色気孔であり、表層部の気孔は高温で酸化したため赤鉄鉱ができる赤褐色を呈する。気孔面積比は 50% を超えている。

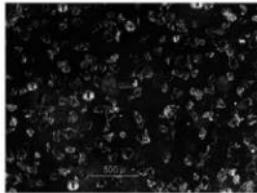


図7 第7層下半スコリア粉碎試料の実体顕微鏡反射光像

は一般に直面状である。破断面で見ると気孔間の隔壁が頑丈であり気孔面積比が50%以下のケース(図4)と50%以上のケース(図5・6)がある。気孔形は多角形状一括円形気孔が多く、直径が数mmの円柱状気孔がある場合はその長い気孔壁を構成する隔壁中に連続して球状気孔(直径1mm以下)が認められる(図6)。

第7層下半部を薄い分けてみると、1mm以上(極粗砂一躍)の部分が全体の83.5%を占め、そのほとんどがスコリア粒であった。異質岩片はない。1mm~0.125mm部分(粗砂~細砂)は13.4%で、ほぼ半分がスコリア片、残りの半分が海岸から飛来した円磨された砂岩片・泥岩片や長石などの結晶鉱物片であった。0.125~0.063mm部分(極細砂)は0.5%であった。過半はスコリア片・火山岩片で、20~30%が海岸からもたらされた円磨粒(大半は泥岩起源)、残りの20%前後が結晶片であった。0.063mm以下のいわゆる泥部分は2.7%を占める。その色調は乾燥色で10YR5/4(黄褐色)、泥水色で7.5YR5/6(明褐色)である。

下半部の標準的なスコリアを20g程度選びだし、これを粉碎して、125μメッシュを通過し63μメッシュ上に留まる粒径、すなわち、最少断面積が0.125~0.063mmとなる粒径にまで粒が揃えられたもののみを集めてプレバラートを作成した。また、スコリア間の充填物についても、薄い分け、125~63μの最少断面積粒径を持つものについて、プレバラートを作成し、他火山起源のテフラ片の検出を行った。

#### <反射光観察の際の分類基準>

スコリア粒子を粉碎し、最少断面積が125~63μの範囲内にあるように粒径を調整することによって、粒数比が重量比や体積比と極端に差異を生じないようにした。なお、最少断面積で薄い分けても、プレバラート上の粒子は、カバーガラスに押し付けられて、最大断面積部分あるいは中間断面積部分を見ることとなる例が多い。図7は本層を構成する平均的なスコリア粒の粉碎プレバラートの反射光写真である。反射光像は光源から入射した光が物体と衝突して直接反射するか、物体内に光が入り屈折して戻ってきた光の色による分類である。入射した光が粒子の外部境界部以外は全て透過し、均等に屈折反射して戻ってきた光を見ることがある。この場合は、我々は、そこに何もない感ずるか、境界部で屈折反射して戻ってきた光だけを見ることとなり、一見、そ

こに何もないあるいは透明なものがあるよう感ずる。このようなケースをここでは氷状*i*としてある。例えば、鉄FeやマグネシウムMgはほとんど入っておらず透光でも透明見える板状の石英、斜長石、流紋岩質ガラスで気孔を含む物は、反射光では、そこに透明一色付きの氷の板があるかのように感ずる。反射光が氷状ではあるが多少気泡がある場合は泡入り氷状*pi*となり、気泡が増えてくると半透明氷状*si*となる。細かい微小な球形気孔が多いと白色メノウ状に見える。こうした状態のものをwoとした。物体が平坦ではなく、粒状であると反射光が乱反射して、全体として白色粉雪があると感ずる。この場合が粉雪状*ps*である。雪が解け始めてシャーベットのようになったように感ずる場合はshである。ガラス部分に長柱状の気泡や透明微結晶(石英・斜長石など)が増えてくると、氷の板があるとは感じず、雪が解け始めてドロドロになりかけたシャーベット状と感ずる。ガラス成分中に鉄Fe分が少ない白色シャーベット*w.sh*もあるし、鉄Fe分が増えてきて黄褐色シャーベット*yor.sh*に見える例もある。一般にガラス成分中に鉄Feが増えてくると、反射光は物体に入った後、光が吸収されてしまい、屈折して視野に戻ってきての光量が減少する。こうなると、黒い泥が混じった汚いシャーベットのように見える。これを泥雪状*ms*と称する。全ての光が吸収され、戻ってこない場合は黒色に見える。これが黒色コクス状*bc*である。赤色系の光は反射するがそれ以外の色彩の光は吸収してしまうと、そこに赤色系物体があるように感ずる。これが赤色コクス状*rc*である。

<色が濃い泥雪状*ms*ガラスやシャーベット状ガラス*sh*が多い>

以上のような分類基準で第7層下半部のスコリア粉碎物(125~63μ)を見ると、図7のように見える。中央には高温酸化のため赤橙色となった赤色コクス状スコリア*rc*が一つだけある。これ以外は見当たらない。なお、図中の半円形の白色二重丸はプレバラート作成時に発生した封入材レーキサイドセメント中の気泡で人為的なものである。分類基準通りに比率を求めてみると、氷状*i*が3%、泡入り氷状*pi*は14.2%で、いずれも透明板状ガラス風ではなく、黄褐色の色付きガラスである。これは、富士系のガラスには鉄分が多いためである。白色メノウ状*wo*や粉雪状*ps*は全くなく、黄褐色シャーベット状*orbr sh*が14%、高温酸化のため赤鉄鉱が生

じ赤みが増えた赤褐色シャーベット rbr sh が 25%、一部に光が吸収されてしまい黒色に見える部分が増えてくる泥雪状 ms が 32% もある。黒色コクス状 bc は 10%、赤色コクス状 rc が 1% であった。

#### <偏光顕微鏡下での諸特徴>

粒子に下から可視光線を当てて、それを通過してくる光を見る透過光観察には偏光顕微鏡が用いられる。これにより、マグマ中の液体部分（噴出して固まるとき粘性の極めて大なる液体、つまり、ガラス部分）と火山ガス部分（気泡部分）が、概略何% ぐらい存在するのか、マグマ溜まり中では、結晶がどの程度形成されたかを調査する。気孔の形状、量比、ガラスの色、結晶粒径をも調査する。結晶が大きい結晶ばかりだったり、微小な結晶だったり、個々のテフラ層ごとに個性がある。

本スコリア層の場合は、以下のような結果が得られて いる。

- 50  $\mu$  以上の大きな結晶は概略 10% 程度しか含まれていない。もし、大結晶が 100% 近くなってしまうと、液体部分やガス部分がないのであるから、マグマ溜まりから噴出できなくなる。10% 程度なら噴出できる。
- 50  $\mu$  以上の大きな結晶のうち、鉄やマグネシウムを含まぬ珪素 Si・アルミニウム Al・酸素 O・ナトリ

ウム Na・カルシウム Ca から構成される透明な軽鉱物（具体的には斜長石）が 89.6% を占め、鉄 Fe やマグネシウム Mg を多く含む高温型のかんらん石（オリーブ色などのオリビンという）が 7.7%、次いで鉄やマグネシウム含量が多い斜方輝石が 1.6%、鉄やマグネシウムばかりではなく、Ca をも含む单斜輝石が 1.0%、鉄鉱物が 0.2% であった。柏原遺跡大潤スコリア層 Fj-Kwb はかんらん石が重鉱物中では最も多い典型的な富士系スコリアである。

c) 50  $\mu$  以下の微結晶をも含んだ液体部分（ガラス部分）と火山ガス部分（気泡部分）は併せて石基 groundmass と呼ばれるが、この部分には次のような特徴があった。

- 全体として、微結晶が石基部分の 25% 以上を占める粒子が全粒子の 96%、25%~5% を占める粒子が 4% である。
- 微結晶の多くは 20  $\mu$  前後の短角状~長柱状である。
- さらにこれとは別に針状の微結晶ないしは晶子 crystallite（結晶の胚珠）が目立つ。
- ガラス部分は屈折率が 1.54 を超える鉄やマグネシウムが多いものである。気泡の面積比は 5% 以下のもの（H 型）が全体の 80% を占め、気孔面積比が 5~25% の



図 8 柏原遺跡大潤スコリア層 Fj-Kwb の典型的な石基構成  
幅 10~20  $\mu$ ・長さ 10~15  $\mu$  の微結晶が面積比で 25% 以上、これ以外に針状の微結晶ないしは晶子が多数ある。

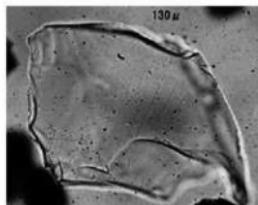


図 9 第 7 層下半に挟在する他火山起源透明ガラス  
ガラスは pmpPHf II 型で富士系テフラではない。

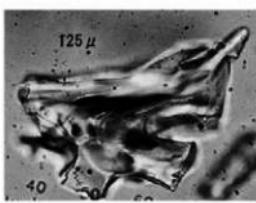


図 10 第 7 層下半に挟在する他火山起源透明ガラス  
ガラスは pmpPHf II 型で富士系テフラではない。

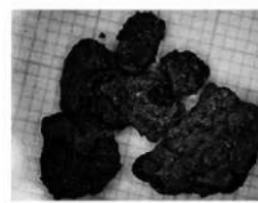


図 11 第 7 層上半を構成する固結破碎円礫入りス  
コリア層。方塊は 1mm 間隔。



図 12 第 7 層上半中の赤褐色スコリア質火山灰  
に包まれる表 1 No.14 破碎円礫。

もの（C型）が2%しかなく、気孔面積比が25%を超えるもの（T型）が18%であった。図8は本層の一般的な石基型である。

d) スコリア粒子間の隙間にしばしば他火山起源のテフラや珪藻や生物硅酸体等の微化石が挟在し、対比に役立つことがある。本スコリア層中の充填物中には、しばしば、他火山起源のアルカリ長石・石英・角閃石・黒雲母や図9・10のような透明で屈折率が低いおそらくは流紋岩質ヘディサイト質火山噴火の産物と思われるやや厚手の薄片状ガラス（pmpPHbw～f<sub>1</sub>型）や長柱状ないしは柱状気孔を面積比で5～25%持つ肉厚のpmpPCco型ガラスが含まれている。長径で100～150μ程度のもので、遠方の火山から飛来したものと思われる。なお、pmpPHbwとあった場合、最初のpはピンク色気味に見えることを示し、次のmpはそのガラス片中に含まれる微結晶や晶子が5%以下であることを示している。mmとあれば、微結晶や晶子が5～25%含まれていることを示す。mrとあれば25%以上含まれる。次の大文字のPはガラスの屈折率が1.54以下であることを示す。もし、Sとあれば、ガラスの屈折率が1.54以上である。Pの次の記号Hは、そのガラス中に気泡が5%以下であることを示す。もしここがCとあれば、気孔面積比が5～25%、Tとあれば、気孔面積比が25%以上の多孔質ガラスであることを示している。

第7層下半部は西暦450～550年以降の主として一次堆積の富士系スコリア層であるが、ほぼ同時期の透明なガラスを噴出する火山としては北関東の榛名山が有名である。榛名山二ツ岳伊香保軽石Hr-FPは西暦550年頃、二つ岳浜川火山灰Hr-FAが西暦500年頃であるとされる。しかしながら、いずれも、主として東方に向けて降下堆積したこととなっている（町田・新井、2003）。多少とも南方方向に飛んだのが二つ岳浜川火山灰Hr-FAである。

## 2) 上部・・・暴浪堆積物の可能性あり

本層上半部には、スコリア堆積時あるいは堆積後に周辺から円礫や風成砂・風成塵が入り込んでいる（図11）。本来の第7層下半を削り込んで新たに堆積した別の地層にも見えるため、考古学的な基準土層番号は、独立させて第Ⅱ層となっている。実際には、柏原遺跡大淵スコリア層の後半の噴火が弱まった時期の同質の火山灰降下時に海岸から暴浪（高潮高波等～津波）が砂礫洲を

週上し、円礫と赤褐色スコリア質火山灰を混濁流として同時に運搬し、この混濁流の中でスコリア片も破碎し、円礫も衝突しあい、円磨粒の表面各所に破断痕を残しつつ堆積したのであろう。

上半部を箇別してみると、1mm以上の極粗粒砂～礫部分が全体の60.9%を占め、その大半はスコリア礫であったが一部は砂岩・泥岩等の破碎円礫であった。1mm～0.125mmの粗砂～細砂部分は27.8%で、海岸部から飛来したと思われる泥岩や砂岩の粒が多かった。つまり、第7層の上半部は下半部に比べて、1mm～0.125mmの粗砂～細砂部分が多く、降下堆積したスコリア間の空隙に飛び込んだ砂岩・泥岩起源の砂粒片が多かったこともわかる。0.125～0.063mmの極細砂部分は1.3%であり、0.063mm以下のいわゆる泥部分が10%を占め、下半部に比べ風化物質ないしは風成塵物質が多いことを示している。その色調は7.5YR5/6明褐色であった。なお、これを水に溶かした場合の泥水色は5YR3/4（暗赤褐色）であった。最上部は風化土壤化し暗褐色を呈し、しばしば、固結帯となる。風化土壤層は7層内で波状帶を構成している。

上記の1mm以上の極粗粒砂～礫部分中の破碎円礫14個を採集し、その長径・中径・短径・細かく観察した場合の粒子表面の面数（細面数）・大雜把に観察した場合の概略の面数（概面数）、破碎部を除いた円磨が進行した部分の円磨度（完全円磨が1.0で円磨部が全くなくギザギザした完全角礫状のものを0.1とする）、現在相当程度破碎部が再度円磨されかかっている部分があるかどうか、新鮮な大破断面があるかどうか、新鮮な小破断面があるかどうか、新鮮な割れ目があるかどうか、岩種、その粒子の表面に付着するものがある場合、それがどのようなものであるのか等の諸特徴を記載した。詳細は表1のとおりである。粒子の最大径は0.9cmで、14個すべての粒子に破断痕が認められた。特に小規模な新鮮破断面は全ての粒子に認められた。また、大部分の粒子は赤褐色スコリア起源の風化赤褐色スコリア質火山灰に含まれていた。図12はその一例である。

## 3) 6世紀初頭～前半以降のコーカン畠遺跡第2地区下位スコリアFj-Kb<sub>2</sub>

本遺跡の北北東（N10°E方向）25kmに位置する愛鷹火山山麓上のコーカン畠遺跡第2地区（富士市江尾727-1：標高22m前後）ではSB03住居（6世紀前半頃）廃絶直後に堆積したスコリア層（試料③）がある。詳細

表1 第7層上半部に含まれるスコリア以外の粗粒物の諸特徴

粒子番号	長径 mm	中径 mm	短径 mm	細面数	楕円度	円周部の 円滑度	修復中 破断面の 有無	新鮮 大破断面 の有無	新鮮 小破断面 の有無	新鮮な ヒビの 有無	岩種	付着物等
1	9	5	3	6	4	0.7	○	○	○	×	チャート質泥岩	赤黄褐色スコリア粉
2	8	4	3	12	5	0.6	×	○	○	○	泥岩	割れ目に赤黄褐色スコリア粉
3	7	6	4	17	5	0.7	×	○	○	○	泥岩	白黄色微粉に包まれる
4	7	3	3	?	4	0.6	×	×	○	×	珪質砂岩	付着物なし
5	6	3	2	7	6	0.6	○	×	○	○	珪質砂岩	赤黄褐色スコリア粉
6	5	4	3	10	5	0.5	○	×	○	○	珪質砂岩	赤黄褐色スコリア粉
7	5	4	2	4	2	0.8	×	×	○	○	致密玄武岩	赤黄褐色スコリア粉
8	5	3	2	9	4	0.8	×	×	○	○	致密玄武岩	赤黄褐色スコリア粉
9	5	3	1	6	5	0.8	○	○	○	○	泥岩	赤黄褐色スコリア粉
10	5	2	1	5	4	0.7	×	×	○	○	致密玄武岩	赤黄褐色スコリア粉
11	4	4	4	?	4	0.5	×	○	○	×	珪質砂岩	赤黄褐色スコリア粉
12	4	3	1	6	5	0.8	×	○	○	×	珪質砂岩	赤黄褐色スコリア粉
13	3	2	2	6	4	0.7	○	○	○	○	泥岩	赤黄褐色スコリア粉
14	3	2	1	14	6	0.6	○	×	○	×	泥岩	赤黄褐色スコリア粉
	5.4	3.4	2.3	8.5	4.5	0.67	43%	50%	100%	36%		

調査は今後となるが、粒径 5 ~ 10mm の破断面が直面体となる赤褐色スコリアで構成され、実体顕微鏡観察（17倍～90倍）では、スコリア破断面の隔壁部が黒色でガラス光沢をもつ点や気孔面積比などが本遺跡の第7層の柏原遺跡大瀬スコリア層 Fj-Kwb に類似する。

#### 6. 第6層 [遺跡土層番号IV-1] • 主に古墳前期初頭～前業の暴浪堆積物中心？

標高 7.2m 前後、層厚は 25cm。本層表層部に 5世紀後半から 6世紀前半頃の形態を有するほぼ完形に復元できる土器の壺 1~2個体分の細片が集中する（藤村、2012）。下位の第5層表層部には古墳前期初頭の完形土器を含み（藤村、2012）、本層が以下で示すとおり暴浪堆積物であることから、土器の時期からさほど間を置くことなく本層が堆積したものと考えられる。従って、本層は古墳前期初頭から前業（西暦 250~300 年頃）に堆積したものであろう。

##### 1) 上部の富士系スコリア・・上部に富士系のスコリア片及び他火山起源の流紋岩質漂着軽石を含む

本層上部には、少量ではあるが輪郭のはっきりした一次堆積に近い富士系のスコリアが含まれている。最大径は 12mm、並みの粒径は 5mm 前後で、礫層中であるにもかかわらず、破碎も円磨もされていない個体が多い（図 13）。破断する前のスコリア表面にはよじれた縄状の再溶融皮膜（図 14）があり、第7層中のスコリアに類似する。これらのスコリアの表面は低温酸化で黄橙色（YR7/8）に変色しているが、破断面が露出している個体で内部を見ると、低温酸化部のすぐ下は、実は高温酸化による赤黒褐色部である例が多い（図 14・15）。やや表面に近い

部分で明褐色（7.5YR5/8）、芯部は暗褐色（7.5YR3/3）である。第7層中のスコリアと類似する例としては、成因は良くわからないが海苔の破片状の黒色部（再溶融ガラス？）が各所に張り付いている点と大きな気孔間の隔壁部がしばしば黒色～暗赤色ガラス質で、この隔壁部に微小な球形気孔が詰まっている点である。これはパリノ・サーヴェイ株式会社（2005）の言う黒い鉱物に当たる可能性がある。

さらに、やや大きめの気孔が連結する結節点からマグマ性の風船状の気泡ができている（図 16）。

なお、本層上半部には最大径が 18cm に達する白色漂着礫（図 17）も含まれる。付近に、このような大きな軽石を噴出する流紋岩質～デイサイト質火山は知られていないので、恐らくは、はるか沖合の火山から噴出したものが海流で回遊し暴浪により運ばれ、漂着したものであろう。この漂着軽石が広範囲に漂着していれば、富士市一帯では、後述のマグマ水蒸気爆発によるものと思われる厚手の透明ガラスとともに、第6層上半期の良い隕層となる。

##### <偏光顕微鏡下の諸特徴>

これらのスコリア粒を粉碎して細い分け、最少断面積粒径（短軸×中軸）が 125~63 μm に捕ったものをプレパラートに封入して観察した。本スコリア層の場合には、以下のよう結果が得られている。

- a) まず、50 μm 以上の大きな結晶（ここでは斑晶と呼ぶ）とそれ以外の石基（微結晶と微結晶になる前の結晶の胚珠に当たる晶子とガラス）の粒数をカウントして、斑晶率を求めるところ 14% であった。これは上位の柏原遺跡大

潤スコリア層中のスコリアでの値10%よりも大きな値であった。

b)  $50\ \mu$ 以上の大きな結晶のうち、鉄やマグネシウムを含まぬ珪素Si・アルミニウムAl・酸素O・ナトリウムNa・カルシウムCaから構成される透明な軽鉱物（具体的には斜長石）が81.3%を占め、残りの鉄やマグネシウム等を含む重鉱物が18.7%を占めていた。

かんらん石が8.1%、（柏原遺跡大淵スコリア層Fj-Kwbは7.7%）、斜方輝石が39%（1.6%）、鉄やマグネシウムばかりではなく、Caをも含む单斜輝石が49%（7層では1.0%）、鉄鉱物が1.7%（7層では0.2%）であった。柏原遺跡大淵スコリア層Fj-Kwbはかんらん石が重鉱物中では最も多い典型的な富士系スコリアであったが、6層上半のスコリアも、同様にかんらん石が多い富士系の典型的なスコリアである。柏原遺跡大淵スコリア層Fj-Kwbに比べて、单斜輝石が多く斜方輝石が少ないという特徴がある。なお、鉄鉱物は不透明で透過光では見えない。反射光で判別すると黒褐色～白銀色～黒紫色、あるいは赤褐色などの強い反射があり、判別できることが

あるが、鉄やマグネシウムMgの多い濃色のガラスに含まれていると判別ができない。従って、富士系のテフラに関しては、鉄鉱物の量比は、誤差が多くなることが確実なため、重要な判定基準にはできない。

c) 石基には次のような特徴があった。

① 微結晶が面積比で石基部分の25%以上を占める例が73.5%、25%～5%の場合が26.5%である。柏原遺跡大淵スコリア層Fj-Kwbよりも、石基部分に含まれる微結晶がやや少ない傾向がある。

② 微結晶は幅が $10\ \mu$ 前後で長さが $20\sim50\ \mu$ 前後の短角状～長柱状微結晶が多い。柏原遺跡大淵スコリア層と大差はない。

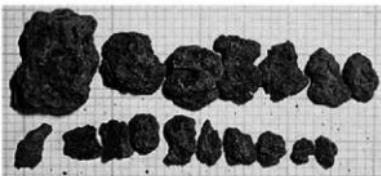


図13 第6層上半のスコリア群 方眼は1目盛1mm



図14 第6層上半スコリア。スコリア表面にはよじれた褐色の厚皮膜が残る。なお、方眼は1目盛1mm。

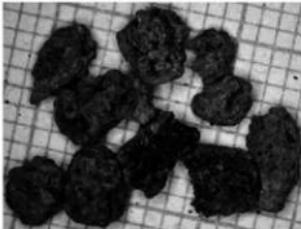


図15 第6層上半スコリア。低温酸化の黄褐色皮膜の下に本来の高温酸化の際の赤褐色帯が残る。方眼は1目盛1mm。

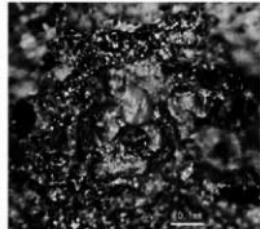


図16 第6層上半スコリア。気孔部の構造は黑色ガラス質で0.1mm以下の球形～卵形気孔が連続する。直径0.3～0.4mm前後の気孔部の結節点からマグマの滴を集めた風船状の直径0.1mm前後の気泡がさらに形成されている。

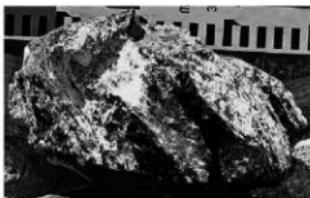


図17 第6層上半の漂着軽石。1目盛が1cm。

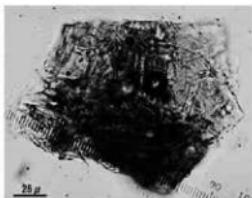


図18 第6層上半に含まれる富士系スコリアの典型的な石基タイプ。微結晶が面積比で50%前後に達し、2μ前後の球形気孔を僅かに含む。

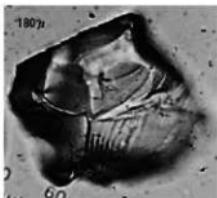


図19 第6層上半に含まれる火山起源透明ガラス。マグマ蒸気爆発で発生した多数の凹面や貝殻状断口を持つ。粒径180μpmPHF型。

③ さらにこれとは別にさらに幅が狭い長柱状～針状の微結晶があるが、柏原遺跡大淵スコリア層 Fj-Kwb と比べると針状結晶が少ない。

④ ガラス部分は屈折率が1.54 を超える鉄やマグネシウムが多いものである。気泡の面積比は5%以下のもの(H型)が全体の58.6%を占め、気孔面積比が5~25%のもの(C型)がほとんど検出できず、気孔面積比が25%を超えるもの(T型)が29.7%であった。図18は、本スコリアの典型例である。

d) 本スコリア片の気孔中あるいは檻面には、しばしば、他火山起源の透明で屈折率が低いおそらくは流紋岩質～デイサイト質なスプーンでしゃくって削ったような凹型曲面で囲まれる厚手の洞片状の透明ガラス pmpPHf t (200 μ以下: 図19) が付着している。貝殻状断口が残る例もある。このタイプのガラス片は火山ガスを噴き出しながら飛来する通常のタイプのテフラ(降下火山碎屑物)とは異なり、火山ガスの痕、つまり、気孔がなく、マグマが海底に吹き出し海水と接触して水蒸気爆発を起こしたとか、マグマが陸上で地下水や火口湖の水と接触したために大爆発を起こすなどのケースに多いタイプである。富士山から第6層上部のスコリアを噴出していった時に、どこか遠方でマグマ水蒸気爆発を起こした火山があったと考えられる。

## 2) いわゆる“大淵スコリア群”について

富士系のテフラ層は、多くが北東方向～南東方向に降下堆積したため、北東麓～南東麓を中心に細かく登録されてきた(泉ほか、1977: 上杉・遠藤他、1979; 上杉・米澤ほか、1980・1983・1992; 宮地、1988; 上杉、1989・1990・2003; 上杉・土井他、1996; 上杉・堀口ほか、2003; 上杉・砂田、2008等)。完新世のテフラは、今日までに、上位から西暦1707年のS-25(宝永スコリア層)、西暦1590年直後と思われる富士河村城スコリア Fj-Kw、S-24-10~1, S-1, S-0-6~1に区分され、更新世のテフラは上位より概略1.1万年前のY-141-3から概略10万年前のY-1まで、詳細に区分されている。

南西麓には各時期のテフラが薄くしか堆積しなかったため、本遺跡を含む富士山南西麓～駿河湾岸一帯のテフラ層の区分対比は相対的に遅れている。

a) 増島(1978・1981)は、愛鷹火山西麓一帯で考古研究者により弥生時代～古墳時代の遺跡一帯で検出されていたスコリア群を大淵スコリアと命名し、その肉眼的諸

特徴などを記載し、その厚さを各地で測定して、等厚線図を作成し、山頂火口から南に向け噴出したものであろうと推定した。これらは富士市須津の東名高速道路北側大塚団地古墳群では7世紀末(1250yrsBP)の古墳直下にあるので、概略1300年前頃(西暦650年)に降下堆積したであろうとした。増島(1981)が示した大淵スコリアの等厚線図は南駿河火山標高1649m高鉢山一帯の層厚50cm以上という値よりも頂上側には測定点が多く、事实上、次の述べる宮地(1988)の等厚線図と大差がない。

b) 宮地(1988)は、大淵スコリアは富士山頂南5~6kmに位置する高鉢山側火山噴出であり、その噴出年代は大淵丸尾溶岩流出期よりも古いとした。この大淵丸尾溶岩中の炭化木の年代が学習院大学放射性炭素年代測定室(木越研)のベータ線計数値で求めたものでは $1420 \pm 80$ yrsBP(GaK-1942; 津屋, 1971)であったので、大淵スコリアは、それよりも古くなり、概略で1500~2000yrsBPであろうとした。また、火山灰層序学的な層位はS-24-3期相当とした。S-24-3は、考古年代では、概略古墳時代前期に当たる。

c) 松原(1992)は浮島ヶ原中央に位置する沼津市難庵塚遺跡で二枚のスコリア層を検出した。下位のものは縄文晩期遺物包含層最上部にあり、日本大学年代測定室(Nu番号)でのベータ線放射性炭素年代は $1770 \pm 70$ yrsBP(Nu-130)であった。上位のものは砂質泥炭直上～泥炭層最下部にあった。松原(1992)はこれが大淵スコリア ObSに当たると考えた。ここではこれを難庵塚大淵スコリア Fj-Mzと仮称する。このスコリアの下位の砂質泥炭層には弥生時代後期から古墳時代中期の遺物が含まれ、難庵塚大淵スコリア直下の泥炭の放射性炭素年代は $1390 \pm 70$ yrsBP(Nu-129)であった。すなわち、難庵塚大淵スコリアは古墳時代中期以降に降下堆積し、放射性炭素年代からはほぼ6世紀半ば頃のものとした。

d) 山元ほか(2005)は、富士山の各溶岩・火碎流・テフラに関する炭化物の年代測定を、アメリカ合衆国のBETA ANALITIC社に依頼した。数10グラムを超える炭化物は $\beta$ 線計測法で、それ以外は加速器年代測定法(AMS法)で計測された。それによれば、富士市桑崎北で採集した大淵溶岩 Obu 中の炭化木の年代は $1240 \pm 40$ yrsBPであった。そして、その3.4km南西富士

市大久保のスコリア直上の暗褐色土壌の年代は  $960 \pm 40$  yrsBP、直下の暗褐色土壌の年代が  $890 \pm 40$  yrsBP であった。このスコリアを大久保大淵スコリア Fj-Ok と仮称する。

e) 小松原ほか (2007) は浮島ヶ原において、14本のハンドコアを探取し、連續柱状図を作成した。それによれば、浮島ヶ原の湿地堆積物中に少なくとも4枚以上の一層ないしは二次堆積のスコリア層がある。16点の炭化片や種子の加速器放射性炭素年代測定を(株)パレオラボに依頼している。これらの年代値によれば、 $1995 \pm 25 \sim 2745 \pm 25$  yrsBP 間に3枚のスコリア (S-24-I ~ S-15 間か?) があり、その上位に、 $1650 \pm 20 \sim 1570 \pm 20$  yrsBP、 $1720 \pm 20 \sim 1095 \pm 20$  yrsBP、 $1605 \pm 30$  yrsBP、 $1630 \pm 20 \sim 1640 \pm 20$  yrsBP、 $1575 \pm 20$  yrsBP という年代値を示すスコリアがある。暦年補正をしなければ、概略で西暦350年頃(古墳前期)のスコリアとなり、暦年補正をすれば西暦400~550年頃(古墳中期~後期)のスコリアとなる。小松原ほか (2007) では、これを大淵スコリアとした。ここでは、これを浮島ヶ原下位大淵スコリア Fj-Uku と仮称する。小松原ほか (2007) の上記の図からはこのスコリア層の上位に別のスコリア層がさらにあるようにも受け取れる。

これを浮島ヶ原上位大淵スコリア Fj-Uku と仮称する。小松原ほか (2007) では、スコリア粒そのものの肉眼的な諸特徴~実体顕微鏡下~偏光顕微鏡での諸特徴については記載がないので、コーカン烟道跡第2地区下位スコリア Fj-Kb ℓ、コーカン烟道跡第2地区上位スコリア Fj-Kbu あるいは柏原遺跡スコリア層 Fj-Kwbとの細かい対比はできないが、恐らくは暦年補正をしなければ、概略で西暦350年頃(古墳前期)、暦年補正をすれば西暦400~550年頃(古墳中期~後期)のスコリアがコーカン烟道跡第2地区下位スコリア Fj-Kb ℓ及び柏原遺跡スコリア層 Fj-Kb (古墳後期頃)に相当し、上位のスコリアがコーカン烟道跡第2地区上位スコリア Fj-Kbu (7世紀初~前半以降)に対応するであろう。

f) 佐藤 (2011)・藤村 (2012)・佐藤・藤村 (2013) は各地の大淵スコリア ObS の降下年代に関して、以下のような例を示している。

① 本遺跡の第7層(柏原遺跡大淵スコリア Fj-Kwb)の直下に5世紀後半から6世紀初頭頃の土師器が出土する。柏原遺跡大淵スコリア Fj-Kwb は、5世紀後半から6世

紀初頭以降に降下堆積した。

② 富士市宮添遺跡大淵スコリアは TK208 型式須恵器(5世紀後葉頃)を含む住居址L地区 SB01 床面を覆う覆土 10~20cm 上方にある。E地区 SB24 では TK23~TK47 型式以前(5世紀末前後以前)と推定される住居址床面を覆う覆土の上方 10cm にある(富士市教育委員会、2011)。

一方、D地区 SB11 住居址は富士市宮添遺跡大淵スコリアを切って構築されたとみられ、MT15 型式須恵器(6世紀前葉)が出土する。

つまり、富士市宮添遺跡大淵スコリアは5世紀後葉頃以降で6世紀前葉以前に降下堆積した。併せて考えると、富士市宮添遺跡大淵スコリアは西暦500年±50年頃に降下堆積している。

<いわゆる大淵スコリアは1枚ではない>

結局は、正確な考古遺物層序、火山灰層序が決め手となるが、これまで大淵スコリアと総称されてきたスコリア群の年代は、新しい方から列挙すると以下のようになる。なお、1990年代までは、学習院大学木越研究室を中心とするベータ線放射性年代が一般的であったが、その後は、多数の民間企業による加速器放射性年代が一般的となり、暦年補正を行う例が増えた。一般に、前者の方が古い放射性炭素年代を示すことが多いように思われる。ここでは、暦年補正も同位体補正もない年代値で示す。西暦あるのは考古学的な年代観であり、AD であるのは放射性炭素年代である。

① 山元ほか (2005) の大久保大淵スコリア・直上土壌  $960 \pm 40$  yrsBP (AD990年頃)、直下土壌  $890 \pm 40$  yrsBP (AD1060年頃)

② 小松原ほか (2007) の浮島ヶ原上位大淵スコリア・直上種子・炭化物  $1095 \pm 20$  yrsBP (AD855年頃)、直下炭化物・種子  $1720 \pm 20$  yrsBP (AD230年頃)

③ コーカン烟道跡第2地区上位スコリア Fj-Kbu ・西暦 600~650 年以降

④ 増島 (1981) の須津大塚古墳群7世紀末遺跡直下の大淵スコリア・西暦 675 年以前

---

⑤ コーカン烟道跡第2地区下位スコリア Fj-Kb ℓ ・西暦 550 年以降

⑥ 柏原遺跡第7層の柏原遺跡大淵スコリア層 Fj-Kwb ・西暦 475~525 年以降

- ⑦ 佐藤・藤村（2013）等の宮添大淵スコリア・・西暦450年～550年
- ⑧ 松原（1992）の雌鹿塚大淵スコリア・・直下泥炭 $1390 \pm 70$  yrsBP (AD560年頃)
- ⑨ 宮地（1988）の高鉢山大淵スコリア・・上位の大淵丸尾溶岩中の炭化物、津屋（1971）は $1420 \pm 80$  yrsBP (AD530年頃)、山元ほか（2005）は $1240 \pm 40$  yrsBP (AD710年頃)

⑩ 柏原遺跡第6層中の柏原遺跡下位大淵スコリア Fj-Kwb  $\ell$ ・・西暦250～300年頃以降、西暦475～525年以前

⑪ 小松原ほか（2007）の浮島ヶ原下位大淵スコリア・種子 $1575 \pm 20$  yrsBP (AD375年頃)、種子炭化物 $1605 \pm 30$  yrsBP (AD345年頃)、直上の種子・炭化物 $1570 \pm 20$  yrsBP (AD380年頃)～直下の種子・炭化物 $1650 \pm 20$  yrsBP (AD300年頃)

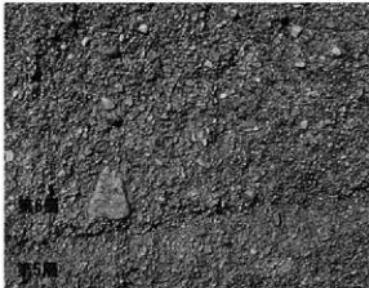


図20 第6層中の礫の堆積状況

礫はぎっしりと詰まっている、間に充填物がある。礫は壁面に張り付くように堆積したものなど、様々な方向性を有している。つまり無方向性である。水平に近くやや傾いて堆積する通常の海浜礁や河川礁とは異なる。暴浪（高潮高波等）津波性堆積物と思われる。



図21 第6層。海浜部の潮上帯swash zoneで形成された二面体礫（おはじき状の礫）が破碎され、本図の上側及び右側に破砕面が形成され、中央部及び左側の底面原面が残る部分にはひび割れの痕が残る。円窓原面上には多数の小孔が形成され、そこに微砂が残る。礫は珪質粒が多い砂岩。方眼の1目盛が1m。



図22 第6層。微砂が詰まる長円形～条状痕破砕孔に微砂が詰まっている。礫は緻密玄武岩。粒径は4mm。



図23 第6層のスコリアの気孔中に飛び込んだ破砕岩片、破砕面は凹曲面と凸曲面で構成されている。粒径は2mm。

今日まで“大淵スコリア ObS”と総称されてきたスコリア層は、概略AD350年頃のもの、概略西暦500年頃のもの、さらには西暦600年以降のもの、少なくとも3枚のスコリア層がありうるようと思われる。

### 3) 第6層の堆積環境について

＜礫が無方向性であり破碎痕が多い。縫間には細かい充填物が多い。＞

第6層は上半部に上述のように原形をとどめたスコリアが多く、最上部に僅かに風化帶～土壌帯があるが、下半部を中心に、全体として、ぼろぼろと崩れる縮まりがない砂～シルトまみれの疊層である。これらの礫はいずれも無方向性で特定の方向に成層していない。あるものは露頭面に張り付くように堆積しており、あるものは露頭面に対して垂直に近く立っている。要するに礫の長軸中軸で構成される広い面がバラバラな方向を向いている（図20）。現場露頭観察では、礫の最大径は35cm前後、目立つ並みの粒径で5～3mmで、四面体～一面体の円錐も目立つが、破碎円錐礫（図21）が多いのが大きな特徴である。つまり、一度は円錐したが、その後の暴浪時（高潮高波時～津波襲来時）に、堆積物どうしが激しく衝突しあい、静穩海況時なら破断する確率が低い円錐礫を破碎したのであろう。円錐面を破碎する球状孔あるいは溝状孔の内部に、微砂～細砂が詰まっている例が多い（図22）。これは、これらの砂礫層が堆積する際に、大量の細粒物質を伴っていた事を示している。礫、礫の破砕片、砂粒子などが高エネルギーの混濁流状態にあり、相互に衝突しあい、細片を生産しつつ、堆積したことを示唆する。本層中には直径数mm以下のスプーンで削り取ったかのような凹局面～凸曲面で開まれた破碎岩片（洞片）が多数含まれる（図23）。なお、こうした状況は第5層（道跡土層番号IV-2）でも第4層（道跡土層番号IV-3）でも

表2 第6層構成様の諸特徴

標 番 号	長 径 mm	中 径 mm	短 径 mm	標 面 数	標 面 内 密度	修 復 破 断 面 の有 無	新 鮮 大 破 断 面 の有 無	新 鮮 小 破 断 面 の有 無	新 鮮 な ヒ ビ の 有 無	岩種	その他の 記述
1	9	9	5	6	5	0.9	○	○	○	○	石英粒の多い砂岩 被紗痕に充填物
2	11	9	3	7	2	0.9	○	×	○	×	石英粒の多い砂岩 砂岩 28%
3	9	8	5	6	5	0.9	×	×	×	○	石英粒の多い砂岩 チート 23%
4	8	5	4	6	5	0.5	○	×	○	○	チャート 泥岩 14%
5	7	7	3	7	3	0.8	×	○	○	×	玄武岩質滑岩 泥紋岩質凝灰岩 7%
6	8	5	4	6	3	0.9	○	×	○	○	砂岩 泥質結晶片岩 17%
7	8	5	3	3	3	0.9	○	×	○	○	玄武岩質滑岩 石英質砂岩 17%
8	7	5	5	5	4	0.5	×	○	○	○	玄武岩質滑岩 閃綠岩 17%
9	7	6	3	6	2	0.7	○	×	○	○	流紋岩質凝灰岩 貝殻状断口あり泥まみれ 先第四系 77%
10	6	5	4	10	3	0.8	○	○	○	×	流紋岩質凝灰岩 貝殻状断口あり泥まみれ 富士系玄武岩滑岩 23%
11	8	5	3	5	3	0.7	×	○	○	○	黑色泥岩
12	7	6	3	6	5	0.6	○	×	○	○	黑色砂岩
13	6	5	3	5	4	0.9	○	×	×	○	黑色砂岩
14	7	3	2	3	3	0.9	×	○	○	○	黑色緻密玄武岩質滑岩 貝殻状断口目立つ
15	7	5	3	6	3	0.5	○	○	○	○	黑色チャート
16	7	6	5	6	5	0.3	○	○	○	○	チャート～珪質砂岩 泥岩原面消失
17	8	5	3	5	4	0.6	×	○	○	○	黒緑色砂岩
18	7	4	2	10	3	0.6	×	○	○	○	黒色チャート
19	6	5	3	7	7	0.4	×	○	○	○	波紋岩質凝灰岩 破断面多し
20	7	5	2	3	2	0.9	○	○	○	○	安山岩・火緑岩？ 真っ二つに被断
21	6	6	3	4	2	0.9	×	○	○	○	灰黑色滑岩
22	6	5	3	5	3	0.5	○	○	○	○	チャート～泥岩 泥岩
23	7	4	3	6	4	0.5	×	○	○	○	石英粒の多い砂岩
24	7	6	3	7	5	0.6	×	○	○	○	チャート 小破孔多数
25	7	5	3	6	3	0.7	×	○	○	○	チャート
26	5	4	3	5	5	0.7	○	○	○	○	黑色緻密玄武岩質滑岩 泥狀被紗痕あり
27	6	4	2	6	5	0.6	×	○	○	○	石英粒の多い砂岩 泥狀被紗痕あり
28	5	5	2	15	3	0.5	×	○	○	○	チャート～泥岩 ヒビあり
29	5	5	3	20	5	0.8	×	○	○	○	泥岩 泥狀被紗痕あり
30	6	4	3	5	3	0.8	×	○	×	○	玄武岩質滑岩 泥狀被紗痕あり
31	5	3	2	5	5	0.5	○	×	○	○	石英脈岩 泥狀被紗痕あり
32	4	4	2	6	5	0.7	○	○	○	○	泥岩 泥狀被紗痕あり
33	5	4	3	4	3	0.8	○	○	○	○	砂岩
34	5	3	2	4	2	0.6	×	○	○	○	砂岩 泥質片岩（ザクロ石入り）
35	6	2	2	6	4	0.5	○	○	○	○	泥質砂岩
36	5	3	2	7	5	0.5	○	○	○	○	黑色砂岩
37	5	4	3	6	2	0.9	×	○	○	○	灰黑色玄武岩 大球状被紗痕あり
38	5	3	3	4	3	0.9	○	○	○	○	灰黑色砂岩 真っ二つに被断
39	5	2	2	5	3	0.9	○	×	○	○	灰黑色泥岩 真っ二つに被断
40	5	3	2	6	4	0.6	○	○	○	○	黑～白チャート
41	10	3	2	12	6	0.8	×	○	○	○	黑色緻密玄武岩質滑岩
42	4	3	2	8	4	0.6	○	○	○	○	円崩原面を大きく被紗し、 その中に溝状～長円状の被 紗痕が形成され、そこにも充 填物が詰まる
43	5	3	2	5	2	0.9	×	○	○	○	黑色泥岩
44	4	3	2	8	4	0.9	×	○	○	○	緑黄色ガラス質凝灰岩
45	4	3	2	8	4	0.8	×	○	○	○	緑黑色チャート
46	4	3	3	5	5	0.4	○	×	○	○	緑黑色チャート 円崩原面消失
47	4	3	2	9	5	0.7	×	○	○	○	緑黑色チャート 溝状被紗痕あり
48	5	2	2	5	3	0.9	×	○	○	○	珪質泥岩
49	4	3	3	11	5	0.4	×	○	○	○	緑黑色チャート 円崩原面消失
50	11	4	3	8	3	0.9	×	○	○	○	黑色緻密玄武岩質滑岩 真っ二つに被断
51	9	4	3	7	4	0.6	×	○	○	○	チャート 溝状被紗痕あり
52	8	3	2	6	3	0.9	×	○	○	○	石英粒の多い砂岩
53	9	5	2	2	2	0.8	×	○	○	○	石英粒の多い砂岩
54	7	5	1	6	2	0.5	○	○	○	○	石英粒の多い砂岩
55	7	4	2	5	3	0.9	×	○	○	○	黑色泥岩
56	8	4	2	3	3	0.9	×	○	○	○	黑色緻密玄武岩質滑岩
57	8	5	3	7	4	0.9	×	○	○	○	泥岩（崩壊岩）

基本的に同じである。

く礁の諸特徴の通常時海浜礁との比較：新鮮破断面は比べれば多少多い  
表2は第6層中の比較的大きな礁の諸特徴を第7層上半中に見られた礁の特徴記載（表1）に併せて表示したものである。これによれば、これらの第6層中の礁57個中49個（86%）に内眼的に確認可能な新鮮な破砕痕があり、礁を真っ二つにするような大きな新鮮な破砕痕が57個中26個（47%）に認められた。礁の面数に注目すると海岸の週上帯で完成する二面体礁は概略16%、河川の河口部～下流部で完成するそれに近い3面体礁は35%、同じく4面体礁は19%であった。さらに、河川の中流～下流部で完成する5面体礁が26%、6面体礁が2%、中～上流部で多い7面体以上の多数の面を持つ礁は概略2%を占めていた。なお、礁の岩種は富士川上流に多い古生代～中生代～新第三紀の砂岩が30%、泥岩が14%、チャートが25%、海底火山噴出物（凝灰岩等）が7%、石英脈岩が2%弱、結晶片岩が2%弱で、第四紀に活動した岩淵火山～愛鷹火山起源と思われる安山岩～閃緑岩が2%弱を占め、第四紀の後期に誕生した富士火山の溶岩が19%を占めていた。



図24 2013年2月13日(静穏海況時)の週上帯 swash zone の堆積物(試料101)と10m内陸側の震直小荒天時の汀段 berm crest の堆積物(試料102)

表3 柏原海岸静穏時(2013年2月13日)の週上帯 swash zone の礁の諸特徴

礁番号	長径 mm	中径 mm	短径 mm	礁面数	礁面数	原面 凹凸度	修復 破断面 の有無	新鮮 大破断面 の有無	新鮮 小破断面 の有無	新鮮な ヒビの 有無	岩種	その他
1	22	22	8	13	3	0.5	○	×	×	×	×	泥質礁岩礁
2	9	7	3	10	5	0.3	×	○	○	×	×	四面體形成、付着物僅か
3	7	6	3	6	5	0.5	○	×	×	×	×	砂岩
4	7	5	2	14	2	0.6	×	○	○	○	○	砂質岩
5	5	4	2	4	4	0.7	○	×	×	×	×	砂岩
6	4	4	2	5	3	0.5	×	○	○	○	○	付着物僅か
7	5	4	2	7	2	0.5	×	○	○	○	×	砂岩
8	6	3	2	6	6	0.6	○	×	○	×	×	砂岩
9	5	3	2	7	4	0.5	×	×	×	○	チャート	付着物僅か
10	4	2	2	8	5	0.5	×	×	○	○	○	付着物僅か
11	4	2	2	9	5	0.3	×	○	○	○	○	砂岩
	7.1	5.6	2.7	8.1	4	0.5	36%	45%	64%	45%		

断面は45%、小規模な新鮮破断面は64%、新鮮なヒビは45%であった。富士川河口からさらに東方に移動するにつれて、修復中の破断面率が増大し、二面体～三面体構造の占める割合は増えていくであろう。

表4は表3の試料10Iから内陸に10m離れた小規模な荒天時の波が打ち上る汀段 berm crestと呼ばれるやや高くなつた打ち上げ粒子が多くなる地点で採集したより粗粒な構造が多い地点の諸特徴を表示してある。静穩

時に比べ、当然、粗粒物が多く、107個の試料の長径平均は29mm余、中径は22mm弱、短径は12mmであった。細面数／概面数は1.85で2に近い。粗粒物の円磨原面の円磨度は0.7であった。粗粒物の粒径が小さく、より細粒の研磨剤が不足していたと思われる静穏時の波打ち際の試料10Iよりも円磨度が大である。また、修復中の破断面は全体の48%、大規模な新鮮破断面は19%、小規模な新鮮破断面は70%、新鮮なヒビは8.4%であった。

表4 柏原海岸荒天時（2013年2月13日以前）汀段 berm crestの諸特徴

羅番 号	長径 mm	中径 mm	短径 mm	細面 数	圓 磨度	原面 円磨度	修復 破断面 の有無	新鮮 大破断面 の有無	新鮮 小破断面 の有無	新鮮な ヒビの 有無	岩種	その他（円磨面の手触り等）
1	136	49	27	11	4	0.8	×	×	○	×	湖底質砂泥岩	30μ前後の微細が僅かに付着
2	96	68	33	4	3	0.9	×	×	○	×	赤紫色粗安山岩	30μ前後の微細が僅かに付着
3	95	59	24	6	2	0.9	×	○	○	×	緑色安山岩	30μ前後の微細が僅かに付着
4	54	27	17	3	3	0.9	×	○	○	○	赤色安山岩質凝灰岩	30μ前後の微細が僅かに付着
5	56	46	35	10	5	0.6	○	○	○	○	黒色玄武岩質滑石岩	付着なし
6	44	27	16	3	2	0.9	×	○	○	○	緑色安山岩質凝灰岩	30μ前後の微細が僅かに付着
7	46	23	16	4	3	0.8	×	○	○	○	緑色安山岩質凝灰岩	30μ前後の微細が僅かに付着
8	43	31	17	4	3	0.8	×	○	○	○	緑色安山岩質凝灰岩	30μ前後の微細が僅かに付着
9	49	27	23	14	5	0.6	○	○	○	○	黒色安山岩質凝灰岩	30μ前後の微細が僅かに付着
10	43	27	18	8	3	0.8	○	○	○	○	黒色安山岩質滑石岩	30μ前後の微細が僅かに付着
11	44	32	14	10	6	0.8	○	○	○	○	緑色石英岩	30μ前後の微細が僅かに付着
12	41	27	15	5	4	0.8	×	○	○	○	黒色斜輝石安山岩質滑石岩	付着なし
13	39	31	24	20	5	0.5	○	○	○	○	灰色ダイサイト滑石	30μ前後の微細が僅かに付着
14	39	21	11	10	4	0.7	○	○	○	○	綠幽翠ラズロ石斑レイ岩	付着なし
15	37	22	11	4	2	0.6	×	○	○	○	サクロ石と閃云斑レイ岩	30μ前後の微細が僅かに付着
16	36	27	13	2	2	0.9	×	○	○	○	白色凝灰質砂岩	付着なし
17	36	21	15	10	4	0.7	×	○	○	○	黑色泥岩	付着なし
18	36	24	17	4	2	0.9	×	○	○	○	黒色安山岩質風化岩	付着なし
19	36	18	14	5	4	0.9	○	○	○	○	黒色紅色チート質泥岩	30μ前後の微細が僅かに付着
20	33	27	16	4	3	0.9	×	○	○	○	黒綠色砂岩	付着なし
21	34	27	16	9	4	0.8	×	○	○	○	紫灰色安山岩滑石岩	30μ前後の微細が僅かに付着
22	34	29	9	9	6	0.7	○	○	○	○	黒色泥岩	30μ前後の微細が僅かに付着
23	31	22	15	6	5	0.7	○	○	○	○	灰色珪質砂岩	手触りがざらざら
24	32	21	17	14	6	0.5	○	○	○	○	赤褐色玄武岩質滑石岩	30μ前後の微細が僅かに付着
25	29	24	15	9	6	0.5	○	○	○	○	黒色玄武岩質滑石岩	手触り (125 - 63 μ) 付着
26	33	22	14	5	5	0.7	○	○	○	○	黒色黑雲母砂岩	手触り (125 - 63 μ) 付着
27	32	17	10	13	7	0.5	○	○	○	○	黒色一鉄石風化入り泥岩	手触りがざらざら (125 - 63 μ)
28	28	24	16	3	3	0.9	○	○	○	○	灰綠色珪質砂岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
29	30	23	18	15	5	0.5	○	○	○	○	黒色斜輝石安山岩質滑石岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
30	30	20	14	6	5	0.8	×	○	○	○	黑色泥岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
31	28	23	13	3	3	0.9	×	○	○	○	黑色泥岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
32	30	15	10	6	4	0.7	×	○	○	○	黑色泥岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
33	29	17	14	6	4	0.8	×	○	○	○	綠黑色安山岩滑石岩	手触りがざらざら (250 - 125 μ)
34	28	23	14	5	5	0.8	×	○	○	○	綠灰岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
35	30	20	11	4	4	0.6	○	○	○	○	綠灰岩火成岩質凝灰岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
36	29	12	11	7	5	0.8	○	○	○	○	綠黑色珪質砂岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
37	26	21	17	6	3	0.7	×	○	○	○	黑色・白雲石泥岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
38	28	27	9	8	2	0.7	○	○	○	○	綠黑色火山堆凝灰岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
39	29	17	11	5	4	0.7	○	○	○	○	綠黑色微晶安山岩質滑石岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
40	28	163	11	8	4	0.7	×	○	○	○	黑色黑色泥岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
41	27	20	9	4	2	0.8	×	○	○	○	灰黑色砂岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
42	29	22	10	6	4	0.6	×	○	○	○	赤麻布綠色火山質凝灰岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
43	25	22	11	6	4	0.7	×	○	○	○	紫灰黑色安山岩滑石岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
44	27	21	11	8	5	0.7	○	○	○	○	黑色安山岩質玄武岩滑石岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
45	26	17	12	17	5	0.5	○	○	○	○	黑色斜輝石泥岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
46	28	23	12	8	6	0.5	○	○	○	○	黑色底風化入式玄武岩滑石岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
47	25	16	6	8	5	0.4	○	○	○	○	灰黑色砂岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
48	26	12	11	4	4	0.7	○	○	○	○	灰黑色凝灰質砂岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
49	25	14	13	5	4	0.8	○	○	○	○	灰黑色凝灰質泥岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
50	26	15	12	10	4	0.5	○	○	○	○	黑色チャート質泥岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)
51	26	15	11	11	4	0.6	○	○	○	○	黑色チャート質泥岩	手触りがするする (63 ~ 32 μ)

標 番 号	長径 mm	中径 mm	短径 mm	楕 円面 数	楕 円面 度	修復 破壊面 の有無	新鮮 大破断面 の有無	新鮮 小破断面 の有無	新鮮な ビビの 有無	岩種	その他 (円磨面の手触り等)
52	26	21	10	10	3	0.6	○	×	○	○	石英聚灰チャート質泥岩
53	25	19	9	4	2	0.6	×	×	○	×	灰黑色砂岩
54	26	14	12	4	3	0.9	×	×	○	×	灰黑色玄武岩質砂岩
55	23	22	15	5	4	0.9	○	×	*	×	下位緑黒色砂質泥岩
56	23	23	9	3	2	0.9	×	×	×	×	綠黑色玄武岩質砂岩
57	24	21	9	9	5	0.6	○	×	○	×	灰黑色玄武岩質砂岩
58	25	18	8	8	4	0.6	○	×	○	×	黑色玄武岩質砂岩
59	24	22	9	9	5	0.5	○	○	○	×	黑色玄武岩質砂岩
60	25	19	5	5	2	0.8	×	×	○	×	黃鐵鉱入灰黑色砂質泥岩
61	23	19	8	8	4	0.7	×	×	○	×	紫灰黑色安山岩質砂岩
62	24	18	9	9	4	0.7	○	○	○	×	綠黑色砂質砂岩
63	26	14	8	8	5	0.6	○	○	○	○	白綠色斜板岩質砂岩
64	25	17	12	12	5	0.6	○	○	○	○	黑灰色玄武岩質砂岩
65	23	18	5	5	4	0.7	○	*	○	○	黑灰色細砂岩
66	22	12	7	7	5	0.8	○	○	○	×	褐灰色石英脈入砂質岩
67	24	15	5	5	4	0.7	×	○	○	○	灰黑色日光質砂岩
68	22	19	6	6	6	0.9	○	○	○	○	白褐色チャート
69	21	19	8	7	4	0.8	○	○	○	○	黑灰色玄武岩質砂岩
70	25	18	16	8	4	0.6	×	○	○	○	赤紫色玄武岩質火山彈
71	25	19	13	8	4	0.6	○	○	○	○	灰黑色砂岩
72	23	17	14	5	4	0.9	○	○	○	○	灰色チャート
73	23	12	10	7	3	0.8	○	○	○	○	灰黑色砂岩
74	23	19	11	5	3	0.9	×	○	○	○	灰白色チャート
75	20	18	14	7	6	0.5	○	○	○	○	灰黑色玄武岩質砂岩
76	22	17	10	13	4	0.6	○	○	○	○	青綠色細砂質泥岩
77	22	16	13	8	4	0.6	○	○	○	○	玄武岩質砂岩
78	24	16	8	5	2	0.9	○	○	○	○	灰黑色砂質岩
79	22	19	12	5	4	0.7	○	○	○	○	白色流紋岩質灰岩
80	22	16	7	4	2	0.9	○	○	○	○	白色流紋岩質砂岩
81	24	20	12	9	6	0.5	○	○	○	○	赤褐色玄武岩質砂岩
82	19	18	17	12	8	0.5	○	○	○	○	黑灰色墨晶入玄武岩質砂岩
83	22	14	9	6	4	0.7	○	○	○	○	黑色泥岩
84	23	13	10	4	2	0.9	○	○	○	○	黑色玄武岩質砂岩
85	23	13	10	4	2	0.8	○	○	○	○	黑灰色砂岩
86	21	17	10	9	4	0.5	○	○	○	○	赤紫色玄武岩質砂岩
87	19	19	13	12	4	0.4	○	○	○	○	黑色玄武岩質砂岩
88	21	16	11	8	5	0.7	○	○	○	○	灰黑色砂質泥岩
89	20	14	13	10	5	0.6	○	○	○	○	灰綠色カクテス質灰岩
90	20	16	11	11	5	0.4	○	○	○	○	赤~黒褐色玄武岩質砂岩
91	22	19	12	17	6	0.4	○	○	○	○	黑色玄武岩質砂岩~火山彈
92	21	19	14	16	4	0.5	×	○	○	○	黑色玄武岩質砂岩
93	21	12	11	9	4	0.8	○	○	○	○	黑色泥岩
94	17	17	12	7	4	0.3	○	○	○	○	灰黑色玄武岩質砂岩
95	21	15	7	5	2	0.9	○	○	○	○	黑色泥岩
96	20	18	16	13	5	0.6	○	○	○	○	灰黑色墨晶入玄武岩質砂岩
97	20	20	8	7	5	0.7	○	○	○	○	灰黑色細砂岩
98	19	16	11	6	4	0.8	○	○	○	○	灰褐色チャート
99	21	14	9	6	5	0.4	○	○	○	○	綠色ガラス質凝灰岩
100	19	11	6	5	3	0.7	×	○	○	○	紫灰黑色安山岩質砂岩
101	15	14	9	6	5	0.7	○	○	○	○	綠灰色砂岩
102	19	14	9	8	5	0.5	○	○	○	○	黑色細密玄武岩質砂岩
103	18	16	12	7	3	0.9	○	○	○	○	褐灰色オルソルフエルス化泥岩
104	17	16	6	5	2	0.8	○	○	○	○	黑色泥岩(粘板岩)
105	18	16	9	6	4	0.6	○	○	○	○	黑色砂岩
106	14	14	8	5	3	0.5	○	○	○	○	灰白色流紋岩質砂岩?
107	18	18	10	8	4	0.7	○	○	○	○	黑色細密玄武岩質砂岩
							48%	19%	70%	8.4%	
	29.4	21.8	12.4	7.4	4	0.7					

手触りは 1000 ~ 500  $\mu$  の粒子に触った時の手触り感がじやりじやり、500 ~ 250  $\mu$  のそれはじやりじやり~ざらざら。

250 ~ 125  $\mu$  の場合はざらざら、125 ~ 63  $\mu$  の場合はさらさら、63 ~ 32  $\mu$  の場合はするする。

32  $\mu$  以下の場合はつるつるないしはぬるぬるである。

これらの礫は無方向性ではなく、水平方向からやや傾く程度である。また、礫には、細かい研磨剤（微砂）などが付着はするが、泥まみれ～砂まみれという事でもない。これに対して、第6層や第7層上半の礫は、礫がぎっしりと詰まり、無方向性であり、礫は大量の充填物に包まれていた。

全体の層相が明確に異なるが、礫に関する諸数値に極端に差があるとは言えない。四者を第7層・第6層・試料102・試料101の順に並べて表記すると、長径平均(5.4: 6.5: 29.4: 7.1)・中径平均(3.4: 4.4: 21.8: 5.6)・短径(2.7: 2.8: 12.0: 2.7)・細面数(8.5: 6.4: 7.4: 8.1)・概面数(4.5: 3.7: 4: 4)、修復中の破断面率(43%: 37%: 48%: 36%)・新鮮大破断面率(50%: 47%: 19%: 45%)・新鮮小破断面率(100%: 86%: 70%: 61%)・新鮮なヒビのある礫の比率(36%: 14%: 8.4%: 45%)となる。第6層・第7層中の礫は、通常の海浜堆積物に比べれば、新鮮な破断面率が大規模な破断面についても小規模な破断面率についても、多少あるいはかなり高いと言える。

＜第6層堆積物の粒径頻度分布積算曲線型の諸特徴：通常時海浜堆積物とは異なる＞

図25は静穏時の波打ち際の堆積物（●試料101）と2011年9月9日に採集した、おそらくは2011年9月2～5日の台風12号時の堆積物（×試料No.3）、本遺跡第6層（◆古墳中期～後期以前）及び後述する第3層（▲弥生後期以前）の堆積物の粒径頻度分布曲線を対数正規確率紙に示したものである。なお、このグラフ用紙では、対数正規分布をするものの積算曲線が直線となるように縦軸目盛間隔が調整されている。

粒径頻度分布は、試料120～230gを篩を用いて、1φ刻みに篩を揃えて求めた。つまり、128mm, 64mm, 32mm, 16mm, 8mm, 4mm, 2mm, 1mm(1000 μ), 1/2mm(500 μ), 1/4mm(250 μ), 1/8mm(125 μ), 1/16mm(63 μ), 1/32mm(32 μ)のように、篩の孔の径が順に2分の1となるように篩を揃えた。篩い分けた後、各粒度階毎の重量を求めた。篩は直径が20cm、10cmのものを適宜使分けた。試料重量の違いは、主として大きな礫がどの程度含まれるのかによる。試料重量が大であるからと言って、総粒数が多くなるわけではない。篩い分けは湿式で、つまり、水を使って篩い分けた。乾式で行うと、粒子同士がぶつかり、新鮮な破断面を新たに発生させてしまう

恐れがあるためと、礫の表面に細かい粒子が多数付着している例が多いのである。これらの付着物を篩い分けするには湿式でやる以外ない。篩い分け時間は原則10分であるが、篩の中に粒が数個しかない場合もあれば、数万個もある場合もあり、原則通りにはできない。各篩の孔の数に比して、過度にその篩上の粒数が多くなる場合は、それに対応して、篩い分け時間を長くせざるを得ない。但し、過度に篩い分け時間を長くすれば、たとえ水篩であろうと、粒子間衝突は避けられず、細粒物質を新たに再生産することになる。得られた各粒度ごとの重量%を粗粒側から順に積算し、積算粒径頻度分布曲線を求める。図25では、粒径16mm以上あるいは8mm以上の粒度階毎の重量%及び32 μ以下の粒度階毎の重量%を求めていないので表示していない。

図25の積算重量曲線は、どの資料についても、大雑把に見れば、概略、3つの集団sub populationから構成されている。中心をなすのは重量の大半を占める中心大集団である。例えば、試料101の静穏時の波打ち際の堆積物（●印）の場合でいうと、積算重量の2%程度から99.9%程度までの重量にして97%程度を占める。図25で急勾配のほぼ一直線で示される粗砂～細砂(1000～125 μ)を主体とする部分が中心大集団である。2つ目の小集団はより粗粒なサイズで構成される粗粒側小集団で、波打ち際堆積物では、それが重量%で2%以下を占める。3つ目の小集団は中心大集団より細粒側の集団である。波打ち際堆積物では、これが0.1～0.01%を占める。これらの3つの集団は、それぞれ、対数正規分布曲線を示す集団であり、それらの様々な比率での組み合せで、全体の曲線形が構成される（近似できる）と考える。こうした観点から、図25の積算曲線を見ると以下のようになる。

① 粒を大きい粒から順番に並べた時の、ちょうど50%目に当たる粒の粒径を中央粒径値Mdというが、その値は第6層堆積物が最も大であり、157mmであった。2011年9月2～5日に当地に強い波をもたらした台風12号時の暴風海浜storm beachの堆積物の中央粒径値Mdは11mm、後述する第3層の中央粒径値Mdは0.9mm、2013年2月13日の静穏時波打ち際（週上帯swash zone）の中央粒径値Mdは0.45mm(450 μ)であった。つまり、第6層及び第3層堆積物は台風12号時の堆積物同様に、粗粒物を運搬できる波が荒い荒天時の堆積物

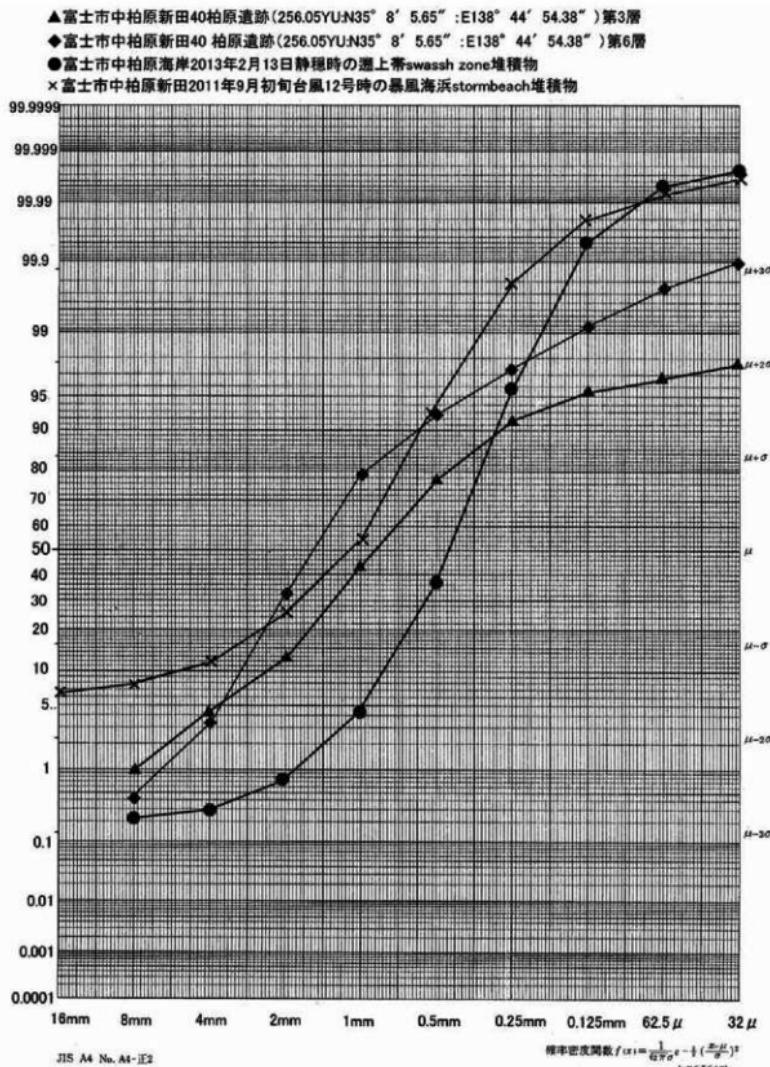


図 25 第6層、第3層、2011年9月台風12号通過後の堆積物、2013年2月13日静穏海況時邊上帯堆積物の粒径頻度分布の諸特徴

と考えられる。

② 積算曲線のタイプは、中心大集団が僅かに上に凹型となる台風12号時の堆積物と2013年2月13日の静穩時の波打ち際の堆積物と全体として上に凸型となる曲線形を示し、細粒側小集団が相対的に大きな第6層及び第3層の二つのグループに分けられる。前者のタイプは中心大集団が一本の直線ではなく僅かに粗粒側傾斜が緩くなる二本の直線で構成されるという特徴がある。これは、日本全国各地の海岸砂を比較した上杉(1972)によれば、波打ち際の波が寄せては返す週上帶堆積物の特徴である。一方、第6層・第3層はいずれも細粒側小集団の比率が高く、第6層では10%弱を、第3層では5%余を占める。また、この二層は全体に積算曲線の勾配が緩やかで、いわゆる“淘汰が悪い”状態にある。

③ 通常の河川や海浜あるいは砂丘地帯での運搬形式、つまり、層流状態では、微砂以下( $32\mu$ 以下)は水流や気流の渦に浮かせて上方を浮游 suspension として運搬し、砂は渦から渦へと粒子が躍動 saltation しながら移動する、より粗粒な礫は底を滑動 surface creep 及び転動 surface rolling で移動する。つまり、粒のサイズごとに層を分けて運搬し堆積する。この場合は、それぞれ粒がそろい、淘汰が良いと呼ばれる状態となる。積算曲線は急勾配となる。上記の①②及び前項の結論、「第6層・第7層中の礫は、通常の海浜堆積物に比べれば、新鮮な被断面率が、多少はあるいはかなり高いと言える」の3つを考え合わせると、第6層と第3層の堆積物が、層流状態ではなく、粗粒小集団も中央大集団も細粒小集団もごたまぜで、つまり、混濁流状態で運搬され堆積したことを窺わせる。混濁流としては、火碎流・粉体流(岩なだれ)・土石流や高潮高波堆積物や津波堆積物を考えられるが、今回のケースでは、津波堆積物か高潮高波堆積物が考えやすい。しかしながら、津波堆積物と言っても、津波高が数10cmにしか達しないものもあり、高潮高波と言っても、伊勢湾台風のように高潮高が3mを超える状態で浸水が1か月近くにも及ぶようなものもある。両者は質的にも量的にも、簡単には識別できないと思われる。混濁流では個々の粒子が衝突するので、その衝突の頻度や強度は、混濁流そのものの速度および渦流速度や混濁流濃度にかかわり、個々の粒子の物性を踏まえたうえでの、粒子表面の破断剥離形態の定量的観察把握が望まれる。現状では、そうした事例研究はほとん

ど聞かない。定性的な観測としては、上杉・春川(2011-2012abc)が挙げられる。

#### 7. 第5層 [遺跡土層番号IV-2]

標高7.15～683m間にあり、層厚は22cm、本層上面に弥生時代末期から古墳時代初期にかけての土器を含む(藤村、2012)。従って、本層本体は、それ以前に堆積したものである。本体中には、弥生時代後期の土器片が含まれる。

層相は上位の第6層とほとんど同じで、最上部に僅かに風化帯～土壤帯があり、全体として、ほろぼろと崩れる綿まりがない砂まみれのざらざら礫層である。富士系のテフラ(火山碎屑物)としては、直径1mm程度の高温酸化して赤紫色となった溶岩片あるいはスバター片(スバターとは溶岩の滴片)が含まれる。礫は無方向性で特定の方向に成層していない。あるものは露頭面に張り付くように堆積しており、あるものは露頭面に対して垂直に近くたっている。現場露頭観察では、礫は破碎した二面体礫が目立ち、礫の最大径は40mm前後、目立つ粒径で10～4mmで、四面体～一面体の円礫も目立つが、破碎円磨礫が多いのが大きな特徴である。つまり、一度は円磨したが、その後の暴浪時(高潮高波時～津波襲来時)に、堆積物どうしが激しく衝突しあい、静穏海況時なら破壊する確率が低い円磨礫を破碎したのであろう。円磨面を破碎する球状孔あるいは溝状孔の内部に、微砂～細砂が詰まっている例が多い。これは、これらの砂礫層が堆積する際に、大量の細粒物質を伴っていた事を示している。礫、礫の破碎片、砂粒子などが混濁流状態にあり、相互に衝突しあい、細片を生産しつつ、堆積したのかもしれない。本層中には直径数mm以下のまるでスプーンでしゃくったかのような断口で閉まれた破碎岩石片(剥片)が多数含まれる。

#### 8. 第4層 [遺跡土層番号IV-3]

標高9.93～653m間にあり、層厚は30cm前後。最上部に僅かに風化帯～土壤帯があり、全体として、ほろぼろと崩れる綿まりがない砂まみれのざらざら礫層である。第6層・第5層と同じで、海浜起源の1～4面体円磨礫とその破碎物が目立つ。礫は無方向性で様々な方向を向いている。従って、堆積環境は第6層や第5層とは同じであろう。

#### 9. 第3層 [遺跡土層番号V-1]

第6～4層が全体として、土壤化が弱く粘り気につけ、

ほろぼろと崩れやすかったのに対して、第3～1層は、比べれば、土壤化が進行し、泥分が多い。やや枯り気があり、乾燥すると縮まり、土はこりがたつ。しかし、乱堆積気味で、礫が無方向性に近いのは、ほぼ同じである。

第3層は標高6.63～6.40m間にあり、層厚は8～13cm。土の色調は通常時は10YR5/6（黄褐色）で、完全に乾燥していると10YR4/6（明黄褐色）、ビーカー中の泥水色は7.5YR4/4（褐色）である。富士系の最大で3mm程度の高温酸化溶岩片～スパター片を少量含む。第3層中の粗粒粒子は最大径12mm、並みの粒径が1mm前後の円錐～円礫が多く、一部は円磨後、破砕されている。いずれの粒子も白黄色の軽石質～風化花崗岩質（マサ状）の細砂～微砂（63μ以下）に包まれている。その粒径頻度分布積算曲線を図25に掲載した。本層は第6～4層と同様に、高潮高波あるいは津波等の混濁流により運搬堆積した可能性が高い。

#### 10. 第2層 [遺跡土層番号V-2]

標高は6.55～6.25m間にあり、層厚は12～15cm。乾燥時の土の色調は10YR5/6（黄褐色）、泥水色は7.5YR4/4（褐色）である。最大径50mm、並みの粒径8mm、5～2mmの円錐～その破砕礫が多い。粗粒粒子を白黄色の軽石質～風化花崗岩質（マサ状）の細砂～微砂が包んでいる。本層中には黒雲母片が目立つ。

#### 11. 第1層 [遺跡土層番号V-3]

標高は6.43m以下で、層厚は20cm以上。乾燥時の土の色調は10YR5/6（黄褐色）、泥水色は7.5YR4/4（褐色）である。円錐～その破砕礫が多く、粗粒粒子は、最大で5mm前後、並みの粒径で2～1mmである。これらを白黄色の軽石質～風化花崗岩質（マサ状）の細砂～微砂が包んでいる。

### Ⅲ まとめと今後の課題

調査成果とそこから生じた今後の課題は、概略、以下のとおりである。

- ① 本遺跡が立地する田子の浦砂礫洲の西側～中央部では、砂礫洲に平行して直近冲合に深海がある。何故、そのようなことが可能なのか説明を要する。
- ② 本遺跡が立地する田子の浦砂礫洲を構成する砂礫の大半は西方の興津山地以東の海蝕崖や富士川～潤井川から供給される西方起源であり、砂礫洲東端部のみ狩野川、黄瀬川から排出された砂礫から構成される。

③ 本遺跡周辺で、“大瀬スコリア”と呼ばれてきた富士系のスコリア層は、AD350yrsBP頃のもの、西暦500年頃のもの、西暦600年以降のものの少なくとも三枚に区分できる可能性が高い。これらは、富士系テフラ編年表のS-243期とS-244～5期及びS-246期以降に位置付けられるであろう。

④ 本遺跡を構成する10枚の礫層は、いずれも充填物が多く、礫が様々な方向を向いた無方向性の礫で構成され、これらの礫の多くは破砕円錐であり、現在の海岸で見られる静穏時及び荒天時の礫に比べ、新鮮な破砕面を持つものがより多かった。また、その礫層が示す対数正規確率紙上の積算粒径頻度分布曲線は、明らかに現海浜のものとは異なっている。本遺跡を構成する各礫層は、程度の差はある、高潮高波あるいは津波時の混濁流で運搬され堆積したものであろう。しかしながら、混濁流中の個々の粒子の衝突の頻度や強度は、混濁流そのものの速度および渦流速度や混濁流濃度にかかわる。個々の粒子の特性を踏まえたうえでの、粒子表面の破断剥離形態の定量的観察把握が望まれる。

謝辞 今回の調査に当たって、富士市教育委員会文化振興課の藤村 雄・佐藤祐樹・小島利史・若林美希の各氏には、現場での考古学的な説明をお願いし、さらには関連文献の収集、関連する他遺跡のスコリア試料等や海岸堆積物試料の採集をお願いした。ここに記して、感謝の意を表します。

#### 引用文献（abc順）

- 遠藤邦彦・上杉 阿 (1974) 砂丘地帯における植生限界線について - 日本地理学会 1974年春季大会講演要旨集, 70-71.
- 富士市教育委員会 (2011) 富士道跡群・富士市
- 富士市教育委員会 (2013) 富士の災害史 -過去に学ぶ-, 62頁, 富士市。
- 藤村 雄 (2012) 富士市・柏原遺跡 (第6地区) の発掘成果について - 天災に悩まされ続けた、砂丘上の集落遺跡の調査 - . 静岡県考古学会通報, (57), 25.
- 波田野誠一・津沢正晴・長島義章 (1979) 舞鶴北岸の完新世重直変動と測地学の上下変動, 地震予知連絡会会報, 2L101-105.
- 泉 浩二・木越邦彦・上杉 阿・遠藤邦彦・原田昌一・小鳥泰江・菊原和子 (1977) 富士土壌の沖積世ローム層の年代, 第四紀研究, 16 (2), 87-90.
- 地震調査研究推進本部 (1998) 富士川河口断層帶の調査結果と評価について. <http://www.jishin.go.jp/main/chousa/fujikawa/index.htm>
- 加藤芳朗・近藤鳴雄 (1960) 富士山西麓のマサ（盤層）について - 日本土壤肥科学雑誌, 31, 212-216.
- 国土地理院 (1981) 2万5000分の1国土地基図「沼津」, 国土地理院発行
- 国土地理院 (1981) 2万5000分の1国土地基図「古原」, 国土地理院発行。

- 国土庁土地局・静岡県地震対策課（1983）静岡県土地保全図「自然環境条件図」
- 国立天文台編（1991）理科年表机上版、1049頁、丸善株式会社。
- 小松原純子・宍食貞正・岡村行信（2007）静岡県浮島ヶ原盆地の水位上昇履歴と富士川河口断層帯の活動・活断層・古地図研究報告、(7) 119-128.
- 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺、336頁、東大出版会
- 増島 淳（1978）富士・愛鷹山麓の火山灰層と先史時代遺跡との関係、静岡地学、(38)、1-10.
- 増島 淳（1981）大沢スコリア層の研究、静岡地学、(48)、1-3.
- 松原彰子（1984）駿河湾奥部沖積平野の地形発達史、地理学評論、57 (1) 37-56.
- 松原彰子（1992）静岡県浮島ヶ原・趙鹿塚遺跡における自然環境と人間活動の変遷、第四紀研究、31 (4) 221-227.
- 松原彰子（2000）日本における完新世の移州地形発達、地理学評論、73A:409-434.
- 松倉公義（1988）砂丘・町田 真・井口正男・貝塚英平・佐藤 正・櫻木 勇・小野有吾編「地形学辞典」767頁、211-211。二宮書店。
- 宮地直道（1988）新富士火山の活動史、地質学雑誌、94 (6) 433-452.
- 小川賀之輔（1965）駿河湾北岸に発達する田子の浦砂丘の研究、地理学評論、38 (4) 19-37.
- 小川賀之輔（1986）富士市域の地質及び地形、富士市都市整備部みどりの課編「富士市の自然」
- バリノ・サーグィエ株式会社（2005）門間上ノ山第1号墳の自然科学院分析、富士市・教育委員会文化振興課編「上ノ山第1号墳-第二東丸No.52地點: 第二東名建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」、54-55。
- 佐藤祐樹（2011）弥生～古墳時代における官道遺跡を取り巻く社会構造の変化、富士市教育委員会編「官道遺跡Ⅴ」、108-111。
- 佐藤祐樹・藤村 雄（2013）考古学から見た富士山の噴火と地域社会の変動～平安時代～平安時代を中心として、静岡県 考古学会 2012年度シンポジウム実行委員会編（2013）考古学から見た静岡の災害と復興、89頁、20-27。
- 倒石幸正（1984）「東海地震」に開連する特A級活動断層、第四紀研究、23 (2) 145-150.
- 倒石幸正・坂場邦雄（1978）安政東海地震（1854）を起こした断層・地震予知連絡会報、20:158-161.
- 倒石幸正・坂場邦雄（1981）富士川断層と東海地震、応用地質、22 (1) 52-66.
- 津屋弘道（1971）富士山の地形・地質、富士山総合学術調査報告書「富士山」、1058頁、2-127.
- 上杉 陽（1972）粒径頻度分布からみた風成砂・海成砂の諸特徴、第四紀研究、11 (2) 49-60.
- 上杉 陽（1989）新開ローム層中に残された突發事変の跡、関東の四紀、(15)、11-24.
- 上杉 陽（1990）富士火山東方地域のテフラ標準柱状図-その1: S-25～Y-114、関東の四紀、(16) 3-28.
- 上杉 陽編著（2003）『地学見学案内書「富士山」』、117p. 1-23. 日本地質学会関東支部。
- 上杉 陽・有留 純・新妻信浩・新川和範・奥脇元子・佐藤恭子・吉田 武（2003）霧の沢剣丸尾第2熔岩と直下のテフラ群（S-24～S-11）-重要な北側模式露頭-、上杉陽編著「地学見学案内書「富士山」」、117p.52-56. 日本地質学会関東支部。
- 上杉 陽・土居由美子・佐藤仁美・伊藤ひろみ・宮地直道（1996）富士山東麓すぎな訣の更新世最末期～完新世テフラ群-特に富士黒土層について-、日本第四紀学会編「第四紀露頭集-日本のテフラ」、252p. 241-241.
- 上杉 陽・遠藤邦彦・原田昌一・小島泰江・泉 浩二（1979）富士山北・東麓完新世テフラ累層中の斜交関係、第四紀研究、17 (4) 207-214.
- 上杉陽・春川光男（2011）2011年3月11日東日本大地震津波砂粒に見られる被破～洞瀬～千葉県旭市椎名内海岸の例-、関東第四紀研究会2011年11月5日例会発表。
- 上杉 陽・春川光男（2012a）津波砂粒認定基準作成のための基礎資料、関東第四紀研究会2012年10月27日例会発表。
- 上杉 陽・春川光男（2012b）東北地方太平洋沖地震に伴う津波砂粒表面形態の諸特徴-九十九里浜海岸東端部の例-、関東の四紀、(32) 41-54.
- 上杉陽・春川光男（2012c）津波砂粒認定基準作成のための基礎資料Ⅲ-九十九里浜海岸旭市仁玉早川輪業屋内の砂粒の諸特徴-、関東第四紀研究会2012年12月01日例会発表。
- 上杉 陽・堀口靖之・三浦美実・本間知子・吉久保恵美・岡山厚太・大畠由美子・葛原千代・入江俊光・田路良光（2003）須走口登山道新五合目下物資小屋脇の新富士最新期テフラ群-S-242期以降のテフラ群東方模式露頭-、上杉 陽編著「地学見学案内書「富士山」」、117p. 91-94. 日本地質学会関東支部。
- 上杉 陽・木越那彦（1986）富士黒土層の“C”年代、火山、第2集、31 (1)、265-268.
- 上杉 陽・松本信哉・片桐幸子・井上久美子・古川隆夫（2003）富士吉田山麓～槍丸尾第2熔岩直下のテフラ群と火碎サー吉堆積物など-、上杉 陽編著「地学見学案内書「富士山」」、117p. 73-76. 日本地質学会関東支部。
- 上杉 陽・岡 重文・長田敏明（2001）仮説「古東京瀬の満水と決壊」、関東の四紀、(24) 3-20.
- 上杉 陽・大手泰司（2003）「太郎坊の新富士テフラ群-南東方向のテフラ模式露頭-」、上杉 陽編著「地学見学案内書「富士山」」、117p. 95-105. 日本地質学会関東支部。
- 上杉 陽・砂田佳弘（2008）「富士～河村城スコリア Fj-Kw」（仮称）の発見について、河村城跡-神奈川県指定史跡河村城跡整備に伴う発掘調査（神奈川県山北町文化財調査報告2）, 62p. 22-28.
- 上杉 陽・米澤 宏・間原忠寿江・中村仁子・岩井郁乃・重雄伸子（1980）富士山東麓の古期テフラ累層、自然と文化（平塚市博物館研究報告）, (3) 33-46.
- 上杉 陽・米澤 宏・宮地直道・千葉達朗・森 恒一（1983）テフラからみた関東平野、アーバン・クボタ、(21), 2-47.
- 上杉 陽・米澤 宏・宮地直道・千葉達朗・肥田本 守・細田一仁・米澤まだか・由井哲雄（1992）富士系火山泥流のテフラ層位、関東の四紀、(17) 1-19.
- 山内秀夫（1988）砂州・、町田 真・井口正男・貝塚英平・佐藤 正・櫻木 勇・小野有吾編「地形学辞典」767頁、214-214。二宮書店。
- 山元弘至・高田 亮・石塚良浩・中野 後（2005）放射性炭素年代測定による富士火山噴出物の再編年、火山、50 (2) 53-70.
- 山崎晴雄（1979）ブレート境界部の活断層-駿河湾北岸内陸地域を例にして-、月刊地球、1 (8) 570-576.
- 山崎晴雄・加藤 康（1986）陸上に延びる駿河トラフの地質構造、月刊地球、8 (2) 74-78.

## 第6節 富士市柏原遺跡から出土した馬歯

植月 学（山梨県立博物館）

本稿では柏原遺跡第6地区5次調査において律令期の溝（SD03）より出土した馬歯について報告する。

### 1. 出土状況と取り上げ

馬歯は溝の覆土中位より出土した（出土状況については4章3節・第157図を参照）。筆者のもとには出土した状態のまま、周囲の砂ごと固められて届けられた。砂も骨もまだ水分を含んでいて強度に不安があったため、室内で十分に自然乾燥させたのちに周囲の砂を除去して、標本を取り上げた。取り上げに際しては写真1のように1点ずつ番号を付した。

検出されたのは左側の上顎、下顎臼歯すべて、および右下顎臼歯の一部である（表1）。一括遺物の中には他にも同定不可の歯の小破片が多くあり、この中に右側

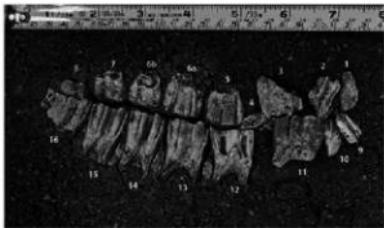


写真1 取り上げ前の状況

表1 出土馬歯一覧

No.	左右	上下	歯種	長さ (mm)		幅 (mm)	歯冠高 (mm)		推定 月齢	推定 年齢	備考
				中心	頬側						
1	左	下	P3								舌側・前半。Na10と接合
2	右	下	M1/2								舌側・前半
3	左	上	P2	28.1		17.7	15	14	199.2	16.6	
4	?	下	P/M fr.								
5	左	上	P3	26.7	0.014	24.6	22.5		182.1	15.2	
6	左	上	[P4	24.6	0.015	25.7	26	植立	181.5	15.1	
			M1]	21.3		23.9		植立			
7	左	上	M2	21.5	-0.017	21.5	17	16	207.6	17.3	
8	左	上	M3								
9	右	下	M1/2								
10	左	下	P3								舌側
11	左	下	P2	35.0		14.4	27		124.7	10.4	舌側・後半。Na1と接合
12	左	下	P3	26.7	0.005	24	26	164.8	13.7	F10 P2/M3 長: 161mm ±	
13	左	下	P4	25.2	0.002	16.4	24	23	175.7	14.6	
14	左	下	M1	22.5	-0.023	15.0	28.5	28	167.5	14.0	
15	左	下	M2	22.8	-0.027	12.5	30	27	169.5	14.1	
16	左	下	M3			11.4	21	20	165.6	13.8	
17	左	下	下顎骨	-	-	-	-	-	-	-	P4-M1 嶺側
右	下	P2									頬側・舌側破片
一括	右	下	P3/4								舌側・前半
				平均	-0.009				平均	14.48	

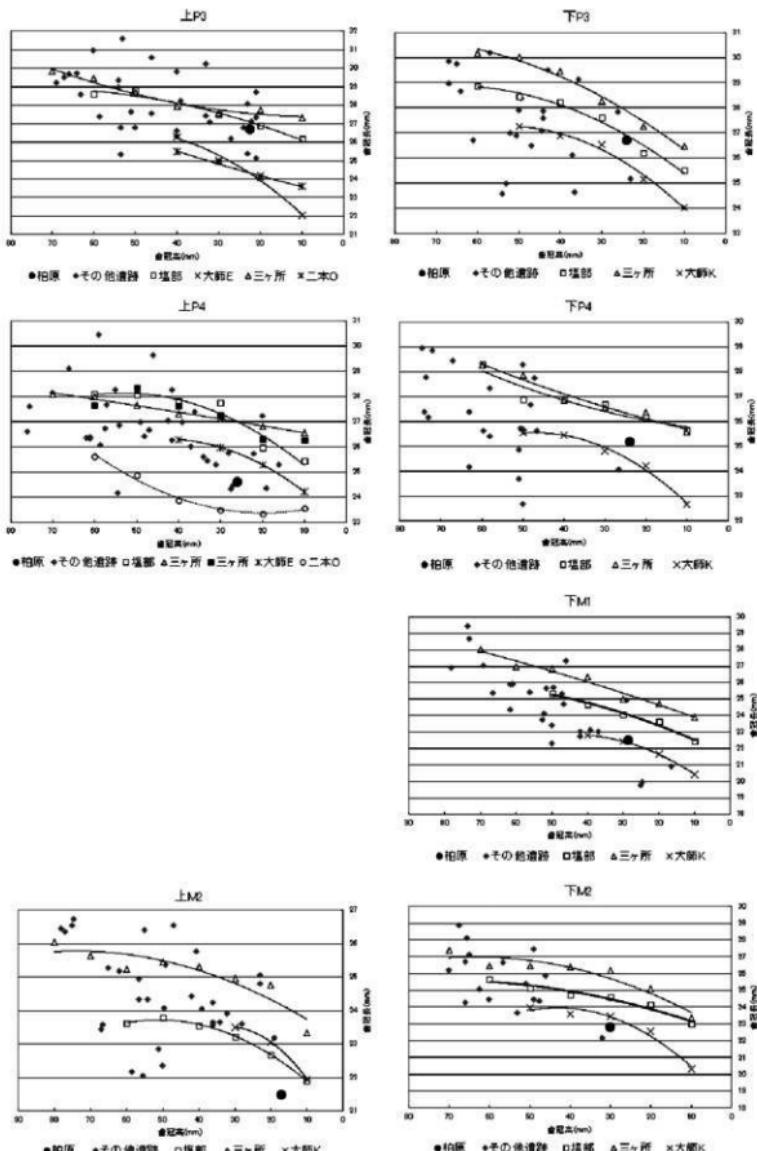


図1 柏原遺跡出土馬齒と東日本古墳時代～中世遺跡出土馬齒の歯冠長・歯根高の比較

## 2. 馬齒の大きさと年齢

それぞれの歯の計測値を表1に示した。まず大きさだが、馬歯は加齢とともに長さを減じていくので、他遺跡標本との比較の際には歯冠高も考慮する必要がある。図1では植月(2011)において集成した計測値のグラフへプロットした(図1)。グラフより上顎P3や下顎P3、P4は中程度の大きさだが、その他の歯種は小形の部類に属すことがわかる。また、表1には中世遺跡の基準3標本の平均的な変化曲線との偏差により求めたLSI(Log Size Index)の値を示した。7歯種のLSI平均値は-0.009である。図2には他遺跡との比較を示した。本個体の値はもっとも小さいグループである山梨古代に近く、本個体がかなり小形であったことを示唆する。

西中川・松元(1991)の推定式により、歯冠高(中心部)から推定された年齢は10.4~17.3才である。推定値に幅があり、上顎より高齢の数値が出ているが、平均約14.5才とやや老齢のウマである。

## 3. 咬耗異常と歯使用の痕

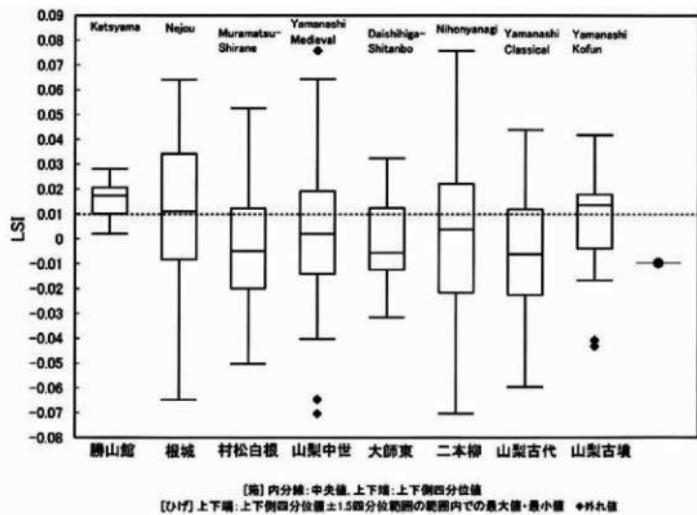
本個体の特徴として、上顎P2の咬耗異常があげられ、前半部の咬耗が極端に進行している。逆に下顎P2の前

端は上方に突出している。これは上顎の咬耗異常に対応したものと推測される。

上顎のこのような咬耗異常については原因不明である。通常の歯とは異なる馬具を用いた可能性も考えたが、下顎P2前面にはBendrey(2007)による歯使用の痕跡(Bit wear)に類似するエナメル質の露出が確認された。この露出はBendreyが歯による損傷とみなす以下の3つの条件を満たしている。

- ① 露出の長さが5mmを超える(約15mm)。
- ② 類側の露出とは異なり、かつより顕著である。本標本の類側ではエナメル質を囲むセメント質が良好残っており、エナメル質の露出は確認されないので、前端の露出は咬耗によるものではないと考えられる。なお、Bendreyの基準には舌側との比較も含まれるが、本個体は埋存時に上面であった舌側の遺存が不良で、セメント質を大部分消失しているため比較ができない。
- ③ 露出の形状は平行な帯状(parallel-sided band)を呈する。

以上により本個体は歯を装着していた可能性が高いが、1個体のみの結果であり、今後他遺跡の例も含めて



比較検討していく必要がある。

下顎 P2 咬合面の傾斜 (Bevel) は Brown と Anthony (1998) によって歯の痕とされたが、Bendrey は咬耗異常による可能性もあり、上顎 P2 との対応も含めて検討すべきことを論じている。本個体は上顎 P2 の傾斜例だが、上下顎の咬耗が対応することから、咬耗異常による傾斜の例と判断される。

#### おわりに

本標本は小形、老齢で、この地方における古代のウマ利用について考える上で貴重な資料である。特に、歯使用の痕跡は我が国ではまだ報告例も稀である。ただ、標本自体には共伴遺物ではなく、年代決定にはやや不確実さも残る。溝の年代比定には問題がないとしても、近世遺構に切られていることから、その時期の掘り込みが存在した可能性は排除できない。本標本の意義を議論するために将来的には理化学的な年代測定を実施することが望ましい。

#### 謝辞

Gundem, Can Yumni 氏（総合研究大学院大学・特別研究員）には Bit wear の観察法についてご教示をいただいた。記して感謝申し上げる。

#### 引用文献

- 植月 学 2011 「出土馬歯計測値の比較のための基礎的研究」『動物考古学』28 1-22 頁
- 金子浩昌 1993 「西新宿三丁目遺跡出土のウマ及びその他の動物遺体」『西新宿三丁目遺跡』東京オペラシティ建設・運営協議会、東京オペラシティ建設用地内埋蔵文化財調査団 73-93 頁
- 西中川 誠・松元光春 1991 「遺跡出土骨同定のための基礎的研究」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』(平成2年度文部科学省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書) 164-188 頁
- Bendrey, R. 2007 New methods for the identification of evidence for biting on horse remains from archaeological sites. Journal of Archaeological Science 34, 1036-1050.
- Brown, D. and Anthony, D. 1998 Bit wear, horseback riding and the Botai site in Kazakhstan. Journal of Archaeological Science 25, 331-347.



1. 咬合面。傾斜面(写真下側)にセメント質が残存する。

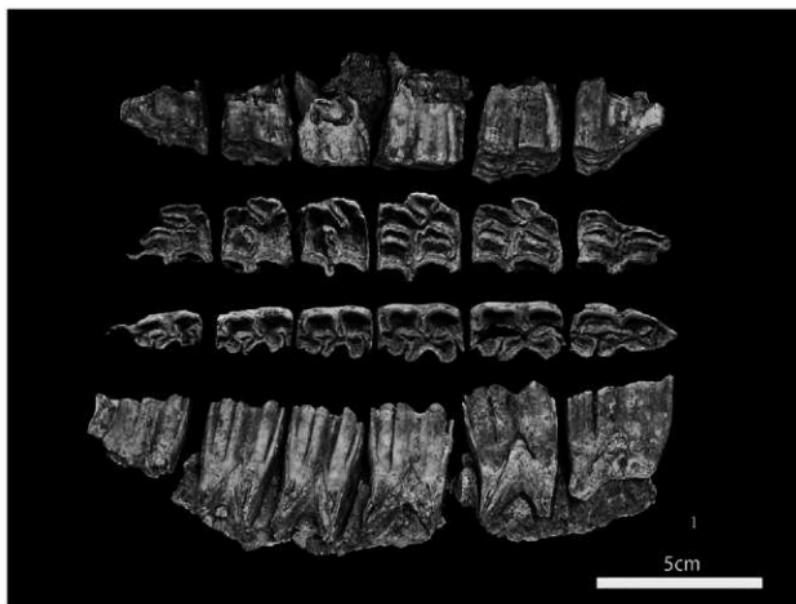


2. 前端のエナメル質露出。

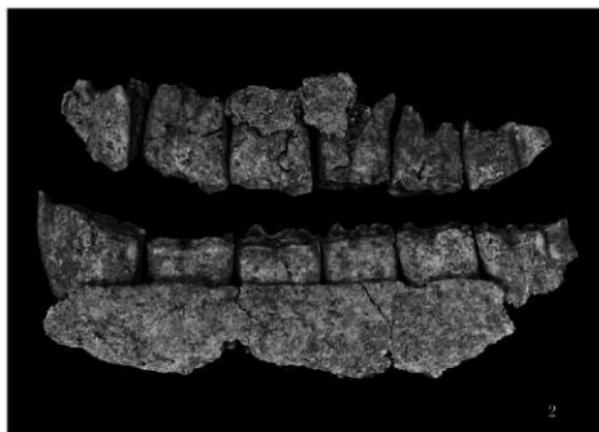


3. 傾斜面。全面にセメント質で覆われており、前端のようなエナメル質露出はない。

写真2 左下顎 P2 の歯使用痕と推定される摩耗 (目盛は 1mm)



1. 左上・下顎臼歯列  
上より 上顎舌側面、上顎咬合面、下顎咬合面、下顎舌側面



2. 左上・下顎臼歯列  
上は上顎頬側面、下は下顎頬側面



3. 右下顎 M1/2 咬合面、舌側面  
4. 右下顎 P2 咬合面、  
頬側面（左下）、舌側面（右下）

写真3 出土馬齒

## 第7節 柏原遺跡の調査成果

### 第1項 繩文時代について

第4地区（第2節）で出土した繩文土器はいずれも後期のものと考えられ、柏原遺跡が立地する田子の浦砂丘上では三新田遺跡B地区で晩期の土器2片が出土していた（平林編1983）が、これをさかのぼることが確認された。中でも加曾利B2～3式の出土遺跡は富士山麓全体でも数少ないとされ（藤原2011）、貴重な事例と考えられる。柏原遺跡周辺では、浮島ヶ原低湿地に埋没した砂礫洲上に立地する沼津市の離鹿塚遺跡や、浮島ヶ原低湿地縁辺の台地端に立地する葱川遺跡などで加曾利B2式期と見られる土器が数点確認されており、気候の寒冷化に伴う海退現象により浮島沼が陸化し、寒冷化の影響により生活領域が低地に移動したものと考えられている（沼津市2002）。（若林）

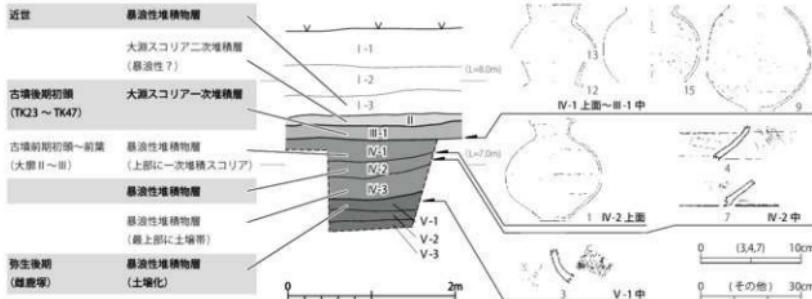
### 第2項 弥生時代から古墳時代前期について

水害起源の堆積層とその推定時期 第6地区（第3節）の調査では、疊層の詳細な観察によって、当該期のIV-1～3、V-1層については高潮や津波といった暴浪性の堆積層であることが明らかになった（第5節）。ここではまず、各層の時期について整理しておきたい。V-1層は弥生時代後期の土器片を含むことから、弥生時代後期頃までにある程度の土壤化が進行した地表付近の層と考えられる。続く定点となるのが、IV-2層上面、遺物集中4の古墳時代前期初頭（大邱Ⅱ式期）に位置付けられ

る短頭壺であるが、その下層であるIV-2層中には、4・7の弥生時代後期の土器片が含まれているのであり（第146図、TP202）、上記V層の年代観も鑑みれば、IV-2～4層が弥生時代後期から古墳時代前期初頭の間に堆積した層であることが判明する。さらにIV-1層の堆積時期については、遺物集中4の出土状況の形成要因となつた層と考えられることから、古墳時代前期初頭（大邱Ⅱ式期）から前葉頭（大邱Ⅲ式期）には堆積したものと考えたい。IV層中から出土したS字壺（第146図2）についても、大邱Ⅲ式以前におさまるものであろう。

水害の回数とその後の浮島沼南縁集落 IV-1層とIV-2層の間に存在する完形の短頭壺（第146図1）について、人間による何らかの行為の結果として残されたものと考えるのであれば、IV-1層堆積前に一定の時間的猶予が存在したことは明らかである。IV-2～4層についても、IV-3層上面には土壌帯が確認されていることを重視すれば（第5節）、複数回の災害によって堆積した層であった可能性が首肯されよう。したがって、弥生時代後期から古墳時代前期初頭までに2回以上、古墳時代前期初頭から前葉頭に1回の水害が当該集落周辺を襲っていたことが明らかとなった。

弥生時代後期に浮島沼の南縁を中心に栄えたとみられる離鹿塚遺跡や離鹿塚遺跡、柏原遺跡は、古墳時代前期初頭までは集落規模が縮小していく。変わって、柏原遺跡の西側1.5kmに位置する三新田遺跡では、古墳時



第166図 柏原遺跡第6地区の土層と土器の関係

代前期前葉（大邱Ⅲ式期）以降に拠点的な集落が形成されていくのであり（平林編 1983、佐藤 2010b）、集落再編の西側に大規模な水害が影響していた可能性についても、今後検証していく必要がある。

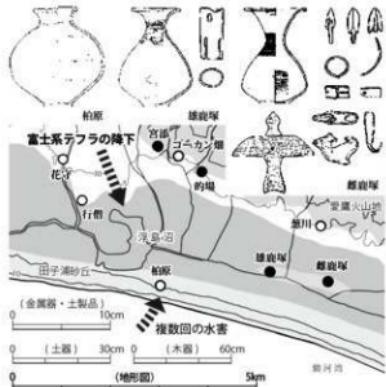
富士系テフラの降下 IV-1 層と IV-2 層、V-1 層では、富士系テフラの存在も確認されている（第5節）。新富士火山の活動期を区分した宮地直道氏（宮地 2007）や、同区分と遺跡の消長についてまとめた篠原武氏（篠原 2011・2012）の研究を参考にすれば、弥生時代中期以降にあたる当該には側火山や側火口からの小・中規模噴火が頻発していたようである。小松原純子氏らの指摘する4世紀半ば頃のスコリア（小松原ほか 2007）についても、今回のIV-1 層上部のスコリアに対応する可能性がある。今後の発掘調査によって、これらの火山灰と出土遺物の関係が整理されていくことが求められている。

### 第3項 古墳時代中期から飛鳥時代について

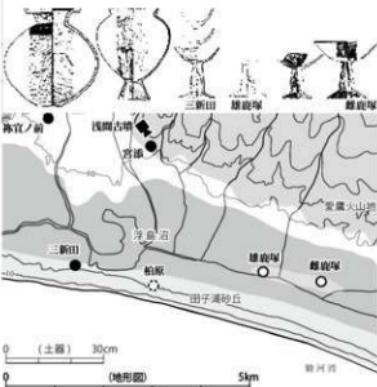
大源スコリア一次堆積層の面的検出 これまでに大源スコリアの一次堆積層とみられる土層が考古学的に検出・検証してきたのは、愛鷹山西南麓に立地する宮添遺跡の堅穴建物跡に堆積した覆土（佐藤編 2011・2012）などの局所的な調査が中心であり、近接する天神塚古墳の墳丘盛土直下（藤村・若林編 2012）や浮島ヶ原低地（浮島沼）縁辺部の沖田遺跡のテストピット調査（前田編

2000など）、低地内部の雄鹿塚遺跡（鈴木裕 1989）、難鹿塚遺跡（石川 1990）の調査、ボーリング調査（小松原ほか 2007など）から、場所によっては大源スコリア一次堆積層自体が面的な抜かりをもって遺存していることが確認されてきたものの、富士系テフラの観察事例が蓄積している近年においては、本発掘調査の機会に恵まれてこなかった。古墳時代後期初頭（TK23～TK47型式併行期）に降下した大源スコリアについては、古墳時代中期前半の土器と古墳時代後期後半～7世紀頃の土器に挟まれて大源スコリア層を面的に検出した沼津市雄鹿塚遺跡の調査を事実上の嚆矢として考古学的な時期比定が行われたが（鈴木裕 1989）、近年実施してきた愛鷹山西南麓における集落遺跡の整理作業の進展によって、その相対年代の精度が増してきた状況にある（佐藤 2011、佐藤・藤村 2013など）。柏原遺跡第6地区（第3館）における大源スコリア一次堆積層の全面検出とその層位的発掘に基づいた地質学的検証（第5節）も、そうした問題意識を絆てたどり着いた大きな成果といえよう。スコリア直下において完形に近い土器がその場で破損、散乱する状況が検出されたことも、スコリア降下時の緊迫した状況を示す遺構であった可能性がある。たとえば、戦の如く降り注いだ大粒のスコリアを避ける様に人々が当該地を離れたため、土器などの日用品がそのまま残されたとみることもできるかもしれない。

### 弥生後期～古墳前期初頭（雄鹿塚～大邱II）



### 古墳前期前葉～古墳前期末葉（大邱III～中見代I）



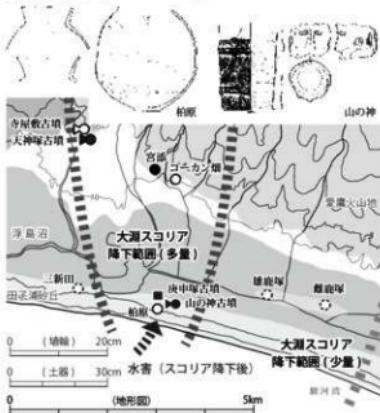
第167図 田子の浦砂丘西半部周辺の遺跡分布図①

大瀬スコリア以後の墓域化と再集落化 爰鷹山西南麓に位置する宮添遺跡では降下後も集落が途切れることなく継続する一方で（佐藤 2010）、柏原遺跡第6地区においては、大瀬スコリアの降下直前までは不自然な土器片集中箇所や不明遺構に人々の痕跡をみとめることができるものの、降下後の遺構や遺物の登場には奈良時代まで待たなくてはならず、両地域の隔たりは大きい。この断絶の間、第6地区の北東約200mにおいて、推定墳長41.5mの前方後円墳である山の神古墳が築造されていたとみられる。山の神古墳は、古墳時代中期から後期中期にかけて東駿河地域にこぞって築かれた中小規模首長墳の一つであり、関東系とみられる低位置突堤の円筒埴輪（鈴木敏 2001）や人物埴輪を採用する。概報に報告された周溝覆土には少なくとも大瀬スコリアの一次堆積層はないことと判断されること（志村編 1983）、また当地域ではTK43型式併行期以降は横穴式石室を主体部とした墳長20m以下の円墳が台頭し、前方後円墳がみられなくなることを考慮すれば、山の神古墳の時期もMT15～TK10型式併行期に位置付けられるとみられる。第6地区においてスコリア降下直後の集落の痕跡がみられないことは、山の神古墳やその前の時期と考えられる庚申塚古墳の墓域であったために、集落が営まれなかつた可能性を想定しておきたい。なお、大瀬スコリアの二次堆積層であるII層についても、その堆積要因が水害に

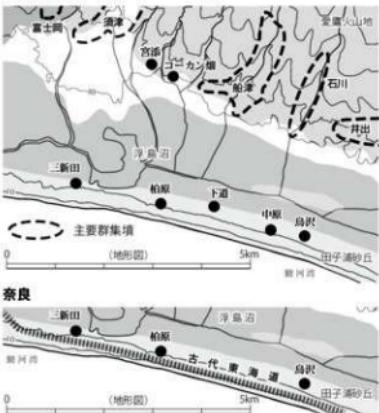
よるものであった可能性が指摘されているので（第5節）、度重なる災害も集落化が拒まれた原因の一つであった可能性がある。ちなみに柏原遺跡周辺は、駿河湾沿岸に大堤防が築かれる近代まで高潮等の水害に幾度も見舞われてきた地域であり、第6地区的発掘調査時に何った住民からの話によると、水害のたびに小高い森であった庚申塚古墳や山の神古墳の上まで避難し、水が引くのを待ったとのことである。2つの古墳は地元住民から「いのち塚」と呼ばれており、現在まで大切に守られてきた由縁がここからも窺える。

山の神古墳の周溝から、遠江中期後葉～末葉（TK209型式併行期～飛鳥1期）とみられる須恵器蓋環が検出されていることは、同時期には周辺の再集落化が進んだことを示すのである。柏原遺跡第3地区（藤村・若林 2012）や第4・7地区（第2・4節）においても、同時期の須恵器環類の出土が報告されている。6世紀後葉から7世紀にかけて田子の浦砂丘西半部の集落が活発化をみており、沼津市の鳥沢遺跡（鶴田 1998）、中原遺跡、下道遺跡（沼津市教委 1995）、富士市三新田遺跡（志村編 2000）で確認されている。当該期における田子の浦砂丘西半部の集落密度は、同時期の愛鷹山西南麓～浮島沼北岸の根方街道沿いの状況と比べると極めて高く、愛鷹山西南麓に築かれた駿河古墳群や石川古墳群といった旧駿河郡の大規模群集墳を形成した被葬者層の母体集落

古墳後期前半（TK23～TK10頃）



古墳後期後半～飛鳥（TK43～飛鳥）



第168図 田子の浦砂丘西半部周辺の遺跡動態②

の一つであったと考えられる。

#### 第4項 奈良時代から平安時代について

田子の浦砂丘西半部における律令期集落の様相については、三新田遺跡（志村編 1983・2000）や沼津市鳥沢遺跡（鶴田 1998）を除くと、不鮮明な状況にあった。柏原遺跡第4地区（第2節）では、堅穴建物と掘立柱建物のセットが8世紀後半から9世紀代に小規模化しつつも継続して建て替えられていた状況が明らかとなり（SB01・SH01・SB02・SH02）、柏原遺跡の古代集落解明への端緒となる調査となった。第3地区（藤村・若林 2012）や第6地区（第3節）でも同時期の堅穴建物跡と遺物が検出されており、ともに調査面積は少ないものの、当該期には柏原遺跡でもまとまった規模の集落が形成されていたことを窺わせる。当該地周辺は「三代実録」貞觀6年（864）12月10日条に記載され、これ以後廢されたとされる「柏原駅」の比定地として認識されている地域であり（田島 2005など）、本章で報告した一連の調査から、田子の浦砂丘上を通過する古代前半期（8～9世紀）の主要交通路（佐野 2011）沿いの集落の一端を明らかにできたと考える。

6世紀後葉～7世紀は田子の浦砂丘上に集落が多数分散する様相であったのが、8世紀になると、潤井川下流域の東平遺跡周辺や狩野川下流域の上ノ段遺跡周辺に人々は集中し、それ以外の集落は要衝を残して整理されていく。田子の浦砂丘上に立地する富士市三新田遺跡、柏原遺跡、沼津市鳥沢遺跡、東畠遺跡などは、富士郡と駿河郡の郡都を結ぶ主要交通路上の集落として、古代前半期には重視されていたものと考えられよう。

また、柏原遺跡第6地区（第3・5節）では当該期の溝状造構SD03内より馬齒がまとまって検出されており、近世以降の搅乱もありうるため馬齒自体の時期決定には慎重を要するものの、溝と同時期であれば「柏原駅」との関連も期待される。三新田遺跡でも同じような主軸を有する溝状造構（SD8）内より馬齒が検出されており（志村編 2000）、併せて検討していく必要がある。（藤村）

#### 参考文献

- 石川治夫 1990 「雄鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ 造構編」沼津市文化財調査報告書 第51集 沼津市教育委員会  
 佐藤祐樹 2010a 「宮添遺跡Ⅲ」富士市教育委員会  
 佐藤祐樹 2010b 「集落の動態からみた古墳出現前後の富士山南麓」『静岡県考古学研究』No.41・42 静岡県考古学会  
 佐藤祐樹 2011 「弥生～古墳時代における宮添遺跡を取り巻く社会構造の変化」『宮添遺跡Ⅳ』富士市教育委員会  
 佐藤祐樹 2011 「宮添遺跡Ⅴ」富士市教育委員会  
 佐藤祐樹 2012 「宮添遺跡Ⅴ」富士市教育委員会  
 佐藤祐樹・藤村 雄 2013 「考古学からみた富士山の噴火と地域社会の変動—古墳時代・平安時代を中心にして」静岡県考古学会 2012年度シンポジウム実行委員会編『考古学からみた静岡の災害と復興』静岡県考古学会  
 佐野五十三 2011 「古代富士都城における宮添遺跡の役割」『宮添遺跡Ⅳ』富士市教育委員会  
 篠原 武 2011 「富士山の火山活動と遺跡の消長・分布について」『上暮地斯屋敷遺跡』富士吉田市教育委員会  
 篠原 武 2012 「富士山の火山災害と縄文の人々」山梨県立博物館 考古学講座資料  
 志村 博編 1983 「富士市埋蔵文化財発掘調査報告書」富士市教育委員会  
 志村 博 1986 「富士市の埋蔵文化財（遺跡編）」富士市教育委員会  
 志村 博編 2000 「三新田遺跡（D地区）発掘調査報告書」富士市教育委員会  
 鈴木敏昭 2001 「埴輪」『静岡県の前方後円墳一部括弧一』静岡県文化財調査報告書第55集 静岡県教育委員会  
 鈴木裕哉 1989 「雄鹿塚遺跡発掘調査報告書」沼津市文化財調査報告書 第46集 沼津市教育委員会  
 田島 公 2005 「三駅二伝の消長と横走闇一駿河郡の駅伝制の変容—」『沼津市史 通史編 原始・古代・中世』沼津市  
 鶴田晴也 1998 「鳥沢遺跡発掘調査報告書」沼津市文化財調査報告書 第66集 沼津市教育委員会  
 沼津市教育委員会 1995 「下道遺跡発掘調査報告書」沼津市文化財調査報告書 第57集  
 沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会 2002 「沼津市史 資料編 考古」沼津市  
 平林将信編 1983 「三新田遺跡発掘調査報告書」富士市教育委員会  
 藤村 雄・若林美希 2012 「富士市内遺跡発掘調査報告書—平成11・12年度—」富士市教育委員会  
 前田勝己編 2000 「沖田遺跡」富士市教育委員会

# 第5章 沖田遺跡の調査

## 第1節 調査の経緯と経過

### 第1項 調査の経緯と経過

平成18年、ヨシコン株式会社（代表取締役吉田立志）（以下、事業者）は、富士市新橋町において、マンション建設及び宅地造成工事を計画した。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「沖田遺跡」に含まれる事から、平成18年4月18日、事業者は、富士市教育委員会教育長宛てに、「埋蔵文化財試掘確認調査依頼書」・「発掘調査承諾書」を提出した。それを受け、富士市教育委員会（担当課：文化振興課）は、埋蔵文化財試掘調査を実施することとなった。

調査は平成18年6月27日に開始し、7月6日に終了した。調査では、敷地南側において弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土し、遺構としては1トレンチから古墳の埋葬施設と考えられる木棺（準構造船の転用）が検出され、副葬品と考えられる珠文鏡・勾玉が出土した。

平成18年7月21日、以上の結果を終了報告書として事業者に伝え（富教文発第88号）、埋蔵文化財の保護に向けた協議を開始した。その結果、遺構・遺物の認められた敷地南側における工事計画の一部を変更し、9月1日、「埋蔵文化財発掘の届出書」を静岡県教育委員会へ進呈し、その後文化振興課職員立会いのもと、工事が行われた。



第169図 沖田遺跡第133次調査地点 調査位置図 (S=1/5,000)

### 第2項 調査の方法

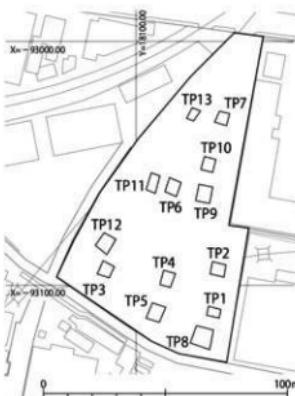
近隣における調査所見から、当該地においても条里型水田の痕跡や弥生時代以降の遺物包含層が存在する事が予想された。しかし、それらの遺物包含層は地表下4m程度と想定される事から、調査の安全・管理上の理由からテストピットによる調査方法とし、地上からの目視と、掘り上げた土中から遺構・遺物の痕跡を探る事とした。

工事計画では敷地の北側にマンションを建設し、南側は宅地造成を行う事とされていた。その為、敷地内には均等に4m四方のテストピットを設定し、調査を開始した。

調査は平成18年6月27日に開始し、合計13ヶ所のテストピットを掘削・調査し、7月6日にすべての作業を終えた。

### 第3項 整理作業経過

出土した木製品・鏡は、「平成19年度国宝重要文化財等保存整備費補助金」により、保存処理が行われた。また、調査成果の一部は既に報告されているが（富士市教育委2009）、本報告をもって正式報告とする。（佐藤）



第170図 沖田遺跡第133次調査地点 テストピット配置図 (S=1/2,000)

## 第2節 遺跡の環境と条里型水田

### 第1項 沖田遺跡の立地と環境

沖田遺跡はかつての吉原瀬の北側、浮島ヶ原低地の西端に位置する。浮島ヶ原低地は愛鷹火山地の南麓に位置し、南方には駿河湾、そして富士川河口から沼津市狩野用まで続く田子浦砂丘が存在する。

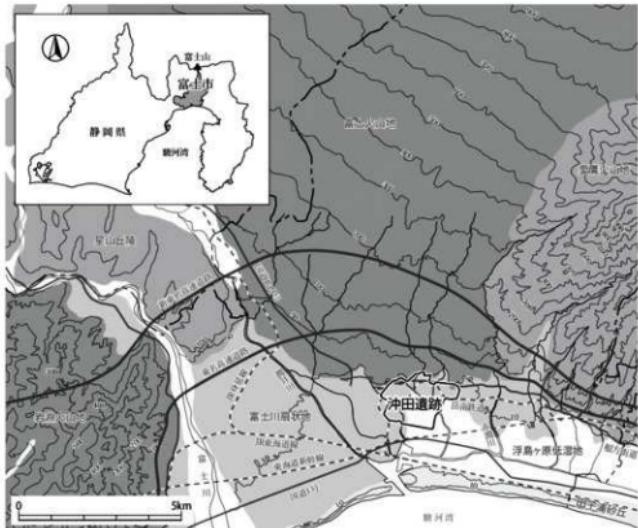
現在は水田地帯が広がっているが、近世まで、この低地部には富士川や愛鷹山の河川が住み込み、最終的に沼川のみによって駿河湾に水が排出される状況であったため、大雨や高潮があると浮島ヶ原低地全域の20km<sup>2</sup>が一大湖沼となる土地であったという。比較的安定的に耕作が行えるようになったのは、昭和18年に沼の排水を目的として田子の浦砂丘上に昭和放水路が、昭和28年から昭和41年にかけて田子浦港が、昭和38年に第二放水路が造られたことによるところが大きい（富士市立博物館 1984）。

弥生時代後期以降、この浮島ヶ原低地を取り囲むようになつて集落が存在し、それぞれが密接な関係をもちながら地

域を形成していたものと考えられる。それらの地域内ネットワークの存在に欠かせない主要な「路」が、浮島ヶ原低地と愛鷹火山地の境に存在する、富士市から沼津市を経て三島市へと至る「静岡県道22号三島富士線」通常称「模方街道」であったと考えられる。

昭和38年の岳南排水路埋設工事に伴って、弥生時代中期に位置付けられる土器片が出土している（富士市教委 1986）。また、本章第3節で報告するとおり第133次調査では、古墳時代前期の準構造船が珠文鏡とともに出土しており、これは木棺に転用されたものと考えられている。第88・104・108・114・118次の各調査では、律令期の条里型水田に関わるとみられる畦畔が検出されている。

道路が存在する土地の地盤が沈下しているため、遺跡の詳細については不明な部分も多いが、近年の報告により、弥生時代から平安時代に至るまで連続と続く遺跡の様相が少しづつ明らかになってきている。（佐藤）



第171図 沖田遺跡の位置 (S=1/150,000)

## 第2項 調査歴

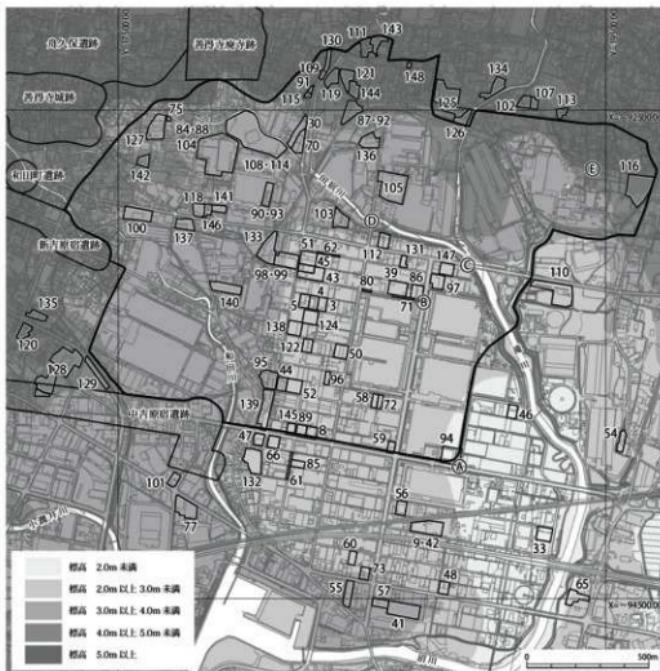
沖田道跡の発見は昭和38年の岳南排水路埋設工事に伴い土器が発見されたことによる。地表下3~7mより土器片が多數出土するという状況は、当時かなりの驚きであったに違いない（A~C地点）。

また、昭和24年に発見された西比奈道跡も含せて現在は「沖田道跡」と呼称している（E地点）が、その実態は長らく不鮮明のままであった。

沖田道跡ではこれまでに148次に及ぶ調査が行われており、そのうちで工事立会を除く試掘・確認調査、本発掘調査は97次にのぼる（第172図、第13表、平成24年3月現在）。

特に平成に入ってから行われた度重なる調査の結果、弥生時代中期以降の土器が多數出土すること、8次の調査で律令期の条里型水田に関わると考えられる町界や杭列が確認されており、（第13表、ゴシック表示）その実態が少しづつではあるが明らかとなってきたと言える。

（佐藤）



第172図 沖田道跡 調査歴図 (S=1/20,000)

第13表 沖田遺跡 調査履歴一覧

調査 地点	調査 年度	調査 区分	所在地	調査期間	時代	遺構	遺物	文献
A	S38	工事発見		弥生～古墳	なし		土器・木製品	
B	S38	工事発見		弥生～古墳	なし		土器・木製品	
C	S38	工事発見		弥生～古墳	なし		土器・木製品	
D	工事発見			古墳	なし		土器	
E	S24	工事発見		弥生～古墳・奈良	なし		土器	
3	S60	試掘	今泉字水澤429-3	S61.23		なし	なし	
4	S60	試掘	今泉字水澤429-4	S61.23		なし	なし	
5	S60	試掘	今泉字水澤429-5	S61.23		なし	なし	
8	S60	試掘	今泉字三条331-1外	S61.2.17		なし	なし	
9	S61	試掘	伊田衝天塚小田261-2外	S61.5.28		なし	なし	
30	H02	試掘	宇都宮市西町8-1号	H2.1.6		なし	なし	
33	H02	試掘	伊田衝天塚419-外	H2.5.24～5.25		なし	なし	
41	H02	試掘	伊田衝天塚下三条207-1号	H3.2.18～2.19		なし	なし	
42	H02	試掘	伊田衝天塚小田257-5号	H3.5.25		なし	なし	
43	H02	試掘	今泉字北尾奈463-1号	H3.5.15～36	弥生～古墳	なし	土器・木器	
44	H03	試掘	今泉字三条355-1外	H3.4.15		なし	なし	
45	H03	試掘	今泉字北尾奈464-2号	H3.4.15～5.9	古墳	溝状構・土坑	土器・木器	
46	H03	試掘	今泉字中巣800-1号	H3.4.16		なし	なし	
47	H03	試掘	伊田衝天塚641-1号	H3.7.15		なし	なし	
48	H03	試掘	伊田衝天塚334-3号	H3.6.24		なし	なし	
50	H03	試掘	今泉字水澤386-3号	H3.10.7～10.11	古墳	なし	土器器・木器	
51	H03	試掘	今泉字北尾奈465-1号	H3.11.12～11.18		なし	土器器・木器	
52	H03	試掘	今泉字三条354-1号	H4.3.23		なし	なし	
54	H04	試掘	北条字片田497-1号	H4.4.23		なし	なし	
55	H04	試掘	伊田衝天塚下三条187-1号	H4.6.11		なし	なし	
56	H04	試掘	伊田衝天塚小田270-1号	H4.7.15～7.17		なし	なし	
57	H04	試掘	伊田衝天塚下三条204-1号	H4.8.20		なし	なし	
58	H04	試掘	今泉字北の水616-1号	H4.9.3		なし	なし	
59	H04	試掘	今泉字花の木645-1	H4.11.26		なし	なし	
60	H04	試掘	伊田衝天塚中163-1	H5.1.16		なし	なし	
61	H05	試掘	伊田衝天塚107-2号	H5.7.28～7.30		なし	なし	
62	H05	試掘	今泉469-1号	H5.8.18～8.23	古墳	なし	土器器・須恵器・木製品	
65	H05	試掘	今井字人丸251号	H5.11.4		なし	なし	
66	H05	試掘	今泉字三条325-1号	H5.12.3		なし	なし	
70	H06	試掘	宇都宮市町7-2	H6.7.5		なし	なし	
71	H06	試掘	今泉字高尾奈433-1号	H6.7.22	弥生～古墳・奈良	なし	土器片	
72	H06	試掘	今泉字北の木615-2	H6.9.14～9.15		なし	なし	
73	H06	試掘	伊田衝天塚下三条174-1号	H6.10.27～10.28		なし	なし	
75	H06	試掘	今泉2丁目9-30	H6.12.20		なし	なし	
77	H06	試掘	同鳥居字内132-1号	H7.3.10		なし	なし	
80	H07	試掘	今泉字北尾奈457-3号	H7.8.17		なし	なし	
84	H07	試掘	今泉3丁目153-1号	H8.1.24～1.30		水田	土器器	報告書1
88	H08	本調査	今泉3丁目153-1号	H8.5.24～7.15	律令	水田・耕作	土師器・木製品・灰釉陶器(墨書き)	報告書1
85	H07	試掘	今泉字三条316-2号	H8.2.14		なし	なし	
86	H08	試掘	今泉字北尾奈453-1号	H8.4.12		なし	なし	
87	H08	試掘	原田字東山下56号	H8.5.1～5.8	律令	水田	土器器・木製品	報告書8
89	H08	試掘	今泉字三条330-1号	H8.6.26～6.28	奈良・平安	水田耕作土	なし	
90	H08	試掘	今泉3丁目17-1	H8.7.3		なし	なし	報告書8
91	H08	試掘	宇都宮市町15号	H8.8.19～8.24	古墳・奈良・平安	水田(奈良・平安)	土師器・机(古墳)	
92	H08	本調査	原田字東山下56号	H8.9.2～11.29	古墳・律令	水田・耕作(古墳)・須恵器・木製品(奈良・平安)	土師器(古墳)・須恵器・木製品(奈良・平安)	報告書8
93	H08	本調査	今泉3丁目17-1	H8.9.13～10.23	古墳・律令	水田(奈良・平安)	土師器・木製品(古墳)	報告書8
94	H08	試掘	今泉字田700-1	H8.10.28～10.29		なし	なし	
95	H09	試掘	伊田衝天塚648-1号	H9.4.23		なし	なし	
96	H09	試掘	今泉字水澤361-1号	H9.5.28		なし	なし	
97	H09	試掘	今泉字北尾奈543-2号	H9.8.11～8.13	弥生～古墳	水田	土器・木製品	
98	H09	試掘	新橋町205-4号	H9.9.25～9.26	奈良・平安	机列	なし	
99	H09	試掘	新橋町205-4号	H9.10.27～10.30	奈良・平安	机列	なし	
100	H09	試掘	今泉1丁目64-19号	H10.3.9～3.10		なし	なし	

調査地点	調査年度	調査区分	所在地	調査期間	時代	遺構	遺物	文献	
101	H10	試掘	八代町 53	H10.6.5 ~ 6.12		なし	なし		
102	H10	試掘	北条字荒川750番地	H10.6.24		なし	なし		
103	H10	試掘	今泉字高尾506番3号	H10.7.9		なし	なし		
104	H10	本調査	今泉3丁目153-1外	H10.7.27 ~ 10.8	古墳前期・平安	桂郷・溝	土師器・木材	報告書1	
105	H10	試掘	荒田町10番	H10.10.5 ~ 10.13		なし	なし		
107	H10	試掘	北条字荒川760番地	H10.11.16		なし	なし		
108	H10	試掘	今泉3丁目146-1外	H10.12.3 ~ 12.25	奈良・平安	水田・大畦畔	なし		
109	H10	試掘	東条町西町341番外	H11.2.4 ~ 3.17		なし	なし		
110	H11	試掘	北条字荒川768番1号	H11.5.17		なし	なし	報告書9	
111	H11	試掘	東条町西町538番7号	H11.5.24 ~ 6.8	平安・中後・近世	住居跡？(中世)	版瓦器片・土器片・陶器片・磁器片	報告書9	
112	H11	試掘	今泉字高尾500番1号	H11.6.8 ~ 6.30		なし	なし	報告書9	
113	H11	試掘	北条字荒川760番1号	H11.11.15 ~ 11.19		なし	なし	報告書9	
114	H11	試掘	今泉3丁目146-1外	H11.12.4 ~ 12.24	吉備・奈良・平安	水田・桂郷跡	土師器片	報告書9	
115	H11	試掘	東条町西町19番9号	H11.12.20 ~ 12.21		なし	なし	報告書9	
116	H12	試掘	北条字荒川768番1号	H12.5.22 ~ 5.25	古墳・奈良・平安	堤上・墓	土師器・磁器器	報告書9	
118	H12	試掘	今泉3丁目158番1号	H12.12.4 ~ 12.5	吉備・奈良・平安	大畦畔(奈良~平安)	土師器(古墳)	報告書9	
119	H12	試掘	東条町西町58番1号	H13.5.22 ~ 5.25	古墳・奈良	なし	土師器・磁器器・木製品	報告書6	
120	H13	試掘	伝法宇治寺道3659番1号	H13.9.26 ~ 9.27		なし	なし	報告書6	
121	H13	試掘	東条町西町58番1号	H13.11.9 ~ 10.15	古墳・平安	住居跡	土師器・磁器器・木製品・灰陶器・墨書き器	報告書6	
122	H13	試掘	今泉字木瀬385番外	H14.1.22 ~ 1.23		なし	なし	報告書6	
124	H14	試掘	今泉字木瀬408番1号	H14.11.26 ~ 11.29		なし	なし	報告書5	
125	H14	試掘	荒田町8番1号200番1号	H16.5.26 ~ 6.10		なし	なし	報告書2	
126	H16	試掘	荒田町土井1301-3番	H16.9.23 ~ 10.27		なし	なし	報告書2	
127	H16	試掘	今泉2丁目127番6号	H16.11.29 ~ 12.8	奈良~平安	水田	木片	報告書2	
128	H17	試掘	荒田町河369番7号	H17.4.22 ~ 4.28		なし	なし	報告書3	
129	H17	試掘	糸島185番外	H17.4.26		なし	なし	報告書3	
130	H17	試掘	東条町西町33	H17.10.19 ~ 10.20		なし	なし	報告書3	
131	H17	試掘	今泉字高尾奈480番8	H18.27		なし	なし	報告書3	
132	H18	試掘	依田橋644番4号	H18.4.24 ~ 4.25		なし	なし	報告書3	
133	H18	試掘	新横町198番3号	H18.6.27 ~ 7.6	古墳	水田	土器片・木製品・金属製品(銅鏡)	報告書3	
134	H18	試掘	荒田字柳原319番4号	H18.7.6		なし	なし	報告書3	
135	H18	試掘	西町3651番2号	H18.7.7		なし	なし	報告書3	
136	H18	試掘	荒田字下八坂127番	H18.12.13		奈良~平安	水田	なし	報告書3
137	H18	試掘	新横町212番1号	H18.12.13 ~ 12.15	溝生	なし	土器片・木製品	報告書3	
138	H18	試掘	今泉字木瀬406番2号	H19.1.16 ~ 1.18	古墳	なし	土器片	報告書3	
139	H19	試掘	依田橋町642番1号	H19.5.24 ~ 5.28	不明	水田耕作土3面	なし	報告書4	
140	H19	試掘	新横町237番1号	H19.8.2	奈良~平安?	水田	なし	報告書4	
141	H19	試掘	今泉3丁目159番5号	H19.9.219	奈良~平安?	水田耕作土	なし	報告書4	
142	H19	試掘	今泉2丁目97番2号	H19.12.19		なし	なし	報告書4	
143	H21	試掘	東条町西町535番5号外	H21.6.9 ~ 6.10		なし	なし	報告書7	
144	H21	試掘	東条町東町502番2号	H22.1.27		なし	なし	報告書7	
145	H21	試掘	今泉329番1号	H22.2.10		なし	なし	報告書7	
146	H22	試掘	今泉3丁目158番1号外	H22.4.8		なし	なし	報告書7	
147	H23	試掘	今泉字金谷534番1号外	H23.7.11 ~ 7.12	古墳	なし	土師器		
148	H24	試掘	東条町東町168番1号	H25.2.5		なし	なし		

※ 工事社会実験。

- 報告書 1 「井田遺跡」宮土市教育委員会 (2006)  
 報告書 2 「平成16年度、富士市内路跡発掘調査報告書」富士市教育委員会 (2006)  
 報告書 3 「平成17・18年度、富士市内路跡発掘調査報告書」富士市教育委員会 (2008)  
 報告書 4 「平成15・19年度富士市内路跡発掘調査報告書」富士市教育委員会 (2009)  
 報告書 5 「平成14・20年度、富士市内路跡発掘調査報告書」富士市教育委員会 (2010)  
 報告書 6 「平成13年夏、富士市内路跡、伝法宇治寺道発掘調査報告書」富士市教育委員会 (2010)  
 報告書 7 「平成21年春、富士市内路跡発掘調査報告書」富士市教育委員会 (2011)  
 報告書 8 「富士市内路跡文化財調査報告書」第31集「富士市内路跡文化財調査報告書」富士市教育委員会 (2012)  
 報告書 9 「富士市内路跡文化財調査報告書」第33集「富士市内路跡文化財調査報告書」平成11・12年度、富士市教育委員会 (2012)

### 第3項 条里型水田の復原

先に述べたように、沖田遺跡では条里型水田に関わるものと考えられる水田畦畔や杭列等が確認されている。

検討資料としては非常に少なく、心もとないようにも思われるが、これらの遺構から律令期の沖田遺跡における条里型水田の姿を推定復原してみたい。

まず、検出されている畦畔の中で「大畦畔」としてきた7ヶ所（第14表、A～G）が水田区画（坪界）を成す畦畔の一部と考えて区画を推定することとした。

始めに、南北の一直線上に並ぶA・B・Cから、南北の傾きはN - 9.66° - Eと推定した。

この直線を南北方向の畦畔E・Fまで平行移動させると、実寸107.0mの等間隔でそれぞれの畦畔を通るラインとなった。

東西ラインは南北ラインに直交するものとして90度回転させて配置すると、南北方向と同じく実寸107.0mの等間隔に並べた線がD・Gの大畦畔を通過した（第173図）。

以上から、実寸107.0m間隔の方格区画を、沖田遺跡における条里型水田の規格として推定した。

静清平野北部の池ヶ谷遺跡、川合遺跡、瀬名遺跡などで約6kmにわたって発見された律令期の条里遺構では、1坪の1辺の長さの平均が約107mと算出されており（栗野1991、栗野・矢田1993）、これと整合する数値が得られた。

推定条里区画の南北の傾きN - 9.66° - Eは、沖田遺跡南方低地部に現存する道路区画の傾きN - 10.3° - Eと近似する値であり、道路と推定区画がほぼ一致する部分も認められる（第174図）。

また、精度の不十分さは否めないが参考までに、昭和8年発行の「静岡県富士郡今泉村地番別入地図」の和田川と田宿川・龍川に囲まれた範囲を河川・道路を基準として重ねてみると、当時の水田区画と推定条里区画がおおよそ合致するような部分が認められる（第175図）。

ここから、条里制に基づいて行われた土地区画が律令期から近年に至るまで踏襲してきたこと、そして、遺構としては殆ど検出されていないが、標高20～30mの範囲も律令期には水田として区画され利用されていた可能性が想定できる。

とすると、細かく、やや乱れたような水田区画がみられる、標高が2m強より低い範囲（第175図の右下あた

り）は、条里区画が行われた当時には畦畔が安定して存在できるような土地ではなかった、あるいは水田として利用される土地ではなかった可能性が考えられる。

「大畦畔」7ヶ所を坪界と考えて水田区画の推定を行ってみたが、それぞれの規模を比較すると、そこには明らかな差が認められる（第14表）。

まず、C・F・Gの3ヶ所は全体幅2～3m前後を測り、7ヶ所の中では同一規模のグループと考えられる。

これに比して、群を抜いているのがDである。調査範囲が限られており全容は不明であるが、検出された部分だけで全体幅がFの3倍、Gの2倍以上となる。

また、一直線上に位置するAとCにおいても、全体幅・上面幅とともにAがCの2倍を超えている。EもAに次ぐ規模であり、A・D・EはC・F・Gとは異なる規模のグループに分類できる。

『沖田遺跡』（富士市教委2000）において、Dはその規模から里界となる可能性が指摘されている。同規模のグループとして、A・Eについても同様のことが言える。

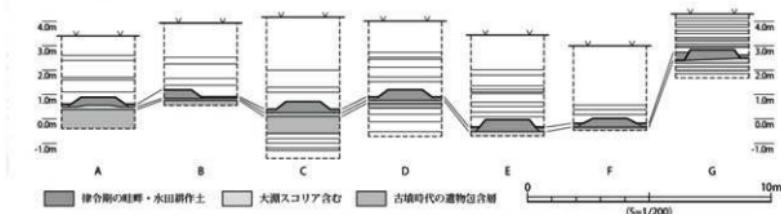
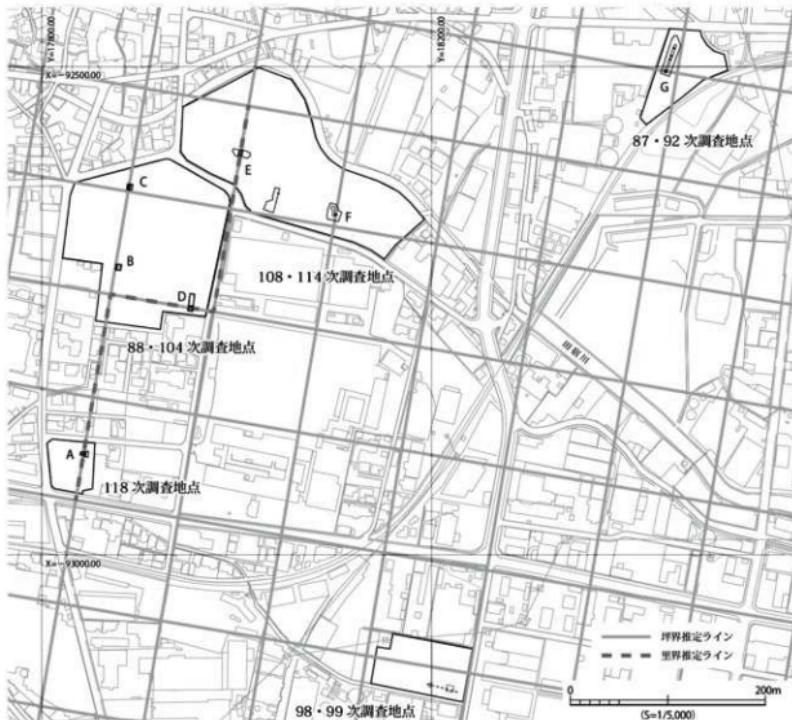
仮にA・D・Eの3ヶ所を里界と考えると、少なくともこの部分においては里界が直交しないことになる（第173図）。坪界は一定の規格に則って整然と区画されるが、里界は土地の高低や河川の流路など、地形の制約に応じて、必ずしも正方形区画ではなく設定された可能性が考えられる。

大畦畔以外に、小畦畔や杭列が検出されている地点が3ヶ所ある。坪内の小区画（段）を為すものと考えられるため、坪の区画方法として「長地型」（短冊状に10等分する）と「半折型」（全体を2分割してそれを5等分する）を基本形として、これに合致するかどうか、試みに検討を行った。

92次調査地点では東西方向の小畦畔が3条（SNK06～08）確認されている（第176図）。セクション図（報告書8、第10図）によれば、検出された水田面には小畦畔を境にSNK08以南、SNK08と06の間、SNK06以北と、10cm程の高低差が認められるようであり。畦畔間（水田面）の幅も11.25m程でおよそ等しいため、これを段の境と考えてみたが、「半折型」「長地型」いずれも合致しない。当地点は浮島ヶ原低地の北端に位置し、畦畔検出面の標高が他地点と比べて最大で3m近く高い（第173図）。水田区画においてもこの辺りが北端であったとも考えられる。

第14表 沖田道跡 接出畦畔一覧

畦畔	調査地点	検出場所	方向	全体幅(m)	上面幅(m)	高さ(m)	本田面標高(m)	備考
A	118	TPI	南北	5.34	2.60	0.30	0.6	土層断面で確認。
B	88	第1調査区	南北	(1.15)	(0.60)	0.30	0.8 ~ 1.0	土盛り畦畔。畦畔に平行する流路あり。
C	88	第2調査区	南北	2.30	1.10	0.30	0.3	畦畔の内側に杭列、畦畔内に芯材。
D	104	第3調査区	東西	(5.60)	(5.26)	0.25	0.9	土盛り畦畔。畦畔上に水路あり。
E	108	TP9	南北	4.20	3.00	0.50	-0.3	土層断面で確認。
F	114	TP5	南北	1.90	1.50	0.20	-0.2	土層断面で確認。
G	92	本調査区	東西	2.70	1.80	0.40	2.5	土層断面で確認。



第173図 沖田道跡 畦畔検出調査地点と畦畔推定ライン (S=1/5,000)・土層断面図 (S=1/200)

未報告であるが、98・99次調査地点では東西方向の直線上に並ぶ4本の杭が出土している（第176図）。西から1本目と2本目の杭の間隔は約17.8m、2本目と3本目の間隔は約3.9m、3本目と4本目の間隔は約1.0mを測る。坪界の推定区画から考えると、東西方向の角度ははざれるが、長地型で北から2条目、半折型で1条目に近い位置にあり、段を区画する小畦畔に付随するものの可能性が考えられる。

こちらも未報告であるが、108次調査地点ではTP14

の東塀土層で小畦畔とみられる高まりが確認されている（第176図）。土層での検出のため畦畔の傾きは特定できないが、推定坪界との間隔はおよそ24mを測る。これより南側の土層には小畦畔が確認されていないことから、この坪の段は「長地型」よりも「半折型」に近い区画になる可能性がある。ただし、坪を東西に二分する小畦畔はテストピットでは確認されていない。

以上、資料がごく限られているうえ、推定に推定を重ねたものであるが、沖田遺跡における律令期の条里型水



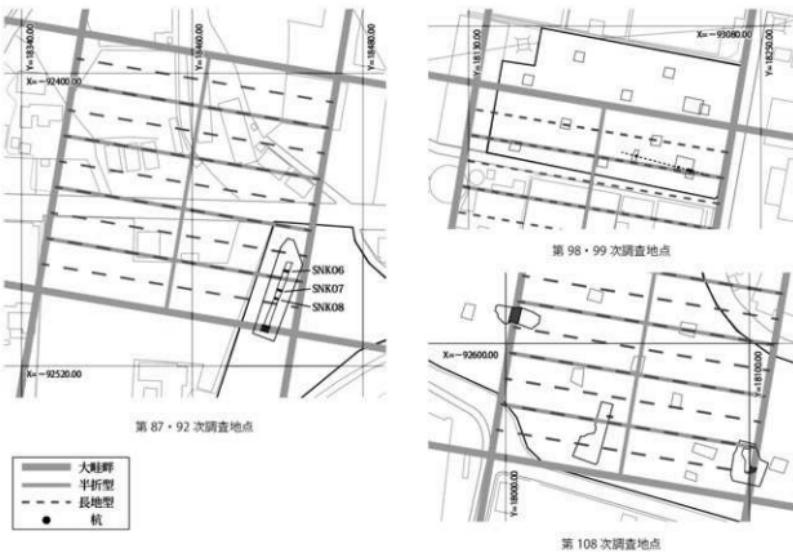
第174図 沖田遺跡 水田開闢遺構検出地点位置図 ( $S=1/10,000$ )

について推定復原してみた。

今後、さらに調査が重ねられ、特に資料の少ない和田川以西、田宿川以北について資料が得られ、より精度の高い復原が可能となることを期待したい。  
(若林)



第175図 「静岡県富士郡今泉村地番反別入地図」と推定条里区画 (S=1/10,000)

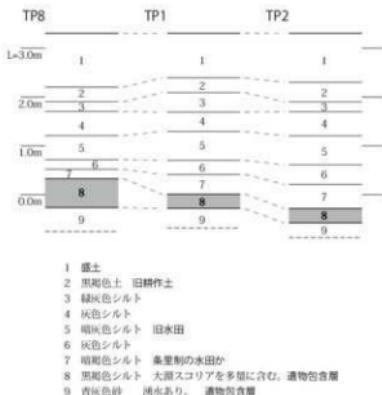
第176図 小貝塚の推定 ( $S=1/2,000$ )

### 第3節 第133次調査地点の調査成果

#### 第1項 基本土層

調査地の標高は32m前後で、標高-0.5m付近まで掘削調査をし、9つの層に分層する事が出来た（第177図）。後世の盛土を除いてシルト層で構成され、標高1m前後付近の暗灰色シルト層（5層）及び標高0～0.4m付近の暗褐色シルト層（7層）が水田耕作土と考えられ、後者は、奈良～平安時代の条里制水田に伴う可能性が考えられた。

また、標高0m以下においてみとめられた黒褐色シルト層（8層）及び青灰色砂層（9層）から遺物の出土が見られた。8層には、大潤スコリアが多量に含まれる事から古墳時代中期末から後期初頭以降（佐藤2012a）の土層と考えられる。また、青灰色砂層（9層）からは木棺に転用された準構造船の部材を始め、珠文鏡、勾玉、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器片が比較的まとまって出土した。

第177図 沖田遺跡第133次調査地点 土層柱状図 ( $S=1/100$ )

## 第2項 木棺の検出

1トレンチの重機掘削中、地表下4m（標高-0.5m）の青灰色砂層（9層）より突如、木の塊りが頭をだした。しかし、安全管理上の理由からテストピットの内部に入が進入し調査をする事は無理と判断し、重機による慎重な掘削を続行し、掘り上げた土砂を精査する事とした。掘削中、船の底面を上面にむけた状態で木材が検出され、その後の土砂の精査中に珠文鏡、勾玉が確認され、さらに軸（もしくは轄）付近を洗浄中に人齒を発見した。出土した木材は準構造船の部材であり、途中が存在しないが、軸・轄の両側が良好に残存していることが明らかとなつた。

以上の所見を総合すると、発見された木材は準構造船の部材を木棺に転用したものと考えることができる。木材には人骨がへばりついている痕跡も観察することも出来る。

現在は軸部分2m、轄部分2mが残存するが、準構造船としては、本来6～7m程度であった事が想定される事から、重機掘削により多くの部材を取り上げる事の出来た軸部分を木棺の蓋とし、轄部分を木棺の身の部分として、合わせる様にして使用したものと考えられる。

また、発見された舷側板も軸、轄同様2m程度であった事から側面に使用されたものと想定される。

他にも木材片が多数出土した事から、小口部分に木材片を使用して密封する様な造作がなされたと考えられるが、棺に転用する際のはぞ穴などがあけられた痕跡がない為、詳細は明らかでない。

珠文鏡、勾玉は副葬品として位置づける事が出来よう。

木棺が出土したのは青灰色砂層であり、明確な埴丘盛土は確認されなかった事から、低埴丘の古墳であったと

考えられる。

## 第3項 出土遺物

前述の通り、今回の確認調査では木棺と考えられる部材が出土した。調査の性格上・安全上の理由から明確な遺構を認識することは出来なかつたが、一緒に出土した青銅鏡や勾玉、人齒などから古墳の埋葬施設である可能性が高い。

その一方で、出土した木棺は準構造船の部材を転用したこと事が明らかであった。その後、保存処理をする過程で、木棺ではなく準構造船として復原することとした。そのため、以下では、木製品として記述することとした。記述順は調査において出土した木製品（準構造船・田下駄）、古墳の副葬品、土器・石製品とした。

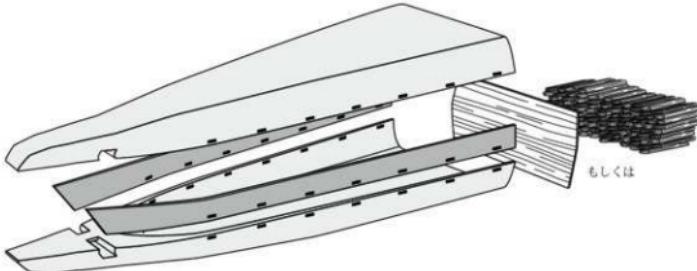
**準構造船** 第179～181図1～8が準構造船の部材である。1～6が丸木舟部分、7・8が舷側板である。いずれも樹種はスギと考えられる。

1が木棺の蓋に、2が木棺の身に転用された部材と考えられる。1・2の軸先から同距離の断面形態を比べると、1のはうが尖っており、2の断面のはうが平らである事から、1が軸、2が轄部分と考えられる。

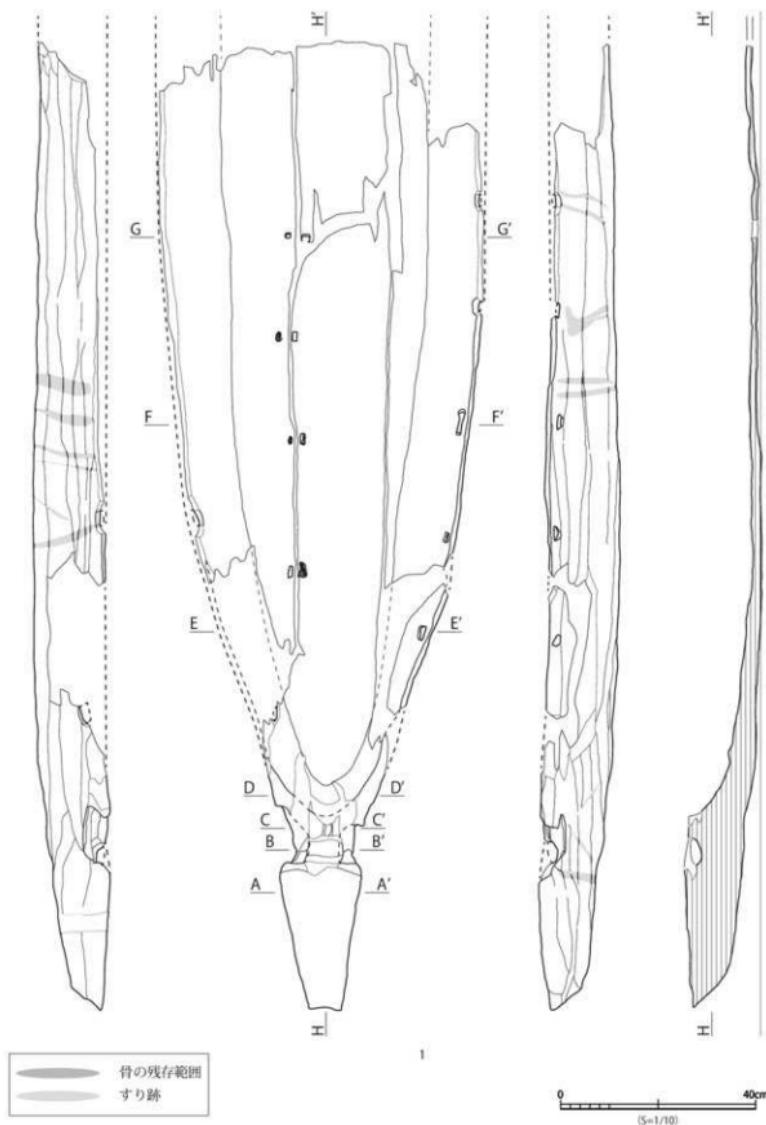
1・2の残存長の合計は約4mだが、2は接合しない。おそらく接合しない部分があると2m程度存在し、本来の長さは6～7m程度であったと考えられる。

幅67cmの浅いU字形の船体から軸の先端にむかって細くなり、先端部は断面三角形を呈し、先端幅は7～8cmを測る。軸上面は平坦に仕上げられ水平方向にはぞ穴があけられている。

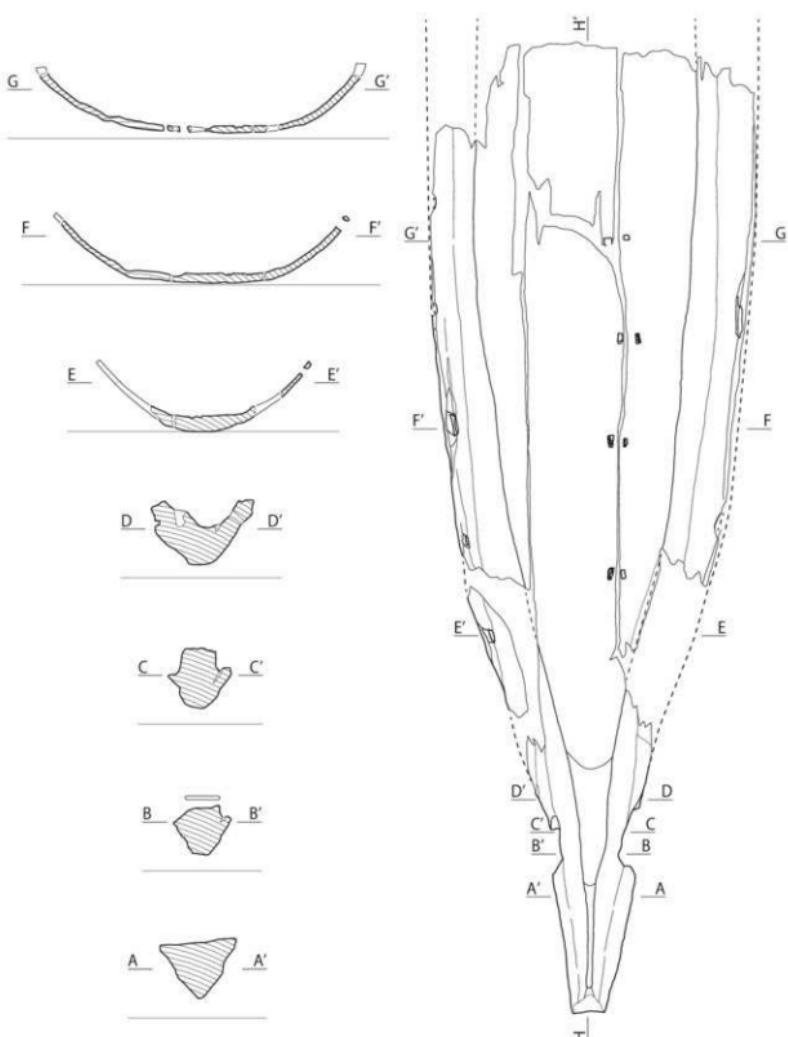
側面部には、舷側板との接合に伴う穴が約20cm間隔であけられている。穴は横長の方形を呈し、幅0.8～



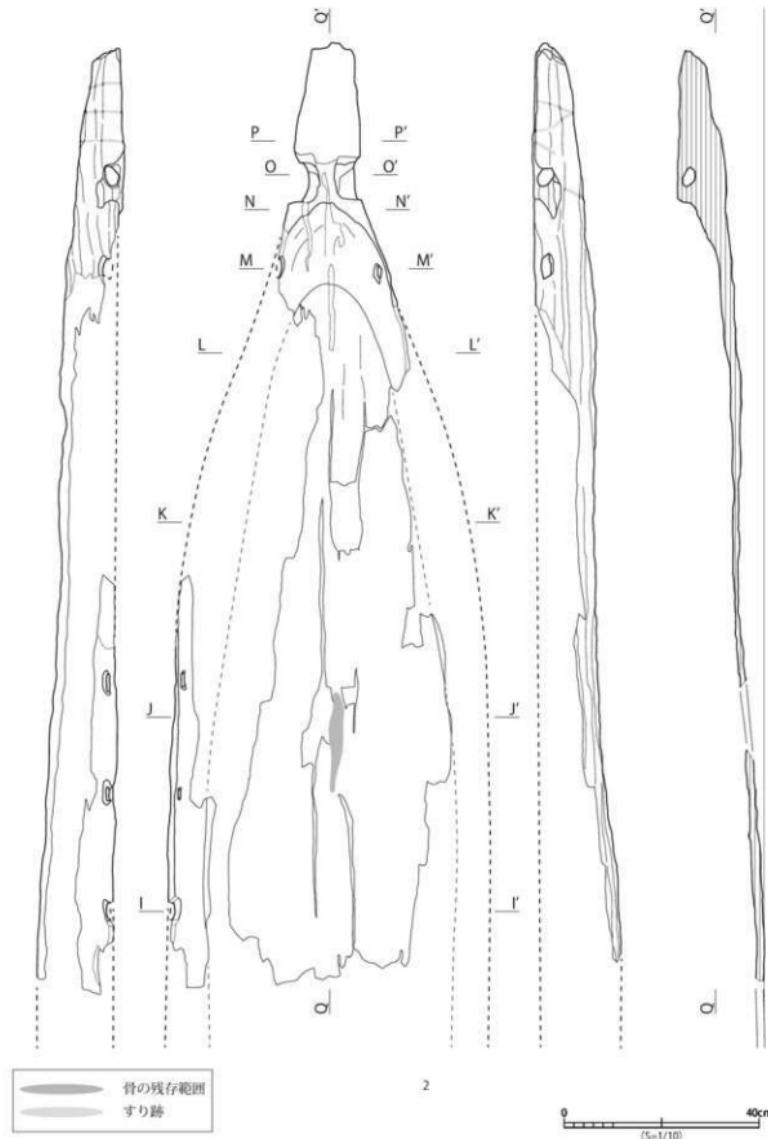
第178図 準構造船 木棺転用のイメージ



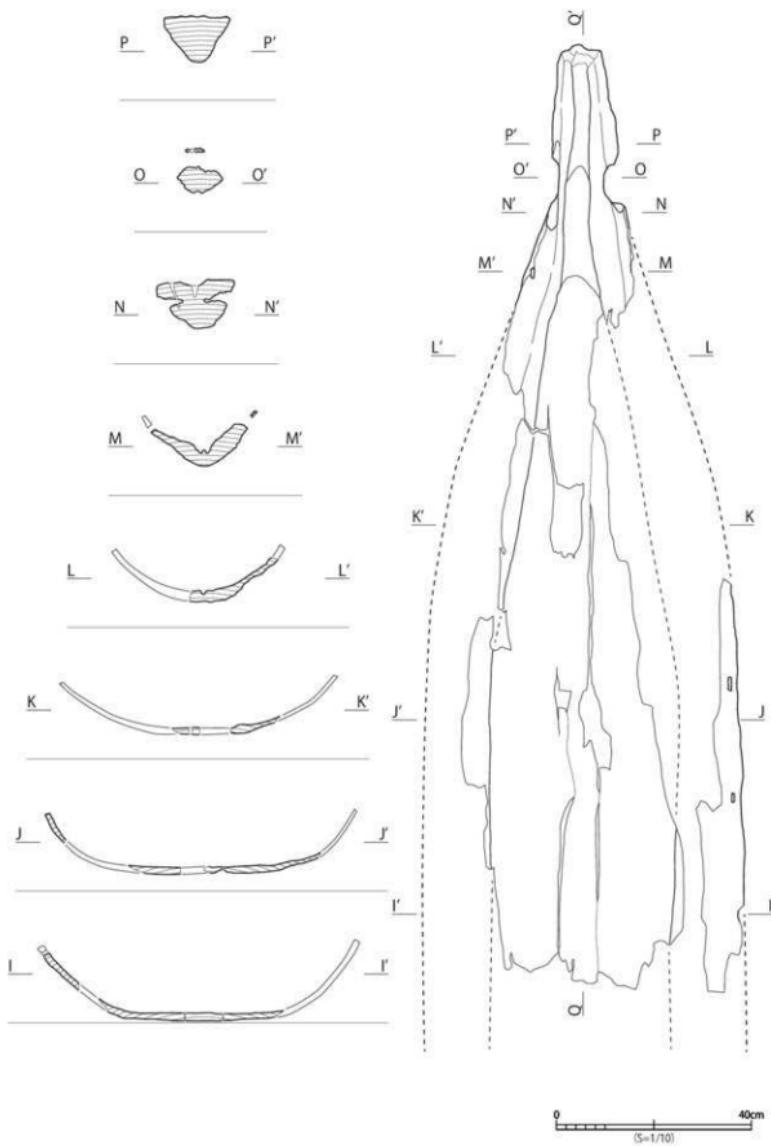
第179図 沖田遺跡第133次調査地点 出土遺物(木製品①)

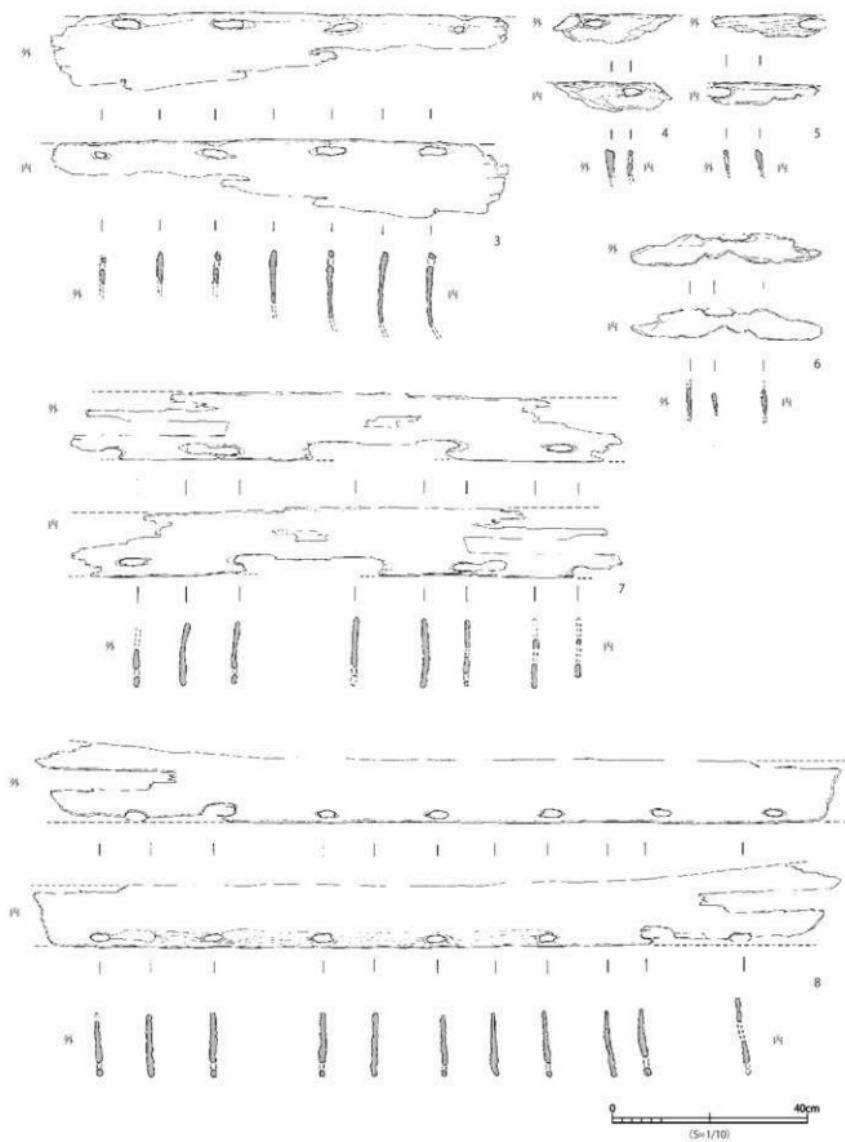


0 40cm  
(5=1/10)



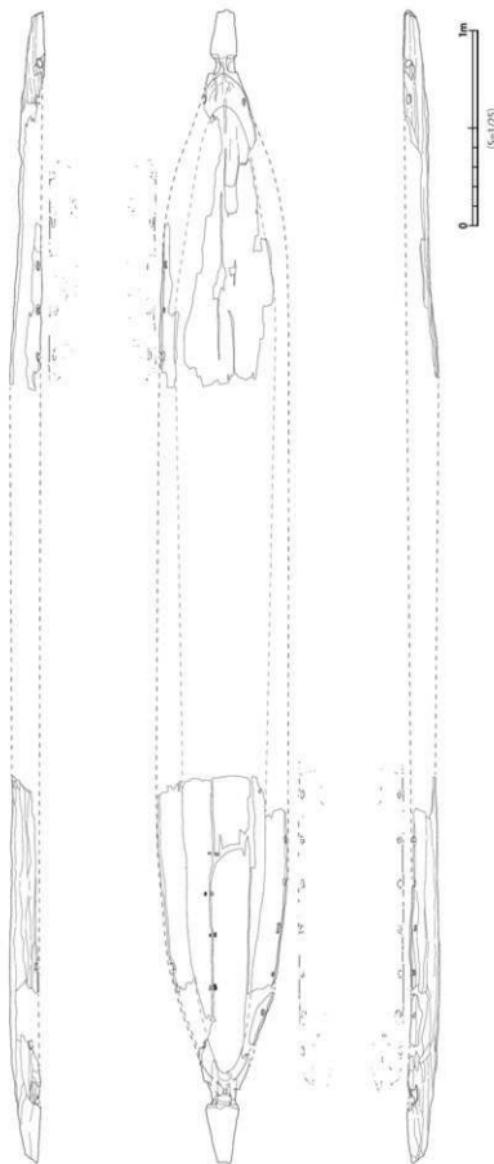
第180図 沖田遺跡第133次調査地点 出土遺物(木製品②)

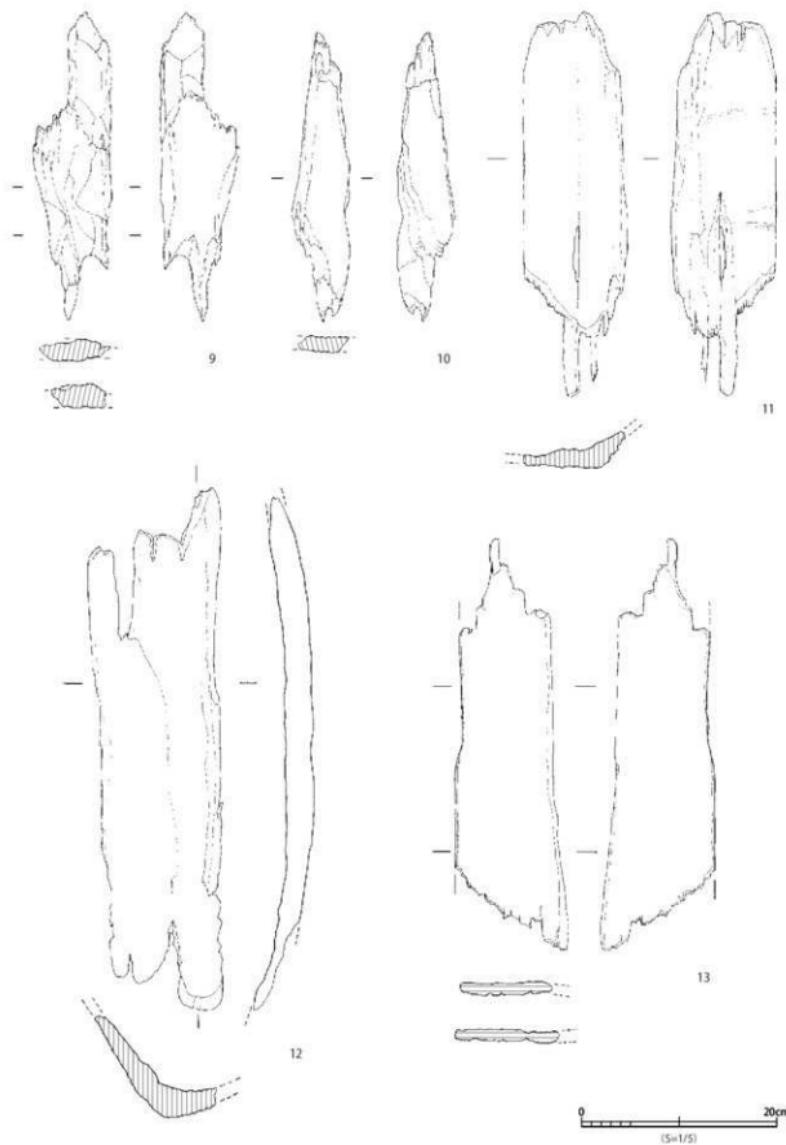




第181図 沖田遺跡第133次調査地点 出土遺物(木製品③)

図182 第133次調査地点の調査成果 (S=1/25)





第183図 沖田遺跡第133次調査地点 出土遺物（木製品④）

1.4cm、長さは2.5~4.0cmを測る。当然7・8の舷側板側にあけられた穴の間隔とも一致する。

穴の断面がかなり摩耗しているのは、船本体と舷側板の連結が解かれた後、しばらく放置されたためと考えられる。1の船本体の底面には、2対4ヶ所の小穴（幅0.8~1.1cm×長さ1.8~3.0cm）があけられている。これは船の補修に伴うもので、部材が割れてしまつても使う（乗船できない）が、ひびが入ったぐらいであつたために、樹皮で穴同士を連結し、修理し使用したものと考えられる。

外側面には、すり跡がスジ状に観察されるが、これが船として使用していた時にいついたのか、木棺として使用する際に身と蓋を閉じる目的の縄の痕跡なのかは明らかではない。

断面形状について、船本体の断面はとがらず、平らに仕上げられている。これは、ローリングを防ぐ目的とともに、浅い場所で船を使用する際に、船底がつかえない様にする目的が考えられる。その為、この船は準構造船でありながら浮島ヶ原低地の様なラグーンで使用する為の船と考えられ、外洋には行かない船と考えられる。

木取りを観察すると、木取りが通常の船の造り方とは異なる。観察の結果、直径170cm~180cm程度のスギの木を四分割程度に割り、木の中心部分側を船底、木の外側を船の側面としている。この様な木取りとするために、それだけ太い木材が必要となるが、その様にする利点は、現段階では明らかではない。（注1）

3~6は、舷側板である7・8と木取りが異なる事から船本体の部材と考えた。1・2とは接合しない。

7・8は舷側板である。厚さ1cm程度の板材で、現在はほぼ湾曲がないが、船本体側面で接合していた時は、船の形状にあわせて湾曲していたと考えられる。

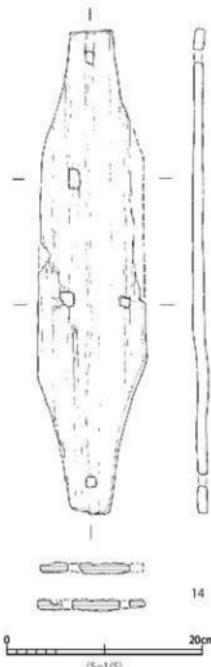
舷側板は、一側面にしか穴があいておらず、二段目が存在しなかった事を示している。穴同士の間は、若干くぼみがつくられており、このくぼみに船本体の側面が引っ掛かる構造であったと考えられる。

第183図9~13・第185図15~35はその他不明の本製品であるが一部に船の部材の可能性が高いものが含まれている。9は船の部材だとしたら、底ではなく、立ち上がりの始まっている部分であろう。また10も船の可能性が高い。12は木取りが異なる為、波除の可能性は捨てきれないが、船ではないと考えられる。大型の槽

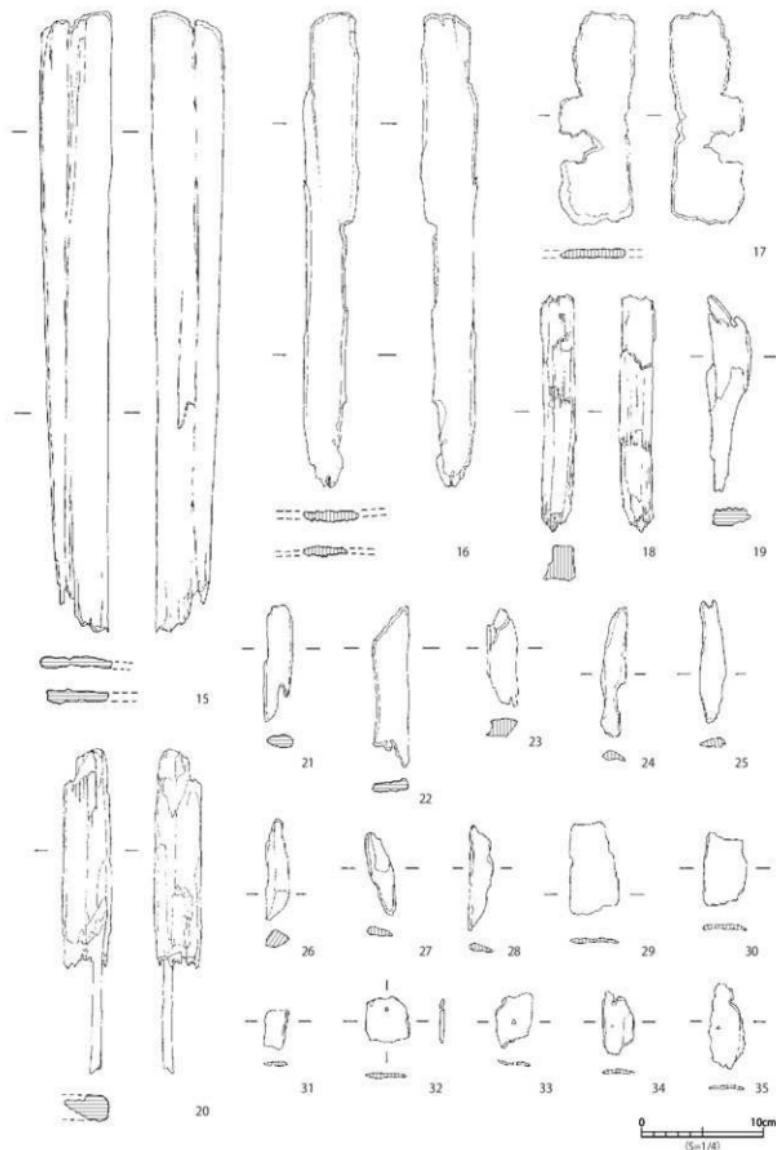
か、13も年輪の間隔が広く、成長の良い若い木が使われており、船の部材とは異なる。その他は、明らかではない。

田下駄 第184図14は円柱型田下駄（輪かんじき型田下駄）と分類されるものである。幅11.1cm、長さ49.7cmを測り、両端を先細りさせる形状を呈する。両端の幅は4.5cm（上）、4.1cm（下）を測る。表裏とも面を整形し、3箇所の縫孔が存在する。縫孔は両面から穿たれていると考えられ、縫孔の断面がやや尖った形態を示す。縫孔は長方形孔で縦2cm×横1.1cm（図上）、縦1.4cm×横1.1cm（図左下）、縦1.0cm×横1.1cm（図右下）を測る。樹種はスギと考えられる。

静岡平野では、古墳時代に入ると板田下駄にかわって円柱型田下駄が登場することが分かっており（静岡県埋蔵文化財調査研究会1998）。本製品も古墳時代以降のものと考えられる。



第184図 沖田跡第133次調査地点 出土遺物（木製品⑨）



第185図 沖田遺跡第133次調査地点 出土遺物(木製品⑥)

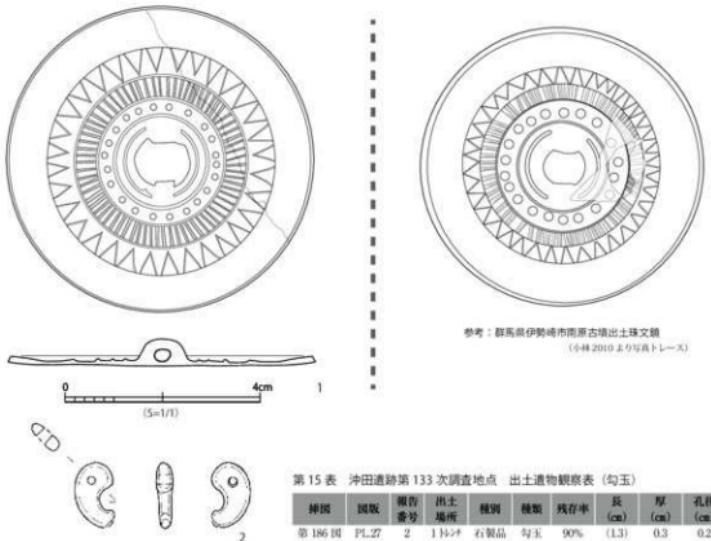
青銅鏡・勾玉（第186図） 1は青銅鏡（珠文鏡）である。直径は635cmを測る。素文帯、鋸歯文帯、佛歯文帯、珠文帯の順に区画されている。外向の鋸歯は1単位の幅が広く全体で32を数える。珠文は内区文様帯の中で一列に並べられ、円周で区分されている。珠文は直径0.13cm前後のものが22配置される。類似したものに群馬県伊勢崎市南原古墳出土の珠文鏡（松村1981）（注2）や、熊本県熊本市竹ノ上石棺出土鏡（熊本県文化財調査会1971）、岐阜県加茂郡前出古墳出土鏡（宮内庁書陵部1992）などがある。いずれも直径や珠文数がやや異なるものの基本的な文様構成は一致している（中山・林原1994）。

本例は古墳時代做鏡の中でも珠文鏡A型に分類され（小林1979・2010）重圓文鏡との関連が想定される。加えて関東地方の前期古墳への副葬例の多さと畿内における出土例が少ないことが指摘されている。沖田遺跡出土の珠文鏡も古墳（木棺）への副葬品と考えられ古墳時代前期後半の埋葬が想定される。

2は滑石製の勾玉である。先端の一部が欠損するもののはば完形品である。形態は定形式に分類される（富樫2003）。

土器・石製品（第187図） 1～3はS字型の破片である。1は頭部内面の平坦が明確に作り出されており、加えて口唇部内面の屈曲もある。2の頭部内面も平坦面を若干意識したような調整があるが1ほどではない。4はS字型の台部の破片で底部内面や台部内面に明瞭なユビナデの痕跡が認められる。台部を作り出した後、胴部下半の粘土を積み上げている。その際の台部との接合時に伴うナデが時計回りに行われ、調整が施されない中央部が突起状に残存している。5～8は台付壺の台部で底部内面・外面ともにハケメ調整により仕上げられている。

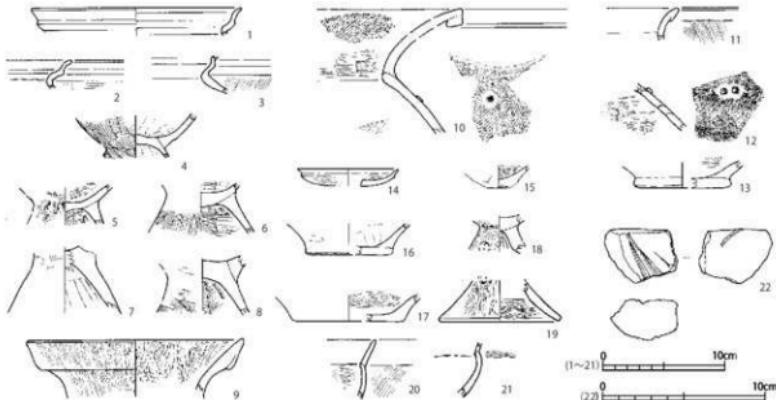
9～12は壺の口縁部から頭部・肩部の破片である。9は既に報告済みの資料である（富士市教育委員会2008）。口縁部が折り返しにより作られ、内外面ともにハケメ調整の後、縱方向のヘラミガキ調整で仕上げられる。10は複合口縁を呈する壺である。口縁部内面と肩部に繩文施文が認められる。口縁部内面には端末結節繩文【L R - S】（鮫島1994）、肩部外面には二段の羽状の端末結節繩文が認められ、下段が【L R - Z ?】、上段が【R L - S】で構成されている。12は弥生土器の壺肩部の破片である。3対の円形貼付け文（1つは剥離）の上下2段に拂拭波状文が認められる。一単位の拂拭き



第186図 沖田遺跡第133次調査地点 出土遺物（鏡・勾玉）

は6本である。これまで富士市内では弥生時代後期の櫛搔きはほとんど認められていなかったが、今後、浮島ヶ原低地における西駿河との交流を考える上で、注目すべき土器である。13・16・17は壺の底部破片である。17は大輪式の大型壺の可能性が考えられる。

14は小型器台、18・19は高環、20・21は小型壺の破片である。22は軽石製の砥石で、市内では宮添遺跡で出土が多く確認されている。  
(佐藤)



第187図 沖田遺跡第133次調査地点 出土遺物(土器・石製品)

第16表 沖田遺跡第133次調査地点 出土遺物観察表(土器)

探査	回数	種類 番号	出土地所	種別	器種	残存率	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内色調	外色調	備考
第187回	PL-28	1	4号井	土器	S字型	20%	(17.1)	(2.3)	-	10YR6-2 (灰黄褐色)	5YR5-6 (明赤褐色)	
第187回	PL-28	2	12号井	土器	S字型	-	(3.4)	-	-	5YR6-6 (暗)	5YR6-6 (暗)	
第187回	PL-28	3	4号井	土器	S字型	-	(3.2)	-	-	10YR7-4 (にぶい黄褐色)	10YR6-3 (にぶい黄褐色)	
第187回	PL-28	4	土器	土器	S字型	70%	(37)	4.7 (奥部)	7.5YR3-1 (黒褐)	7.5YR5-2 (暗褐色)		
第187回	PL-28	5	14号井	土器	台付型	70%	(3.3)	5.3 (奥部)	10YR3-2 (黒褐)	10YR7-3 (にぶい黄褐色)		
第187回	PL-28	6	4号井	土器	台付型	-	(4.2)	(5.5) (奥部)	7.5YR6-4 (にぶい黄褐色)	5YR6-4 (にぶい黄褐色)		
第187回	PL-28	7	4号井	土器	台付型	-	(5.5)	-	7.5YR5-2 (灰褐色)	10YR7-2 (にぶい黄褐色)		
第187回	PL-28	8	5号井	土器	台付型	70%	(4.9)	5.7 (奥部)	5YR7-3 (にぶい黄褐色)	5YR7-3 (にぶい黄褐色)		
第187回	PL-28	9	1号井	土器	壺	20%	(17.8)	(4.8)	-	5YR4-2 (灰褐色)	25YR5-2 (にぶい赤褐色)	
第187回	PL-28	10	4号井	土器	壺	-	(10.2)	-	10YR7-2 (にぶい黄褐色)	10YR7-2 (にぶい黄褐色)		
第187回	PL-28	11	5号井	土器	壺	-	(2.8)	-	10YR6-2 (灰黄褐色)	10YR6-2 (灰黄褐色)		
第187回	PL-28	12	5号井	弥生土器	壺	-	(4.0)	-	7.5YR7-4 (にぶい黄褐色)	7.5YR7-4 (暗)		
第187回	PL-28	13	土器	土器	壺	25%	(2.3)	(7.9)	10YR4-1 (褐灰)	5YR6-6 (暗)		
第187回	PL-28	14	12号井	土器	小型器台	20%	(7.7)	(1.3)	-	5YR6-4 (にぶい黄褐色)	5YR6-4 (にぶい黄褐色)	
第187回	PL-28	15	1号井	土器	壺	90%	-	(1.9)	1.9	7.5YR7-4 (にぶい黄褐色)	7.5YR7-3 (にぶい黄褐色)	
第187回	PL-28	16	8号井	土器	壺	20%	-	(2.6)	(7.1)	5YR2-3 (暗赤褐色)		
第187回	PL-28	17	土器	壺	壺	25%	-	(2.3)	(9.1)	10YR7-2 (にぶい黄褐色)	7.5YR7-3 (にぶい黄褐色)	
第187回	PL-28	18	8号井	土器	高环	90%	-	(3.1)	-	10YR6-1 (褐灰)	7.5YR6-4 (にぶい黄褐色)	
第187回	PL-28	19	5号井	土器	高环	20%	-	(3.3)	(9.7)	7.5YR6-4 (にぶい黄褐色)	5YR4-6 (赤褐色)	
第187回	PL-28	20	土器	小型壺	-	-	(4.5)	-	7.5YR5-3 (にぶい黄褐色)	7.5YR4-4 (暗)		
第187回	PL-28	21	12号井	土器	小型壺	-	-	(4.5)	-	7.5YR6-4 (にぶい黄褐色)	7.5YR6-4 (にぶい黄褐色)	

## 第4節 総括

地域内における準構造船の位置付け 沖田遺跡第133次調査地点において発見された準構造船は、古墳時代前期、土器型式でいう大底式Ⅲ・Ⅳ式（渡井 1998）、中見代Ⅰ式（渡井 1999）の頃に浮島ヶ原低地というラグーンで使用されていたものと考えられる。駿河湾で活動していた可能性は否定しないものの、舷側板が一段という構造や湿地帯での使用を考えた断面形態などから、ラグーンを中心とした内湾交通・水上交通に使用されていたものと考えている。

さて、この頃の浮島ヶ原低地周辺の集落構造については再三触れてきた通りである（佐藤 2009・2012b）。すなわち、浮島ヶ原低地やそれを臨む丘陵先端に占地する集落がそれぞれ異なる役割を担い、構造的に結びつくことにより地域内ネットワークを形成していたと考えられるのである。外からもたらされる情報・モノはそのネットワークを通じて各集落に浸透し、激動の時代に対応し、乗り越えることで自らの地域性・アイデンティティを認識・発信していたのであろう。

沖田遺跡は「浮島ヶ原低地」の最西端に位置し、そこは「吉原塚」という情報・モノの玄関口であったと考えられる。現在、沖田遺跡とされる範囲は広大であり、そこに単にひとつの役割のみを与えることは難しい。微高地では水稻耕作が行われていたと考えられるが、それと同じくらいに重要であったのが、情報・モノの玄関口としての役割と拠点集落にいち早く伝えることであり、また、潤井川を廻ることにより甲斐への情報・モノの中継点という性格を持ち合わせていたのだろう。

今回、沖田遺跡から見つかった準構造船は、浮島ヶ原低地周辺のネットワークを考える上で貴重な材料を提供したと言える。

埋葬施設に転用された準構造船 これまで述べてきたように、発見された準構造船は、部材を木棺として転用し、低墳丘を有する古墳の埋葬施設として使用したと推察される。しかも、舳と檣をあわせ、舟としての形態を残し、それが舟の部材であることを明らかに意識した埋葬方法を採用しており、「舟葬」というものを考えずにはいられない状況である。

舟形木棺と異なり、丸木舟を棺へと転用したものを「舟

棺」と区別することが出来る（岡本 2000）。静岡県においては、焼津市小深田西第1号墳や藤枝市五鬼面1号墳などの舟形木棺の存在から磯辺武男によりいち早く舟葬論が展開され（磯部 1983・1989）、近年では辰巳和弘（2011）や岡本東三（2000）により総括的に述べられている。岡本によれば舟葬とは「海上に流す代わり、死者を実際の舟や舟形の棺に納めて埋葬したり、死者の舟の模型をつくる葬法」とされる（岡本 2000）。ただし、舟葬とは「集団が共有した他界觀に基づく行為」であるからたまたま検出されたものをもって舟葬とは言えないとしている。

岡本は、千葉県館山市大寺山洞穴において発掘された12基以上の舟棺の調査例から集団における共有他界觀を強く意識した定義づけを行っている。沖田遺跡では、まだ本報告例しか舟棺は見つかっていない。しかし、前述の通り沖田遺跡の集団が内湾交通の中心を担っていた、特殊な役割・技術を持った集団であったと考えられることから、その集団にも「共有した他界觀」が存在した可能性が高い。そうなれば本例を「舟葬」として評価することも出来るだろう。

以上のように、今回の調査において発見された準構造船が投げかける問題は大きい。今後、浮島ヶ原低地の地形の変化など科学分析データなどの成果も合わせて地域的様相を明らかにしていくこととしたい。

末筆になりましたが、発見時から整理作業に至るまで御指導いただきました、首都大学東京 山田昌久教授、奈良県立橿原考古学研究所 岩林孝作氏に御礼申し上げます。  
(佐藤)

(注1) 静岡市登呂遺跡出土の丸木舟も同様の木取りである事を山田昌久教授に御教示頂いた。また、準構造船についても実見していただき、詳細な指導を頂いた。

(注2) 南原古墳出土青銅鏡は、歴博鏡データ集成では群馬県 No.143 乳文鏡として集成されている(国立歴史民俗博物館 1994)が、小林(1982-2010)や下坂(2011)により珠文鏡として分類されている。

参考文献

- 磯部武男 1983 「古代日本の舟葬について」上『伝承』第35巻12号
- 磯部武男 1989 「舟葬考－古墳時代の特殊葬法をめぐって』『藤枝市郷土博物館紀要』1号
- 岡本東三 2000 「舟葬説再論」『大塚初東先生頌寿記念考古学論集』 東京堂出版
- 宮内庁書陵部編 1999 「出土品展示目録 古鏡」学生社
- 熊本市文化財調査会 1971 『熊本市文化財調査報告書』II
- 栗野克巳 1991 「V、まとめ」『麻名道跡 静清バイパス（麻名地区）埋蔵文化財発掘調査概報』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 栗野克己・辻田勝 1993 「延長約4kmにわたる律令期の埋没柔石構造の発見』『研究所報No.45』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 国立歴史民俗博物館 1994 『国立歴史民俗博物館研究報告』(共同研究「日本出土鏡データ集成」2) 第56集
- 小林三郎 1979 「古墳時代初期做製鏡の一侧面—重圓文鏡と珠文鏡—」『駿台史学』第46号
- 小林三郎 1982 「古墳時代做製鏡の鏡式について」『明治大学人文学研究紀要』第21册
- 小林三郎 2010 「古墳時代做製鏡の研究」六一書房
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998 『静清バイパス総括編（集成図）』
- 佐藤祐樹 2009 「古墳時代について」『神奈ノ前遺跡』富士市教育委員会
- 佐藤祐樹 2012a 「E地区における調査成果」「宮添遺跡」N 富士市教育委員会
- 佐藤祐樹 2012b 「高尾山古墳周辺における集落の動態と古墳墓造の背景』『高尾山古墳発掘調査報告書』沼津市教育委員会
- 飯島和大 1994 「南関東弥生後期における繩文施文の二つの系統』『東京大学文学部考古学研究室研究紀』第12号
- 下垣仁志（編）2011 「倭製鏡一覧」立命館大学考古学論集刊行会
- 辰巳和弘 2011 「他界へ飛ぶ船」新泉社
- 香川市町村地図刊行会 1933 「静岡縣富士郡今泉村地番反別入地図」
- 高橋雅彦 2003 「弥生・古墳時代のガラス」「考古資料大観」第6卷
- 弥生・古墳時代（青銅・ガラス製品）小学校
- 中山浩隆・林原利明 1994 「小型仿製鏡の基礎的集成（1）- 珠文鏡の集成 - 」「地域相研究」第21号
- 富士市教育委員会 2000 「平成15・19年度富士市内遺跡発掘調査報告書」
- 松村一昭 1981 「今井南原遺跡発掘調査概報」（今井南部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書）赤坂村教育委員会（未説）
- 渡井英賀 1997 「土器編年」「瀧戸遺跡」富士宮市教育委員会
- 渡井英賀 1998 「大鄭式土器小考—大鄭式土器の両期とその展開—」「庄内式土器研究」XVI
- 渡井英賀 1999 「中見代式土器小考—大鄭式土器から中見代式土器へ—」「東国土器研究」第5号

写真図版

PLATE





## 第48地区 調査写真



1. 1Tr SB1 棟出状況（北から）



2. 1Tr SB1 棟出状況（西から）



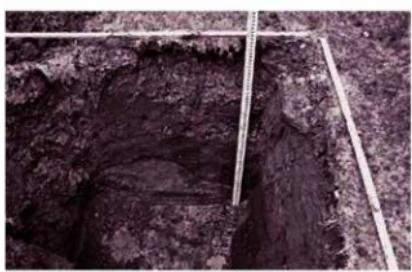
3. 1Tr SB1 遺物出土状況（北から）



4. 1Tr SB1 西側半裁終了（南から）



5. 1Tr 西壁 SB1 セクション（東から）



6. 2Tr 北壁セクション（南から）

## 第48地区 出土遺物



1

## 第3地区 出土遺物



1



1 (印面)

PL.2 東平遺跡 第55地区

調査写真



1. 1Tr 全景 (北から)



2. 1Tr 遺構検出状況 (南から)



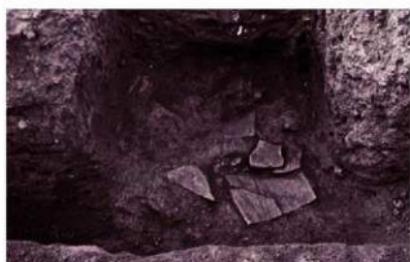
3. 1Tr 遺構検出状況 (北から)



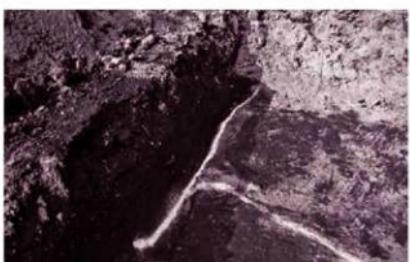
4. 1Tr 西壁 SB4・SBS セクション



5. SBS サブトレンチ遺物出土状況

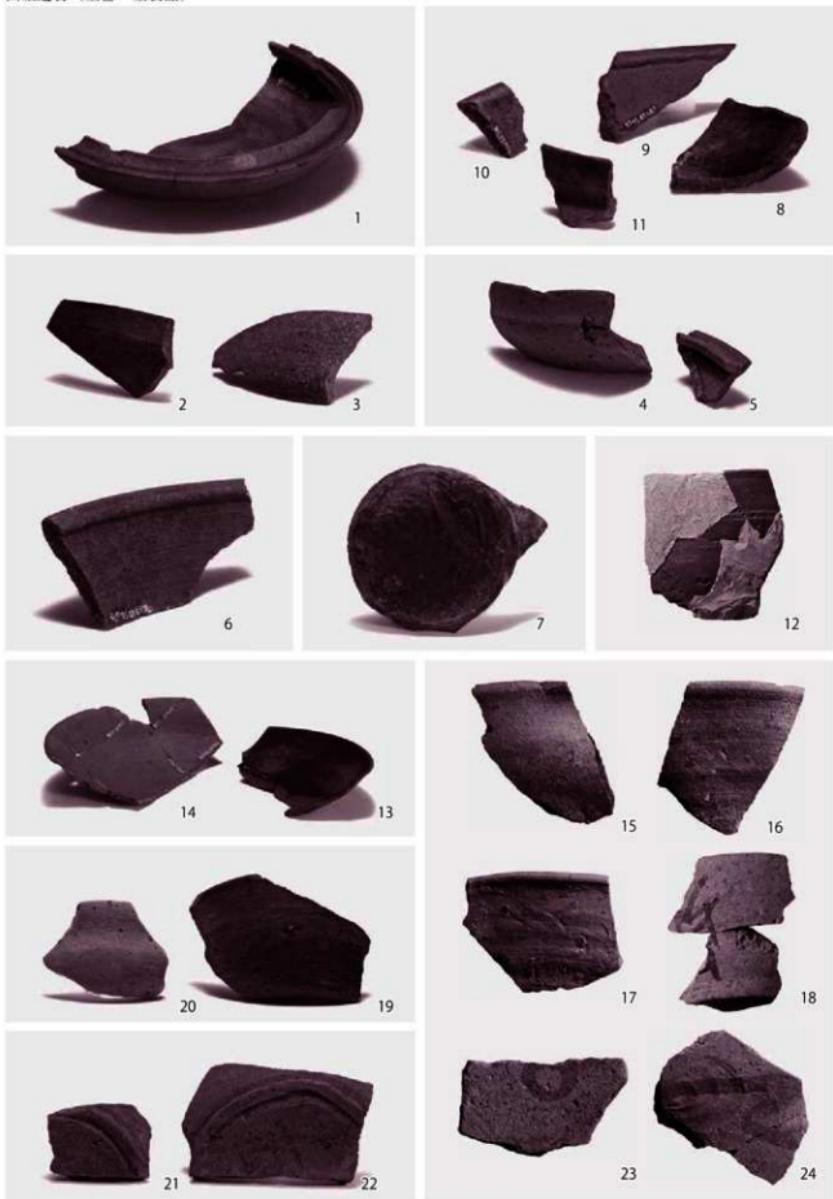


6. SB5-SX1 (東から)



7. 1Tr SB6 棟出状況 (南から)

## 出土遺物（土器・土製品）



PL.4 東平遺跡 第55地区

出土遺物（土器・土製品）



出土遺物 (瓦)



1



2



3



4



5

6

PL.6 東平遺跡 第55地区

出土遺物(瓦)



7



10



8



13



9



11



14



12



15



16

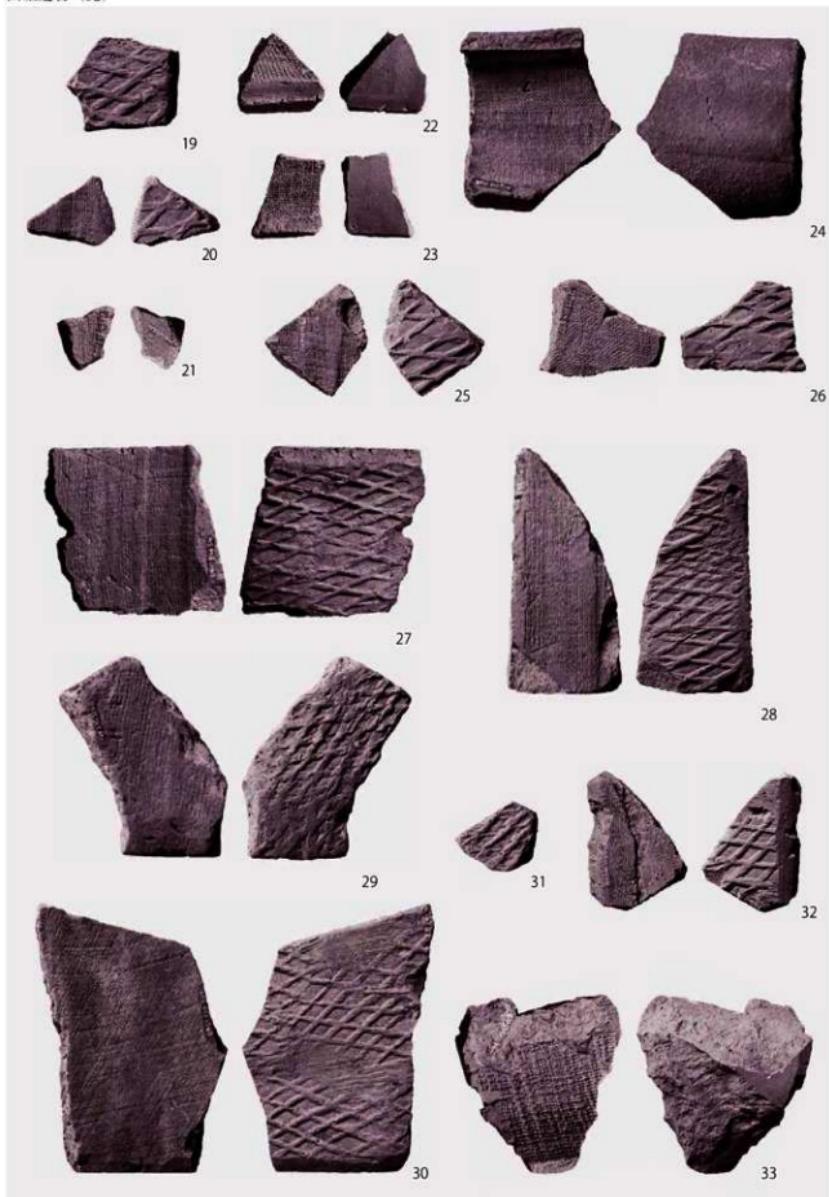


18



17

## 出土遺物 (瓦)

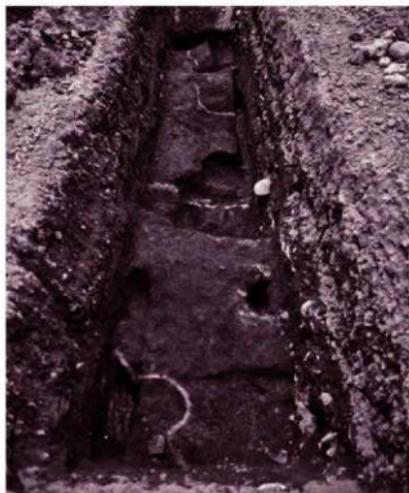


PL.8 東平遺跡 第57地区

調査写真



1. 1Tr 全景（西から）



2. 1Tr 全景（東から）



3. SB1（北から）

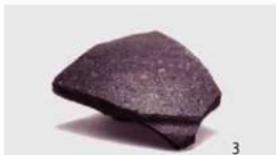


4. SB2（南から）

出土遺物



1



3



2



5



4

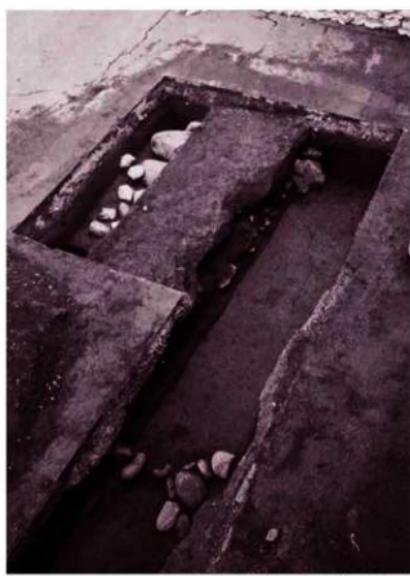
## 1 次調査 調査写真



1. 調査地全景（南から）



3. 1Tr 西壁セクション



2. 花川戸第4号墳 全景（南から）



4. 1Tr 東壁セクション



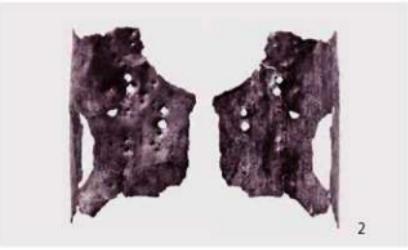
5. 1Tr (南から)

## 花川戸第4号墳 出土遺物



1

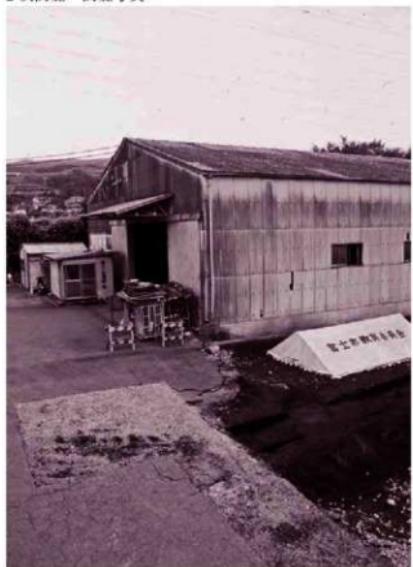
撮影：杉本和樹



2

PL.10 富士岡1古墳群 第12地区

2次調査 調査写真



1. 2Tr 古墳周溝等検出状況と 1Tr (南から)



3. 2Tr 古墳周溝等検出状況 (北東から)



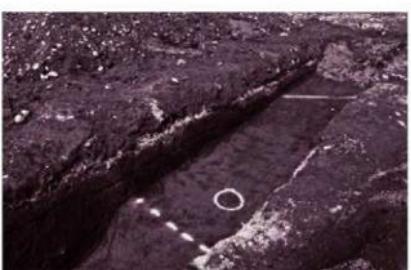
4. 2Tr 北壁 墓坑・埴丘内埋没溝 セクション



2. 2Tr 古墳周溝等検出状況 (西から)

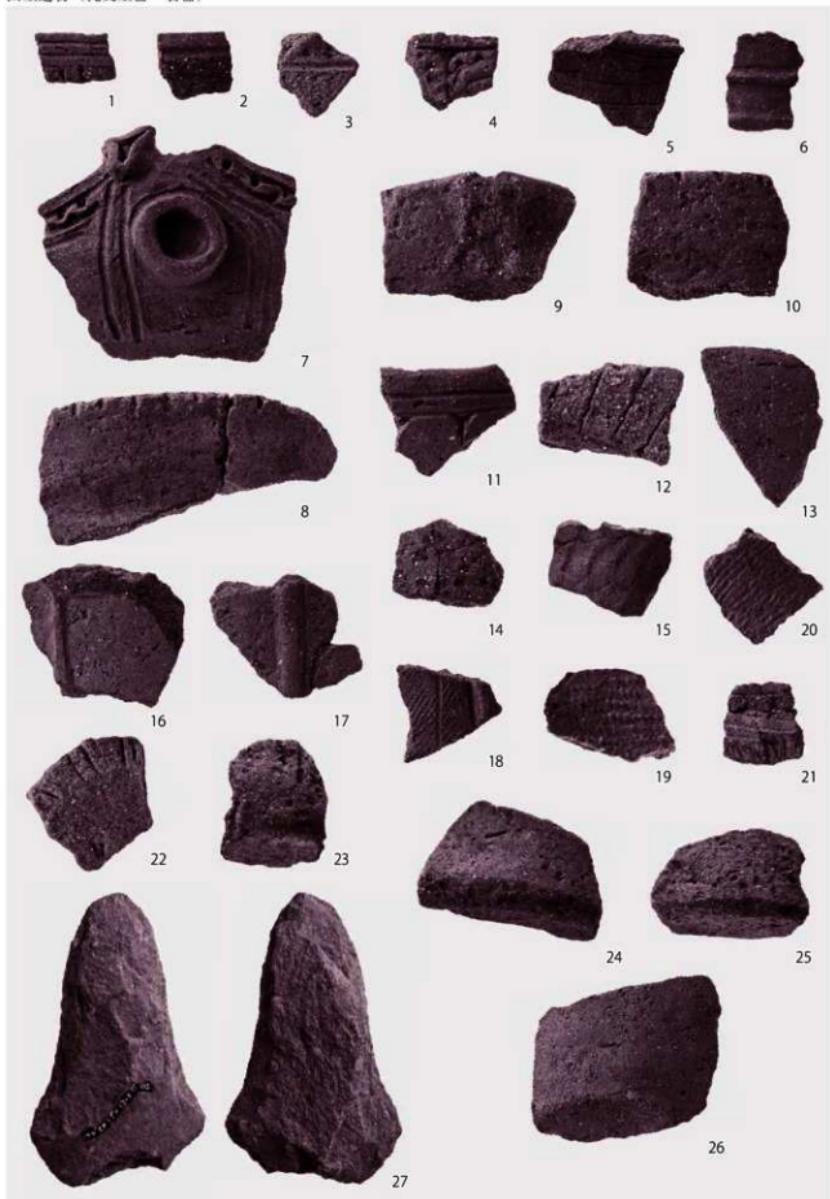


5. 4Tr 北壁 SB7 セクション



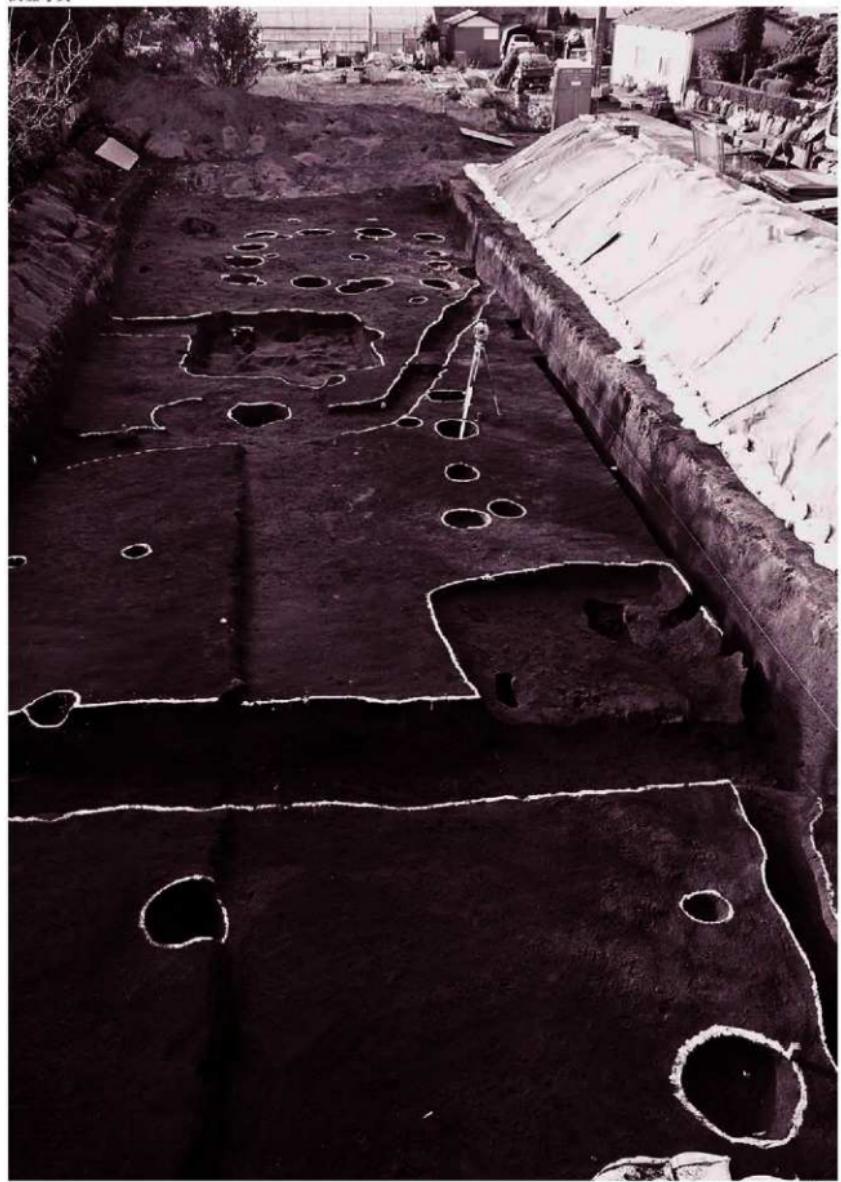
6. 5Tr/SB6 検出状況 (南西から)

## 出土遺物（縄文土器・石器）



PL.12 柏原遺跡 第4地区

調査写真



1. 調査区全景（東から）

調査写真



2. SB01・SB02 全景（西から）



3. SB01 カマド



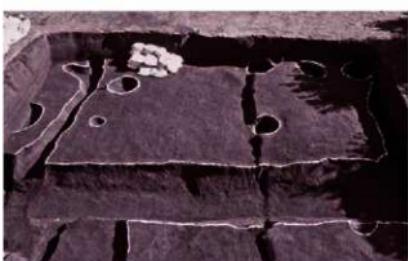
4. SB02 カマド



5. SB03 全景（南から）



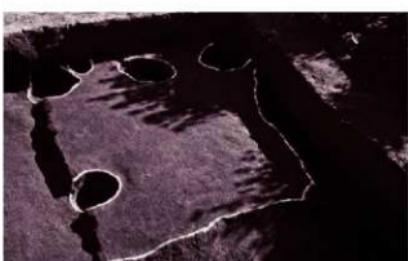
6. SB03 カマド



7. SD01 全景（西から）



8. SD04 東半部分（西から）



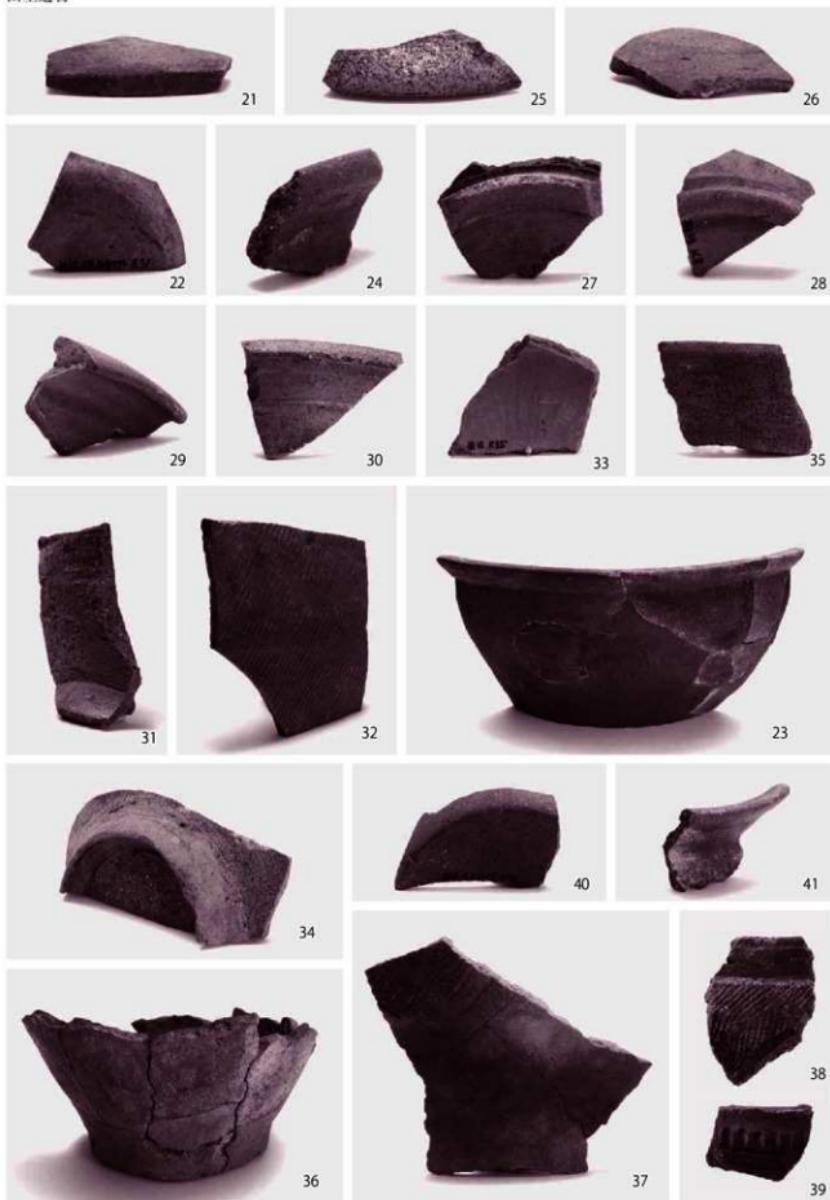
9. SH03・SH05（西から）

PL.14 柏原遺跡 第4地区

出土遺物

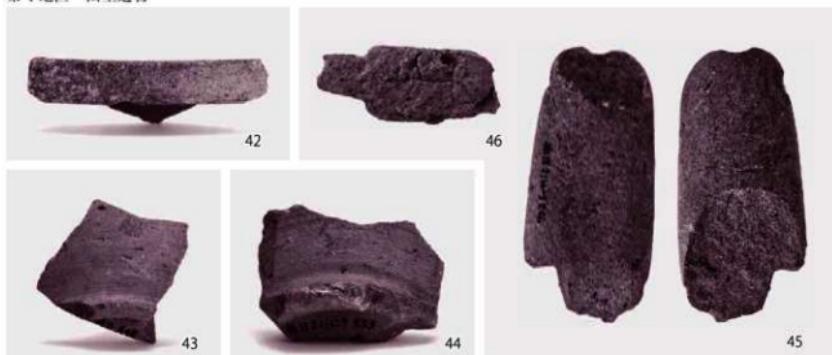


## 出土遺物



PL.16 柏原遺跡 第4地区・第7地区

第4地区 出土遺物



第7地区 調査写真



1. 調査地全景（南から）



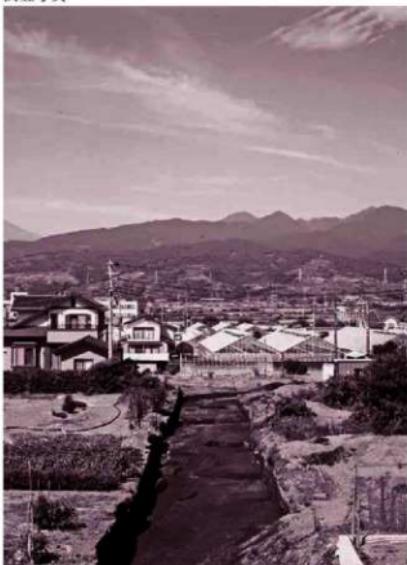
2. 1Tr 南壁セクション（西から）

3. 2Tr 東壁・南壁セクション（西から）

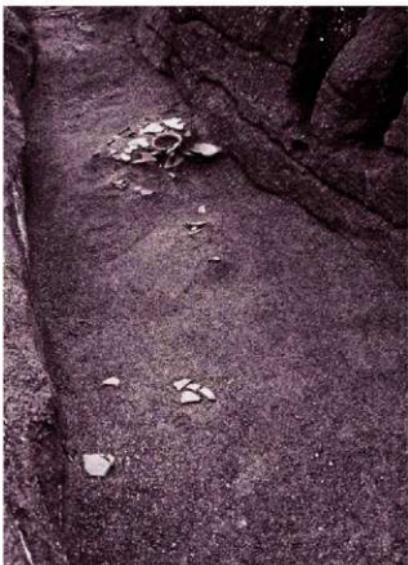
第7地区 出土遺物



調査写真



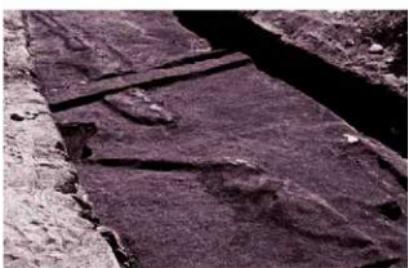
1. 調査完了全景（南から）



2. 遺物集中4



3. A~C区III-2層検出



4. A~C区III-2層検出



5. 遺物集中1



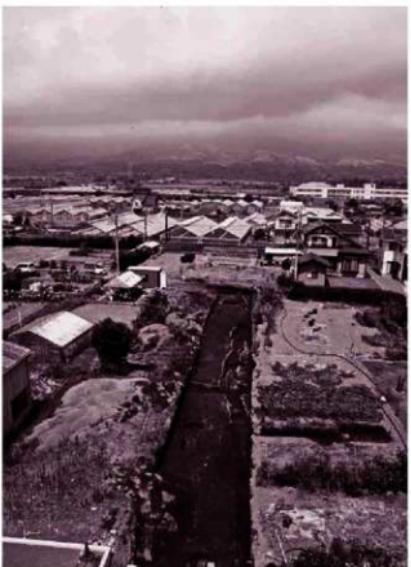
6. 遺物集中3

PL.18 柏原遺跡 第6地区

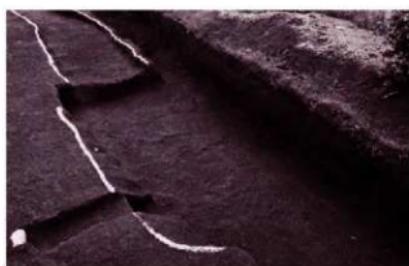
調査写真



7. 遺物集中5



8. III層上面全景



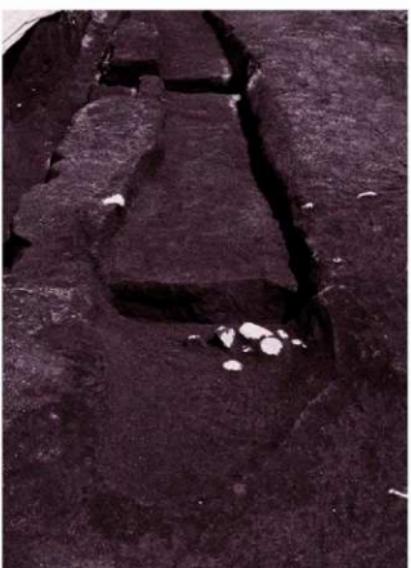
9. SB01 完組



10. SX01・SD01 完組



11. A区西壁・SX01 セクション



12. SD02 完組

調査写真



13. SD03・SD04 完掘



14. C区西壁セクション



15. SD03 馬歯出土状況



16. SX03 完成

出土遺物



古墳時代中期～後期初頭 出土遺物集合

PL.20 柏原遺跡 第6地区

出土遺物（弥生時代後期～古墳時代前期）



2



3



4



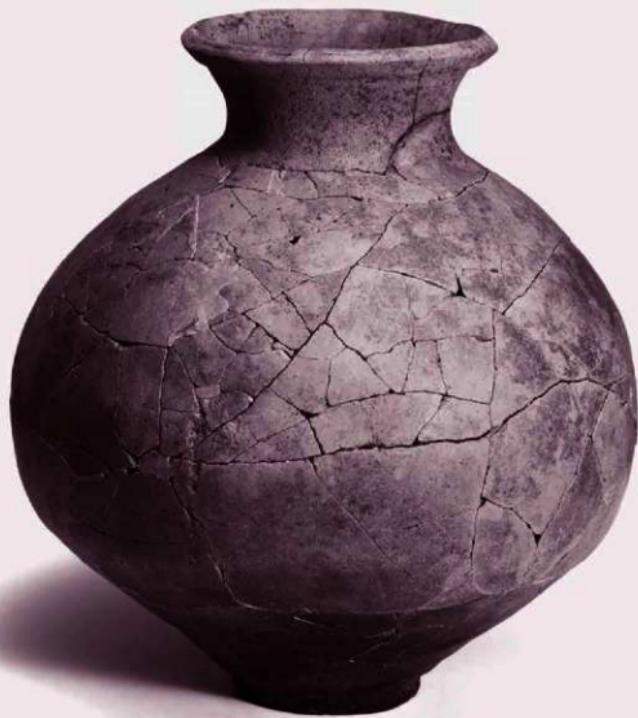
5



6

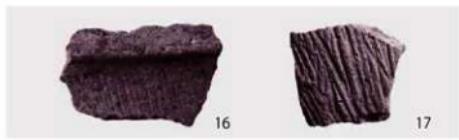


7



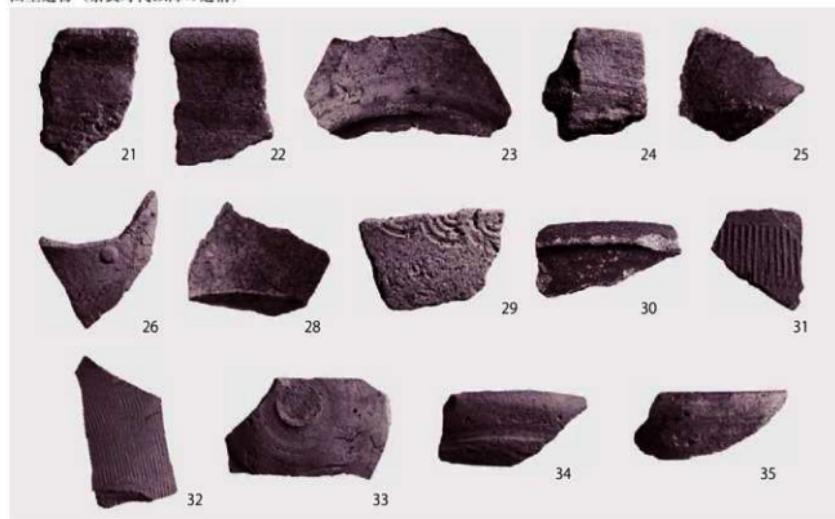
1

## 出土遺物（古墳時代中期～後期初頭）

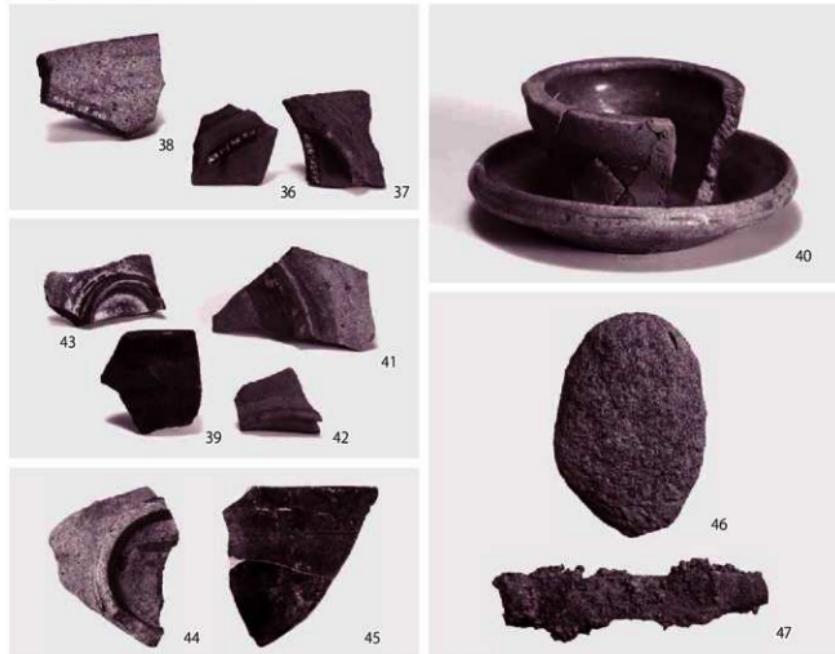


PL.22 柏原遺跡 第6地区

出土遺物（奈良時代以降の遺構）



出土遺物（奈良時代以降の包含層）



調査写真

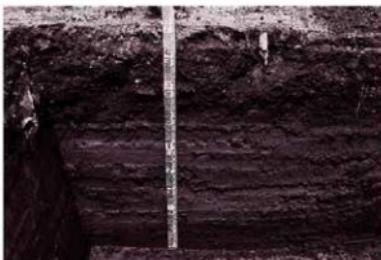


1. 重機掘削状況



2. TP1 船部材出土状況

3. TP1 土層堆積状況



4. TP4 土層堆積状況



5. TP7 全景



6. 出土した準構造船の丸木舟部（木製品 - 1・2）

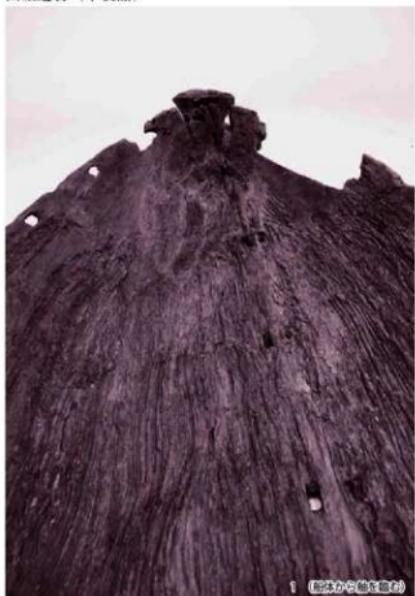
撮影：寿福 滋

PL.24 沖田遺跡 第133次調査地点

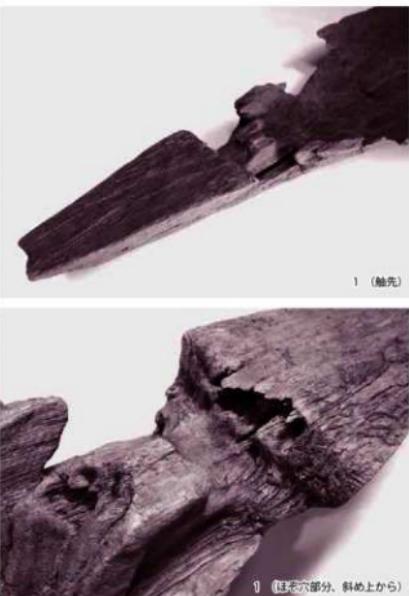
出土遺物（木製品）



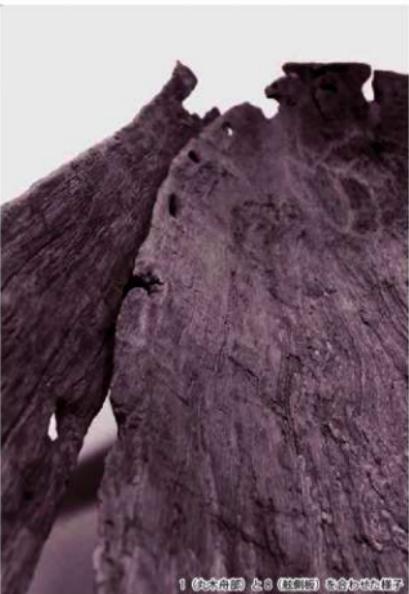
出土遺物（木製品）



1 (左から袖を留む)



1 (船先)



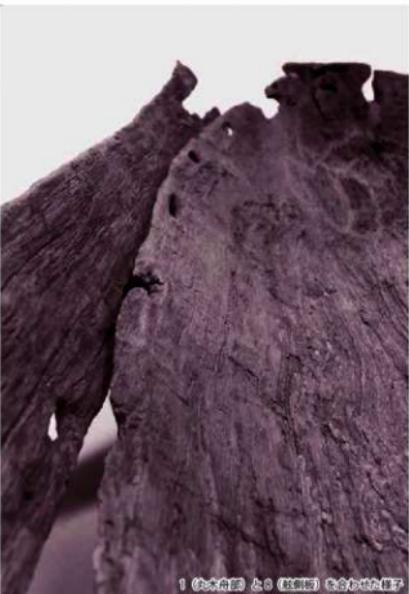
1 (舟穴部分、斜め上から)



1 (ほぞ部分、横から)



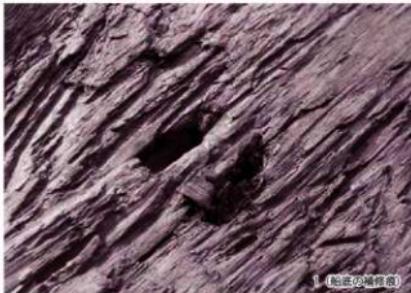
1 (底面結合の舟穴の裏面)



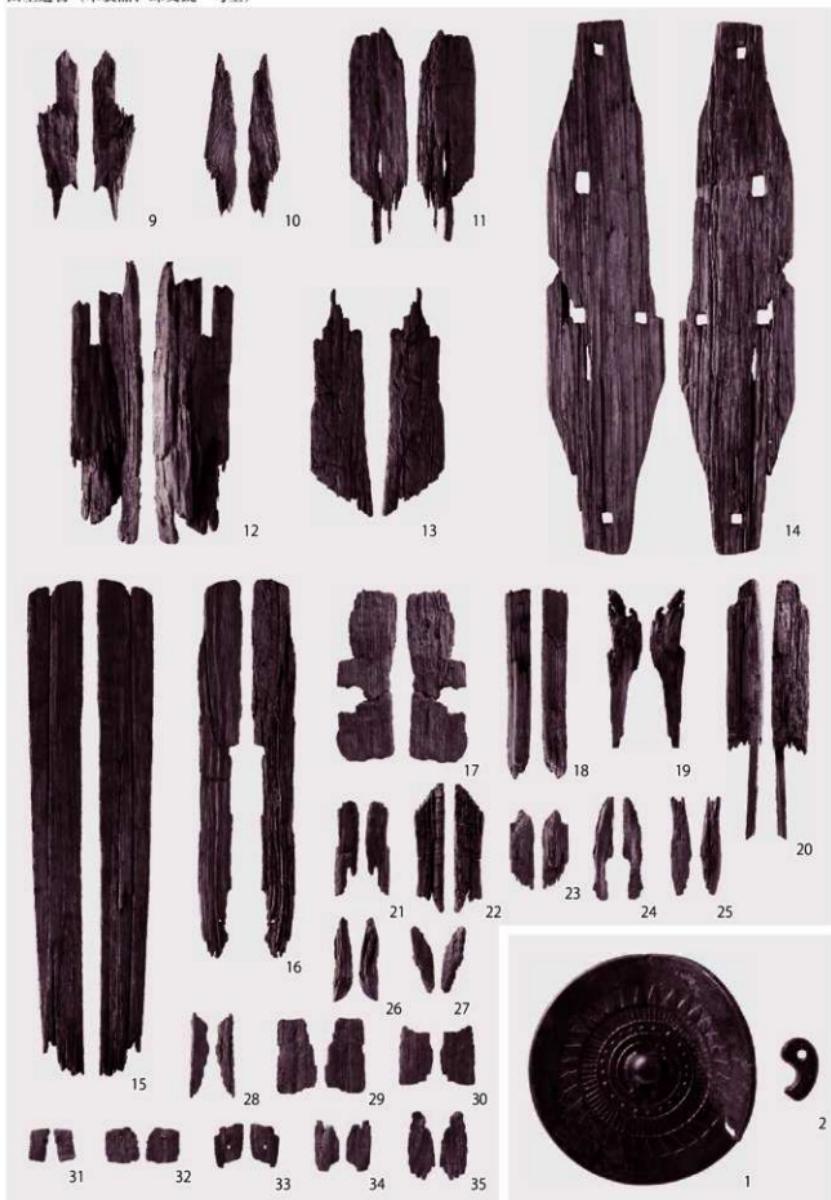
1 (舟穴部) と 2 (舷側面) を合わせた様子

PL.26 沖田遺跡 第133次調査地点

出土遺物（木製品）



## 出土遺物（木製品、珠文鏡・勾玉）



PL.28 沖田遺跡 第133次調査地点

出土遺物（土器・石製品）



## 報告書抄録

ふりがな	ふじしないいせきはくつちょうさほうこくしょ				
書名	富士市内道路発掘調査報告書				
副書名	平成22・23年度				
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告				
シリーズ番号	第54集				
編著者名	佐藤祐樹・若林美希(編)・藤村 翔・小島利史・上杉 陽・植月 学				
編集機関	富士市教育委員会(担当課:文化振興課)				
所在地	〒417-8601 静岡県富士市永田町1丁目100番地 Tel 0545-55-2875				
市町村コード	22210				
発行年月日	平成25年3月29日				

調査 年度	所取 番号	所取道路名 地区名		所在地	種別	主な遺物
		北緯	東経	主な時代	市道番号	特記事項
H22	1	沖田道路 第1章 第16次調査地点	富士市今宿3丁目158-7 外 35° 09' 44"	138° 41' 46"		なし
H22	28m	試掘・確認	H224.8	53		なし
H22	2	青井寺坂寺跡 第1章 第3地区	富士市今宿5丁目1144 35° 10' 02"	138° 41' 43"		なし
H22	23m	試掘・確認	H223.19 ~ 52.1	102		
H22	3	天石道路 第2地区	富士市天石2314-1 外 35° 11' 13"	138° 39' 56"		なし
H22	22m	試掘・確認	H225.25	16		なし
H22	4	重字道路 第2節 第49地区	富士市天石2804-12 35° 10' 13"	138° 40' 18"		なし
H22	22m	試掘・確認	H226.8	42		なし
H22	5	東平道路 第2節 第50地区	富士市天石2782-1 外 35° 10' 16"	138° 40' 11"		なし
H22	57m	試掘・確認	H227.6 ~ 7.7	42		
H22	6	東平道路 第2節 第15地区7次調査	富士市天石3116-1 35° 10' 12"	138° 40' 13"		なし
H22	8m	試掘・確認	H227.22	42		なし
H22	7	花守道路 第2節 第4地区	富士市中里442-6 外 35° 09' 30"	138° 43' 47"		なし
H22	34m	試掘・確認	H227.27	66		
H22	8	富士市坂守跡周辺地 (第3道路 第51地区)	富士市坂守二丁目2161 外 35° 10' 05"	138° 40' 51"	奈良~平安 土師器・須恵器	なし
H22	19m	試掘・確認	H228.26 ~ 8.27	43 (42)		
H22	9	井東B道路 第2節 第6地区	富士市井東159-12 35° 10' 38"	138° 39' 04"		なし
H22	30m	試掘・確認	H229.13	34		なし
H22	10	寺下道路 第2節 第4地区2次調査	富士市寺下 地先 35° 11' 19"	138° 42' 47"		なし
H22	137m	試掘・確認	H229.30 ~ 10.1	23		
H22	11	東平道路 第2節 第52地区	富士市伝平2869-1 35° 10' 09"	138° 40' 30"		なし
H22	13m	試掘・確認	H2210.6 ~ 10.7	42		
H22	12	比奈古墳群 第2節 第1地区3次調査	富士市比奈2038 外 35° 10' 12"	138° 43' 08"		なし
H22	400m	試掘・確認	H2210.15 ~ 10.22	182		なし

調査 年度	所取 番号	所取道路名 地区名		所在地 北緯	東經	種別	主な遺構 主な遺物
		調査面積	調査原因				
				調査期間	市道番号	特記事項	
H22	第1章 第2節 13	三新田道跡 K地区		富士市松原町 203-1 外 35° 08' 18"	138° 43' 48"		なし
		25m <sup>2</sup>	試掘・確認	H22.10.27	96		なし
H22	第1章 第2節 14	中島道跡 第8地区		富士市原田 913-3 35° 10' 25"	138° 42' 20"		なし
		12m <sup>2</sup>	試掘・確認	H22.11.9	49		なし
H22	第1章 第2節 15	荒川古墳群 第1地区		富士市原田 1120-11 35° 10' 34"	138° 42' 31"		なし
		8m <sup>2</sup>	試掘・確認	H22.11.17	174		
H22	第1章 第2節 16	東平道跡 第53地区1次調査・2次調査 2m <sup>2</sup> ・19m <sup>2</sup>		富士市伝法 3031-1 35° 10' 03"	138° 40' 26"		なし
			試掘・確認	H22.12.1・H22.12.20	42		なし
H22	第1章 第2節 17	比奈古墳群 隣接地 (第8地区)		富士市比奈 2523-1 35° 10' 39"	138° 43' 24"		なし
		83m <sup>2</sup>	試掘・確認	H22.12.7	178		なし
H22	第1章 第2節 18	柿宜古墳道跡 第3地区		富士市比奈 1562-1 の一部 35° 10' 01"	138° 43' 27"		なし
		6m <sup>2</sup>	試掘・確認	H22.12.14	57		なし
H22	第1章 第2節 19	三沢坂道跡 第2地区		富士市三沢坂 318 外 35° 10' 53"	138° 42' 17"		なし
		10m <sup>2</sup>	試掘・確認	H22.12.15～12.20	106		
H22	第1章 第2節 20	東平道跡 第54地区		富士市伝法 3106-1 35° 10' 07"	138° 40' 18"		なし
		55m <sup>2</sup>	試掘・確認	H22.12.17	42		
H22	第1章 第2節 21	大間沢道跡 第30地区		富士市大間 625-10 外 35° 12' 18"	138° 38' 19"		なし
		8m <sup>2</sup>	試掘・確認	H23.1.26	7		なし
H22	第1章 第2節 22	三日市坂道跡 (東平道跡 第56地区)		富士市浅間本郷 3423-1 35° 10' 00"	138° 40' 41"	奈良・平安	土師器・石製品
		15m <sup>2</sup>	試掘・確認	H23.3.1	43 (42)		
H23	第1章 第3節 1	神戸4古墳群 第2地区		富士市神戸4 615-2 外 35° 11' 49"	138° 42' 55"		なし
		40m <sup>2</sup>	試掘・確認	H23.4.8	188		なし
H23	第1章 第3節 2	大間沢道跡 第31地区		富士市大間 1166-8 外 35° 12' 24"	138° 38' 42"		なし
		14m <sup>2</sup>	試掘・確認	H23.4.11	7		なし
H23	第1章 第3節 3	厚原橋造下道跡 第2地区		富士市厚原 1209-1 外 35° 11' 20"	138° 39' 42"		なし
		32m <sup>2</sup>	試掘・確認	H23.4.14	15		なし
H23	第1章 第3節 4	中野沖田道跡 隣接地 (第3地区)		富士市中野沖田 1894 外 35° 11' 12"	138° 35' 56"		なし
		12m <sup>2</sup>	試掘・確認	H23.4.26	227		
H23	第1章 第3節 5	石坂10古墳群 隣接地 (第3地区)		富士市石坂 70-6 外 35° 10' 32"	138° 40' 55"	不明	標列1例 なし
		58m <sup>2</sup>	試掘・確認	H23.5.18	160		
H23	第1章 第3節 6	荒下道跡 1地区		富士市荒下道跡 1957-1 35° 10' 26"	138° 40' 48"	奈良・平安	土師器
		83m <sup>2</sup>	試掘・確認	H23.5.19～5.20	44		
H23	第1章 第3節 7	大間沢道跡 第32地区		富士市大間 1096-1 外 35° 12' 25"	138° 38' 30"	圓文	圓文土器
		19m <sup>2</sup>	試掘・確認	H23.6.3	7		

調査 年度	所取 番号	所取道路名 地区名		所在地		種別	主な遺物
		調査面積	調査原因	北緯	東經	主な時代	主な遺物
				調査期間	市道跡番号	特記事項	
H23	8	6m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市松坂 2708-1			なし
				35° 10' 22"	138° 40' 08"		なし
				H23.6.14 ~ 6.15		42	
H23	9	70m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市松坂 1964-1 外			なし
				35° 10' 32"	138° 40' 47"		なし
				H23.7.5 ~ 7.7		44	
H23	10	59m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市今泉 534-1 外			なし
				35° 09' 37"	138° 42' 25"	古墳	土師器
				H23.7.11 ~ 7.12		53	
H23	11	10m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市今泉 902-38 外			なし
				35° 12' 37"	138° 38' 16"		なし
				H23.7.14		5	
H23	12	13m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市今泉 1651 外			なし
				35° 10' 01"	138° 43' 33"		なし
				H23.8.26 ~ 8.29		57	
H23	13	30m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市厚原 1287 (第3地区)			土坑
				35° 11' 22"	138° 39' 37"	近・現代	なし
				H23.9.6		15	
H23	14	186m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市厚原 522 外			なし
				35° 11' 00"	138° 40' 32"		なし
				H23.9.7 ~ 9.9		19	
H23	15	16m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市厚原 1642-17 外			なし
				35° 09' 59"	138° 43' 32"	縄文・古墳・平安	縄文土器・土師器
				H23.9.26		57	
H23	16	11m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市厚原 363-1 (第2地区)			土坑 2基
				35° 10' 54"	138° 39' 16"	不明	須恵器片
				H23.9.29 ~ 9.30		34	
H23	17	128m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市神戸 674 (第3地区)			なし
				35° 09' 55"	138° 44' 30"	平安	土師器
				H24.1.10 ~ 1.16		65	
H23	18	8m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市中里 4-2-3 境群 (第5地区)			なし
				35° 10' 10"	138° 44' 22"		なし
				H24.2.14		199	
H23	19	45m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市厚原 306-1 の一部 (第1地区)			土坑
				35° 11' 05"	138° 39' 44"	近世15世	なし
				H24.3.15 ~ 3.16		18	
H22	20	4m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市浅間上町 2697-2 外 (東字道路 第8地区)			堅穴建物跡
				35° 10' 05"	138° 40' 40"	平安	土師器・須恵器
				H22.4.22 ~ 4.28		43 (42)	
H22	21	47m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市浅間上町 2978-6 外 (東字道路 第5地区)			堅穴建物跡・土坑
				35° 10' 07"	138° 40' 36"	古墳・平安	土師器・須恵器・瓦・灰釉陶器
				H23.1.27 ~ 1.28		43 (42)	
H23	22	17m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市浅間本町 2992-37 外 (東字道路 第3地区)			堅穴建物跡
				35° 10' 04"	138° 40' 34"	古墳・平安	土師器・須恵器・瓦
				H23.4.18		43 (42)	
H23	23	37m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市厚原 1614-1 (古墳群)			堅穴建物跡・花用器第4号埴
				35° 10' 20"	138° 43' 41"	縄文・古墳	縄文土器・主頭大刀把頭
				H23.7.27 ~ 8.30		192	花川戸第4号埴 新規発見
H23	24	151m <sup>2</sup>	試掘・確認	富士市厚原 1614-3 外 (古墳群)			堅穴建物跡・古墳周溝・墓状堆积
				35° 10' 20"	138° 43' 41"	縄文・古墳	縄文土器・土師器・須恵器
				H23.10.12 ~ 10.20		192	

調査 年度	所取 番号	所取遺跡名		所在地	種別	主な遺物	
		地区名	北緯			主な時代	主な遺物
		調査面積	調査原因	調査期間	市道路番号	特記事項	
H14	第4章 第2節	柏原道路	富士市中柏原新田	164.1 外		整穴建物跡、孤立建物跡	
		第4地区 2次調査	35° 08' 11"	138° 44' 44"	西文、奈良、平安	西文土器、土師器、須恵器	
H22	第4章 第3節	柏原道路	富士市東柏原新田	地先		なし	
		第6地区 2次調査	35° 08' 07"	138° 44' 57"		なし	
H22	第4章 第3節	柏原道路	富士市東柏原新田	29 外		整穴建物跡?	
		第6地区 3次調査	35° 08' 07"	138° 44' 56"	古墳~律令	土師器、須恵器、鉄器	
H22	第4章 第3節	柏原道路	富士市中柏原新田	198.1 外		整穴建物跡?	
		第6地区 4次調査	35° 08' 05"	138° 44' 54"	古墳~律令	土師器	なし
H23	第4章 第3節	柏原道路	富士市中柏原新田	198.1 外		整穴建物跡、溝・火山水窖痕跡	
		第6地区 5次調査	35° 08' 06"	138° 44' 55"	古墳~律令	土師器、須恵器、土製品、馬齒	
H23	第4章 第4節	柏原道路	富士市中柏原新田	155.1 外		整穴建物跡	
		第7地区	35° 08' 15"	138° 44' 41"	古墳~律令	土師器、須恵器	
H18	第5章	沖田道路	富士市新橋町	198.3 外		水田	
		第133次調査地	35° 09' 39"	138° 41' 56"	古墳	半構造船・珠文鏡、田下駒	
		208m	試解・確認	H18.6.27 ~ 7.6	53		

富士市埋蔵文化財発掘調査報告 第54集

富士市内遺跡発掘調査報告書  
- 平成 22・23 年度 -

発行年月日 平成 25 年 3 月 29 日

編集・発行 富士市教育委員会

〒 417-8601 静岡県富士市永田町一丁目 100 番地

TEL 0545-55-2875 FAX 0545-53-0789

E-mail:kty-bunkashinkou@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本 文光堂印刷株式会社

〒 410-0871 静岡県沼津市西間門 68 番地の 1

(富士市行政資料登録番号 24-55)